

恒藤恭 「旧友芥川龍之介」 (全)

全篇正規表現電子化・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」本書は芥川龍之介が最も信頼した畏友であった恒藤恭明治二一（一八八八）年～昭和四二（一九六七）年の著になるもので、朝日新聞社から戦後の昭和二四（一九四九）年に刊行された。

恒藤恭は旧姓井川（婿養子により大正五（一九一六）年十一月に改姓）は島根県松江生まれ。法哲学者で法学博士。大阪市立大学学長及び名誉教授（昭和二一（一九四六）年）。戦前に於ける日本の代表的法哲学者として知られ、京都帝国大学法学部教授時代、思想弾圧事件として著名な「瀧川事件」で抗議の辞任をした教官の一人であった。

芥川龍之介より四歳年上であるが、中学卒業後、体調を崩し（本文に出るように内臓性疾患）、三年間の療養生活を経て、恢復の後、文学を志して上京、『都新聞社』文芸部所属の記者見習をしながら、第一高等学校入学試験に合格、第一部乙類（英文科）に入学した。この時、芥川龍之介と同級となり、終生の親友となった。大正二（一九一三）年、一高第一部乙類を首席で卒業後、京都帝国大学法科大学政治学科に入学した（文科から法科への進路変更については別な文章で、芥川との交流によって自身の能力の限界を知ったからである、と述べておられる）。

京都帝大進学後も龍之介との文通（新全集で現存三十八通に及ぶ）による交流が続き、芥川の勧めを受けて第三次『新思潮』第一巻第五号（大正三（一九一四）年六月一日発行）にジョン・ミリントン・シング（John Millington Synge 一八七一年～一九〇九年）の「海への騎者」(Riders to the Sea 一九〇四年作)を翻訳寄稿したりしている。

また、芥川龍之介は大正四（一九一五）年八月三日から二十二日迄、彼の薦めで彼の実家のある松江に來遊している。これは芥川龍之介の人生の最初の大きな痛手となった吉田弥生への失恋の傷手を癒してやるのが井川の目的であった。その際、山陰文壇の常連であった井川は、かねてより、自分の作品発表の場としていた地方新聞『松江新報』に、芥川來遊前後を記した随筆「翡翠記」を連載（既に私のブログ・カテゴリ「芥川龍之介」にて二十六回分割で電子化注を終えている）、その中に「日記より」という見出しを附した芥川龍之介名義の文章が三つ、分けられて掲載された。後にこれらを抜き出して合わせ、「松江印象記」として、昭和四（一九二九）年二月岩波書店刊「芥川龍之介全集」別冊で公開されている（従って現在の「松江印象記」という題で知られるそれは芥川龍之介自身による命名では、実は、ない）。これは私が昔、既に『芥川龍之介「松江印象記」初出形』として電子化しているのを参照されたい。個人的に私は恒藤恭の文学的才能を非常に高く評価している。

底本は「国立国会図書館デジタルコレクション」の「国立国会図書館内図書館・個人送信限定」の恒藤恭著「旧友芥川龍之介」原本画像を視認して電子化した（国立国会図書館への本登録をしないと視認は出来ない）。既に分割してブログ・カテゴリ「芥川龍之介」で公開してあるが、これは、その一括版である。なお、私は原書を所持していない。二十代の頃に入手しようと、神保町を木枯らしの吹く中を經巡ったが、遂に見つけることが出来なかったから、この書には拘りがあるからである。されば、かなりマニアックに注を附してある。但し、多く引用がなされる芥川龍之介の書簡については、私がブログ・カテゴリ

「芥川龍之介書簡抄」で注したものと等については、一切、注は附さない。それぞれのところで当該書簡等にリンクさせあるので、そちらを見られたい。なお、私の注は一部を除き、ポイント落ちで示し、文中に置いたものが、本文の読みの邪魔にならないように配慮した。なお、縦書では不具合が生ずる芥川龍之介の欧文書簡箇所があり、そこは、別にPDF横書版を作成してリンクをはっておいた。また、「「」」を恒藤恭は使用しているが、これが、やはりWordの横書きでは、うまく表記出来ない。それは、で代用したので、読み替えられたい。悪しからず。

*

実は、以下の本書本文の最初に掲げられてある「友人芥川の追憶」は、サイト横書HTML版で筑摩書房類聚版「芥川龍之介全集 別巻」に所収するそれを、一度、「友人芥川の追憶 恒藤 恭」として電子化注はしている。ここでは、恣意的に漢字を概ね正字化して示した。

それは、本「友人芥川の追憶」が、本文を見ても判る通り、龍之介の自死の直後に書かれたもので、芥川龍之介の書誌データによれば、昭和二（一九二七）年九月発行の『文藝春秋 芥川龍之介追悼號』に初出した同名記事であるからであった。しかも筑摩版のその末尾には『昭和二年八月七日』という丸括弧記載があり、これは実に、芥川龍之介の自死から僅か十四日後に書き上げられたものと判るからである。

残念ながら、本篇の戦前に書かれた「友人芥川の追憶」は、底本本書が敗戦から四年後の刊行であるため、概ね歴史的仮名遣を基本としつつも、漢字は新字と旧字が混淆し、しかも同じ漢字が新字になったり、旧字になったりするという個人的にはちよつと残念な表記なのだ、これは、恒藤のせいではなく、戦後の出版社・印刷所のバタバタの中だから仕方なかったことなのである。「友人芥川の追憶」パートは、既存の私の電子化を参考にしつつ、漢字表記その他は、以上の底本に即して、厳密にそれらを再現した。但し、活字のズレが激しく、拡大して見てもよく判らないところもあるが、正字か新字か迷った場合は正字で示した。注は私の電子化注を参考にしながら、ブラッシュアップした。

なお、大一篇「友人芥川の追憶」の「十二」章の十八条から成る龍之介を剔抉したアフロリズム風のそれは、恒藤版の「西方の人」（リンク先は私の芥川龍之介の正續完全版）とも言うべき、恐るべき分析であり、私は隅から隅まで完全に支持する素晴らしいものである。「十三」章に至っては、法哲学者ならではの、非常に論理的に解析された龍之介論で、短い乍らも、大方の芥川龍之介研究者のだからだと長く、それでいて彼の核をまるで掴んでいない有象無象の退屈極まりない龍之介論に比べて、公案への名答と言うべきもので、最早、孰れも注の必要を認めない名文である。」

恒藤 恭

旧友芥川龍之介

「やぶちゃん注：外装カバーの表紙部分。底本は国立国会図書館で外装が変えられて補修されているため、表紙は見られないのだが、幸い、[表現急行氏のブログ「表現急行2」](#)の「[古本日記 恒藤恭『旧友芥川龍之介』](#)」に底本原本の外装カバー写真が載せられあったことから、その画像から起こした。以下もその同写真にあるカバーの背である。」

旧友芥川龍之介 恒藤 恭

恒藤 恭

旧友芥川龍之介

朝日新聞社

「やぶちゃん注：以上は国立国会図書館デジタルコレクションの底本の扉。」

序

芥川龍之介は私の最も親しい友人の中の一人であつた。一高の学生時代にはじめて互ひに知り合つてから、私たちの親しい交はりは十六年ばかり続いた。昭和二年七月二十四日の芥川の自殺によつて此の交はりは終りを告げたとは云ふものの、彼のおもかげは絶えず折りにふれて私の意識のうちによみがへり、或時はあざやかに。或時はかすかに、私の心と呼びかけるのである。

たぐひ稀れな、すぐれた資性と能力とをいだいたままに、三十六歳のみじかい生涯をもつて芥川か此の世を去つたことは、今でもなほ、遺憾の極みにおもふところである。彼の死後、私は二十年以上も生き延び、碌々として生活をいとなんであるのであるが、若しも彼が現存まで生存してゐたのであつたならば、作家として又は文学者として、どのやうにすばらしい成長を遂げたであつたらうかと、空しい想像をめぐらして見たい氣になる。

この書に収めた諸篇は、学生時代に執筆したものと、芥川の自殺の直後に執筆したものと、一昨年から昨年にかけて執筆したものと、三つの種類にわかち得られる。「旧友芥川龍之介」といふ書名をえらんだけれど、芥川に関することだけを書きつらねたわけではなく、それ以外に、過去における私自身の生活についての敘述や、芥川に係のある事柄から連想を馳せて、ほしいままに論述をこころみたものなどもまじつてゐる、さらに、岩波書店刊行の「芥川龍之介全集」第七巻の中に収録されなかつた故人の書簡四十二通を巻末にをさめて、故人を偲ぶよすがとした。

昭和二十四年六月二十四日

恒藤 恭

目次

序

友人芥川の追憶

芥川龍之介

芥川龍之介のことなど

赤城山のつつじ

※

芥川書簡集

「やぶちゃん注」目次。リーダとページ数は省略した。

以下はその「目次」の裏の右ページ左下方に記されてある。」

挿
絵
樹下の我鬼先生
裸形の芥川龍之介
女
※
芥川龍之介遺墨

「やぶちゃん注…この左ページには、「樹下の我鬼先生」と下方に活字で入れた芥川龍之介が恒藤宛に郵送した葉書の裏の、龍之介自身の手になる自身のカリカチュアと短い通信文の画像が載る。国立国会図書館デジタルコレクションの底本データ画像は全部がモノクロームであるので、カラー印刷かどうかは判らないのだが、先の表現急行氏のブログ「表現急行」の「古本日記 恒藤恭『旧友芥川龍之介』」にある原本のカラー画像を見ると、原葉書 of 美麗なカラー画像であることが判った）これは、私の「芥川龍之介書簡抄88 / 大正七（一九一八）年（三） 五通」の内の四通目にある「大正七（一九一八）年九月十八日・京都市外下加茂村松原中ノ丁八田方裏 井川恭様・消印十九日・十八日 龍（自筆絵葉書）」であり、そちらで原葉書の自筆絵葉書をカラーで示してあるので、参照されたい。以下にも活字化しておく。」

忙しかつたので返事が遅れた 土日兩日は大抵東京にゐる 秋來たら

「やぶちゃん注…ここまで絵の右端の余白にあり、以下は左端の余白に書かれてある。」

一度やつて來給へ 以上

「やぶちゃん注…以下は絵の中に書かれた自作漢詩句。」

寸步却成千里隔

我鬼題并画^龍

紛々多在半途

「やぶちゃん注」最後の「龍」は上の「画」の字の上に朱印として打たれてある。」

樹下の我鬼先生

芥川龍之介ゑがく

「やぶちゃん注」以上は、葉書画像の画像外の右下に恒藤が記した活字である。」

旧友 芥川龍之介

「やぶちゃん注…本文前標題（左ページ）」。

友人芥川の追憶

一

数へて見ると、芥川との交はりは十八年の過去からつづいた。芥川は三十六歳で亡くなったのだから、私達の交はりには丁度芥川の一生の後半にわたつて居た訳である。

この永い年月のあひだ、彼は恒に私の最も親しい且つ最も敬愛する友人の一人であつた。性格や氣質において二人はいろいろ異なる所があつた。思想の上でも一致しない点が数々あつた。しかしながら不思議とお互ひに親しみを感じた。この心持は少しも渝ることなく十八年のあひだ持続した。

「やぶちゃん注…「渝る」「かはる」「變はる」に同じ。」

この間に、高等学校時代の彼、大学時代の彼、機関学校の先生をして居た頃の専ら文筆に依つて衣食するやうになつた彼、と云つたやうに――彼の生活の境涯の変つて行くのを、近くから又遠くから私は眺めた。そして終りに彼の遺骸の茶毘に付せられるのを見守らねばならなかつた。

お互ひに死といふものについて話したことは時折りあつた。お互ひに健康について絶えずいたはり合つた。

何時のことであつたか、田端の家で、私の用ひてゐた白耳義製のカフスポタンをしきりにほめて、「君が死んだら形見にくれたまへ」と云ふから、「やるよ」と約束したことかあつた。欧羅巴へ向けて出発する前のこと、ひよつとしたら先方で何かの加減で死なぬとも限らぬと思つたから、その釦を芥川に贈つて置かうかとも考へたが、少し感傷的に過ぎるやうな氣がして差控へた。アメリカの暑熱で大分胃腸をいためたものの、兎に角、昨年の九月の半ばすぎに私は横浜に上陸することが出来た。そして鶴沼の居に芥川をおとづれ、久し振りに話し合つた。それが永久の別れであつた。

「やぶちゃん注…「白耳義」「ベルギー」。

「欧羅巴へ向けて出発する」恒藤は大正一一（一九二二）年に京都帝国大学経済学部助教授となり、二年後の大正一三（一九二四）年三月から大正一五（一九二六）年九月まで欧州へ留学している。」

鶴沼の駅に向ふ車の中で、ふと、これきりでもう会へないのぢやないかしら、と云ふやうな予感があたまの中に閃いた。瞬間ひじやうにさびしい氣がした。が私は直きに、そんなことはないと理性によつて打消した。けれども、やつぱり其予感が事実となつてしまつた。ほんたうに残念である。

「やぶちゃん注…後の「芥川龍之介のことなど」にもこの最後の邂逅は再話されるが、ここでは、私の「芥川龍之介書簡抄137 / 大正一五・昭和元（一九二六）年九月（全九通）」の最後の私の太字注の引用で我慢されたい。」

二

謂はゆる江戸つ子の出不精で、大学卒業のころ以前には、芥川はめつたに東京を離れなかつた。東京を離れてもあまり遠方へ出かけたことは無かつた。それを初めて遠方へ引張り出したのは私だつた。そして、私の勧めに應じて印象記を『松陽新報』といふ地方の新聞に載せたのが――後になつて知つた事であつたけれど――彼が作品を公けにした最初であつた。

「やぶちゃん注…私の冒頭注で出した『芥川龍之介「松江印象記」初出形』を参照。この作品が「芥川龍之介」を作者名として使用した最初であり、パブリックに公開した最初の作でもある。」

同じ筆法で、私は芥川を西洋にまで引張つて行かうと思つて努力した。西洋へ行きたい希望は彼自身一高時代から懷抱してゐたので、大分乗り氣になつて私の勧めに耳を傾けて呉れた。だか、中國へ行つて健康を害した以前の経験は、彼の洋行に対する家庭の人々の憂懼の念を大ならしめた。それは全く無理のない事でもあつた。同行が出来ぬのは遺憾だが、後からやつて來たまへと言ひ残して、私は日本を去つた。巴里からまた、私は勧誘の手紙を出した。小穴氏などの言によると、私の誘惑は大分効果をあたへたらしい。しかし芥川は日本を離れることが出来なかつた。

「やぶちゃん注…「小穴」芥川龍之介が晩年に強い親近感を持った友の画家小穴隆一。私の「芥川龍之介盟友 小穴隆一」等を参照。」

それは二つの点において甚だ遺憾である。一つには、和漢の文学において甚だ造詣の深かつた芥川は、西洋の文学についても恐る可き読書力を發揮してゐた。また、すぐれたる彼の藝術的感覚は、東洋の絵画彫刻に対しても、西洋のそれに対しても、潑刺たる鑑賞能力となつて働いた。欧羅巴における見聞は、彼の創作的精神の上に深大なる影響を及ぼしたであらうと想像される。二つには――此方が主として遺憾なのであるが――あの頃に彼が西洋へ行つたとしたら、恐らく彼の氣持は一轉したであらう、内的生活にも展開を來したであらうと考へられる。そして、多分あんなに早く死にはしなかつたであらうと思ふ。

そんなやうな仮定的想像が當つてみようが居まいが、彼に欧羅巴の土を一度踏ませてやりたかつた。たとへば、システイナ礼拝堂のミケランジェロの天井画及壁画の複製を見てあんなにも昂奮した彼が、原物を見たらどんなに歡喜したであらうか。あるひはルーヴル

画廊のレムブランド筆「基督復活して弟子に現るる図」に直面して、如何ばかり彼はわが意を得たり！ とうなづいたであらうか。

しづかなイタリアの僧院、堂内のくらがり瞑目のをんなの影うかぶフランスの加特力教寺院などにも、彼はたましひと感覚との安らかな休息を見出したであらうものと思ふ。どうせ、今となつてただ愚痴を言ふだけのことに過ぎぬとは知れてゐるけれど、しかし全く残念である。

「やぶちゃん注：「加特力」「カトリック」。」

三

私にとつてだけ興味のある事柄を書くことを恕して貰ふとして——芥川との交はりには、四つの時期ともいふべきものがあつた。高等学校時代、大学時代、その後大正十二年頃迄の時代、彼の晩年三四年の間といったやうなくざり、がそれである。最後の時期には私は海外に在つたし、帰つてからも一度しか彼に会はず、唯彼の作品を通じてのみ彼の存在に接触したのであつた。

「やぶちゃん注：「恕して」「ゆるして」。」

右にあげた第一の時期、すなはち高等学校時代における芥川及び彼との交はりについて、心にかぶままにそこばくの追憶を書きしるしたいと思ふ。それ以来、大分年月が経過したので、おぼえの悪い私の記憶には、多くの事柄が逸してしまつたし、その頃の日記の類なども破棄したやうに思ふ。そして丹念に思ひ出のいとぐちをほどこいて行く時間の余裕もあたへられてゐないので、私の記述は甚だ不十分なものとなるであらう。

芥川は会話においても「僕」といふ一人称の代名詞を用ひてゐた。文章においてもさうであつたと思ふ。彼と私との間においても、会話にも音信にも彼は「僕」といふ代名詞を用ひた。私もやはりさうであつた。但、芥川が家庭の内でも外でも「僕」を以て一貫してゐたのに反して、私は幼時から家庭では「私」といふ代名詞を用ひてゐた。かつて芥川が私の郷里の家に来て泊つてゐたとき、『なるほど、君はうちでは「私」といふ語をつかつてるね。やさしい語だね』と妙に感心して云つたことがあつた。

私にとつては「僕」といふ語は社交用、特に対友人用の代名詞であつた。をかきな事には、自分自身の家庭をつくつてからは、妻に向つても「僕」といふ代名詞を用ひるのであつた。しかも文章において自己を表はす爲には私は「私」といふ語を用ひ來つてゐる。芥川と私とは、複数の一人称としては「僕たち」といふ代名詞を用ひてゐた。そこで、私が文章の上に芥川と私とを一人称の複数において表はす場合には、一つのディレンマに会する。しかし私は以下において「私たち」といふ代名詞を用ひることにはしたい。——言語の感覚の極めて鋭敏であつた芥川の事について追想するとき、つい斯やうな餘計な事柄も書き添へたい気持になるのである。

去る七月二十七日、芥川の遺骸が谷中の齋場から日暮里の火葬場に運ばれ、焼竈の中に

移され、一同の焼香が了つたのち、ふと見ると、鉄扉のかたへにかけてある札の上の文字が「芥川龍之助」となつてゐた。その刹那に、若しも芥川がそれを見たら、「しやうがないな」と苦笑するだらうと思つた。すると世話役の谷口氏が「どなたか硯をもつて来て下さい、佛が氣にしますから字を改めます」といふやうなことを言つた。……「芥川龍之介」と改めて書かれた。何だか私も安心したやうな氣がした。生前、芥川は「龍之助」と書かれたり、印刷されたりして居るのを見ると、参つたやうな、腹立たしいやうな、浅ましいやうな感じをもつたものだつた。それは、彼が「龍之介」といふ自分の名を甚だ愛し且つそれについて一種の誇りをもつて居たからでもあつた。第三者の眼から見ても、「龍之介」は「龍之助」よりもよほど感じがいいし、よりエステッシュでもある、しかし私の強い彼は特別強くこの點を意識してゐたに違ひない。それは子供らしい誇りであつた。しかしそんな所にわが芥川の愛すべき性格のあらはれがあつた。彼の作品を愛讀してゐるとか、彼を敬慕してゐるとか云つたやうな事を書いて寄こす人が、偶々「芥川龍之助様」と宛名を書いて居るのを見て、「度し難い輩だ」と云ふ様なことを呟いた例を一、二思ひ出す。

「やぶちゃん注」：「谷口」谷口喜作（明治三五（一九〇二）年～昭和二三（一九四八）年）。「うさぎや」の店名で知られ、現在も東京都台東区上野広小路に営業する大正二（一九一三）年創業の和菓子屋の主人。岩波新全集に人名索引によれば、東京生まれの当主は『俳人としても活躍し、多くの文化人と交流を持つとともに「海紅」「碧」などの俳句雑誌に句やエッセイを載せていた』とし、『甘いものが好きな芥川は、この店の「喜作もなか」が大好物であつた』とある。『小穴隆一 「二つの繪」（17） 「手帖にあつたメモ」』の私の注の「うさぎや」を参照。

「エステッシュ」は、Esthetic、である。『審美的な』の意。言わずもがなであるが、音写は「エステティック」。この焼き場の一件については、別に『小穴隆一 「二つの繪」の「横尾龍之助」』（リンク先は私の電子化注）、『焼場の竈に寝棺が約められ、鍵がおろされてしまつて、門扉にかけた名札には芥川龍之助と書いてあつた。谷口喜作が焼場の者に注意をして芥川龍之介と書改めさせ、恒藤恭がよく注意してくれたと谷口に禮を言つてはゐたが、今日芥川の墓のある染井の慈眼寺に區で建てた立札はこれまた芥川龍之助の墓となつてゐる。龍之介は戸籍面ではどこまでも龍之助であつたのかも知れない』などとある。参照されたい。」

四

芥川も私も一年のうちの季節の移りかはりを強く意識し、それからの影響を氣分の上になんか深く受けるたちであつた。けれども、其点について共通な所もあれば、さうでない所もあつた。たとへば、秋は私たち二人の心を同じ仕方だ促へた。ところが、夏については、芥川は梅雨の候を愛すること深く、濕潤の空氣にひたつて IN HIS ELEMENT に在るかの如く思はれたが、私はそれに先立つ新緑の季節を好もしとした。彼は盛夏のころの強烈な日光に対し一種の本能的な恐れを感じる慣ひであつたが、私はむしろ夏の太陽の下にかがやく物象のすがたをいさぎよく思つた。二人の間の性格や氣質やの相違の外に、東京で

生れ東京でそだつた彼と、山陰道で生れ山陰道で育つた私との間に存したところの生活環境の上の相違が、夏季に対する——さうした二人の異なる意識を條件づけたのであるかも知れない。

「やぶちゃん注：「IN HIS ELEMENT」彼の本領發揮の内に在る」と言った意。」

子供の時から中学時代までを通じて私たちの生活環境を形づくつたところの家庭や、社会的周囲や、郷土やは、かなり趣を異にするものであつた。ただ一つの例をあげると、芥川から二、三度聞かせられた話にこんながある——「四つか五つの時だつた。母に連れられて歌舞伎へ行つたんだ。その時、團十郎が勸進帳をやつたんださうだが、團十郎があの大きい眼を剥いて花道から出て来たとき、僕が『うまいつ』と叫んださうだ。見物がみな息をこらしてゐる時なんだらう。母はどうしようと当惑したんださうだ。今でもよく其事を云つて母がわらふよ』 團十郎の噂をしか聞いたことのない私は、この話など、何だかひどくまばゆいやうな氣もちで聞いたものであつた。

「やぶちゃん注：「わらふよ」の後の字空けはママ。芥川龍之介は「[文學好きの家庭から](#)」（大正七（一九一八）年一月発行の『文章俱樂部』に「自傳の第一頁（どんな家庭から文士が生まれたか）」の大見出しで表記の題で掲載されたもの。リンク先は私の古い電子化注）の中に、このエピソードを書いており、『芝居や小説は随小さい時から見ました。先の團十郎、菊五郎、秀調なども覚えてゐます。私が始めて芝居を見たのは、團十郎が齋藤内藏之助をやつた時ださうですが、これはよく覚えてゐません。何でもこの時は内藏之助が馬を曳いて花道へかゝると、棧敷の後で母におぶさつてゐた私が、嬉しがつて、大きな聲で「ああうまえん」と云つたさうです。二つか三つ位の時でせう』とある。」

それで、高等学校で二人がお互ひを深く知りはじめたとき、二人はずみ分と内容の違つた世界を所有しつゝ接触して行つたのであつた。やがて、共通の世界が二人の間に生まれつた。それは次第に廣くも深くもなつて行つたが、その以前から各自の所有してゐた世界の特性は、この新しく二人の間に展開し始めた世界の内容に対して影響を及ぼすことを止めなかつた。勿論依然として東京に住むことをつづけた彼と、新たに東京に住む境遇にたつた私とでは、右の關係において著しく事情を異にするものがあつた。とは云へ、一高における生活、とりわけ二年生である間彼の送つた寄宿寮の生活は、芥川にとつて全く新しい経験であつた。一高及びその寄宿寮の生活は私にとつても亦新しい経験であつた。斯うした種々の事情の錯綜のうちに、私たちの共通の世界はつくられた。

私は一年生の時から寮にはいつてゐたが、芥川は二年生になつて初めて寮にはいつた。私たちはたしか北寮三番の室に起臥した。初め寮の生活は彼にとつて随分無氣味な、そして親しみにくいものであつたに相違ない。次第に彼は其れに馴れては行つたものの、六分どころしか其れに應化しなかつた。私も寮の生活には十分應化せずして終つた方だが、それでも芥川に比べれば、さうした生活に適應する能力をより多くもつてゐた。例へば、彼は初めは中々寮で入浴することを肯んじなかつた。やつと入浴するやうになつても、稀れにしか入浴しなかつた。しかし忘れて手拭をもたずに風呂にはひつたやうな逸話をのこした。銭湯にもあまり行つたことはないと云つてゐた。寮の食事は風呂のやうに忌避するわ

けにはゆかぬので毎日喫べてはゐたが、いつも閉口してゐた。食堂でも、ある日の昼食後に、インキ瓶だと思つて醬油入をつかんで入口まで持つて行つたといふ逸話を作つた。さうした。ユーモアは、後年に至るまで、彼の行動の上にも、思想の上にも影を射してゐたやうに思ふ。

五

当時、芥川の意識の中に二個の東京が存在してゐた。郷土としての東京と、一高の所在地としての東京とがそれである。芥川にとつて、向が陵は郷土としての東京の範囲外に在つた。土曜日の午後、新宿の家に向つて寮を去り行く彼の様子は、さながら東京に遊学せる地方の青年が郷里をさして帰省の途に就く姿に似たものがあつた。だから、薄暮、寮の窓に灯がつきそめ、白い霧が艸地に這ふのをながめながら、私が多少のノスタルジアにかかると芥川もひと事ならず其れに同感して呉れたものであつた。

「やぶちゃん注」向が陵「むかふがをか（むこうがおか）」は旧制第一高等学校の別名。「向陵」こうりやうとも称した。東京都文京区向丘にあつたことに由来し、「旧制第一高等学校寮歌」の第一番は「向が陵の自治の城、サタンの征矢はうがちえて、アデンの堅城ものならず、こもる千餘の大丈夫は、むかし武勇のほまれある、スパルタ武士の名を凌ぐ。」である。「今昔マップ」の昭和初期（最も古いものは画像が劣化していて、判読し難いので、こちらを選んだ）の地図で「一高」とあるのが、そこ。現在、東京都文京区弥生で東京大学弥生キャンパスであるが、その西北に向丘むしやうがおかの地名が残っているのが確認出来る。」

尤も眞実のところは、私たちのノスタルジアの対象は、超現実的な或る世界であつたかも知れない。さう云ふ意味においては、白晝、校庭の樹木のかげなどで、私たちは屢々私たちのノスタルジアについて語り合つた。

そんなとき、校庭の木立のものと空間は、芥川の郷土としての東京の一部分でもなければ、第一高等学校の構内の一部分でもなく、私たちだけの領する第三の世界に属するのであつた。

後年、私たちは田端の家の二階の書齋において時に斯かる第三の世界を復活せしめたことがあつた。

六

かの郷愁に似て、しかも本質を異にするものに、私たちのエキゾチシズムがあつた。

茲にも、ただ一つの例をあげると、工科大学の古城のやうな煉瓦造りの前の細かな石砂利を踏んで、ディッキンソンの銅像の下にいたり、滑かに光る花崗石の台石の上に踞けつつ、沈丁花のほのかなかをりに私たちはイスパニアの荒れた町の女の歌声を思ひうかべた。

「やぶちゃん注」「茲」「ここ」。

「ディッキンソンの銅像」芥川龍之介の「路上」（リンク先は「青空文庫」の「二十二」にも登場する。

筑摩書房全集類聚版脚注では『東大構内にあった外人教師の銅像であろうが実物も記録も現存しない』とするが、これは誤りで、現在の本郷キャンパス内に現存し、Charles Dickinson West (チャールズ・ディキンソン・ウエスト 一八四七年〜一九〇八年) で、アイルランド・ダブリン出身の御雇外国人で、明治一五(一八八二)年に招聘されて来日、機械工学と造船学を教授した。 [サイト「travel.jp」の0114/01tab147](http://travel.jp/0114/01tab147) <http://www.tabi47.com/> 氏の投稿記事で銅像の写真を見ることが出来る。

「据けつつ」「こしかけつつ」。

だが、夏休みの近づく頃の或る夕がた、同じ銅像の下で、來らむとする夏のことを話し合つたとき、彼の語つたことを忘れ得ない。

「君、どこへ行く?」

と私はたづねた。

「東北の方へ旅行して見たいと思ふけれど、夏は暑くてね。僕は暑さには辟易する。それに少しでも家うちに余計あつちみたいよ」

と彼は答へた。

「なぜ?」

と重ねて問ふと、

「なぜつて、僕は少しでも父や母と一緒に居たいんだ。父や母も最早年をとつてゐるからね。父や母はただ僕一人を希望に生きてるんだ。それに何人にも何物にも侵されない家庭の城壁の中はほんたうに安らかなんだからな」

といふやうなことを言つた。

後年、彼の作品の中に、芥川はいともうつくしく広大なる彼自身のエキゾチシズムの世界をつくり上げた。私はそれを嘆賞する。

おなじやうに、芥川がその創作力によつて展開を企てたものに、妖怪の世界がある。妖怪に関する古今東西の文献を夙くからあさつた彼は、屢々私に彼の蘊蓄の一端をもらした。諸國の河童の話などは毎々きかされた。しかし私は妖怪にはあまり趣味をもたなかつた。私の趣味は神話的存在者の彼方に及ばなかつた。

「やぶちゃん注:「夙く」「はやく」。」

私たちの読み、そしてそれについて語り合つた文学的作品などのことは、煩しいから記述しない。

七

東京について私が芥川を通じて知り得た事柄は少くない。但、古今の東京について知る事極めて豊富なる彼が、江戸趣味を私に向つて鼓吹するやうなことを努めて避けてゐたやうに思はれるのは、かへりみてまことに心床しい。その点において、彼は大通に近きものがあつた。

「やぶちゃん注:「大通」(だいつう) 遊里・遊芸などの方面を中心とした庶民風俗の事情に非常によく通

じている人物。粹人。」

彼はむしろ當時流行してゐた浅薄な江戸趣味をあざ笑つてゐた。あなか者の私をあなか者視するやうなこともかつて無かつた。但、ある日、大川端まで散歩したとき、或る川べりで、

「あのあたりが『こまがた』だらう」

とゆびさしたら、

「君、『こまがた』ぢやない。『こまかた』といふんだよ」

と教へられた。そばでをんなの人が聞いてゐた。その時は、自分の地方人たることを切実に意識した。でも、ある日、古本屋から、寺沢靜軒著「江戸繁昌記」を買つて来てよんでゐたところ、芥川がまだそれを読んでゐまいと知つて、いささか得意になつたやうなこともあつた。

「やぶちゃん注：『寺沢靜軒著「江戸繁昌記」』江戸末期の漢学者で儒者であつた寺門靜軒（寛政八（一七九六）年～慶応四（一八六八）年）の著わした江戸地誌。正編五冊・後編三冊で天保二（一八一三）年刊。爛熟期の江戸市中の繁盛の光景を「相撲」・「吉原」・「両国花火」など数十項に分けて、俗体の漢文で記述したもので、幕末期に流行した繁昌記ものの濫觴。今でこそ風俗史料として貴重であるが、天保十二年、内容の政道への風刺から「天保の改革」忌諱に触れ、風俗壞乱の指弾を受けて発禁となつた。その結果、武家奉公御構（勤仕おんし）となつて、以後、諸國を流浪した。」

私たちは好んで上野の不忍の池のほとりを散歩した。蓮は彼のこのむ植物の一つであつた。私もまた幼時から蓮がすきであつた。しかし敗荷のおもむきを解することにおいて、彼は私よりはるかに先んじてゐた。

「やぶちゃん注：「敗荷」「やれはす」「やれはちす」。葉のやぶれた蓮。」

時に郊外に足をのびしたこともあつた。野外で辨当をたべるやうなことは嫌ひな彼であつたけれど、くぬぎ林のかげなどで一緒に握飯の包をひらいたことも無いわけではなかつた。むさし野の林をわたるしぐれの音は、彼のここから愛した所であつた。

一般的には、彼は自然の美の観照において極めてするどい感覚をもつてゐたけれど、自然に対する彼の態度は、観照者のたたずむ界線の此方に執念深く留まつてゐた。それを踏みこえて、謂はば自然のふところに抱かれることを少年の時からねがうてゐた私にとつては、さうした彼の性向は、意地悪くも、はがゆくも惑じられた。

かうした方角には、私たちに共通でないところの離ればなれの世界がひろがつてゐた。

八

一緒に芝居を見に行つたこともあつた。幕合には大分議論をした。絵の展覧会にも折々一緒に行つた。上野の音楽学校の土曜演奏会にもかなり缺かさずに出かけた。音楽の鑑賞力においては、彼は大して私を凌駕してゐなかつた。

彼のすきな、一高の寮歌が二つ三つあつた。彼はよく昂然としてそれを歌つた。

こころもち猫背の氣味に、そしていささかへんな両手の振り方をして歩む癖はあつたけれど、兵式体操は私なんかより余程うまかつた。それに、大して声はおほきくないけれど、小隊長になつたりなんかすると、敵愾心のこもつたやうな雄壯な声を吐き出して、例の昂然たる態度で号令をかけた。

軍國主義はきらひだけれど、軍事趣味は解する所があつたらしい。後年彼の職を奉じた海軍機関学校と彼のとの配合は、出たらのやうで、必ずしも出たらめではない。軍艦の中の生活のことなどを書いた彼の作品には、幾分軍事趣味が滲み出てゐるやうに思ふ。ことに軍人の生活ではなく、軍艦それ自身を描写した文句などには、軍艦それ自身が生きてゐると同時に、軍艦といふ存在物に対する一種の愛着心の如きものが漂つてゐる——甲虫などをみて私たちの意識する愛着心のやうなものが……。

「やぶちゃん注…「軍艦それ自身を描写した文句などには、……」ここで恒藤が言っているのは、機関学校時代の軍艦「金剛」への教授囑託としての航海見學で実際に乗船した折りのルポルタージュ「[軍艦金剛航海記](#)」（リンク先は「[青空文庫](#)」を指すというよりも、私は寧ろ、自分自身や、発狂状態になつて芥川らが入院させた親友宇野浩二をカリカチャライズした、自死直前の「[三つの窓](#)」（昭和二（一九二七）年七月一日発行『改造』初出。リンク先は私の古いサイト版）を指しているものと考えるべきである。但し、芥川が軍事趣味を持っていたことは、「金剛」乗船時の手帳記録を見れば、歴然とする。例えば、私の図入りの「[芥川龍之介手帳 1-16](#)」を参照されたい。」

尤も、すべて勝負事はきらひであつた。

「圍碁の趣味がわからなくては、漢詩、ことに五言絶句の味はひはわからないだらう」といふやうなことを私がいふと、

「なあに、眞の藝術家は勝負事はきらひなんだよ」

と、幾人もその実例をあげて、彼の主張の証明を試みた。何遍もその主張は聞かされた。だが、賭け事のおそびには興味をもち得たやうである。

「やぶちゃん注…龍之介は晩年には花札を好んでやっている。」

勝負事のきらひだつた彼の心理を解剖してみると、負かすこともあまり愉快ではないし、負けることは尙更愉快ではないといふ心持が、すぐ顔をのぞけるからであつたらう。

九

彼は数学は好きだつたし、数学的能力ももつてゐたらしい。

高等学校時代から彼は長い路筋をたどつて議論をすすめることは嫌ひであつた。

感じや氣分の上では、矛盾が大きらひであつたが、論理の上の矛盾は之を犯して平氣であつた。

抽象的な概念で言ひあらはすと、芥川は理智の人でなく、叡智の人であつた。

彼は精神的に著しく早熟だった。

後年彼の諸々の作品に盛られた内容の根柢を成す人生観的思想は、高等学校時代の後半期及び大学時代の初期にすでに確立されてゐたことを想ふ。

その後成長し、円熟して行つたものは、大体から見ても、彼の表現の力なり手腕なりではあるまいか。

唯一——これは単に作品を通じてのみ判断するのであるが——死を距ることあまり遠からぬ時期から、彼の人生観の一面としての宗教的思想を深く掘り下げたやうに思ふ。もとより、以前からさうであつた如く、彼の芸術観によつてびたりと裏打された宗教的思想ではあつたけれど。

私は中学校の四五年生の頃から胃腸を害し、卒業後三四年間、無爲にくらしてゐたことがあつた。一度は將に死にさうであつた。

幸ひにして健康を回復した。爾來、私は健康を維持することにはかなり努力した。この点について、芥川は著しく私の影響をうけた。尤も、私は常に熱心に芥川におなじやうな努力をすすめた。これは彼にとつて少からず迷惑であつたに相違ない。しかし私の苦言の合理性は彼も十分みとめてゐた。そして相当私の言を用ひて、彼の日常の生活に採用してくれた。高等学校時代の後半から卒業ごろにかけて、彼の健康状態はかなり良好であつた。私の執拗な干渉がその事に対して多少寄與する所があつたと信じて、抛り所のない推測とは云へぬであらう。

後年、創作に専心するに至つて、芥川は身体の虐待を次第に甚しくした。その頃には、相会する機会はすくなかつたけれど、相見る毎に、私は苦言をあたへた。何とか彼とか彼は弁解をしたが、反抗はしなかつた。

「やぶちゃん注：「何とか彼とか」「なんとかかとか」「なんとかかんとか」。

身体の力の旺盛なために、肉体と精神との釣り合のとれてゐない人が沢山あるが、彼の場合には、精神の力が旺盛に過ぎて、肉体と精神との釣り合が危げに保たれてゐた。高等学校時代において既にその兆があらはれてゐた。後年、この現象は顕著となり、芥川は常にどれだけそれを氣にかけ、それに悩んだか知れない。

彼の精神のはたらくところ、凡そ愚鈍と名状す可きものの現はれを見出し難かつた。彼の肉体は彼の精神を荷ふにふさはしき品位にみちてゐたが、彼の精神のはたらきを支へるに足る力にあまりに欠けてゐたとも考へられるであらう。

だが、彼みづから動物的なる力と呼んだ所のものの中に、彼のすぐれたる聰明の支配を

拒むものがあつた。これらの二者の葛藤に乗じて、彼の精神の一隅に巣くふ或る病的なるものが勢ひを逞しくしたやうに感じられる。但、これは後年に至つての出来事である。

十二

はじめに、高等学校時代の芥川についての追憶を書きたいと記したが、その範囲を逸することをゆるされたい。

芥川はモラリストを憎みつつも、彼自身あまりにモラリストであり過ぎた。

波はメフィストフェレスを愛しつつも、あまりに烈しいメフィストフェレスをばにくだ。

藝術の道に精進せむとする彼の氣魄は、りんりと鳴りを立てるかの如く思はれた。

彼のあゆんで行く方向に、或る処では、人生の道と藝術の道と相合し、或る処では、二つの道が離ればなれに見える。

後の場合に、彼は躊躇なく藝術の道をえらぶが如くして、必ずしもさうでない。

彼は孤独を愛しながら、孤独に堪へることが出来なかつた。(都会人であり過ぎたせりかも知れない)

彼はかなり多量のセンチメンタリズムをもつてゐた。自分でもはつきりそれを意識してゐた。そして其れを露はにすることを怕れた。

それは鍊を経たセンチメンタリズムであつた。このセンチメンタリズムの湧き出る源泉は、一塊の岩石をへだてて、彼の固有する詩的精神の源泉と相對した。

詩は彼の孤独のくるしみを和げた。しかしながら、何人か詩に永住することが能きやう乎。

「やぶちゃん注：「何人か」「なんびとか」。

「能きやう乎」「できやうか」。

彼が天使を呼べば、天使は嬉々として來つて彼の手を取らむとするであらう。だが、彼はひらりと身をかはずであらう。

彼が悪魔を呼べば、悪魔は欣々として來つて彼の手を取らむとするであらう。しかし、彼はひらりと身をかはずであらう。

さりながら、つひに彼は氣根萎えて打ちたふれ、やさしい天使の介抱を受けるであらう。芥川のところに宿る悪魔は、良心の瞳を片時も放さず睜めてゐる悪魔であつた。彼がその悪魔を退ける工夫をしないのが、もどかしく思はれた。それは怕ろしい悪魔ではあるが、神々しい悪魔でもあつた。

「やぶちゃん注：「瞠めて」「みつめて」。

「神々しい」「かうがうしごと」。

芥川において生活と芸術とは、ひじやうに高い程度に合致してゐた。但、その意味は、彼の残した芸術と彼の生きた生活とが寸分の間なく合はさつて居るといふのではない。彼の生きた生活が彼の残した芸術よりも一層藝術的であつたといふにある。

芥川の思想のあるものに、その作品を通じて接するとき、私は往々にして不満を感じた。しかし、同一の思想を芥川自身が口づから語るとき、私は何らの不満を感じなかつた。恐らく、芥川の中から離れて客観化されたが故に、その思想に対して不満を感じたのかも知れない。但、往々にして彼の弄することを好んだ江戸つ子の詭辯にまどはされたわけでは断じてない。

全体して見れば、芥川は強靱な意力をもつてゐた。けれども、その意力のはたらく方向にむらがあつた。

彼の精神のはたらきの鋭さは、多くの場合に、彼のうちに潜む処女のごとくやさしい心づかひと、はげしい情熱とを、他人の眼から全然隠し去つた。

いつ見ても彼の眼は澄み切つてゐた、が、彼の感情は常にあたたかく揺いでゐた。

彼の表現があまりに隙の無いやうにと工夫を凝らされてゐる爲に、彼の作品がつかめたい感じを惹き起すことがある。日常の彼の行動には沢山の隙があつた。彼はそれを意としなかつた。だから彼から直接につめたい感じを受けたことはない。

屢々彼はさかんに人を罵倒した。

彼は時には（子供らしく）虚勢を張つた。

しかし法螺は決して吹かなかつた。

自然にむかつて彼は甚しく謙虚であつた。が、心の底に三分の敵意を藏して自然に對することが稀れでなかつた。

彼は妖怪を愛した。しかし妖怪の存在を信じては居なかつた。

彼のミラクルをよろこぶ心は、彼の峻厳なるリアリズムといたましく矛盾した。

彼は若い女のある前で昂奮した。しかし男のある前でも昂奮した。ただ親しい友人の前

でのみ平静であつた。

誰だつてさうなんだらう。

ただ彼の聰明さに比べて少し不釣合だと思はれただけだ。

彼にも初恋があつた。その委曲は記すまい。そのとき彼は一生懸命であつた。

十三

争闘があればこそ、勝利はあり得る。争闘を経ない勝利は無い。これは自明の理である。善と悪とは永久に争闘の運命を負はされてゐる。悪の征服において善が成り立ち、善に対する反抗において悪が成り立つ。

悪がなければ善もない。これが此世の掟である。悪の征服の後に来る平和はうつくしい。けれども現実の世界は、争闘なくして平和に至る途を保證せぬ。

この争闘は最も多様な形態において行はれる。が、芥川はこの争闘をいとはしとした。だから、彼の眼には、善も亦暗い陰影を帯びて映り過ぎた。「しかも悪も、悪との争闘も、共に人生の必要に属する。しからば、すでに悪との争闘を善と名づけるとき、何故に悪そのものをも善とよびえないか。否、一方において悪を悪とよぶものが、何故に善をも悪とよばないか。」彼は斯る論理に飽くまでも執着した。どこ迄も、何処までも、それにこだはつた。

善悪の相関的制約性は美醜の相関的制約性とその論理的構造を一にする。ただ美醜の差別は官能を通じて我等の意識にあたへられるのを特色とする。芥川の如く鋭敏なる美的感覚をもつ人にとつて、美醜の鑑別はあまりにも明確なりと思惟されたであらう。

その思想的生涯を一貫して彼の抱いたところの「道德に対する懷疑心」は、彼の感情と感覚とにかたく根ざすものであつた。しかも道德的本能は彼において人一倍力強かつた。

この矛盾は、後半生を通じて、彼をいら立たせた。

十四

この稿を書き始めたとき書かうとも思はなかつた事を、勢ひに任せて書いた。あまり長くなつたから大抵にして稿を了したいと思ふ。

大正二年に私たちは一高を卒業した。六月の試験のすんだあと、芥川、藤岡、長崎、私と四人の同級の者が、赤城、榛名の山々へ旅した。

私たちは先づ赤城山を目ざした。

足尾鉄道の一小駅上神梅かみかんばいで下車した私たちは、森林の茂みを縫ふ峻しい山みちを登つて

行つた。芥川はその年の春胃拡張を病み、不換金正氣散といふ漢方薬の二合分を一合に煎じ詰めたやつを根氣よく呑んで、それを癒したあとだった。彼は大分登りなやんだ。「こんなに心臓が鼓動する」といふから、その胸に手を当てて見ると、なる程むやみと心臓が鼓動してゐた。『これでもつて好く登れるね』と私は感心した。

大黒檜と地藏が嶽との間の外輪山の凹みにたどりついたときは、もう日暮れに近かつた。黄ばなの梅鉢草やゆきわり草の花のうへに坐して暫く憩うた。うしろを振り向くと、今まで登つて来た方角の上州の平野の眺めが遙かな思ひをさそひ、ゆくての谷を見おろすと、みどりの牧場に数知れぬ牛や馬があそんで居た。牧場の盡きるところには湖の水が白く光つてゐた。草鞋の足かろく四人は夕餉のけむりの一すぢ立つ方へと降つて行つた。

枝振りのやさしい山梨の木が一杯に梢を張り、純白な花をこぼれるやうに咲かしてゐた。あるいて行くうちにも、「ほんたうに佳いだらう。うつくしいだらう。だから僕は赤城が一等好きだつて云ふんだ。ねえ、何処よりもいいだらう」と、芥川は大へん得意だつた。ウイリアム・ブレークの版画などをみせて呉れたときのやうに得意だつた。前の年の春休みのころ、まだ湖畔は雪にうもれて居る折りに彼は来たことがあるのだつた。

大沼おほぬまの岸に近い宿に泊つた。あくる朝、四時まへに目をさまし、三人を起して登山の途に就いた。私たちは大黒檜の峯にかかつた。

林をはなれて草山の背にたどりつくと、風はさかさまに下から吹き上げ、見る見る雲霧が谷間をとぎし、林を包み、ゆくての山をかくしてしまつた。

櫻草や虫取すみれや、そのほか数々のうつくしい花になぐさめられつつ雲の中を登りにのぼつて、絶嶺についた。眺望はなかつた。

寒いので、ながく留まることも出来ず、山の花をつみつまみ下山した。宿の若者の剪つて呉れた白樺の杖をつきながら四人は湖水の岸づたひにあゆんで前橋に向つた。七里のみちを前橋に降り、電車で伊香保の温泉に行つて泊つた。あくる日は榛名の山にのぼつた。そのまた翌る日は二組にわかれ、芥川と藤岡とは帰京し、私は長崎と妙義山から軽井沢の方へまはつた。

それから三、四年後のこと、赤城の頂の山霧の中に径みちがかようて居る叙景を結末に取り入れた、「道」と題する長篇の小説を書きたいと思ふと、芥川は私に語つた事があつたが、その希望を現実にしなかつた。

「やぶちゃん注…大正二年に私たちは一高を卒業した。六月の試験のすんだあと、芥川、藤岡、長崎、私と四人の同級の者が、赤城、榛名の山々へ旅した」この前の大正二（一九一三）年六月十二日から二十日が一高の卒業試験で、それが終わった二日後の六月二十二日から、芥川龍之介は同級生の井川（いかわ…後の恒藤）恭・長崎太郎・藤岡蔵六とともに赤城山方面へ旅行に出立し、二十三日には午前四時に起床、赤城山に登頂、下山して伊香保に宿泊、翌二十四日には榛名山に登頂、二十五日に伊香保に滞在、二十六日に藤岡とともに帰京している（井川と長崎は、二人と別れ、妙義山から軽井沢に向かつてゐる）。

この登山の途中、「赤城にて」とする少年期よりの親友山本喜譽司に宛てた絵葉書がある（大正二（一九一三）年六月二十三日・消印二十四日）。私の「芥川龍之介書簡抄14 / 大正二（一九一三）年書簡より（2）」[三通](#)の二通目を参照。なお、この時の同行者については、長崎太郎（明治二五（一八九二）年〜昭和四四（一九六九）年）は高知県安芸郡安芸町（現在の安芸市）出身。京都帝国大学法科大学を卒業後、日本郵船株式会社に入社し、米国に駐在し、趣味として古書や版画を収集、特に芥川龍之介も好きだったブレイクの関連書の収集に力を入れた。帰国後に武蔵高等学校教員となった。昭和四（一九二九）年、京都帝国大学学生主事に就任、昭和二〇（一九四五）年、山口高等学校の校長となつて山口大学への昇格に当たった。昭和二十四年には京都市立美術専門学校校長となり、新制大学への昇格に当たり、翌年、京都市立美術大学の学長に就任している。藤岡蔵六（明治二四（一八九一）年〜昭和二四（一九四九）年）は愛媛県出身で、後に哲学者となった。東京帝大哲学科を卒業し、ドイツ留学後、甲南高等学校教授となった。この旅行については後掲される紀行文「赤城山のつづじ」で、より細かに描かれている。

「前の年の春休みのころ、まだ湖畔は雪にうもれて居る折りに彼は来たことがあるのだつた」明治四四（一九一一年）四月一日から一週間の試験休暇中の六日に、府立三中・一高時代の親友であった西川栄次郎（明治二五（一八九二）年〜昭和六三（一九八八）年…東京帝国大農学部卒で、同大助手となり、研究員として英国へ留学、後に鳥取高等農林学校教授となった）とともに、雪景色の赤城山に登頂している。

「大沼」おほぬめ 実はルビは誤りで、「おの」と読む。赤城山の北東にあるカルデラ湖「赤城大沼（あかぎおの）」（[国土地理院図](#)）。

「足尾鉄道の一小駅上神梅」現在の群馬県みどり市大間々町上神梅にある「わたらせ渓谷鐵道わたらせ渓谷線」の「上神梅駅」。[ここ](#)（グーグル・マップ・データ）。

「不換金正氣散」（ふかんきんしょうきさん…現代仮名遣）は、[サイト「漢方ライフ」のこちら](#)によれば（生薬成分はそちらを見られたい）、主治は『瘴疫時気による湿困脾胃・頭痛・発熱・嘔吐痰涎・腰背部のこわばり・突発性吐瀉・下痢とあり、『体力』が『中等度で、胃がもたれて食欲がなく、ときにはきけがあるものの次の諸症』とあって、急性及び慢性胃炎・胃腸虚弱・消化不良・食欲不振、及び、『消化器症状のある感冒』とある。

「大黒檜」も読みが難しく、現行では「[おおくろび](#)」と読む。赤城山系の最高峰（千八百二十七メートル）である「大沼」の北東に聳える「[黒檜山（くろびやま）](#)」（[国土地理院図](#)のこと）。

十五

「我は唯茫茫とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を與へるものは眠りの外にある譯はない。あらゆる自然主義者は外科医のやうに残酷にこの事実を解剖してゐる。しかし聖靈の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを残して行つた。何か『永遠

に超えようとするもの』を」

「改造」所載、「西方の人」の第三十五、「復活」の末尾に、芥川はこんな文句を書いてゐる。

今や彼は、その文句の中にしるされた真理を目のあたり見て居るであらう乎。

書いてここに到つて、私は涙の落ちるのを止めえない。

「やぶちゃん注・冒頭に惹かれているのは、恒藤の述べるように、芥川龍之介の事実上の最後の遺筆となった「[西方の人](#)」(正編)の「35 復活」の最終段落である(リンク先は私の「西方の人」正續完全版)。これを以って「友人芥川の追憶」は終わっている。」

「やぶちゃん注：以下の「芥川龍之介」は芥川龍之介自死の一ヶ月あまり後の昭和二（一九二七）年九月発行の『改造』に初出したものである。但し、本篇末尾には、『昭和二年八月五日』のクレジットがあるので、執筆自体は芥川の処決から十三日後に攔筆されたものと判る。

以下、「芥川龍之介」本文（35（左）ページ）の前の前の左ページには、作者が描いた芥川龍之介の絵が配されてある。龍之介の傷心を癒すために恭が自身の故郷出雲に招いた折りに描いたものである（龍之介の松江到着は大正四（一九一五）年八月五日午後四時着で、二十一日に松江を発っている）。以下に絵の右下方外にあるキャプションを起こしておくが、この絵は、表現急行氏のブログ「表現急行」の「古本日記 恒藤恭『旧友芥川龍之介』の写真を見るにモノクロームのようである。この絵は私の『芥川龍之介畏友井川恭著「翡翠記」（芥川龍之介「日記より」含む） 始動 / 「一」でモノクロとカラーの画像（彼方の山体が薄い紫に着色されているのが印象的である）を掲げてあるので、そちらを参照されたい。絵の右下には「AUG.12TH」のクレジット・サインがある。」

裸形の芥川龍之介

大正四年八月出雲海岸にて著者ゑがく

芥川龍之介

—

七月二十八日の午前、遺族、親戚、若干の友人と共に私は日暮里の火葬場にゆき、芥川の遺骨を壺に拾った。はじめ一同が焼香した後、係りの人たちが鉄扉を開いて竈の中から取り出した白骨を皆の眼の前に置いたとき、「きれいに焼けて居るな」と思った。それは清浄なるものの一と塊りであった。

「この白骨を芥川に一と目見せてやりたいものだな」、次の瞬間にはそんな事を考へてみた。そしたら「ああ身が軽くなつちやつた、うれしいぜ」と言ふだらうとおもつた。

「もうこれで此世に於ける君の存在は完全に終了した。安心して呉れたまへ。しかしね、残つた者はさびしくて堪らないぜ」。斯んなことを一言彼に告げたくも思つた。

八月二日の夜、私は東京を出発し、翌あさ下鴨の家に帰つた。暑さに中つて腸や頭やを

いためた後に上京して、酷暑の中をあちこちしたので、心も身体も疲れた。何だか氣拔けのしたやうな感じがした。東京で買って来たおもちゃの BILDA や積み木を並べて子供たちとあそんだ。

「やぶちゃん注：「BILDA」Beta Bida（ベッタ・ビルダ）。イギリス製のレゴに似たプラスチック製の組み立てブロック玩具。英文サイトのこちらで確認した。」

それから、戸棚の中から古い手紙を入れた箱を取り出して、芥川から来た書簡をえらび出した。大抵の手紙は保存して居ないけれど、芥川のよこした分は不思議と高等学校時代のから割合に完全に保存してある。順序もなく、封筒の中からもなにかみを出して読み返した。過去はなつかしく記憶の中によみがへつて来た。ああそんな事もあつたつけと幾たびか独りでうなづいた。

明治四十五年の七月、出雲の國松江に帰省して居た頃に呉れた手紙などが、一等古い部分に属し、封筒に入れた書簡が七十通ばかりと五、六枚のはがきとが残つてゐる。最後に来たのは今年の五月二日付の便りで、留守中に妻が状差の中か何かから探し出して置いて呉れたのであつた。大部分は大正二年から七年頃までの日付になつてゐる。その頃から以後は、偶々東京又は京都で会へば、昨日別れたもののやうに話し合ふのであつたけれど、文通は稀れにしかしくなつた。

「やぶちゃん注：「明治四十五年の七月、出雲の國松江に帰省して居た頃に呉れた手紙などが、一等古い部分に属し」恒藤の言う通りで、旧全集（私は新全集は一部しか所持しない。全文新字体というのが、反吐が出るほど嫌いだからである）の書簡の中で最も古い井川（恒藤の結婚以前の姓）恭宛書簡は明治四五（一九一二年一月一日附の自作の漢詩を記した年賀状である（当時、二人は一高第二学年であつた。なお、当時の学制の新年度の始まりは九月）。私の「芥川龍之介書簡抄8 / 明治四五・大正元（一九一二年）年書簡

より（1）八通」を見られたい。一通目の明治四五（一九一二年一月一日・新宿発信（推定）・山本喜譽司宛（葉書）の注に、芥川が井川に送った年賀の漢詩を示してある（漢詩は私の「芥川龍之介漢詩全集始動 一」で訓読や注も示してある）。さらに、少し後に、同年六月二十八日附、及び、七月十六日附（これがここで恒藤が指摘している書簡である）の出雲に帰省中の井川恭に宛てた書簡が続ぎ、井川恭との急速な親近度の高まりを見てとることが出来る。旧全集本巻収録の恒藤（井川）恭宛書簡は全部で九十四通で、画家小穴隆一と並んでダントツに多い。

「最後に来たのは今年の五月二日付の便り」「芥川龍之介書簡抄145 / 昭和二（一九二七年）年五月（全） 十八通」の冒頭一通目で電子化注してある。」

人の死んでしまつた後の状態を死といふし、斯かる状態としての死に人が到達する過程をも死といふ。前の意味における死は、生と対立するものであるが、後の意味における死は、生の最終の部分である。だから、或る人の一生について云爲するときに、この後の意味における死を其人が如何やうに経過したかといふことを不問に付してはなるまい。その人が自殺といふ経過をえらんだ場合において、一層然るであらう。しかしながら、人生の終りの部分としての死は、必ずしも藝術品の創作の過程における最後の仕上げのやうな意味をもつものではない。死が人の生涯の一構成分子として有する重要性は或る人の場合において是比较的に大であり、他の人の場合においては比較的に小である。自殺の場合といへども、例外を成すものではないと思ふ。或る人が自殺によつてその生涯を了へた場合に彼の自殺を以て彼の生涯における最大の事件であるが如く思惟することは、多くの場合において彼の生涯の意義を正しく理解するの途ではない。しかも或る人の自殺が、彼を知つてゐた者に與へるところの心理的影響は、ややもすれば後者をして、死が前者の生涯において有する意義に関する錯覚に陥らしめる。

「やぶちゃん注」云爲「うんぬ」。ある事柄を取り上げ、それについて、あれこれ言うこと。「云々（うんぬん）」に同じ。

「然る」「しかる」そうあるべきであること。

「途」「みち」。

芥川の場合において、彼の死が彼の生涯において如何なる意義を有するものであるか、を私は論じようとは思はない。唯、何にしても、自殺が彼の一生において有する重要性を過大視することは、私にとつては望ましくない。——根本において斯うは考へるものの、しかし、彼の自殺によつて惹起された心理的影響から免れることは不可能である。一つ一つ披いて讀んで行つた芥川の手紙の中で、次に全文を写すところの一通が最も強く私の心を撲つたのも、その爲である。それは大正四年三月九日の書信である。

「やぶちゃん注」以下書簡引用は最後の恒藤の註を含め、底本では全体が二字下げとなっているが、ブログ版では引き上げた。私の「芥川龍之介書簡抄36 / 大正四（一九一五）年書簡より（二） 失恋後の沈鬱書簡四通」で最初に電子化してある。恒藤が後注するように、元書簡では句読点はなく、表記・改行・字空けの一部も恒藤によつて整序が加えられてある。」

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか。イゴイズムのある愛には、人と人との間の障壁をわたる事は出来ない。人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は出来ない。イゴイズムのない愛がないとすれば人の一生程苦しいものはない。

周囲は醜い。自己も醜い。そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい。しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる。一切を神の仕業とすれば神の仕業は悪むべ

き嘲弄だ。

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ。(僕自身にも)。僕は時々やりきれないと思ふ事がある。何故、こんなにして迄も生存をつづける必要があるのだらうと思ふ事がある。そして最後に神に対する復讐は、自己の生存を失ふ事だと思ふ事がある。僕はどうすればいいのかわからない。

君はおちついて画をかいてゐるかもしれない、そして僕の云ふ事を浅薄な誇張だと思ふかも知れない。(さう思はれても仕方がないが)。しかし僕にはこのまゝ回避せず、すすむべく強ひるものがある。そのものは僕に周囲と自己とのすべての醜さを見よと命ずる。僕は勿論亡びる事を恐れる。しかも僕は亡びると云ふ予感をもちながらも、此ものの声に耳をかたむけずにはゐられない。

毎日不愉快な事が必ず起る。人と喧嘩しさうでいけない。当分は誰ともうっかり話せない。そのくせさびしくつて仕方がない。馬鹿々々しい程センチメンタルになる事がある。どこかへ旅行でもしようかと思ふ。何だか皆とあへなくなりさうな氣もする。大へんさびしい。

三月九日

龍

(註) 句読点は恒藤施す。以下同じ。

右の書信の日付に先立つこと約十日の二月二十八日に書かれた書信の内容と照し合せると、右の書信の内容の意味が一層よく了解し得られるけれど、或る事情のために、唯その最後の部分だけを左に寫す。

「やぶちゃん注…やはり、恒藤は句読点以外にも手を加えている。『芥川龍之介書簡抄35』／大正四(一九一五)年書簡より(一) 井川恭範 龍之介の吉田彌生との失恋告白書簡」で、ここではカットされた前半部も電子化してある。

「不性」は書簡のママ。「無精(ぶしやう)な」の慣用。

「貰へば」は原書簡では正しく「貰へれば」となっている。」

不性な日を重ねて今日になった。返事を出さないでしまった手紙が沢山たまつた。之はその事があつてから始めてかく手紙である。平俗な小説をよむやうな反感を持たずによんで貰へば幸福だと思ふ。

東京ではすべての上に春がいきづいてゐる。平靜なる、しかも常に休止しない力が悠久なる空に雲雀の声を生まれさせるのも程ない事であらう。すべてが流れてゆく。そしてすべてが必ず止るべき所に止る。学校へも通ひはじめた。イヴンイリイッチもよみはじめた。

唯、かぎりなくさびしい。

二月廿八日

龍

右の二通をいづれも私は京都吉田の帝國大学寄宿舎で受け取つてよんだ。間もなく春休みとなつた。私は上京して、前の年の十月に建ち上つた田端の新居に芥川をおとづれ、休暇の間そこで起居を共にした。

「やぶちゃん注…「前の年の十月に建ち上つた田端の新居」芥川芥川龍之介の終の棲家となつた新築の田端の家は、大正三（一九一四）年十月末に完成し（府下北豊島郡滝野川町字田端^{あき}四三五番地。現在の田端一丁目十九一）。グーグル・マップ・データ）、新宿の実父の持ち家から転居している。但し、この春休み（三月）に井川が「上京して」「田端の新居に芥川をおとづれ、休暇の間そこで起居を共にした」という事実は、現在のいかなる芥川龍之介年譜にも記載がない。但し、この大正四年三月の部分は、例えば、**現在、最新の岩波新全集の宮坂覺氏の年譜でも記載が全くない（丸々ないのは同年表中では特異点である）から、或いは、そうした、井川が心配してやつてきた事実があつたとしてもおかしくはない。**」

二

その時から約一ヶ年前の芥川の心境を物語る手紙がある。

「やぶちゃん注…同前。「芥川龍之介書簡抄25 / 大正三（一九一四）年書簡より（三） 五月十九日井川恭宛」を参照されたい。私の語注も完備してある。」

僕の心には時々恋が生れる。あてのない夢のやうな恋だ。どこかに僕の思ふ通りな人があるやうな氣のする恋だ。けれども實際的には至つて安全である。何となれば、現實に之を求むべく、一に女性はあまりに自惚がつよいからである二に世間はあまりに類推を好むからである「やぶちゃん注…「自惚」「うぬぼれ」。」

要するに、ひとりであるより外に仕方がないのだが、時々はまつたくさびしくつてやり切れなくなる。

それでもどうかすると大へん愉快になる事がある。それは自分の心臓の音と一緒に風がふいたり、雲がうごいたりしてゐるやうな氣がする時だ。（笑ふかもしれないが）。勿論、妄想だらうけれど、ほんとにそんな氣がして少しこはくなる事がある。

序にもう一つ妄想をかくと、何かが僕をまつてゐるやうな氣がする。何かが僕を導いてくれるやうな氣がする。小供の時はその何かにもつと可愛がられてゐたが、この頃は少し小言を云はれるやうな氣がする。平たく云ふと、幸福になるポッシビリティがかなりつよく自分に根ざしてゐるやうな氣がする。それも仕事によつて幸福になるやうな氣がするのだから可笑しい。

幸福夢想家だと君は笑ふだらう。

無智をゆるす勿れ。己の無智をゆるす爲に他人の無智をゆるすのは、最も卑怯な自己防禦だ。無智なるものを輕蔑せよ。（ある日大へん景氣がよかつた時）

オックスフォードの何とか云ふ学者が「ラムをよんで感心しないものには英文の妙がわからない。ESSAY ON ELIA「やぶちゃん注」横書。以下同じ。この原書簡では縦書。」は文学的本能の試金石だ」と云つた有名な話があるさうだ。上田さんのラム推奨の理由の一として御しらせする。

試験が近いんだと思ふとがっかりする。試験官は防疫官に似てゐる。何となれば、常に吐瀉物を検査するからだ。眞に栄養物となつたものを測るべき医学者が來ない以上試験は永久に愚劣に止るにちがひない。ノートをつみ上げてみると、ほんたうにがっかりする。

キャラバンは何処に行ける

みやれば唯平沙のみ見ゆ

何処に行ける

行きてかへらざるキャラバンあり

スフィンクスも見ずに

砂にうづもれにけむ

われは光の涙を流さざる星ぞ

地獄の箴言をかかざるブレークぞ

わが前を多くの騎士はすぎゆくなり

われも行かむと時に思へる

MEMNONはもだして立てり

黎明は未來らず

暗し——暗し

何時の日か日の薔薇さく

ほのぼのと

何時の日かさくとささやく声あり

象牙の塔をめぐりて

たそがるはうすあかり

せんすべなさにまどろまんとする

この手紙には日付はないが、封筒に大正三年五月十九日のスタンプが捺してある。当時彼はなほ新宿の家に住んでゐた。

四

順次に時の流れを遡つて行くやうだが——封筒の上のかすかなスタンプの文字により、大正三年一月二十一日に発信したものと認むべき手紙がある。後年に至るまで一貫して芥川が把持してゐた人生観なり藝術観なりが、かなり明瞭に且つ濃厚にその中にあらはれてゐるやうに思ふ。彼の手紙の多くはむしろ普通の書信の体裁を成してゐるのだが、この頃はよく感想録めいたものを書いてよこした。

「やぶちゃん注…以下は書簡の引用だが、ご覧の通り、底本では今までのような字下げがない。以下は、[「芥川龍之介書簡抄22」](#) / [大正三（一九一四）年書簡より（一）](#) [「二通」](#)の二通目で電子化注してある。かなり長い書簡である。やはり恒藤による整序がなされている。」

自分には善と悪とが相反的にならず相関的になつてゐるやうな氣がす。性癖と教育との爲なるべし。ロジカルに考へられない程腦力の弱き爲にてもあるべし。

兎に角、矛盾せる二つのものが自分にとりて同じ誘惑力を有する也。善を愛せばこそ悪も愛し得るやうな氣がする也。ボードレールの散文詩をよんで最もなつかしきは、悪の讚美にあらず、彼の善に對する憧憬なり。遠慮なく云へば、善悪一如のものを自分は見てゐるやうな氣がする也（氣がすると云ふは謙遜「やぶちゃん注…原書簡では「謙辭」となつてゐる。」なるやもしれず）。これが現前せば「やぶちゃん注…原書簡では「現前せずば」となつてゐる。恒藤の脱字か、誤植であろう。」藝術を語る資格なき人のやうな氣がするなり。

同じ故郷より來りし二人の名を善悪と云ふなり。名づけしは其故郷を知らざる人々なり。「やぶちゃん注…ここで底本では改ページになつてゐるが、版組上では、行空けをしていない。原書簡は一行空けである。ここは特異的に一行空けておく。」

何にてもよけれど、しかつめらしくロゴスと云はむ乎。宇宙にロゴスあり。万人にロゴスあり。大なるロゴスに従つて星辰は運行す。小なるロゴスに従つて各人は行動す。ロゴスに従はざるものは亡ぶ。ロゴスに従はざる行動のみ、もし名づくべくんば悪と名づくべし。

ロゴスは情にあらず、知にあらず、意にあらず、強ひて云へば、大なる知なり。所謂善悪はロゴスに従ふ行動を浅薄なる功利的の立場より漠然と別ちたる曖昧なる概念なり。

自分は時に血管の中を血が星と共にめぐつてゐるやうな氣がする事あり。星占術を創め

し「やぶちゃん注…「はじめし。」」人はこんな感じを更につよく有せしなるべし。

このものにふれずんば駄目なり。かくもかかざるもこの物にふれずんば駄目也。

藝術はこれに関係して始めて意義あり。

今にして君の「WESEN」を感得せしむるアートは最高也」と云ひしを思ふ。君は三足も四足も僕に先んじたり。

しひて神の信仰を求むる必要なし。信仰を窮屈なる神の形式にあてはむればこそ有無の論もおこれ。自分は「このもの」の信仰あり。こは「藝術」の信仰なり。この信仰の下に感ずる法悦が他の信仰の與ふる法悦に劣れりとも思はれず。

すべてのものは信仰とならずんば駄目也。ひとり宗教に於いてのみならず、ひとり藝術に於てのみならず、すべて信仰となりてはじめて命あらむ。

藝術を実用新案を工夫する職人の如くとり扱ふものは幸福なり。

自己を主張すと云ふ、しかも軽々しく主張すと云ふ。

自分は引込思案のせいかしらねど、まづ主張せんとする自己を觀たしと思ふ。

顧みて空虚なる自己をみるは不快なり。自ら眼をおほひたき位いやなり。されどせん方なし。樽の空しきか否かを見し上ならでは、之に酒をみたす事は難かるべし。兎に角いやなり、苦しいものなり。

みにくき自己を主張してやまざるものをみるとときには、嫌惡と共に壓迫を感ず。少しなれど壓迫を感ず。

自分はさびし。

時々今から考へると一高にみた時分に君はさぞさびしかつたらうと思ふ事あり。

かく云へばとて君と今の僕と同じと云ふにはあらず、君の云つてる事が僕にわからなかつたからなり。何時でも「やぶちゃん注…「何時までも」の意か。」わからないのかもしれないねど。

自分は新思潮同人の一人となれり。發表したきものあるにあらず、發表する爲の準備をする爲也。表現と人とは一なりとは眞なりと思ふ。自分は絃ぎれたる胡弓をもつはいやなり。これより絃をつながむと思ふ。

アナトオル・フランスの短篇を訳して、今更わが文のものにならざるにあきれたり。同

人中最も文の下手なるは僕なり、甚しく不快なり。

同人とは云へ皆歩調は別なり、早晚分離せむか。「やぶちゃん注…この後には原書簡では一行空けがある。」

この二、三ヶ月、煮え切らざる日を送れり。胃の具合少し悪きに、いろいろな考に頭をつかひし爲なり。その爲に年賀状の外どこへも手紙をかかず、君にも失礼した訳なり、堪忍したまへ。海苔は少し大袈裟なり。胃病で死んでも海苔を食ふはやめじと誓ひたり。

忙しいだらうが時々手紙をくれたまへ。僕もせいぜい勉強してかく。

今日の手紙は大抵日記よりのぬき書きなり。幼きを嗤はざらむ事をのぞむ。「やぶちゃん注…この後は原書簡では一行空けがある。底本は改ページであるが、版組上、一行空けはされていない。特異点で一行空けを施す。なお、以下の和歌は原書簡では三首ともに一行ベタである。原書簡では、第一首目の初句は「ともかく」で「も」はない。」

歌も殆どつくらず、つくる暇もなし。唯三首。

ともかくもむしやうに淋し

夕空の一つ星のやうに

むしやうに淋し

こんなうれしき事はなし

こんなうれしき事はなきに

星をみてあれば涙ながるるかな

木と草との中に

われは生くるなり

木と草との如くに

「やぶちゃん注…この最後の和歌はおかしい。原書簡では、「木と草との中にわれは生くるなり日を仰ぎてわれは生くるなり木と草との如くに」（ベタはママ。前の二首も同じ）であるから、改行表示するなら、

*

木と草との中に

われは生くるなり

日を仰ぎて

われは生くるなり
木と草との如くに

*
となろうか。』

書中偶々私の言について記してゐることなどは、聰明なる彼の謙遜の氣質に因るものであつて中らざること大である。「やぶちゃん注：「中らざる」「あたらざる」。

大正二年六月、私たちは一高を卒業した。芥川はかねての志望通りに東京大学の英文科に入学する考へであつた。私はその一年前から読んでみた哲学書の影響を受けて、英文学研究の志を絶ち、京都大学の法科に入学することに決心した。それについては、芥川は唯一の相談相手であつた。

「やぶちゃん注：当時は既に東京大学も京都大学も孰れも「帝國大學」に改称されている。

「私はその一年前から読んでみた哲学書の影響を受けて、英文学研究の志を絶ち、京都大学の法科に入学することに決心した」と述べているが、一つには、芥川龍之介の文才を見るにつけ、彼には叶わない、彼に叶わないのであれば、(英)文学での活路はないと、恒藤が思ったらしいことは、現行ではよく知られたことである。」

その夏、私は松江に帰省したが、七月十七日夜の日付で芥川の送つて呉れた手紙は、高等学校三年間二人の交はりを回顧して、つぶさに彼の感想をしろしたものであり、私にとつては最も思ひ出の深い長文の書信である。ただ私はその内容を公けにしようとは思はない。この手紙に対して私の送つた返答の手紙の文句が偶然残つてゐる。恐らく一度書いて、気に入らなくて書き直したものかと思ふが、事によつたらすつかり内容を書き改めて送つたのかも知れない。つまらないものではあるけれど。当時私が彼に対してもつてゐた心持をそのまま現してゐると思はれるので、一部分をぬき書きする。

「やぶちゃん注：七月十七日夜の日付で芥川の送つて呉れた手紙」は「芥川龍之介書簡抄41 / 大正

四(一九二五)年書簡より(七) 井川恭宛」があるが、これは「高等学校三年間二人の交はりを回顧して、つぶさに彼の感想をしろしたものであり、私にとつては最も思ひ出の深い長文の書信である」とあるのは一致しない。或いは、結局、この書簡を全集には拠出しなかつたものと考えらえる(ちよつと残念。往復書簡を並べて読みたかつた)。なお、以下は恒藤自身の下書きであるから、字下げや行空けはない(但し、手紙の開始は改ページとなっている。しかし、判組上の行空けは認められない)。下書きではあるが、往復書簡の一方として恒藤の手紙が読めるのは、私は非常に嬉しい。」

きみの手紙をよんだ。その文句は僕のころにとつては強い響を持つてゐた。大へんうれしいと同時に、するどいメスのさきがかくれた傷口を抓いてゆくやうに痛苦しい氣持がした。僕には値ひしないほど君があつくそそいでくれた好意がこの二年間にどれだけつもつたか。今またそのあらはれにふれたとき、きみの示してくれたやさしいころは、な

ぞかメスのやうにするどくいたく感ぜられる。「やぶちゃん注…「抓着」は「取る・掴む・握る」、「搔く・ひっ搔く」、「捕らえる」などの意があるが、ここは私はメスに応じて、「ひらいて」「ひきさいて」と読みたい。ああ！ かし！ 井川（恒藤）が言う「するどいメスのさきがかくれた傷口を抓着てゆくやうに」文章を書く芥川龍之介とは、後に菊池寛が芥川龍之介の作品をカリカチャアして「人生を銀のピンセットで弄もてあそんである」と言い放ったそれなんぞより、遙かに芥川龍之介の核心をつらまえているではないか!!」

なんだか斯う書いて行くと、ぢきにあの本館が目にちらつく。それを斜めに見上げたさまが浮ぶかと思ふと、二階のまどから追分を見下した眺めがみえる。やつぱり君がそばに居て、ややもすると二あし三あし動きさうにするやうな氣がする。庭から見上げるときは、動いてゐる雲のあひだから日のひかりがこぼれて來さうだが、窓から見おろすときは、雨がねずみ色に空間をぬらしてゐる。もうあそこいらで低徊する機会はないかも知れないね。

「やぶちゃん注…「追分」何処を指しているのか判然としないが、『今昔マップ』の戦前の第一高等学校附近の地図（右に現在の地図と併置されている）をリンクさせておく。」

僕が君に対して言ひたいと思つてゐたことを、君の方から僕に向けてよつぽどすなほにうまく書いて貰つたやうな氣がする。君のまごころからのいろいろの賞讃のことばのどれか一つでもほんたうに受けるだけの理由が若しあつたならば、それを君から聴くことはどれだけの悦びであるかも知れない。しかし僕はうれいよりも恥しい氣がする。恥しいよりも悲しい氣がする。僕はそれだけの理由を確實にもつてゐない。（略）

君がわがままであつたと云へば僕はどれだけ我儘であつたであらう。正直なところ、もし比較の出来るものがあるならば、幾倍わがままであつたか知れない。

君はいつも、そしてどのかどを手に当つて見ても、いつも手ぎはりのよい珠玉のかたちをしたやうな人だと思つた。それで、手ぎはりがわるいと感じたやうな時をあとで考へて見ると、いつもやつぱり自分の手の先の感覚が我儘な時であつたのだ。一体、君はしづかにして居るときは、大へんやさしい謙遜を主張するから、若し君にわがままがあつたにしろ、君は氣を置いてわがままをするのに、僕は自分がわが儘をするのが権利でもあるやうに我儘を通さうとしてゐたやうな氣がしてすまなかつたと思ふ。（略）

ゼんたい僕の方が年上なくせに、僕は君に対するといつても、年長者に対するやうな氣がしてゐた。少くとも年少とは感ぜられなかつた。それだけ君は世間に対して、否自己に対して落ち着きを持つてゐるのに違ひない。君ばかりでなく、一体に僕は大抵の周囲の同じ年輩の人々がみなはるかに僕よりも老成してゐるやうな氣もちがしてならないが、誰でもそんなものかしら？ まあ僕の交友の中では君ぐらゐが同じ年ごろに感ぜられる。ただみんなは、ざわざわと落ちつかうとしてゐるのに、君だけは羨ましいほど靜かに落ち着いてゐる。君はやはり君の自己を内からながめて、不安である、いつもさわいで居ると云ふかも知れないけれど、その不安も騒ぎもまことに靜かに落ちついて居るらしく見えてならない。（略）

君にいろんな弱点や缺点があるとしたら、僕はそれに大てい平氣で接して居られるらし

い。また好きな点もあるらしい。君の弱点に乗ずると云ふやうな考へからでは無い。数へ立てて来れば、君の長所や美点は沢山あつて、嘆賞する、また畏敬する心は折りにふれて湧いたが、何だか君を誰よりもなつかしくさせるものは、君のどちらかと云へば影のうすいSIDEであつたやうな氣もする。考へてみると、誰だつてほんたうに威張れる、誇れる長所や美点をどれだけも持つて居はずまい。お互ひの缺点か弱点がお互ひの氣に障らず、不快にも思へなかつたら、此世の中で其上の事はあるまい。世の中が寂しい。いろんなものざわめきや入り乱れの中にも生といふものはさびしい。そのさびしい氣持が君とは共通なやうな氣がして、二人一緒にゐると、大分さびしさが薄らぐやうな氣がした。眞実、君から求められるものは其れだけであつたかも知れないし。またそれだけが何よりも有難かつたのであつた。[やぶちゃん注：「SIDE」性格の側面。一面。]

氷の上に立つて一寸踏み出すと、あつしまつたと思ひながらも滑るやうになると書いたが、その踏み出す時の足の性根は實際に確かで、また能く自己を制する力をもつてゐるが、少しすべり出したかと思ふと、足の方が逆に自己を主張する。その滑り出した初めの自己がほんたうの自己か、それとも其制御を無視してほとんど本能的にするのがほんたうの自己か、実さい紛らはしい。君はよくつつしんで、わり合にその無制御的にする事をやらないやうに思ふ。それだけ君はよく自己を顧慮して生活を按排してゆく。(略)

東京の町の中で君と一緒にゐて来て、又は乗り合せて来て、新たに乗り別れたり、又乗り替へたりして電車で別れるときは、大へんさびしいと思つた。電車といふ奴は不可抗力をもつた動物のやうな氣のする時もあるね。(略)君に対しては不まじめに腹を立てたことも、まじめに腹を立てたことも殆どない。尤もいつか有樂座の外で待ちぼうけてゐた時は、君と云ふもののカテゴリーの中からパンクチュアリティを除かねばならぬかと考へて少し腹が立つた。その外、何時か(君に氣にもとめなんだであらうし、僕もいつ頃かよく覚えぬが、とに角此学期の間である)学課を了へて帰るときに、一緒に三丁目まで(?)ゆかうと云ひ出したら、君は用事があるからといつて、さつさとどちらへか電車に乗るべくあの下駄棚のふたをあけて往つてしまつた事があつた。その時は、腹が立つたといふよりは、ばかに失望したやうなと云ふよりは、何だかつまらない氣がした。それで今でもその氣持はよくおぼえて居る。僕はいつでも僕の勝手に従つて行動してゐたくせに、その時は、『なぜ一寸氣をかへて一緒に行つて呉れないのだらう』とずゑ分我儘な事を考へながら、畢竟人間といふものの交はりはお互ひの「我」の接触で、その触れ合はないところの時間と空間とは恐ろしく空虚なものと感じた。そして考へて見ると、自分も、いつも自分の我を通したが、若しも幾分まごころを以て自分に接して呉れる人があつたら、よつほどその人にさびしい氣もちを與へるにちがひないだらうと考へた。(略)

[やぶちゃん注：「パンクチュアリティ」= punctuality。人の時間を守る几帳面さ。時間を厳守する能力。

それにしても！ この恒藤の手紙はまるでラヴ・レターではないか！

「やぶちゃん注：ママ。本当は「五」。以下、そのまま、章番号は、ずれてしまっている。」

大正三年十月、新宿から田端に引っこしたときには「銀杏落葉櫻落葉や居を移す」といふ小句を書きそへた印刷の通知状をよこしたが、十二月一日付の音信には、その新居の様子や田端の情景を叙述したあとに、次のやうな事をしたためてゐる。

「やぶちゃん注：冒頭のそれは「芥川龍之介書簡抄32」／大正三（一九一四）年書簡より（十）
「通」の初めの大正三（一九一四）年十一月一日・田端発信・井川恭宛を見られたい。以下の引用は字下げはない。これは「芥川龍之介書簡抄33」／大正三（一九一四）年書簡より（十一）
井川恭宛二通」の一通目だが、日付は大正三（一九一四）十一月三十日の誤りである。この手紙も、かなり長い。以下は途中からの抄録で、やはり恒藤によって表記に手が加えられてある。」

此頃僕はだんだん人と遠くなるやうな氣がする。殆ど誰にもあはうと云ふ氣がおこらない。時々随分さびしいが仕方がない。その代り今までの僕の傾向とは反対なものが興味をひき出した。僕は此頃ラップでも力のあるものが面白くなつた。何故だか自分にもよくわからない。たださう云ふものをよんでみると、さびしくない氣がする。さうして高等学校にゐた時よりも大分ピュリタンになつた。（略）

兎に角僕は、少し風向きがかはつた。かはりたてだからまだ余裕がない。僕は僕の見解以外に立つ藝術は悉く邪道のやうな氣がする。そんな物を拵へる奴は大馬鹿のやうな氣がする。「やぶちゃん注：ここに省略がある。」大分鼻いきが荒いが、まじめなんだからひやかしてはいけない。それから天才の眞似をしてるんでもないから心配しなくてもいい。余裕「やぶちゃん注：底本は印字が擦れているため、判読不能。原書簡で「裕」とした。」がないから切迫してゐる。切迫してゐるとすぐ喧嘩腰になりさうでいけない。一体僕は人の感情を害するやうな事をするのは大嫌なのだが此頃は反意志的に害しさうで困る。Y「やぶちゃん注：恒藤によつて匿名にされたもので、原書簡では「山宮」（さんぐう）。」さんなんか大分氣をわるくしてゐるらしい。兎に角僕がよくないのだ。

君が京都にゐる中に一ぺんゆきたい。鼻息のあらいい時にゆくと、君があきれてしまふかもしれない。尤もいくらあらくつても自分のものがいいと思つてゐるわけではない。人のものがあんまり卑怯でのんきだから不愉快なのだ。同時に自分のものも其仲間入りをするか、もしくは其以下になりやすいのだから猶不愉快なのだ。でも少し位あらいいのではあきれまいと思ふから、やつぱり行きたい。要するに君が京都へいつたのはよくない。あはうと思つても一寸あへないのはおそろしく不自由だ。手紙では埒があかないし、「やぶちゃん注：ここに省略がある。」ゆくには遠いし、甚だよくない。

何だかする事が沢山あつて忙しい。体は大へんいい。胃病は全く癒つた。

いつか寮で君が云つたやうに朝おきた時にミゼラブルな氣もちがする事だけは少しもか

はらない。医科の男に何故だらうつてきいてみたら、血液が後頭部へどうかする具合だらうつて云つた。その男もあまりよくわかつてゐないのだから、僕はなほさらわらない。新思潮はとうの昔廃刊した。それでもあれがあつたおかげで、皆かいたものがすぐ活字になる権利を得てゐる。(略)

僕はこの頃今までよんだ本を皆よみかへしたいやうな氣がする。何もわからずによんでゐたやうな氣がして仕方がない。

世の中にはいやな奴がうぢやうぢやある。そいつが皆自己を主張してゐるんだからたまらない。一体自己の表現と云ふ事には自己の價値は問題にならないものかしら。ゴーホも「己は何を持つてゐるか世間に見せてやる」とは云つたが「どんなに醜いものを持つてゐるかみせてやる」とは云はなかつた(略)「やぶちゃん注」ここで引用は終わり、改ページとなっている。版組を見るに、一行空けはないが、特異的に一行空ける。」

大学の英文科に在籍した三年間の学課は芥川にとつて世にも退屈な時間つぶしであつた。それは当然至極な事柄である。彼はその事についてよく話しましたし手紙にもかいた。一例をあげる。大正四年六月十三日付の書簡である。

「やぶちゃん注…字下げはない。この書簡はこのために、昨夜、「芥川龍之介書簡抄 追加 大正四（一九一五）年六月十二日 井川恭宛書簡」として電子化注しておいた。やはり恒藤によつて一部表記が整序されている。」

試験は十日に始まつて十五日にすむ。日数は短いが一日に二つある日がある位で中々充實してゐるから厄介だ。殊にこの一年來興味の無いものには努力する事が益々出来なくなつて來たので余計厄介だ。そして専門の英文学の講義が僕には一番興味が無いんだから愈々厄介だ。最後にまだ一週二回づつ品川の医者へ通つてゐるんだから、その上に厄介至極だと云つていい。(略)

差当り僕の頭は数字で一杯になつてゐる。ディッケンスの著作年表、ペトラルカのソネットの数、十六世紀のソネット作家の作品総数、沙翁のソネットの番号、及シムベラインの幕数、景数——實際災だ。早く自分の事がしたくつてたまらないが、仕方がない。ノートのよみきれない科目は半創作的な答案を書いて間に合せてゐる。

田端は若葉——あらゆる種類の若葉で埋つてゐる。その上に毎日静な雨がさあつとふつてゐる。僕が雨期を愛するのは。君もしつてゐるだらう。僕は少しでもエステイッシュな心のある人なら誰でも黴のはえる事位は度外視して雨期を愛すべきものだと思ふ。この頃の雨に飽きた木の枝ほどよくしくしだれてゐるものは外にない。江城五月黄梅雨と云ふが、黄梅、黄麦、新緑及び灰色の空の美しい諧調は、西洋の詩に見られない美しさであらう。雨のはれまを散歩すると、家々門巷掃桐花と云ふ句を思出す。槐影沈々雨勢來と云ふ句を思出す。一川薰徹野薔薇と云ふ句を思出す。僕は試験後少くも半月は雨がふつてゐる事を祈つてゐる。(略)

早く自由にいろんな事がしたい。僕にはする事、しなくてはならない事が沢山ある。僕の友だちに一人今三期の結核患者があるが、病気が病氣なので、誰も見舞ひに行かない。姉さんと妹と三人ぐらしで、姉さんもまだ片づいてゐないのだから大へんだ。病院へ入れておくのも苦しいらしい。ああなつちやたまらないと思つた。しみじみさう思つた。その人が野心家でないのは、まだしもの幸かもしれない。「やぶちゃん注」以下は原書簡では改行している。「どこへゆくともまだきまつてゐないがどこかへゆく。」

十二日夕

龍

七

封筒を失つた爲に、発信の時を正確に知り得ない書簡が若干ある中に次のやうな文句のものがある。多分大正四年のあひだに書かれたものと思ふ。

「やぶちゃん注」以下、字下げはない。これは「芥川龍之介書簡抄36 / 大正四（一九一五）年書簡より（二） 失恋後の沈鬱書簡四通」の三通目で、「大正四（一九一五）年三月九日・京都市吉田京都帝國大學寄宿會内 井川恭君 直披・三月十二日 東京田端四三五 芥川龍之介」として電子化注してある。恒藤はかなり手を入れている。」

僕は愛の形をした HUNGER を恐れた。それから結婚と云ふ事に至るまでの間（可成長い、少くとも三年はある）の相互の精神的、肉体的の變化を恐れた。最後に最も卑しむべき射倖心、そして更に僕の愛を動かす事の多い物の來る事を恐れた。

しかし時は僕にこの三つの杞憂を破つてくれた。僕は大体に於て常にジンリツヒなる何物をも含まない愛を抱く事が出来るやうになつた。僕はひとりで朝眼をさました時に、ノスタルジアのやうなかなしさを以て人を思つた事を忘れない。そして何人「やぶちゃん注」「なんびと」にも知らるる事のない、何人にもよまるる事のない手紙をかいて、ひとりでよんで、ひとりでやぶつた事も忘れない。（略）

僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな氣がする。しかし不幸にしてその新しい國には醜い物ばかりであつた。「やぶちゃん注」原書簡ではここで改行していない。」

僕はその醜い物を祝福する。その醜さの故に、僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知る事が出來たからである。しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にもっとよく知る事が出來たからである。

僕はあるのままに大きくなりたい。ありのままに強くなりたい。僕を苦しめるヴァニチーと性慾とイゴイズムとを、僕のチャスチファイし得べきものに向上させたい。そして愛する事によつて、愛せらるる事なくとも、生存苦をなぐさめたい。

この二、三日漸く CHAOS をはなれたやうな、しづかな、そのわりに心細い状態が來た。僕はあらゆる愚にして滑稽な虚名を笑ひたい。しかし笑ふよりも先に同情したくなる。恐らくすべては泣き笑ひで見るべきものかもしれない。

僕は僕を愛し僕を惜むすべての STRANGERS と共に大学を出て、飯を食ふ口をさがして、そして死んでしまふ。しかしそれはかなしくも、うれしくもない。しかし死ぬまでゆめをみてゐてはたまらない。そして又人間らしい火をもやす事がなくては猶たまらない。ただあく迄も HUMAN な大きさをもちたい。

かいた事は大へんきれぎれだ。此頃僕は僕自身の上に明かな変化を認める事が出来る。そして偏狭な心の一角が愈々 SHARP なつてゆくのを感ずる。毎日学校へゆくのも沙漠へゆくやうな氣がしてさびしい。さびしいけれど僕はまだ中々傲慢である。

龍

高等学校時代から大学時代へかけて芥川がいて呉れた書信の中の若干をえらび、その全文もしくは一部分を寫しとることによつて、この時代における彼の生活——主として内的生活の片影をあらはすことが、以上において私の試みた所であつた。故人が私に宛てて送つた私的音信を公けにするのは、さし控ふべき事であらうかと考慮してみたが、直接に又は作品を通じて間接に故人を愛する人々が、彼をより好く知り、より深く愛するよすがに爲るであらうといふ考へから、その公表を敢てすることにした。

八

人生の或る時点に個人が社会において占める地位は、そこばくの義務と責任とを伴ふ。それらの義務なり責任なりは、生存の肯定を前提することによつてのみ成り立つものであるから、原則としては、自殺はそれらの義務や責任やに調和するものではない。芥川の場合において、彼の自殺は社会の一員としての義務及び責任に反するものではないといふやうに、私は彼の所爲を辯護しようとは思はない。仮令かやうな辯護を試みたところで、それが彼にとつて何の意義に値ひするであらうぞ。さりとして、彼に向つて道德的責任を問はむとすることは、私の感情の肯ぜざる所である。むしろ私は、若しも彼の魂がなほ存在するものならば、「よくも君はあんなに深刻な苦しみに堪へて、その時までも生きて居られたね」と、さう云つて慰めたく思ふのである。

七月二十四日夜、始めて悲報を耳にしたとき。「噫「やぶちゃん注」ああ。」、やつたな!」と思つた。この心持を説明するには多くの言を費さねばならぬから差控へる。ただ私は彼の自殺の事実を知つたとき、後で考へると自分でも不思議な位に、少しも駭かなかつた。そして彼の自殺を決意するに到つた心持に十分同感することが出来るやうに思つた。唯俄に人生が数倍の寂寞を加へた感に襲はれた。爾來この氣持は今に至るも持続して居る。

彼の自殺に何等かの理由があるとすれば、それは全く彼の場合に特有な理由であると、私は信ずる。何等かの他の人又は人々の自殺の理由と同一のカテゴリイに歸せしめることによつて、彼の自殺の理由を理解し得たと考へるのは、單なる論理的満足たるに過ぎぬであらう。人間の行爲の動機はすべて之を理解し得るといふ前提其ものが、すでに甚だ疑は

しいものではあるまいか。若しも強ひて普通の自殺の理由を以て彼の場合を理解せむと欲する人があれば、彼は理由無くして自殺したと答ふべきであらう。但、「彼の全生涯及び全性格の裡に彼の自殺の理由を求めよ。而して其中に彼の生きた社会的環境の全面をも考慮せよ」との答は、恐らく間然する所無き答であらう。私自身としては、「彼の自殺の理由はわからない。しかし自殺を決意するに至つた心持には同感出来る」と云ふ外はない。だが、彼の自殺の原因や動機が仮令完全に明かになつたところで、最早二度と彼に会つて話することが出来なくなつたといふ儼然たる事実面に面して、何の得る所ぞと云ひ度い。

——昭和二年八月五日——

「やぶちゃん注：最後のクレジットは底本では最終行の下二字インデントであるが、改行した。

さて、私は、以上の恒藤恭の文章を、初めて、タイピングで電子化しながら読んだ（書簡は私の「芥川龍之介書簡抄」の電子データを用いて加工したので、思ったより早く打てた）が、私は読み終わって、世にある作家や研究者の有象無象の芥川龍之介論などでは、到底、ほとんど感ずることの出来ない、強い芥川龍之介への愛を感じた。しかも、論考部は、流石に法哲学者恒藤を感じさせる、名外科医の術式を見るような明晰さにも感動したことを言い添えておく。」

「やぶちゃん注：以下の「芥川龍之介のことなど」は全四十章から成るが、その初出は、雑誌『智慧』の昭和二二（一九四七）年五月一日発行号を第一回とし、翌年七月二十五日を最終回として、全九回に分けて連載されたものである。

私がブログ・カテゴリ「[芥川龍之介書簡抄](#)」で注したものと等については、一切、注は附さない。それぞれのところで当該書簡等にリンクさせあるので、そちらを見られたい。」

芥川龍之介のことなど

は し が き

秋田屋書店の八束氏がねんごろに勧めて呉られるままに、ここにかかげた標題の下に幾回かにわたって執筆したいと思ふ。「芥川龍之介のことなど」といふ標題をえらんだわけは、執筆にとりかかるたび毎に心の向かふにまかせて、芥川自身のことのほかには、何かしらそれに関係のあることや、それから思ひついたことなどをも書いて見たいと思ふからである。多くは故人のおもひ出を書くこととなるだらうと思ふのであるが、別に時の順序にしたがふといふのでもなく、ことがらの順序にしたがふといふこともせず、およそどのくらゐの回数書きつづけるかといふことについても全く見当が立たない。つまり至つてわがままな書きかたなので、あらかじめその点について読者諸氏の寛恕をおねがひして置く次第である。

「やぶちゃん注：「秋田屋書店の八束氏」本篇が連載された雑誌『智慧』の出版元の店主八束清。同雑誌は本連載開始の前年昭和二二（一九二六）年に創刊号が発刊されている。[sumus2013氏のブログ「林哲夫の文画な日々」の「小沢信男と富士正晴」](#)に、中尾務氏による論考からの引用として、『八束』は、八束清。八束は、戦前、富士正晴と弘文堂書房で同僚。一九四三年、八束は弘文堂書房を退職して、大和書院に入社するが、大和書院は、翌四四年の企業合同時に、ほか五社と秋田屋を創設。八束は、京都北白川追分町の秋田屋編輯室に勤めていた。（秋田屋本社は、大阪。）とある人物であろうと思われる。古書店の書誌を見ても、創刊号が何月に出たかも判らず、雑誌がどういったジャンルのものであるかも不明であるが、古書店の創刊号の表示に『吉井勇他』とあるから、文芸誌であったことは判る。」

一 戦火に焼け失せた澄江堂

芥川龍之介が昭和二年の夏に亡くなったあと、彼の住みなれてゐた田端の家——澄江堂——には、未亡人とをさない男の子たちとのほかに、三人の老人たちが住みつけてゐた。三人の老人といふのは、故人の両親と伯母さんである。私は高等学校の学生時代に、そのころ新宿にあつた芥川の家にしぼしば遊びに行つたものであつて、時には泊めてもらつたこともあつた。京都大学の学生時代から大学院の学生であつたころにはいく度か上京して滞在すると、芥川の家——そのころは田端に移つてゐた——泊めてもらつたものであつた。それで、おのづと故人の両親や伯母さんにはよほど親しくなつたところから、故人の亡くなつた後にも、筍とか、松茸とかいつたような、京都の名産のものの出盛らうとする季節には、客車便でそれを田端の家に送りとどけた。さうすると、未亡人が礼状をしたためて寄越され、その中には三老人たちの消息も書いてあるので、いつも故人の亡きあとの芥川家の生活の平安をいのるやうな氣もちでそれを読んだものであつた。

だが、その後、三人の年老いた人たちが次々に此の世を去つて行つてしまつてからは、親しい年老いた人々のなぐさめにもと思つて季節の物を送るといふやうなこともなくなり、しぜん芥川家との交渉も疎遠となつて行つた。それでも、故人がかかりつけのお医者としてたよりとしてゐた下島さんの令息が京大の文学部に在学してゐたころは、下島さんの手紙や、令息が帰省のたび毎にもたらす噂話によつて、芥川家の様子を知ることが出来たのであつたが、下島君が卒業して、文藝春秋社に入社してからあとは、さうしたよすがも無くなつてしまつた。

〔やぶちゃん注…「三老人」養父芥川道章（嘉永二（一八四九）年一月六日〜昭和三（一九二八）年六月二十七日…龍之介の養育を受けた当時は東京府勤務）、及び、

彼の妻で養母芥川儔（とも 安政四（一八五七）年四月十一日〜昭和一二（一九三七）年五月十四日）、そして、

龍之介の母新原にいばらフクの姉にして道章の妹でもあつた伯母の芥川フキ（安政三（一九五六）年八月二十九日〜昭和一三（一九三八）年八月四日…龍之介にとっては生活的にも精神的にも重要な人物で、生涯、独身で道章・儔と同居しており、龍之介の養育は主に彼女が面倒を見ている。龍之介の大正一五（一九二六）年十月に『改造』に発表した「[點鬼簿](#)」の「三」の中で、実父新原敏三から、『僕は一夜大森の魚榮でアイスクリームを勧められながら、露骨に實家へ逃げて来いと口説かれたことを覚えてゐる。僕の父はかう云ふ時には頗る巧言令色を弄した。が、生憎その勧誘は一度も効を奏さなかつた。それは僕が養家の父母を、——殊に伯母を愛してゐたからだつた。』と述べていることでも明らかである。なお、龍之介が自死の前に最後に会話したのはこのフキであつた。次注参照）

を指す。以上の三人の生没年月日は三人全部のそれを掲載する研究書が少ないのだが、所持する一九九二年河出書房新社刊の鷺只雄氏の編著になる「年表作家読本 芥川龍之介」の十四ページに載つた二種の系

図に拠った。

「下島さん」下島勲（いさをし（いさおし） 明治三（一八七〇）年〜昭和二十二（一九四七）年）は芥川家の近所に住む芥川龍之介及び芥川家の主治医。日清・日露戦争の従軍経験を持ち、後に東京田端で開業後、芥川の主治医・友人として、その末期をも看取った。芥川も愛した俳人井上井月の研究者としても知られ、自らも俳句をものし、空谷と号した。また書画の造詣も深く、能書家でもあった。芥川龍之介の辞世とされる「水涕や鼻の先だけ暮れのこる」の末期の短冊は彼に託されたものであった（それを渡すように言った相手がフキだったのである）。私は十年前にサイト版で下島氏の「[芥川龍之介氏のこと](#)」（昭和二（一九二七）年九月号『改造 芥川龍之介特輯』初出）を電子化してある。ここに出る「令息」は不詳。】

ことに、近年一度も上京の機会がなかつたので、東京の空襲のことが傳へられるごとに、田端のあたりはどうであつたらうかと遙かに思ひを馳せて案じるばかりであつた。終戦後折り折り東京からたづねて来る知人や所用の客に、田端の辺の戦災の模様を尋ねて見ても正確な状況を話して呉れる人はひとりもなかつた。下島さんか、菊池寛君かに手紙を出して尋ねて見ようかとも思つたこともあつたけれど、ついそれも実行しないでゐるうちに、夏になつて東京から訪ねて来たN君が、かなり確からしい口調で、田端の駅の上方向一帯は無事の筈だと話して呉れたのですつかり安心した。「やぶちゃん注…「N君」不詳。」

七月の下旬に、塩尻清市君が「河童」の英訳を秋田屋から出版されるについて、芥川家の諒解を得て欲しいといふ依頼を受けた。それで、ずいぶん久しぶりに未亡人あてに、御無沙汰のおわび旁々、その依頼の趣旨をつたへる手紙を書いたが、そのときは澄江堂は戦禍をまぬがれてゐたことばかり思ひ込んでゐたので、そのことについての慶びの言葉をかき、近況を知らせて頂きたい旨をしたためた。無論、アドレスも元のままにその手紙を発送した。

「やぶちゃん注…七月」初出時期と前後から、敗戦の翌年の昭和二一（一九四六）年七月である。

『塩尻清市君が「河童」の英訳を秋田屋から出版されるについて、芥川家の諒解を得て欲しいといふ依頼を受けた』芥川龍之介の「河童」の英訳本は翻訳家塩尻清市氏の訳で書店「秋田屋」から昭和二二（一九四七）年に刊行されている（書名は「[KAPPA](#)」）。「[大阪公立大学図書館](#)」[公式サイト内のこちらの書誌レビュー](#)に、『芥川の親友、恒藤恭による日本語序文つき』[\(1\)](#)とあり、『河童』は戦前にも中国語・ドイツ語訳などがあるが、英訳の刊行は本書が初めてであつたようだ。恒藤の序文には、大正の初期に芥川がしばしば河童の絵を描いていたとある。芥川が河童の絵を描き始めたのは大正九（一九二〇）『年頃と言われており（安藤公美「マルチメディア時代の芥川龍之介の表象」『芥川龍之介研究』第十二『号など』、本書序文の証言は、『その定説を』、『数年遡る貴重なものである。河童という、英語圏では知られていないものを理解してもらうため、訳者は江戸時代の文献を引いて』、『河童そのものの詳しい解説』THE [KAPPA IN THE JAPANESE FOLKLORE](#)、も付している』（奥野久美子氏の文とある）とあつた。[グーグル](#)

[画像検索](#)『塩尻清市 「河童」英訳』でオークション・サイトの幾つかの画像が出るが、それらは出版社が「北星堂書店」とあり、奥付の出版年も昭和二十四年十二月となっている。「塩尻清市」氏については、事績を探し得ないが、昭和一八（一九三三）年にアーネスト・サトー「幕末維新回想記」を和訳しておら

れ、また、同姓同名の退官記事が『京都女子大学英文学会』（第十四号・一九七〇年十二月発行）の中に標題で見られるが、同一人物であろうか。」

八月の上旬になつてから、未亡人からの返簡がとどいた。それには、鶴沼のアドレスが書いてあつたけれど、避暑のために実家に行つて居られるのだらうと推察しただけで、戦禍のことなどは全く思ひ及ばないままに封を切つて読んだ。便箋のはじめの一枚には、こちらからの依頼の件について丁寧なあいさつのことばがしたためてあつたが、二枚目から三枚目にかけて、「今年は仰せの如くお暑さきびしく、昭和二年の夏を思ひ出され、廿四日には宅でも皆々と話し合ひました。田端の家も昨年四月十三日に灰になつてしまひました。子供達は入隊致し居り、一昨年夏、当鶴沼に疎開致して居りました爲に、身は安全ではございましたが、バケツに一杯の水さへもかけませんでした事を実に残念に思つて居ります。戦ひも終り、長男、三男は復員致しましたが、次男多加志は此度復員省で調べていただきましたところ、ビルマ國ヤノン縣ヤメセンに於て、昨年四月十二日に戦死致して居ります事がわかり、田端の家が焼けます前日に戦死致しました事を不思議に思つて居る次第でございます。」といふやうにしたためてあつた。

「やぶちゃん注：「鶴沼のアドレス」「避暑のために実家に行つて居られるのだらう」芥川龍之介の未亡人文の母塚本鈴（明治一四（一九八一）年三月九日〜昭和一三（一九三八）年九月二日…夫山本善五郎は海軍将校であつたが、「日露戦争」で戦死した）は、長男の八洲（文の弟。一高に入学し、将来を期待された）が肺結核を病んでおり、龍之介生前の大正一五（一九一六）年の四月には既に息子八洲の療養のため鶴沼に転居していた。彼の転地療養探しには龍之介も心を砕いていた。八洲は結局、その後は病床生活を送り、敗戦の前年、昭和一九（一九四四）年六月十日に既に亡くなつて居る。

「長男」俳優となつた芥川比呂志（大正九（一九二〇）年三月三十日〜昭和五六（一九八一）年十月二十八日）は「太平洋戦争」勃発のため、慶應義塾大学（仏文科）を繰上卒業させられ、甲種幹部候補生として、群馬県の前橋陸軍予備士官学校（赤城隊）に入校、卒業後の陸軍少尉時代には、帝国陸軍有数の本土防空戦闘機部隊として有名な東京調布の飛行第二百四十四戦隊の整備隊本部附として勤務し、敗戦時は陸軍中尉として滋賀県神崎郡御園村の神崎部隊三谷隊にいた。敗戦後は神奈川県藤沢市鶴沼の母の実家別荘に疎開していた家族の許に復員した。なお、彼の名「ひろし」は親友菊池寛（表記は同じであるが、ペン・ネームでは「くわん（かん）」、本名では「ひろし」と読んだ）の名の読みを万葉仮名に当てたもの（当該ウイキに拠つた）。

「三男」作曲家となつた芥川也寸志（大正一四（一九二五）年七月十二日〜平成元（一九八九）年一月三十一日）は東京音楽学校予科作曲部（現在の東京芸術大学音楽学部作曲科）に合格していたが、その翌年十月、学徒動員で徴兵され、陸軍戸山学校軍楽隊に配属された。敗戦後は東京音楽学校に復籍した。彼の名「やすし」はまさに、この恒藤恭の名「恭」を訓読みして同様に命名されたものである（当該ウイキに拠つた）。

「次男多加志」芥川多加志（大正一一（一九二二）年十一月八日〜昭和二〇（一九四五）年四月十三日）は昭和一五（一九四〇）年に東京外国語高等学校（現在の東京外語大）仏語部文科入学（但し、重度の肋膜炎で一年余を休学している）、昭和一八（一九四三）年十一月二十八日出征し、陸軍朝鮮第二十二部隊へ入

営したが、翌昭和一九（一九四四）年六月二十九日、ビルマ戦線への起死回生の投入のための陸軍第四十九師団歩兵第一〇六連隊（狼一八七〇二）の一兵士として朝鮮を出発、翌年、ビルマのヤーン県ヤメセン地区の市街戦にて、胸部穿透性戦車砲弾破片創を受け、戦死した。僅か満二十三歳であった。多加志は文学嗜好で、最も父龍之介に似ており、生きていれば、作家になっていたと思われる人物であった。彼の名「たかし」は、晩年の盟友で画家の小穴隆一の「隆」に基づき同前で命名されたものであった。なお、私のブログ・カテゴリ「芥川多加志」を、是非、参照されたい。」

「ああ、さうだったのか」と愕くと共に、あのもの静かな澄江堂のあたりの家並みの在りし日の風趣をまざまざと思ひうかべた。とりわけ澄江堂の隣りの香取秀眞さんのお宅も焼け失せたのだなど、年老いた鑄金の大家の身辺を襲うた戦禍のいたましさを思はずには居れなかつた。篤実なN氏の話だから、よもや間ちがひはないだらうと信じきつてゐたので、故人の死後年々七月二十四日に、河童忌の会合がひらかれた天然自笑軒は無事であつたであらうし、平和も回復したことはあるし、今年は其処での河童忌のあつまりも復活されたことだらうと考へ、未亡人に宛てた手紙の中には「この夏の河童忌には皆さん御会合のことだつたらうと存じます」といふやうなことを書いたのであつたが、未亡人からの近簡をよんで、なんとも愚かしい手紙の文句をしたためたことだつたと、自分のうかつさを愧ぢるころもちを禁め得なかつた。

「やぶちゃん注」香取秀眞（かとりほづま 明治七（一八七四）年～昭和二九（一九五四）年）は鑄金工芸師。東京美術学校（現在の東京芸術大学）教授・帝室博物館（現在の東京国立博物館）技芸員・文化勲章叙勲。アララギ派の歌人としても知られ、芥川龍之介の隣人にして友人であつた。

「天然自笑軒」田端の自宅近くにあつた会席料理屋「天然自笑軒」。芥川龍之介は文との結婚披露宴をここでやっている。

「禁め」「とどめ」。

芥川の自殺の後丁度十八ヶ年を経た昨年の七月のなかばに、次男の多加志君は遠い南方の炎暑の地域で戦死し、その翌日には故人の生前をしのぶよすがとなるさまさまの遺書や遺品と共に澄江堂の建物が戦火のために焼けうせてしまつたといふことは、奥さんが手紙の中に書かれてゐるやうに、なにか不思議なめぐり合はせだといふ感じがする。

「やぶちゃん注」「さまさまの遺書や遺品と共に澄江堂の建物が戦火のために焼けうせてしまつた」とあるが、実は遺品・遺書は焼失していない。私の「芥川龍之介遺書全六通 他 関連資料一通 2008年に新たに見出されたる遺書原本やぶちゃん翻刻版 附やぶちゃん詳細注2009年版」を見られたい。この件については、後の「十四 澄江堂の遺品について」で修正されている。

あの元の新宿の家――となり飼牛場があり、門の前から東南に向つて四、五百坪ばかりの廣さの、雑草のしげるに任せた廣場があつた――も、東京から来た人々のうわさ話から推して考へると、やはり戦災の襲ふところとなつたものらしい。高等学校の一年生のあひだ、芥川は寄宿寮でくらしただけのものであるが、私たちは英文科の同じクラスであつた関係から。その一年間といふもの、寄宿寮の中の同じ室で起臥したのであつた。先年一高の校舎が現在の駒場に移された後、その寮はとりこぼされて、東京帝大の建物がそれに代つた

さうである。そんなやうなわけで、この次ぎ上京する機会にめぐまれたとしても、故人と共に起臥したり、雑談したりした青年のころのことを、再び眼の前にありありと思ひうかべる空間的機縁は、跡かた無く消滅してしまつたわけである。そのやうに考へると、大正二年の夏に、私が生まれ故郷の松江で一と夏借りて住まつたことのある城のお濠の岸べのささやかな家のことが、一層なつかしく思ひ出されるのであつた。と云ふわけは、その夏の私の勧誘に應じて、芥川がそれまでの彼の経験としては晨初の長い汽車の一人旅を思ひ立ち、松江にたどり着いて、しばらくのあひだ、そのお濠端の家に滞在し、一しよに松江の市中のあちこちをあるきまはつたり、出雲大社に参詣したりしたからである。その家が現在でもそのままに残存してあるかどうか分らないけれど、いつか久しぶりに松江をおとづれる機会があつたならば、その家をたづねて、当時の思ひ出をあらたにしたいものと思つてゐる。この夏のはじめに、島根縣の当局の人から、夏期大学風の企てについて講演の依頼を受けたけれど、長迎の汽車旅行をすると肋間神経痛を起す虞れがあるために、その種の依頼はすべて引き受けないことにしてゐる私は、すゐぶん永いあひだおとづれたことのない湖畔の市街をあるきまはつたり、水草が茂り、いろいろの藻のたぐひのうかんである城のお濠にのぞんでゐたその家が、今なほ有るか無いかをたしかめる機会を獲ることを断念するほかはなかつた。

「やぶちゃん注：「城」松江城。

「お濠の岸べのささやかな家」私の『芥川龍之介畏友井川恭著「翡翠記」(芥川龍之介「日記より」含む)「二」』の冒頭を引く(太字化は今回した)。

*

お花畑の町はさびしい町である。「やぶちゃん注：「お花畑」底本の後注に「松江城(千鳥城)西麓の内堀に沿つた町の名。井川芥川を迎えるために、松江市中原町一六七の堀端の一軒屋を借りた。この借屋は、前年」、かの作家「志賀直哉が三月滞在していた家で、「濠端の住まひ」(大正二三(一九二四)年十月執筆。大正十四年一月号『不二』初出。所持する岩波書店「志賀直哉全集」に拠る)』の舞台ともなった家である」とある。[ここ](#)(「グーグル・マップ・データ」)。

*

「グーグル・マップ・データ」の[サイド・パネルの画像](#)もよすがとして見られたい。」

文藝春秋の八月號には、故人の長男比呂志君の執筆にかかる「父龍之介の映像」の一篇が載せてある。すなほな、滞りのない筆致で、幼年のころの同君の眼に映じた故人のすがたが生き生きと描いてあるが、二階の八畳の書齋についての描寫をことに興味ふかく読んだ。「青い絨毯を敷いた、あかるい部屋の中央に小さな紫檀の机と、長大鉢とが、鍵の手に置いてあり、後の二辺を、書き損ひの原稿用紙や、炭取や、つみ重ねた本や、來翰を入れた木の盆や籐の紙屑籠などが、雑然と描き出してゐる。机のむかうの、座蒲團のおいてある所が、自然にそこだけ窪んだやうなかたちで残されてゐて、それは如何にも、父の出かけたあとといふ感じがした。」といふやうなくだりを読んで、それは如何にも、父の部屋が今でもむかしのままに現存してゐて、竹垣をめぐらし、檜の木のかげに八つ手が葉を

ひろげてゐる庭に、明るい日光をあびながら面してゐるやうに思はれてならないのである。「やぶちゃん注」『長男比呂志君の執筆にかかる「父龍之介の映像』昭和二一（一九二六）年八月発行の『文藝春秋』所収。これは現在、岩波文庫の石割透編「芥川追想」（二〇一七年七月刊）で読める。未読の方は恒藤の言う通りで、お勧めである。』

二 エゴイストについて

充分な意味心おけるエゴイスト、言ひかへると、徹底的なエゴイストといふものは、自分がそのやうなエゴイストであるといふことを、ほとんど自覚せず、臆面もなくエゴイストチックな振るまひをして憚らない人であるやうに思ふ。

なんらかの程度にエゴイストとしての性向をそなへながら生まれるといふことは、萬人に共通な事実である、と言ひ得るであらう。が、エゴイストチックな傾向の猛烈な人は、概してエゴイストとしての自己の存在について自覚をもたないのに反して、さまでエゴイストチックな傾向の強大でない人の中には、かへつて自己のうちに潜んでゐて、ややともすれば自己の行動や言説を支配しがちなエゴイストチックな傾向について、絶えず強度の自覚をもち、人知れずそれになやまされ、氣苦労をする人が、往々にして見出されるのである。

「エゴイスト」の名に充分に値ひする人々が、その事からして心のくるしみをくるしむことがないのに反して、特にエゴイストとして視られるほどでもない性格の人々が自己に附きまとふエゴイズムについていつも鋭い意識をもち、そのためにいやされ難い悩みを悩みづづけるといふことは、なんとしても不合理なことだらだと思はざるを得ない。「人生はそれに類した不合理の事態にみたされてゐる」と言つてしまへば、それまでの話だけけれど、さう言ひ切つてしまふことにより、問題を片づけることをしないで、そのやうな不合理な人生の根本的事態のうちに、何かより深い意味をくみ取ることが出来さうにも考へられる。

芥川詣之介はここにあげた第二の種類の型に属する人であつたとおもふ。おそらく大学の学生のところから死の時にいたるまで、彼は自己のうちにひそむエゴイズムを絶えずするどく意識し、どうすることも出来ないところの、そのエゴイズムの存在によつて悩まされつづけながら、生涯を終つたやうにおもふ。しかも他のいろいろの境涯にある人々と比較して、彼が「エゴイスト」といふに足るほどのエゴイストでなかつたことは確かである。彼の生涯の後半を蔽ふ悲劇的色彩を生み出した主因の一つは、そのような事実の中に見出されると信ずる。

そして、「主観的にエゴイストとしての自意識を強度にもつてゐる人は、客観的には、概して、むしろエゴイストとしての資格に欠けてゐるところのある人である」といふことがらを、芥田ははつきりと認識してゐなかつたのではないか、とも思ふ。しかも、恰もその事実が、晩年における彼の作品をして、眞実味のこもつた。詞子の高いものたらしめたのであつたとも考へられる次第である。

「やぶちゃん注・芥川龍之介について——人間のエゴイズムを（時に必要悪としてのそれを）冷徹に解剖し、剔抉した小説を書いた作家——と常套的に評することが多いが、では、「芥川龍之介自身は、エゴイストであったか、なかったか？」という根本的問題を叙述した評論に出逢うことは極めて稀れである。自死の翌々月である昭和二（一九二七）年九月発行の雑誌『文藝春秋』九月号（「芥川龍之介追悼號」）に「[闇中問答（遺稿）](#)」（リンク先は私の古いサイト版）の題で掲載された中に、こんな下りがある。

*

或聲 お前は戀愛を輕蔑してゐた。しかし今になつて見れば、畢竟戀愛至上主義者だつた。僕 いや、僕は今日こんにちでも斷じて戀愛至上主義者ではない。僕は詩人だ。藝術家だ。

或聲 しかしお前は戀愛の爲に父母妻子を抛つたではないか？

僕 諷をつけ。僕は唯僕自身の爲に父母妻子を抛つたのだ。

或聲 ではお前はエゴイストだ。

僕 僕は生憎エゴイストではない。しかしエゴイストになりたいのだ。

或聲 お前は不幸にも近代のエゴ崇拜にかぶれてゐる。

僕 それでこそ僕は近代人だ。

*

芥川龍之介の師夏目漱石も人間のエゴイズムを描き出した作家とされるが、漱石はその精神的疾患（恐らくは強迫神経症）を除外しても、人格的氣質を観察するに、事実、頗るエゴイストであった。しかし、私は、芥川龍之介については、作品・アフォリズム・書簡を見るに、ここでの恒藤の見解を文句なく支持するものである。」

三 ひがんばんな

私は省線電車を利用して毎週二回または三回大阪に往復するので、沿線の風景は私にとつてすっかり馴染ふかいものになつてゐる。とりわけ山崎から茨木あたりまでの丘陵や、村落や、田畑の入りまじつてゐる風景は取り立てて言ふほどの特色があるわけではないけれど、いつも飽きることなく電車の窓から其れをながめることを、ひとつのたのしみとしてゐる。

この秋は近年まれな米の豊作の昆こみだといふことが、新聞などでくりかへし報道されてゐるが、京阪のあひだの田圃を見わたすと、私のやうな素人の眼にも、いかにももずつしりと粃をつけた垂穂の一面に充ちみちた田のもの様子がたのもしげに映するのである。そして、それと一緒に、畦みちをいろどる曼殊沙華の鮮麗なくれなみの色が、この頃の季節の感じを力強くよび起さねばやまない。

どの草水の花でも、それぞれ「やぶちゃん注…ママ。」一定季節を期して咲くものではあるけれど、曼殊沙華はとくべつに正確な季節の感覚をもつてゐて、いつの年もあやまつこと

なく彼岸をむかへて何処の田野でも一せいに咲き出すやうな氣がする。これはおそらくその通称を「ひがんばな」といふことにもとづく連想が、因を成してゐるのではないかと思ふが、何にせよ、どの花にもまさつて季節のうつりかはりに敏感な花だといふ感じを、毎年その咲き出すのを見るたびに私はいだくのである。

ところで、この秋は、私の家の庭の片すみにもその花が一つの株から三つひらいた。これは昨年の夏、中学生の次男が学校からのかへりみちに、下鴨の糺の森かどこかで球根をたくさん掘つて持ちかへり、それから澱粉をとつた残りを捨てて置いたのが、いつかしら土の中にうまり、それから荅を出したのだらうと思ふ。私はふと思ひ出して、戸棚の中から一つの壺形の花瓶を取り出し、三本の花のうち二本をそれに活けた。高さ五寸ばかりの此のつぼがたの花瓶は、ずっと以前に糺の森を二階から見下ろす家に住んでゐたころ、中京あたりの或る古道具屋で目つけて手に入れたものである。それを買つて来てから間もなく、芥川が入浴して、その下鴨の家をたづねて来たとき、二階の座敷の中央に据ゑられた机のうへに、丁度その花瓶が置いてあつたのを、手にとつてしばらく見た後、「これは好いね。うまく出来てゐるよ。しかし、ほんもののオランダではないよ」と微笑をうかべながら言つた。

花瓶の表面には乳白色の地に淡い藍いろで異國の水郷のけしきが、かろく、そして靜かなタツチで描いてある。私はそれに添はつてゐる古びた桐の箱を出して芥川に見せた。箱の蓋に「阿蘭陀之類壺」とかいてあるのを見て、「なるほど、オランダの類か。しかし、これはこれで好いんだよ」と言つて、彼は長崎で一時オランダの陶磁器の模造をやつた者があつたこと、たしかなことは言へないけれど、多分その一時の所産だらうといふことを教へてくれた。

下鴨の家の庭には丁字の木があつたので、そのかをりの高い花のさくころには、毎年きまつて、濃緑のかつきりした葉に紫いろを帯びた白色の花がこまかく咲き簇がつてゐる枝を切りとり、ふだんは戸棚の中にしまつてある其の花瓶に挿して机のうへに置いたものであつた。

六年ばかりまへに現在の田中の家に移つて来てからは、其の花瓶を戸棚の中から取り出してかぎつたこともなかつたが、庭の隅にさいた彼岸ばなを見てゐるうちにふと、「あの花瓶に活けたら、よく調和するに違ひない」とおもつた。それで戸棚の中からそれを取り出し、水をみたした後、三本のうちの二本をいけた次第である。予期したとほりの、否、予期した以上の効果が私のこころを満足させた。そして、壺の口から七、八寸ばかりをぬきん出て、かんざしに似たくれなゐの花弁をかぎしてゐる二本の花も、なんだか満足してゐるらしい様子のやうに思はれた。

「やぶちゃん注…」私は省線電車を利用して毎週二回または三回大阪に往復する」恒藤は京都帝国大学法科大学政治学科を大正五（一九一六）年卒業すると、同大学院に進学（国際公法専攻）したが、大正八（一九一九）年退学、同年に同志社大学法学部教授となり、

大正一一（一九二二）年に母校の京都帝国大学経済学部助教となった。大正一三（一九二四）年三月から大正一五（一九二六）年九月まで欧州に留学、昭和三（一九二八）年、大学内の組織変更に伴う異動で京都帝国大学法学部助教となり、翌年には同大学法学部教授となった。しかし、[当該ウィキ](#)によれば、『赤化思想だとして』、同僚であった『瀧川幸辰教授の著作』『刑法講義』・『刑法読本』が『発売禁止処分となり』、『文部省から瀧川教授の罷免が要求され、学問の自由を主張し』、『京大法学部教官全員が辞表を提出した』『滝川事件』に『おいて、松井元興が京大総長に就任』、『佐々木惣一、宮本英雄、森口繁治、末川博、休職扱いの瀧川幸辰の辞表を受理し、他の者には辞表の撤回を求めたが、恒藤恭と田村徳治は辞表を撤回しなかった。事件中、恭は雑誌『改造』に「死して生きる途」と題する文章を発表している』とある。この退官の後、大阪商科大学専任講師・立命館大学非常勤講師（兼任）となった。昭和一三（一九三八）年には立命館大学で学位論文「法的人格者の理論」によって法学博士を授与され、昭和一五（一九四〇）年に大阪商科大学教授、昭和二一（一九四六）年に大阪商科大学学長及び京都帝国大学法学部教授（兼任。昭和二四（一九四九）年まで）・同志社大学客員教授（兼任）となった後、昭和二十四年、新制大学として発足した大阪市立大学初代学長となり、日本学士院会員となっている。本篇は昭和二二（一九四七）年に発表されたものであるから、上記下線部の時期に当たるので、兼務の大阪商科大学学長として大阪へ通勤する際の、現在の「JR西日本」東海道本線でのロケーションであることが判る。

「山崎」現在の[京都府乙訓郡大山崎町](#)（おおよまざきちよう…グーグル・マップ・データ。以下、無指示は同じ）。

「茨木」[大阪府茨木（いばらき）市](#)。

「曼殊沙華」彼岸花（单子葉植物綱キジカクシ目ヒガンバナ科ヒガンバナ亜科ヒガンバナ連ヒガンバナ属ヒガンバナ *Lycoris radiata*）。同種は異名が異様に多い。根茎に強毒を持つが、私の好きな花だ。私の「[曼珠沙華逍遙](#)」を見られたい。

「下鴨の糺」（ただし）「の森」[京都市左京区にある賀茂御祖神社（かもみおやじんじや…通称は下鴨神社）の参道に当たる森](#)。

「糺の森を二階から見下ろす家に住んでゐた」芥川龍之介の恒藤宛書簡の住所には『京都市下賀茂村松原中ノ町』とあり、これは現在の[京都府京都市左京区下鴨松原町](#)（しもがもまつばらちよう）と思われる。

「芥川が入浴して、その下鴨の家をたづねて来たとき」複数の年譜を確認したが、この事実は記されていないけれども、大正八（一九一九）年五月十九日附書簡（旧全集書簡番号五二七）に『無事歸京』『いろいろ御世話になつて難有う お母様によろしく』とあることから、この年の五月四日に芥川龍之介は、菊池寛とともに、まさに「長崎」旅行に出かけた折り、新全集の宮坂年譜によれば、その旅の帰りの五月十五日の条に『京都で葵祭を見物するか』とあるから、この日の前後に龍之介が恒藤家を訪ねた可能性が極めて強い。

「類壺」こういう模造品を指すような謂い方を骨董や製品に使ったケースを私は知らない。

「丁字の木」フトモモ（蒲桃）目フトモモ科フトモモ属チヨウジノキ *Syzygium aromaticum*。
原産地はインドネシアのモルツカ群島。

「田中」旧宅のあったところの東方、高野川たかのがわの対岸、現在の京都府京都市左京区田中馬場町（たなかばちよう）附近か。」

四 藝術的作品と制作者の性格

あらゆる藝術的作品は、なんらかの藝術的内容を表現することの故に、藝術的作品としての存在をもつのであるが、それと同時に、なんらかの程度において制作者の人間としての、または制作者としての性格を表現する。といひ得るであらう。もとより、此の事に関して、文章を表現手段とする藝術的作品と、文章以外の表現手段を用ひる藝術的作品との間には、本質的相違が見出される。すなはち、後の種類の作品を通してあらはれるものは、主として制作者の制作者としての個性的性質であり、彼の人間としての個性的性格は概して微弱の程度にしかあらはれないのであるが、これと異なつて、前の種類の作品の場合には、それを通して制作者の人間としての個性的性格が多分にあらはれ得る可能性が存するのである。

この可能性は、文章は人間の思想や感情をかなりの確に表現し得る機能を有するものであるといふことにもとづくものに他ならないが、ひとしく文章を表現手段とする藝術的作品の中でも、その種類如何によつて、制作品の個性的性格を表現するしかたは一樣でなく、且つ同一の種類の藝術的作品について見ても、制作者の制作態度の異なるにしたがつて、彼の作品を通して、彼の個性的性格があらはれる様態は一樣たり得ないわけである。

文章を表現手段とする藝術の中で、制作者の人間としての性格を最も多分に表現し得る可能性をそなへてゐるものは、おそらく小説ではなからうかと思ふ。いかなる型の小説であつても、人間生活の再表現を意図してゐないものはなく、自然界の事象を純粹に自然界の事象として取りあつかつたやうな小説は決してあり得ない。往々動物の生活を対象としてゐる小説が存するけれど、彼らの動物としての生活のすがたを人間の立場から擬人化して感情移入的に描寫したものであるか、さもなければ、たとへば、夏日漱石の「猫」や、芥川龍之介の「河童」などのやうに、動物の生活に仮托して、人間生活の消息を傳へようとするものたるに過ぎない。小説はかやうな本質をもつたものであるから、他のいかなる種類の藝術にもまさつて、小説家自身の人間としての性格を多分に表現する可能性をそなへてゐるはずであり、他面から言へば、小説は、他のさまざまの藝術にくらべて、特に制作者の人間としての性格によつてその藝術的作品としての性格を力強く制約される傾向を有するのである。もちろん、小説家の制作態度如何によつて一概に論ずることはできないし、又、たとへば、「私」小説の場合と、歴史小説の場合とでは、おほむね著しい相違が見出されるであらう。

制作者の人間としての性格と制作者としての性格とを区別したのであるが、制作者の制

作者としての性格は彼の人間としての性格の一面をかたちづぐるものに他ならないと考へられるであらうけれども、謂はば藝術的作品の中に憑り「やぶちゃん注…のり」。「移つた制作者の性格がその作品によつて表現されるといふやうに考へるならば、そのやうな意味において制作者そのものから離れて独立性を獲得した彼の制作者としての性格といふごときものを思惟し得るであらう。かやうな考へかたを採るときは、制作者が死んで、彼の人間としての性格も、その一部分をかたちづくる彼の制作者としての性格も、もはや実在する者の性格ではなく、曾て実在した者の性格となつてしまつた場合においても、作品は依然として実在してゐる以上、それに憑り移つた制作者の制作者としての性格は、人間としての制作者から離れて独立性を獲得し、作品に内在して、後者が実在してゐる限り常に表現され続けているところの制作者の性格としての存立を保有すると言はれ得るわけである。

まはりくどい言ひかたをしたやうであるが、私が特に述べたいと思ふのは、——小説の場合には、とりわけ事態が顯著なしかたで成り立つことが多いから、小説について言ふこととすれば、——「小説家の人間としての個性的性格と彼の制作者としての性格とは、ある程度に相互的独立性をもつものである」といふことである。

もとより、小説家の作家としての性格は彼の人間としての性格によつて誓約されざるを得ないのであるから、彼の作家としての性格はなんらかのしかたで、且つなんらかの程度において彼の人間としての性格を反映するものといふべきであらう。しかしながら、小説家の作家としての性格は、單に彼の人間としての性格の一部分をかたちづくるものに過ぎず、したがつて、前者を媒介として後者の何たるかと認識することは必ずしも容易な課題ではない。全体をはなれて部分はあり得ず、部分から遊離せる全体もあり得ないのであつて、部分は必ずやなんらかの意味において全体のすがたを表現するものであることは、あらゆる存在を通じてあまねく観取され得る事態である。だから、小説にあらはれた作家の作家としての性格を媒介として彼の人間としての性格を認識することは、原理的には可能である、といはざるを得ないが、事実としては、この認識が比較的にたやすく爲され得る場合もあるけれど、非常に困難な場合や、不可能な場合もしばしば存するのである。

はじめに述べたやうに、藝術的作品は制作者の制作者としての性格を表現するだけでなく、彼の人間としての性格をも表現するのであるが、作品とのあひだに必然的な関係をもつものは制作者の制作者としての性格であつて、彼の人間としての性格が作品を媒介として表現される関係は偶然的性質をもつものである。だから、一般的には、作品を通して制作者の人間としての性格を知らうとする者は、作品にあらはれた彼の制作者としての性格を媒介として、彼の人間としての性格を洞察することに重きを置かねばならぬであらう。

藝術的作品を通して制作者の性格を知るよりは、制作者自身に接触する機会をもつことによつて直接に彼の性格を知ることの方が、手つ取り早いしかたであると同時に、概してより正確な方法であると考へられるが、制作者自身に接触する場合においても、われわれは決して直接に彼の性格を知り得る可能性をあたへられるわけではなく、彼の動作や、感

情や、談話などを媒介とすることによつてのみ、彼の性格を知り得るのであり、したがつて、場合によつては、かへつて彼の作品を媒介とすることによつて、より好く彼の性格を知り得ることもある。だから、制作者に直接に接触する方法と、彼の作品を媒介とする方法とを併せ用ひるときは、より好く彼の性格を知り得るはずである。直接に彼に接触する機会を持った人が彼の性格について知り得たところを記述したものによつて彼の性格を知る方法は、彼に直接に接触することによつて彼の性格を知る方法に代用され得るであらう。現実の生活における作品の行動や態度が、彼の性格を知るための重要な指標たる意義をもつことは言ふまでもないところである。

女 芥川龍之介ゑがく

「やぶちゃん注…芥川龍之介が描いたルノアール風の女の絵が、以上の段落が終わつた、その左ページ全面に掲げられてある。上記のキャプションは絵の外の右下方に記されてある。表現急行氏のブログ「表現急行」の「古本日記 恒藤恭『旧友芥川龍之介』」の原本の四枚目の写真を見るにモノクロームのようである。この絵は私の「芥川龍之介書簡抄4 2 / 大正四（一九一五）年書簡より（八） 井川恭宛三通」の二通目の「大正四（一九一五）年七月二十一日・消印二十六日・出雲國松江市内中原御花畑一八七 井川恭様・七月二十一日 田端四三五 芥川龍之介」に引用元の異なる画像を二種掲げてあるので、そちらを見られたい。なお、本文はここで終わつておらず、絵の裏ページは白紙だが、次の段落がまだあるので注意されたい。」

私はこの夏のあひだに、小説家としての又は藝術家としての芥川龍之介についての研究又は紹介といつたやうなたぐひの著書を幾冊かよんだが、それらの著書の中で芥川龍之介の人間としての性格や、小説家または藝術家としての性格についてあたへられてある記述が、著者によつてそれぞれ「やぶちゃん注…ママ。後も同じ。」特色があること、また芥川の性格について彼れ是れと論じてゐる著者たちの、芥川の性格を見きほめるために執つてゐる方法がそれぞれ特色をもつてゐることを、興味ふかいことだとおもつた。そして、右に述べたやうなことを考へたものである。あまり長くなるので、この項は一應これで終ることとしたい。

「やぶちゃん注…我々は、ここに、恒藤が彼に送つてきた絵を挟んでいるのが、確信犯であることに気づかなければならない。さらにまた、恒藤は最後に、極めて禁欲的に他社の芥川龍之介のそれぞれがどれも、芥川龍之介という人間を、かなり異なつた存在として綴つていくことに對して、字背に於いて「ノン！」と述べているのである。恒藤恭が、「私のよく知

っている親友芥川龍之介はあなた方が考えているような人間ではない！」と言っているのである。」

五 流沙河の渡し守

世の中に「心の重荷」を背負つてゐない人があるものだらうか。

もちろん、世の中のさまざまのことがらについて一通りのわきまへを爲し得る成人について言ふのであるが、——いささかも心の重荷といったやうなものを持つて居らず、いつの時でも、いかにもかろがるがろした身のこなしをして生きてゐるやうな人も見受けられるけれど、果たしてその人が眞になんらの心の重荷をも持つてゐないものか、どうかは分りやうがない。おそらく、人々によつて重量こそ異なれ、何人といへども、何ほどかの重量の心の重荷を背負ふことなしには、人生の行路をたどつて行くことをゆるされたいといふのが、人間に課せられた必然の掟ではなからうか。

あらゆる人間に共通な、此のやうな在りかたに即して、佛教やキリスト教などが存立するとも考へられるであらう。人によつては心の重荷をさまざまで気にしないで、人生のいとなみに没頭する者もあれば、それを絶えず氣にして、壓迫を感じながらも、自分の心の重荷は自分自身で背負つて行くより外はないと信じつつ、かうべを挙げて人生の行路を進んで行く人もあるし、心を許し合つた親しい人とたがひに桐手の心の重荷をわかち合つて背負ひながら生きて行く人もあるであらう。しかしまた、佛とか、キリストとかいふやうな絶對者に、心の重荷をすつかりあづかつてもらふのでなければ、到底長い生涯の途をたどつて行く氣になれない人があることもたしかである。

芥川龍之介の作品の中に、大正八年四月に書かれた「きりしとほろ上人傳」といふ小説がある。これは作者みづから「小序」の中にことわつてゐるやうに、「古來あまねく歐洲天主教國に流布した聖人行狀記の一種」にもとづいて作られた物語風の小説である。私は「きりしとほろ」が童子を背負つて河を渡つて行く姿をゑがいた版畫を見たことはあるけれど、ふつうの繪畫に「きりしとほろ」がゑがかれてあるのを見たことはない。

さて、芥川の記述によれば、「きりしとほろ」は遠い昔のこと「しりあ」の國の山奥に住んでゐた、身のたけは三丈あまりもある山男で、もとの名は「れぶろぼす」といふのであつたが、人間と生れたからには、あつぱれ功名手がらを立てて、末は大名にもなりたいといふ野心を起して、「あんちおきや」の都にさしのぼつた。それからさまざまの異常の經驗をしたあげくの果てに、「えじつと」の沙漠の中をながれてゐる流沙河のほとりに、ささやかな庵を結んで、渡りになやむ旅人を肩に負うて向うの岸にわたす渡し守となつた。それから三年目のある夜のこと、嵐がすさまじく吹き荒れ、神鳴りさへも鳴り渡るさなかに、年の頃は十歳にも足らぬやうな、みめ清らかな白衣の童兒が、その庵のまへで、「如何に渡し守はをりやるまいか、その河一つ渡して給はれい。」とさげんだ。外のくらやみ

に出た「れぶろぼす」が、巨きなからだをかめながら、「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」とたづねると、童兒は悲しげな瞳をあげて、「われらが父のもとへ帰らうとて。」とこたへた。そこで、「れぶろぼす」はもろ手にわらんべをかき抱き、肩へ乗せたらうへ、大杖を突いて岸への青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中にざんぶと身をひたしてわたりはじめたが、風は黒雲を巻き落して吹きどよもし、雨は川の面を射て、底までとほれと降りそそぎ、浪は一面涌き立ち返るのを時折り闇を破つて稻妻が照らし出すといふ凄じい勢ひに、さすがの豪の者もほとほと渡りなやんだ。

しかし、雨風よりも更に難儀だったのは、肩のわらべが次第に重くなつたことで、河の眞唯中へさしかかつたころには、大盤石を背負つてゐるかと思はれるくらゐであつた。山男は寄せては返す荒なみに乳のあたりまで洗はせながら、大杖も折れよと突きかためて、必死に目ざす岸へといそいだ。およそ一時あまりして漸く向う岸へ着き、よろめき上ると、肩のわらんべを抱きおろしながら、「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山はかり知れまじいぞ」と言つた。すると、わらんべはにつことほほゑんで、山男の顔を仰ぎ見ながら、さもなつかしげに、「さもあらうず。おぬしは今宵といふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた『えす・きりしと』を負ひないたのぢや。」と、鈴を振るやうな聲でこたへた。そのとき、わらんべの頭上には燦然たる金光が嵐をつんざいてきらめいてゐた。

「きりしとほろ」といふのは、山男の「れぶろぼす」が、「えじつと」の沙漠の中に住む隠者の翁から洗禮をさづけられたときに貰つた名前であつて、流沙河の渡し守となつたのも、この翁のさしづにしたがつたからであつたが、わらんべをわたしたその夜から「きりしとほろ」はむくつけい姿を見せぬやうになつた。

キリストを信ずる人々の心の中に生きてゐるキリストは、今でもやはり彼を信ずるすべての人々の心の重荷を身一つに背負ひながら、父なる神のひざまとに帰つて行く日の到来するまで、この世界の涯から涯まで、ひとり旅をつづけてゐるのであらうか。

「やぶちゃん注…本篇では、芥川龍之介の「きりしとほろ上人傳」（初出は「きりしとほろ上人傳」で大正八（一九一九）年三月発行の『新小説』に前半が、続いて同年五月発行の同誌に初出標題を「續きりしとほろ上人傳」として掲載された。翌年一月春陽堂刊の作品集「影燈籠」に纏めて決定稿として収録された）が紹介されている。同作では冒頭の「小序」で、芥川龍之介が解説して、『これは予が嘗て三田文學紙上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所藏の切支丹版「れげんだ・あうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人傳は古來治」（あまね）『く歐洲天主教國に流布した聖人行狀記の一種であるから、予の「れげんだ・あうれあ」の紹介も、彼是』（ひし）『相俟つて始めて全豹』（ぜんぺう）『を彷彿する事が出来るかも知れない。』（改行）『傳中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が續出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さな

い事にした。大方の諸君子にして、豫が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。』（岩波旧全集を底本とした）と記すものであるが（「れげんだ・あうれあ」は芥川龍之介が勝手にでっち上げた架空の書名である。但し、「奉教人の死」も「きりしとほろ上人傳」も元ネタにした原拠は実際にはある）、私が激しく偏愛する「奉教人の死」（大正七（一九一八）年九月発行『三田文学』）に初出。私はサイト版で古くに「奉教人の死（岩波旧全集版）」及び、作品集『傀儡師』版「奉教人の死」、さらに、芥川龍之介「奉教人の死」（自筆原稿復元版）ブログ版と、同前やぶちゃん注 ブログ版、さらには、原拠をサイト版として電子化した原典 斯定筌（Michael Steichen 1857-1929）著「聖人伝」より「聖マリナ」も完備している程度にはフリークである）に比べ、構成の面白さがなく、感動も薄く、龍之介の切支丹物の中では、最も評価しない作品である。従って、私のサイトでは電子化していないので、「青空文庫」版の同作（但し、新字旧仮名）をリンクさせておく。

「流沙河」「りうさが」は筑摩書房全集類聚版「芥川龍之介全集」第二巻の脚注（昭和四六（一九七二）年刊・第二巻）では、『流沙』とは砂漠さばくのことで、砂漠を流れる河といふほどの意味。もちろん芥川の虚構の河名である』とある。

「きりしとほろ上人」同前で『Christophoros（キリストを背負う者の意）は伝説によれば三世紀頃のシリアの人。救難の聖人』とある。また、ネットの中経出版の「世界宗教用語大事典」には、『キリストフォロス【Christophoros】は「十四救難聖人の一人。ギリシア語で〈キリストを運んだ者〉の意。詳歴不明だが』、ローマ皇帝『デキウス帝』（ガイウス・メッシウス・クイントゥス・トラヤヌス・デキウス（Gaius Messius Quintus Trajanus Decius 二〇一年～二五一年六月：在位：二四九年～二五一年）』の迫害の時の殉教者といわれる。怪力の渡し守だったとの伝説があり、ある時、少年を背負って川を渡ったら、次第に重くなり、水をかぶりながら（洗礼の意）岸に着くと、少年はキリストであり、その重さは全世界のそれだった、との寓話がある。教会南門に面して、この像を描く習慣があり、見た人は災難に遭わないとする。水夫・巡礼者・旅人などの守護聖人。アイコンでは犬の顔にすることがある』とある。この「救難聖人」は同じ事典に、『カトリックで、とくに困った時、難を救ってくれるという』十四『人の聖人』とあり、十五『世紀中頃』、『盛んに崇拜された』とある。ウイキの「キリストフォロス」もあり、そこには私の好きなルネサンス期のネーデルラントの画家で初期フランドル派に属するヒエロニムス・ボス（Hieronymus Bosch 一四五〇年頃～一五一六年）が描いたイエス・キリストを背負ったキリストフォロスの絵も載る。そちらには、『キリストフォロスの物語は教派によって微妙に異なっている』とし、「カトリック教会における伝承」の項には、一つの『伝承ではキリストフォロスはもともとレプロブス』（英文ウイキでは『Reprobus』）という名前のローマ人だったという。彼はキリスト教に改宗し、イエス・キリストに仕えることを決意したという。別の伝承ではカナン出身でオフエロスという名前だったともいう。彼は隠者のもとを訪れ、イエス・キリストにより親しく仕える方法を問うた。隠者は人々に奉仕することがその道であるといい、流れの急な川を示して、そこで川を渡る人々を助けること

を提案した。レプロブスはこれを聞き入れ、川を渡ろうとする人々に無償で尽くし始めた。『ある日、小さな男の子が川を渡りたいとレプロブスに言った。彼があまりに小さかったのでお安い御用と引き受けたレプロブスだったが、川を渡るうちに男の子は異様な重さになり、レプロブスは倒れんばかりになった。あまりの重さに男の子がただものでないことに気づいたレプロブスは丁重にその名前をたずねた。男の子は自らがイエス・キリストであると明かした。イエスは全世界の人々の罪を背負っているため重かったのである。川を渡りきったところでイエスはレプロブスを祝福し、今後は「キリストを背負ったもの」という意味の「クリストフォロス」と名乗るよう命じた。『同時にイエスはレプロブスが持っていた杖を地面に突き刺すように命じた。彼がそうすると』、『杖から枝と葉が生えだし、みるみる巨木となった。後にこの木を見た多くの人々がキリスト教に改宗した。この話は同地の王（伝承によつてはデキウス帝）の知るところとなり、クリストフォロスは捕らえられ、拷問を受けたあとで斬首されたという』とある。

「三丈」九メートル九センチ。

「あんちおきや」筑摩全集類聚脚注には、『Antiochia』は『シリアの首都。いまはシリア共和国の町。ローマ時代、パレスチナ以外で最初のキリスト教団が組織された町』とあるが、ネットの「goo 辞書」では『アンティオキア（ラテン）Antiochia』として、『トルコ南部の小都市アンタキヤの古称』で、紀元前三〇〇年頃、『古代シリア王国のセレウコス』I『世が首都として建設。のち』に『エルサレムに次ぐ初代キリスト教会の中心地』となったとある。[トルコのアンタキヤはここ](#)（グーグル・マップ・データ）。

「えじつと」Egypt。エジプト。

「海山」「うみやま」。

「荷うた」「になうた」。

「えず・きりしと」イエス・キリスト。

「むくつけい姿」芥川龍之介の「きしとほろ上人」の最終段落の表記をそのままに用いたもの。芥川龍之介は「奉教人の死」と同様に、擬似切支丹版の雰囲気を出すために、一種訛ったような、旧口語的にズラした特異な表記・表現法を本作では用いている。」

六 芥川家の人々

芥川龍之介は新原敏三氏の長男として明治二十五年三月一日に生まれた。幼年のときに――何歳のときであつたかは私は知らない――実母の兄に当る芥川道章氏の養子となつた。芥川の十一歳の年に実母は亡くなり、その妹が代つて敏三氏の後妻となつて、二人のあひだに生まれた得二君が新原家を嗣いだやうに思ふ。

「やぶちゃん注」以下、年譜的事実は概ね新全集の宮坂覺氏のそれに拠った。

「新原敏三」（姓は「にいはら」と読む 嘉永三（一八五〇）年九月六日〜大正八（一九一九）年三月十

六日（死因はスペイン風邪）は二〇〇三年翰林書房刊の「芥川龍之介新辞典」の庄司達也氏の「新原敏

三・新原家」によると、『周防国玖珂』（くが）『郡生見村湯屋（現、山口県玖珂郡美和町大字生見）（現在は山口県岩国市美和町（みわまち）生見（いくみ））。グーグル・マップ・データ。以下、無指示は同じ）』に農家の三男として生まれた」とあり、慶応二（一八六六）年に『火蓋を切った四境戦争（長州征伐）に』、敏三は、数え十七歳で『大林源治の変名を用いて長州軍の農兵隊である「御楯隊」（後の整武隊）の器械方（砲兵隊）下士卒として参戦』、七月二十八日に『あった芸州口（現、広島県大竹市付近）の戦闘で負傷し、戦線を離脱した』とあり、その後は、しばらく消息が途絶えるが、明治九（一八七六）年九月に『千葉県成田三里塚の官営牧場「下総御料牧場」に「雇」として入所』、『その後、神奈川県仙石原の耕牧舎牧場』に移って、『実業家渋沢栄一のもとで次第に頭角を現していった』（長州征伐は幕府軍が小倉口・石州口・芸州口・大島口の四方から攻めたために長州側では「四境戦争」と呼ぶ）。『後には東京における耕牧舎の牛乳販売の管理者として、外国人居留地に隣接する築地入船町（現、中央区明石町）に本店を置き』（明治一六（一八八三）年）、『府下北豊島郡金杉村、芝、四谷に支店を設け、事業を拡大していった』とある。龍之介の芥川実母フク（万延元（一八六〇）年十月九日〜明治三四（一九〇二）年十一月二十八日）との結婚は明治一八（一八八五）年三月で、待望の長男龍之介の生誕は七年後であった（出生地は東京市京橋区入船町（現在の中央区明石町のこの附近）。しかし、その年の八か月後の十月末に母フクが精神に異常をきたしたため（私は重い強迫神経症を疑っている。未だに年譜などで発狂と記すのは、そろそろ考えた方がいいと思う。なお、その発症原因の一つには龍之介が生まれる四年前の明治二一（一九八八）年四月に長女ソメが僅か満二歳九ヶ月あまりで脳膜炎で急逝したことが挙げられるが、どうも実父敏三絡みの隠された原因もあるやには聴いている。因みに、この「ソメ」とは、芥川龍之介の名掌品『點鬼簿』（大正一五（一九二六）年十月発行の『改造』初出）の「二」に出る『初ちゃん』のことである。同作は実母フクや実父敏三も記されている。しかし、私はこの夭折した姉「初ちゃん」への龍之介の感懐は読むたびに目頭が熱くなるのである。なお、私は今回調べてみて、これは「はつちゃん」ではなく、「ソメちゃん」と読むのが本当は正しいことを発見した）、龍之介は本所区小泉町（現在の墨田区両国三丁目この附近）にあったフクの実家で兄の道章が当主であった芥川家に預けられた。

「実母の兄に当る芥川道章氏の養子となつた」法的決着が下って正式に芥川家の養子となったのは、明治三七（一九〇四）年。同年五月四日に審判が行われ、同月十日に新原家の推定家督相続人廃除の判決が出、同年八月には芥川家に入籍している。当時、龍之介は満十二歳で江東尋常小学校高等科三年であった。養父母については、先行するこちらで既注済み。

「芥川の十一歳の年に実母は亡くなり」数え。満十歳であった。

「その妹が代つて敏三氏の後妻となつて」龍之介の実母フクの末妹フユ（文久二（一八六二）年十月九日〜大正九（一九二〇）年四月二十日）が後妻となった。

「得二」新原得二（一八九九）年七月十一日〜昭和五（一九三〇）年二月十八日）は龍之介の異母弟。フユとの間に生まれた。新全集人名解説索引によれば、上智大学に入ったが、中退した。『父に似た野性的な激しい性格で』、『岡本綺堂について戯曲「虚無の実」を書いたりしたが』、『文筆に満足』せず、後には『日蓮宗に入』信じた。龍之介もいろいろと世話を焼いたが、結局、物にならず、満三十で早逝している。』

芥川が一高に入學した明治四十三年に芥川家は本所小泉町から新宿一丁目に移轉した。

そのころは、四谷見附から新宿へ向けて走る電車が終點に近づいて行くと、電車涌りに新宿の遊廓の建物がならんであるのが窓から見えたものであった。たしか三丁目下車して少し引返し、左りへ折れて二、三町ばかり行くと、千坪くらゐの廣さの方形の草原を前にして芥川の住んでゐた家がぼつんと建つてゐた。檜の木などが疎らに生えてゐる地面を十、五間へだてて牛舎があつた。芥川の実父新原氏はそこ今一つほかの場所牧場を経営してゐた。いま一つの方のことは知らないけれど、新宿の方のは牧場といつても小規模のものだつた。しかしホルスタイン種か何かの骨格のたくましい牛を幾頭も飼つてゐた。

芥川の住んでゐた家も新原氏の所有に属するものであつた。大正三年十月には芥川家は田端に轉居したから、芥川は高等学校時代を通じて新宿に住んでゐたわけであるが、一高の二年生だつた一年間は寮生活を送り、そのあひだと土曜日の午後から日曜日にかけて自宅に帰るならひだつた。

「やぶちゃん注」芥川が一高に入學した明治四十三年「この年（龍之介満十八）の三月、府立第三中学校を卒業、四月には一高の一部乙類（文科）への進學と英文科志望を決めて受験勉強に励んだが、八月五日、『官報』で一高への成績優秀者の推薦無試験入学（この年に導入されたもの）で合格を知つた（龍之介は無試験合格組の第四位であつた）。入学は九月十一日日曜日、入学式は二日後の十三日にあつた。

「芥川家は本所小泉町から新宿一丁目に移轉した」この明治四三（一九一〇）年の秋から翌年の二月にかけて、芥川家は本所小泉町から、府下豊多摩群内藤新宿（現在の新宿区新宿二丁目（新宿御苑の北直近附近）の実父敏三の經營する耕牧舎牧場脇にあつた敏三所有の家に転居している。この家は実は葛巻義定（明治一六（一八八三）年十一月三日〜昭和二三（一九四八）年十月十三日）・ヒサ（龍之介の実姉・明治二一（一八八八）年三月十九日〜昭和三一（一九五六）年六月二十八日・婚姻届けは明治四二（一九〇九）年三月四日で、二人の間には、後に龍之介が面倒を見て龍之介の書生役となり、龍之介の死後は原稿や資料保存を行つた義敏（明治四十二年八月二十一日〜昭和（一九八五）年十二月十六日）と、左登子（明治四十三年十一月二十八日〜平成一一（一九九九）年十一月）の二子が生まれている。）の新居として敏三が建てたものであつたが、龍之介一高入学の同日に二人は離婚しており、空き家となつていた。転居が長期に亘つてゐるのは、十月に龍之介と伯母フキが、まず、移り、翌年二月頃までに養父母道章・傭が移つたとする資料があるためである。因みに、ヒサは、その後、弁護士西川豊と再婚するが（大正五（一九一六）年五月八日婚姻届提出）、龍之介の自死の年、自宅への放火の嫌疑をかけられ、取り調べ中に失踪、昭和二（一九二七）年一月六日、千葉県山武郡の土氣とけトンネルで鉄道自殺を遂げた。なお後にヒサは最初の夫義定と再々婚している。」

実父の新原敏三氏には何回か会つたことがあるが、養父の道章氏とはまるで風格のちがつた人だつた。道章氏はいかにも江戸の通人らしい趣のある、ゆつたりとした人であつたけれど、敏三氏は着実な商人風の人でいくらか瘡の強さうに見える人だつた。芥川は実父の敏三氏にあまり似てゐない。で、むしろ伯父であり養父である道章氏によく似てゐた。道章氏と敏三氏とが並んで話してゐるのを見ると、どうしても芥川が敏三氏の息子だとは思はれず、道章氏の実子だと思はれにくいからであつた。芥川の容貌はそのやうに道章氏に似てゐたし、趣味などの上からいつても、道章氏と一致する所が多かつたが、争は

れないもので、性質の点では、道章氏ののんびりした性質には似ないで、敏三氏の疝の強さうな性質を十分に受けついでやうである。

芥川の養母は至つて氣だてのやさしい、よく物事に氣のつく婦人で、いかにも人なつこい口調で淀みなく、もの柔かに話す人であつた。新宿のころも、田端に移つてからも、私はしばしば芥川家に泊めてもらつたものであるが、この芥川の阿母さんにはいつもずるぶるん世話になつたものであつた。新宿の家でも、田端の家でも、朝飯にはきつと生玉子が二つと、ほうれん草のひたしと、短冊形の焼海苔四、五枚とが膳のうへにならべてあつた。いつも芥川と私とは芥川の書齋で食事をしたので、他の家族の人々も同じやうな朝飯をたべる慣いであつたか否かは分らないが、何にせよ一度だつてそれらの三品が欠けてゐたことはないし、またそれ以外の品がついてゐたこともなかつた。

芥川家には、道章氏の妹で、芥川の実母の姉に当る婦人が一しよにくらしてゐた。この伯母さんにも芥川はよく似てゐた。道章氏とおなじく額の廣い、やや眼のくぼんだ顔立ちであつたが、少し藪にらみで、中々勝ち氣な人であつた、その物腰なり、話しぶりなりが芝居に出て来る御殿女中を連想させるやうなところがあつた。どういふ事情からかはしらず知らないけれど、一生を独身で通した婦人で、よく氣くばつて芥川の身の廻りの世話などをしでやつてゐたやうである。

「やぶちゃん注：「道章氏の妹で、芥川の実母の姉に当る婦人」既注の芥川フキ。

「少し藪にらみで」フキは幼少時の怪我で、片方の眼が不自由であつた。」

芥川は「龍ちゃん」とよばれて、これらの三人の老人たちに愛せられつつ、高等学校時代から大学時代をすごした。その後横須賀の海軍機関学校の教師をつとめてゐたころも、それをやめて毎日新聞社に入社し、専門の小説家となつてから後も、かはりなく「龍ちゃん」とよばれつつ、大きくなつた子供のやうにふるまつてゐた。

これらの老人の共通の趣味は一中節であつた。長唄とか、清元とか、歌沢とかにくらべて、一中節は地味な、澁いもので、つましく静かなところに特色があるらしいが、とき折りその方の帥匠が来て、老人たちが稽古をしてもらふ場合には、しのびやかな三味線のひびきと唄の声とが、僕たちのゐる二階へつたはつて来るのであつた。

「やぶちゃん注：「一中節（いちちゆうぶし）は浄瑠璃（三味線音楽）の一流派。初代の都太夫一中が、元祿の末ごろ上方で語り出し、後に江戸に普及した。なお、芥川家の趣味等については短いものだが、私のサイト版芥川龍之介「文學好きの家庭から」を参照されたい。」

昭和二年七月二十四日に芥川が自殺して、先づ此の世を去り、老人たちも次々にその後を追つた。いまでも、芥川のことを心に思ひうかべると、きつと三人の老人のすがたが一しよに浮んで来る。

七 青年芥川の一書簡

私は大正二年七月に一高を卒業して、京大の法科に入学した。九月から、建ち上つたばかりの寄宿舎に住み、卒業するまでの三年間をずつとそこで過ごした。

大正四年の春休みに上京して、田端の芥川家に休暇のあひだ滞在して、帰洛してから間もなく、次のやうな文句ではじまつてゐる芥川の手紙をうけ取つた。

うちへかへつて「丁度うまく汽車が間にあつてね、十時五十何分かに品川から立ちましたよ」と云つたら「さうかい」と云つて、母や伯母が涙を流した。おやぢまで泣いてゐる年をとるとセンチメンタルになるものだなと思つた。

それから午少しすぎに、三並さんと藤岡君が來た。三並さんと画や漢学の話をした。

(註―三並さんはそのころ一高のドイツ語の教授であり、藤岡君は私達の一高時代のクラスメートであつた。)

三並さんのやうに、いい加減な所で妥協してゆくのが現代の日本では一番安全な道だらうと思ふ。

少しとぶ。

昨日帝劇へ行つた。梅幸のお園、お富、松助の蝙蝠安に感心して歸つて來た。

行くときに警視廳の前を通つたら、何となく芝居へゆく事が悪いやうな氣がした。飯も食へなくて泥棒をしてみつかまつて、ここへつれて來られる人がゐる事を考へたからである。しかし十歩ばかりあるうちに、そんな事は全然氣にならなくなつた。それから芝居をみてゐる中に、自分は何を見てゐるのだらうと思つたら急に心細くなつた。芝居でなくて役者を見るより外に仕方のない事を知つたからである。しかし松尾太夫の冴えた肉声をきいてゐる中に、これも亦何時の間にか忘れてしまつた。

又とぶ。

博物館へ來てゐるルノアルの石版やエッチングを見て又可成感心した。

画をみるのに文学的内容を入れてみるのはまだいい、一番愚劣なのは、描かれてゐる対象を実世界に引入れて、その中へ自分を置いて考へる奴である。バアの石版画をみて、かう云ふ所でパンチをのんだらいいだらうと思ふ男が可成ゐる。實際もゐた。おかげで、踊子やオーケストラのうつくしい画をおちついて見てゐる事が出来なかつた。「やぶちゃん注…旧全集では「画」は三箇所ともに「畫」。同全集の凡例では、この字は両表記を本文で併用したとあるの

で、不審である。後の「画」も総て同じ。」

又とぶ。

浮世絵の会へ行つて、廣重を可成みて來た。そのあくる日、本所へ行つてかへりに一の橋のわきの共用便所へはいつた。あの便所は橋の側の往來よりは余程ひくい河岸にある。

丁度、夕方で、雨がぼつぼつふつてゐた。便所を出ると、眼の前に一の橋の橋杭と橋桁が

大きく暗い水面に入り違つてゐる。河は夕潮がさして、石垣をうつ水の音がびちゃびちゃする。橋の上を通る傘や蓑、西の空のおぼつかない残照、それから河を下つて来る五大力——すべてが廣重であるのに驚いた。

ぐづくぐづくしてゐると、今人は古人に若かずと云つて笑はれるだらうと思ふ。
又とぶ。

僕はよく独りでぶらぶらあるく。東京の町をあるく。三越へはいつたり、丸善に入つたりする。

さうすると時々とんでもないものを見る事が出来る。さうして、さう云ふものをつくる doom に没入して、暫すべてを忘れてしまふ事が出来る。「やぶちゃん注：「doom」はママ。

「mood」の誤植であろう。」

さういふ mood をつくるものにはいろいろある。家、空、人、電車、並木——それらのすべての雑多なコムビナチオンに加えられる光と影とのあらゆるグラード。その代りに、之は独りでないとうまく行かない。すぎな人も、嫌な人も、同様に二つの異つた方面からこの興味を破壊するから。

又とぶ。

櫻がよくさいた。櫻の歌四首。

ひなぐもる空もわかなく櫻花ををりにををりさきにけるはや

これやこの道灌山の山櫻ちりたまりたる下水なるかも

あしびきの尾の上の櫻ひえびえと夕かたまけて遠白みたれ

遅櫻夕ひそかにさきてありこの画室（アトリエ）に人の音せず

又とぶ。

時々大へんさびしくなる。

こんな事は云つてもはじまらないからとばす。

ビアズレーの画をかなり沢山まとめてみて感心した。ビアズレーの画は感受的にのみ興味があると君は云つたかと思ふ。僕はその意味がわからない。（内容の上の興味がないと云ふのなら反対）ひまな時でいいから、もう少しくはしくその事をかいて貰へるといいと思ふ。とぶ。

のどをいたためて湿布をしてゐた。鏡で朝、顔をみたら、頸のまはりへ白い布をまきつけてゐるのが、非常に病人らしくみえた。そこで湿布をやめにしてしまった。さうして帝劇へ行つて、夜の冷い空気を吸ひながらうちへかへつて来た。そのせいで又のどが痛くなつた。のど佛の中に八面体の結晶が出来たやうな氣がするのには困る。

又とぶ。

今日も電車の中の顔が悉く癩にさはつた。simlich と云ふ顔に二種類ある。こつちに simlich な心もちを起させる顔と、顔そのものが simlich な顔と。——電車の中の顔は皆後者である。

帝劇でもいやな奴に沢山あつた。貧乏ないやな奴よりは、金のあるいやな奴の方が余程

下等な氣がする。

みんなからよろしく 四月十四日午後

附記 「芥川龍之介全集」の第七巻は「書翰」と題して、総計一千一百四十一通の故人の書信を収録してあるが、右に載せた書信は収録されてゐない。実は、全集刊行の当時、故人からの來簡の全部を書き寫して送ることが出来なかつたので、第七巻に収録されなかつたものが残つたわけである。

「やぶちゃん注…ここに出る書簡は、私の所持する岩波の最後の旧全集版初版第十巻（「書簡一」。一九七八年五月刊。第四次編年体全集）には収録されており、『芥川龍之介書簡抄36 / 大正四（一九一五）年書簡より（二） 失恋後の沈鬱書簡四通』の四通目で詳しく電子化注してある。そちらで注したものは、ここでは繰り返さない（短歌の語注も附してある）。

なお、既に疑問を出してあるが、いかなる年譜にも記載がないが、実はこの大正四年三月に井川恭が春休みに龍之介を心配して上京し、芥川家に滞在したのは事実なのである。但し、そのソースは本書（昭和二二（一九四七）年五月刊）である。

最後に恒藤の附記があるが、そこで言っている「芥川龍之介全集」は所謂『第一次元版全集』と呼ばれる、自死の年の昭和二（一九二七）年十一月に開始され、昭和四年二月に刊行を終えた、岩波書店のそれである（全八巻）。その後、昭和九年十月から翌年八月にかけて全十巻の第二次普及版が出ているが、そこでは、恒藤の附記から、この書簡は追加収録されていないと考えてよい。その証拠に、所持する昭和四六（一九七二）年刊の諸全集を参考にしつつ作られたと思しい筑摩書房『全種類聚』版第七巻（「書簡（一）」）には、この書簡は掲載されていないからである。

それにしても、恒藤は凄い！ 芥川龍之介の書簡は貸出せずに、書き写して岩波書店の全集編者に送っていたのか？ 確かに、編集作業中に原稿や書簡が紛失する事故はよくあったし、内容的に公開を憚る箇所もあつたからかも知れず、また、何より原書簡を恒藤が大事なものという意識があつたのであろう。しかし、書写したというのは…「凄い」と思うのは私だけだろうか？

八 嵐山のはるさめ

父親の道章氏を同伴して芥川が京見物に來たことがある。大正六年の春のことであつたかと思ふ。

「江戸つ子の出不精」といつて、生粹の東京人は遠方へ出かけることを億劫がる傾向があつたやうだ。『箱根から東にはお化けは出ない』といふ諺も、いくらかその事と関係がありさうだ。道章氏の場合もその一例であつて、めつたに東京を離れたことはなく、遠方へ

の旅行は、その京見物の時が、最初の、そして最後のものではなかったかと思ふ。

芥田はその前年の十二月に海軍機関学校の嘱託教官となり、自分だけは鎌倉に住んでいた。春の休暇を利用しての旅行であったが、謂つて見れば、親孝行の上方見物であった。まへの年の二月には、菊池寛、久米正雄、松岡譲、成瀬正雄などの諸君と第四次の「新思潮」を創刊し、その第一号に載せた「鼻」は、夏目さんの賞讃をうけた。七月には東大の英文科を卒業し、九月の新小説に「芋粥」を、十月の中央公論に「手巾」を発表して、いづれも好評を博した。まだ結婚はしてゐなかつたけれど、たしか既に婚約は成立してゐたかと思ふ。いろいろの意味において芥川の生活が最もめぐまれた状態にあつた時であつたので、その京見物の折りの芥川たちはいかにも楽しさうな親子の旅のすがたであつた。何しろずゑぶん以前の事なので、その時のことはほとんど忘れてしまつたけれど、三人で嵐山へ行つたことだけが、不思議とはつきりと頭の中に残つてゐる。

「やぶちゃん注」箱根から東にはお化けは出ない」江戸代の江戸っ子が生んだ御当地関東の諺で、「箱根からこつちに野暮と化け物は無し」。箱根からこちら側（江戸を中心とした言い方で広域の「東側」「関東」のこと）には、「野暮な人間」と「化け物」はいないということ。江戸っ子が田舎者を相手に自慢した台詞である。但し、江戸の庶民が「江戸っ子」というオリジナルな自意識を持ったのは、江戸後期以降であろう。前にある、「江戸っ子の出不精」というのは、江戸が一番という誇りの見栄を張つた謂いに過ぎまい。

「前年の十二月に海軍機関学校の嘱託教官となり」大正五（一九一六）年十一月七日に一高時代の恩師（英語教授）であつた英文学者畔柳都太郎（明治四（一八七二）年〜大正二二（一九三三））の紹介で横須賀に赴き、海軍機関学校就職のための履歴書を提出、翌日には同学校から海軍教育部長に芥川龍之介の「英語学教授嘱託」としての上申が行われ、十三日までには就職が決定され、翌十二月一日に正式に就任している。龍之介満二十四。なお、この大正五年十二月には本書の著者が恒藤雅（まさ 明治二九（一八九六）年〜昭和五七（一九八二）年…日本最初の農学博士の一人であり、本邦の土壌学の創始者にして「ラサ工業」を設立したことで知られる恒藤規隆（安政四（一八五七）年〜昭和一三（一九三八）年）の長女）と結婚（婿養子）し、井川から恒藤姓となっている。

「自分だけは鎌倉に住んでゐた」海軍機関学校への就職に伴い、鎌倉和田塚の旧海浜ホテル隣（北）にあつた野間西洋洗濯店の離れ（現在の鎌倉市由比ガ浜四丁目八のこの中央附近）の八畳間に下宿している。但し、通勤に嫌気がさしたのか、この京都旅行の五ヶ月後の大正六年九月十四日には、学校に近い横須賀市汐入五百八十番地（現在の横須賀市汐入町三丁目一附近）の尾鷲梅吉方の二階（八畳間）に転居している。しかも、この九月の下旬には、早くも教師生活に嫌気をきたし、文筆業一本に絞ることを考え始めたりもしている。なお、ここでも大学の学生寮の時と同じく、週末には田端の自宅に帰り、月曜に仕事を終えてから、下宿へ戻るといふ生活であつた。

「成瀬正雄」「成瀬正一」の誤り。

「手巾」作品名の読みは「はんけち」。

「まだ結婚はしてゐなかつたけれど、たしか既に婚約は成立してゐたかと思ふ」龍之介は大正五（一九一

六)年二月の中旬、伯母フキ・叔母で実父の後妻であったフユに塚本文(幼馴染みの親友山本喜誓司の姪)を会わせたところ、二人とも好感を持って呉れたことから、前年末から結婚相手として意識し始めていた彼女との結婚の意志を固め、同年六月中旬には塚本文との結婚について、芥川・新原・塚本家の家族間で約束がなされたものと推定されている。正式には大正五年十二月に、塚本文との婚約が成立し、彼女が在学している跡見女学校を卒業するのを待って、結婚する旨の縁談契約書が芥川・塚本両家の間で交わされた。因みに、内祝言は大正七年二月二日(龍之介満二十五、文満十七)であった。」

そのころ私たちは下鴨の糺の森に臨んだ小さな二階家に住んでゐた。四月十一日の夕かた芥川から『ジウニニチアサシチジツク』といふ電報がとどいたので、あくる朝早く起きて、家内と二人で京都駅に行つた。七時すぎに下り列車が着いたけれど、芥田父子のすがたが見えないので、十時の列車まで待たなければ、やはり二人のすがたは見当らなかつた。「どうしたのだらう。行き違つたのかしら」と不思議がりながら二人は下鴨の家に帰つた。はたして行きちがひであつたのかどうか忘れてしまつたけれど、その日の午後芥川父子は俥に乗つてやつて來た。森を見下ろす二階の部屋でしばらく話した後、下鴨神社に案内した。

芥川たちは駅の前の鳥居樓に宿をとつてゐた。そのあくる日、つまり四月十三日のあさ、そこを訪ねて、先づ東本願寺に二人を案内した後、四條大宮から嵐山電車に乗つた。終点で下車すると、すぐ渡月橋の方へあるいて行つた。橋を渡らないで右へ折れて、とつっきの茶店の赤い毛氈の敷いてある床几にこしかけて休んだ。そこで平たい皿に盛つた花見だんごをたべながら芥川がしきりに東京を出発してからの老人の旅慣れぬ様子のことなどをしゃべつた。

それから私たちは流れに沿うた堤のみちをぶらぶらあるいて行つて。亀山公園の松林の中にはいつた。晝過ぎになつたんで、小高いところにある茶店に立ち寄つて、簡単な晝食をとつた。そのうちに雨模様となつた。向ひの山を蔽ふ樹々の濃い翠りいろの中に、ほのかな赤みを帯びた櫻のはなのかたまりが浮きあがつてゐるのが、眼に沁みてうつくしかつた。雨はかすかな糸すぢを白く引いて降り、蓑を着た舟人をのせて、いくつもの筏がゆるやかに眼の下の碧い流れを下つて行つた。

道章氏は、椽先きの松の木蔭にたたずみながら、感にたへないやうな顔つきで眺めてゐたが、「さくらはやはり松の中に咲いてゐるのが佳いんだな。」と私たちをかへりみて言つた。

すると芥川が間髪をいれず、「松の中に櫻が咲いてゐるんで感心したのぢやなくて、さくらが咲いてゐるんで松に感心しちゃつたのでせう。」といつてわらつた。道章氏も釣りこまれて、わけなく「あはは」とわらつた。

それから私たちは嵯峨駅から汽車に乗つて二條駅に引き返し、北野の天神に参詣した後、金閣寺を見物した。夕方、四條通りを東へあるいて行き、都踊りを見た。

その翌日は芥川父子だけが奈良へ見物に行つた。夕がた私と家内とは芥川父子に贈るために二條木屋町へ行つて「大原ふご」を買ひ、四條の繩手上ルで「驚知らず」を買つたう

へ、鳥居樓に行つた。芥川は奈良で買ったのだと言つて、古い鏡を見せて呉れた。親子二人は八時二十分の汽車で京都を去つて行き、私たち二人は圓山公園に寄つて、夜ざくらを見てかへつた。

「やぶちゃん注…「芥川が京見物に來た」ここにある通り、芥川龍之介は大正六（一九一七）年四月十二日に養父道章と二人で、京都・奈良見物に出かけた。この日の午後京都下鴨の作者の下鴨の新家庭を訪問しており、翌十三日には恒藤恭の案内で、東本願寺（老婆心乍ら言つておくと、芥川家の宗旨は日蓮宗である）・嵐山・清涼寺・金閣寺を巡り、夕刻には都踊りを見学した。十四日に道章と二人で奈良を見物し、午後八時二十分発の列車で東京へ向かつた。なお、次の章で語られるが、翌朝、田端に戻つてみると、養母儂が丹毒（蜂窩織炎^{ほうかしきえん}。次の章の最初の注のリンク先の私の注を参照）で高熱を出して床に就いているという騒動があつた。私は京都に冥いので、幸い、古くからよく訪ねる[サイト](#)「東京紅團」の「芥川龍之介の京都を歩く」の「1」に、詳細地図や、「とつっきの茶店」について、サイト主は『戦前はこの写真』（リンク先にある写真）『の右側に三軒屋という有名な茶店がありました。推定ですが、芥川親子もこの三軒屋で休んだのだとおもいます』と述べられ、旧「三軒屋」や、芥川父子の泊つた京都駅前の旧「鳥居樓本館」の写真も揚げておられるので参照されたい。

「大原ふご」不詳。「ふご」は「畚」（魚釣りの魚籠）のような竹細工かとも思ったが、判らぬ。いろいろなフレーズで検索してみたが、正体不詳。京都の方の御教授を乞うものである。

「驚知らず」は京都名産の小魚の佃煮。当該ウィキによれば、『よく洗つた鴨川産の小魚』一『升』（四百九十匁〓千八百三十七・五グラム）『につき醤油』七『合を入れ、砂糖・薑を少々加え、数時間煮て製する。このときの調味液の残りは次回に使用し、その不足分のみを補給する。折詰または曲物に入れて販売されていたが、今ではほとんど見ることはできない。なお、使われる小魚は体長約一寸』『程のオイカワ』（コイ科クセノキブリス亜科 *Oxygastinae* ハス属オイカワ *Opsarichthys platypus*。所謂、「はや」類の代表的な一種）『の稚魚を使う。「鉄道唱歌」の歌詞に出てくるのが知られる』とある。』

九 帰京後の挨拶の手紙

東京にかへつてから一週間ばかりしてから芥川の呉れた手紙の文句を次にしるす。これも「全集」の第七巻に載つてゐない。

「やぶちゃん注…最後の岩波の正字旧全集には所収し、『芥川龍之介書簡抄71』／大正六（一九一七）年書簡より（三）塚本文宛・井川（恒藤）恭宛』（宛名姓は「井川」となっている）で電子化注してある。原書簡を少し整序してある。」

先達はいろいろ御厄介になつて難有う

その上、お土産まで頂いて、甚恐縮した。早速御禮を申上げる筈の所、かへつたら、母が丹毒でねてゐた爲、何かと用にかまけて 大へん遅くなつた。

かへつた時は、まだ四十度近い熱で、右の腕が腿ほどの太さに赤く腫れ上つて、見るのも氣味の悪い位だつた。何しろ命に關する病氣だから、家中ほんとうにびつくりしたが、幸とその後の経過がよく、医者が心配した急性腎臓炎も起らずにしまつた。今朝、患部を切つて、炎傷から出る膿水をとつたが、それが大きな井に一ぱいあつた。今熱を計つたら卅七度に下つてゐる。このあんばいでは、近々快癒するだらうと思ふ。医者も、もう心配はないと云つてゐる。

何しろ、かへつたら、芝の伯母や何かが、泊りがけで、看護に来てゐたには、實際びつくりした。尤も腕でよかつたが。

医者曰く、「傳染の媒介は、一番が理髪店で、耳や鼻を剃る時にかみそりがする事が多い。さう云ふのは、顔へ来る。顔がまつ赤に腫れ上つて、髪の毛が皆ぬけるのだから、女の患者などは、恢復期に向つてゐても、鏡を見て氣絶したのさへあつた」と。用心しないと、あぶないよ、實際。

とりあへず御礼かたがた、御わびまで。まだごたごたしてゐる。

廿一日夜

龍

「やぶちゃん注…」芝の伯母」リンク先で既注だが、この「芝の伯母」というのは、実父敏三に後妻で入った実母フクの妹フユのことである。どう転んでも「伯母」ではなく「叔母」なのだが、一面、構造上は「義母」にも当たることから、彼はつい、かく「伯母」と呼んで、心理的に區別しているのであろうと私は思っている。他の書簡でも、フユを「伯母」と呼んでゐる例がある。」

十 共に生きる者の幸福について

「おたがひに一と言も話さないで、おやぢと二人、部屋の中に一緒にゐるときがある。それでゐて、そんな時にいちばん幸福な感じがするんだ」といふやうなことを、芥川が話したことがある。

これは意味の深い言葉だと思つて、いまでも記憶してゐる。

たとへば、恋愛に熱してゐる男性と女性とは、向かひ合つてゐるあひだ甚だ多辯である。それも、人生における幸福にみちた一時であるに相違ない。だが、ほんたうに親しい間柄の人と人とは、ただ同じ処に一しよにじつとして居るだけで、すでに充分に幸福である。

「やぶちゃん注…言わずもがなであるが、この「おやぢ」とは養父芥川道章である。芥川龍之介は実父新原敏三に対しては、こうした親近感を表明したことは、作品でも書簡でも、

一度も、ない。龍之介の大正一五（一九二六）年十月に『改造』に発表した「點鬼簿」の「三」の冷徹な叙述が、それを決定的に示している。」

十一 芥川のきやうだい

芥川には二人の姉と一人の異母弟があつた。その二人の芥川の姉の中で私は一人しか会つたことはない。芥川は細長の顔立ちであつたけれど、その人はむしろ丸顔で、あまり芥川には似てゐなかつた。芥川は切れの長い眼つきであつたが、その姉さんはぼつちりとした、つぶらな眼をもつてゐた。二人の間がらはあまり親しさうではなかつた、昭和二年一月に、その姉さんの夫、つまり芥川の義兄の家が火を発して全焼した。義兄は放火の嫌疑を受けたのが因を成して轢死した。その跡始末のために芥川はずるぶん心づかひをしたらしい。彼が自殺したのは、この事件があつてから半年ばかり経過した時のことである。

この義兄にあたる人にも二、三回会つたことがあるが、小柄で、ふとり氣味で、医者のだ診みたやうな感じのする血色の好人だつた。「あれは俗人だよ」と芥川はいつてゐた。異母弟の得二君は、まつたく芥川には似てゐなかつた。日蓮宗に凝り出して、いくぶんフアナチックになつてゐたやうだ。「あいつにはかなはん」と芥川はいつてゐた。

「やぶちゃん注…二人の姉」先行する『六 芥川家の人々』の私の注を参照されたいが、長姉は、新原敏三と龍之介の実母フクの間に生まれた龍之介の長女「ソメ」（初）であり、恒藤どころか、龍之介自身も逢つたことはない。龍之介の生まれる四年前の明治二二（一九八八）年四月に僅か満二歳九ヶ月あまりで脳膜炎で急逝しているからである。次姉ヒサもそちらの注を見られたいが、自死に際しての芥川龍之介の遺書には、遺族によって破壊された部分が存在し、理由は判然としないが、現行の研究では——この次姉ヒサ——及び、ここに出る——義母弟新原得二——との——義絶——の指示があつたとされる（無論、実行されてはいない）。私のサイト版「芥川龍之介遺書全6通 他 関連資料1通」2008年に新たに見出されたる遺書原本 やぶちゃん翻刻版 附やぶちゃん注」を参照されたい。

「その姉さんの夫、つまり芥川の義兄の家が火を発して全焼した。義兄は放火の嫌疑を受けたのが因を成して轢死した。その跡始末のために芥川はずるぶん心づかひをしたらしい」同じく『その6』／『六 芥川家の人々』の私の注を参照されたいが、少し付け加えると、姉ヒサの再婚相手である弁護士西川豊は、大正二二（一九二三）年の一月頃、偽証教唆によつて市ヶ谷刑務所に収監されるという騒動が、まず、あり、芥川龍之介が自死の直前の昭和二（一九二七）年七月発行の『中央公論』に発表した『冬と手紙と』の「一 冬」（私のサイト版）は、その収監された西川に面会するシークエンスが描かれている。この同じ時、龍之介は盟友小穴隆一が脱疽のために右足首を切断しており、その手術に立ち会うなどのダブル・パンチ状態にあつた。そして、自死の年の一月四日には、西川宅が全焼、直前に多額の火災保険がかけられていたことが判り、西川に嫌疑がかかつたのであつた。その取

り調べの最中、西川は失踪し、一月六日午後六時五十分頃、千葉県山武郡土気の国鉄のトンネル付近で飛び込み自殺をしたのであった。結局、あったとされるヒサと得二の義絶は、龍之介の自死の決意の時期に、神経に触る面倒な問題を彼に波状的増幅的に齎したことに對する甚だしい不快感が原因であろうと思われる。則ち、ヒサと得二は自分の死後も養父母・叔母フキ・妻文・男子三人に間接的・直接的に甚だしい難題を吹っかけて来るに違いない（と、確かに、注している私自身も思うのだが）と断じて、義絶要請を遺書に命じたのであろう。先の遺書で注したが、推定では、ヒサ及び得二との義絶とともに、葛巻義敏の扶養を指示してもいるとされるのである。母であるヒサを義絶しながら、義敏を扶養するというのは、正直、おかしな話であろう。遺書のその部分を書いている龍之介には、最早、その矛盾と実行不可能性に気づかないほど、一時的にでも、理性が働いていなかったのである。因みに、破棄された部分には、あと二つ、全集底本は原稿によること及び削除作品についての指示」（原稿は総てが作者に戻ってはいないこと、削除作を指定されたものでは「全集」にならないことから、現実的に実行することは困難であるから、破棄は正當とも言える。但し、だから破棄したというよりも、この破棄された指示書は、同一の続いた文章で一枚或いは複数枚の原稿用紙に書かれていたために、一緒に破棄せざるを得なかったという物理的理由があったと考える方が自然であろう）と――驚くべきことに――小穴隆一と文子の再婚の指示――があったとされるのである。無論、実現していないし、小穴は龍之介の死後、「二つの繪」や「鯨のお詣り」に単行本化される、芥川龍之介に纏わる、あることないことを一緒にした文章を、多数、書いており、特に龍之介の原稿を自身の管理下に置いた葛巻義敏を、芥川家に巢食う『奇怪な家ダニ』と卑称して徹底的に批判したりした結果（二作は私のブログ・カテゴリ「芥川龍之介盟友 小穴隆一」で総て電子化注してある）、芥川家の方から小穴とは疎遠になってしまったようである。

「異母弟の得二君」同じく『(その6)』／「六 芥川家の人々」の私の注を参照。」

十二 未婚のころの文子夫人

大正七年に芥川は塚本文子さんと結婚した。よはひは二十七歳。

私は結婚前の芥川夫人に一度だけ会ったことがある。（尤もこの記憶は確かではない。一度だけではないかったかも知れない。）それは前年の大正六年の正月のことだったかと思ふが、それよりも前だったかも知れない。とにかく私が京都から上京して、年末から正月にかけて滞在してゐたあひだのことである。

そのころの塚本家の住居は、芝にあつたのか、麻布にあつたのか、これも忘れてしまつたが、芥川にさそはれて、ある日の午後はじめてそこにおとづれた。十人ばかり集まつてゐた者たちが歌がるたをしてあそんだ。

まだ女学校の生徒らしい様子のとれてゐない文子さんが、お茶やお菓子などをくばつたりした。大柄な、肉つきの好いからだつきで、ふくよかな頬のいろがうつくしかつた。弟

の八洲君も一しよにかかるたを取つたかと思ふが、そのころはまだ可愛らしい少年だった。

夕方そこを辞してのかへりみち、私たちは文子さんについて語り合つた。とほからず結婚することにきまつてゐた頃のことだったので、芥川の話しぶりには希望にみちてゐるやうなところがあつた。

文子さんのお父さんは、日露戦争のとき海軍大学出の少佐として軍艦初瀬に乗り組んでゐたが、旅順の港外で乗艦が機械水雷に触れて沈没した際に、艦と運命を共にした。そのあと、しつかりした氣性の未亡人のいつくしみ深い養育によつて二人の遺兒は健かに成長したのである。

「やぶちゃん注・龍之介と文の結婚についての経緯は、既に「[八 嵐山のはるさめ](#)」の注で年譜的事実を時系列で簡単に纏めてあるが、ここで恒藤が、「とほからず結婚することにきまつてゐた頃のことだった」と述べていることから、大正五（一九一六）年年始ではなく、最初の述べている大正六年年始である（前年十二月に縁談契約書が両家によつて交わされている）。年譜には恒藤（彼は既にこの大正五年の十一月に結婚している。当時は彼は大学院生）の年末年始の滞在は記されていないが、海軍機関学校の冬季休暇は十二月二十一日に始まり、翌年一月九日（この日に鎌倉の下宿に戻っている）までであつた。ちよつと氣になるのは、新妻雅との最初の正月を妻を置いて上京というのはちよつと解せない氣がするが、或いは、恭の逆の思いやりで、雅を里帰りさせて父と水入らずの正月を計らつたのなら、腑に落ちなくもない。

「塚本家の住居は、芝にあつたのか、麻布にあつたのか」麻布というのは記憶にないが、芥川龍之介の妻文の「二十三年ののちに」（昭和二四（一九四九）年三月発行の『[図書](#)』所収。岩波文庫石割透編「芥川追想」で読める）で、芝の新原家（旧芝区新銭座町十六。現在の[港区浜松町1-2](#)（グーグル・マップ・データ。以下同じ）附近）から南南西に直線で三キロ強の位置のここ（現在の[港区高輪三丁目](#)）にある東禅寺のそばに、元々の塚本家があつたことが、そこに『東禅寺の隣り』とあることから判明した。しかし、これは、恒藤恭の記憶違いで、恒藤が芥川龍之介と知り合い、芥川が文に好意を抱いた頃には、既に塚本鈴と文は本所相生町の芥川の三中の親友山本喜誉司（文の叔父に当たる）の家に移つてからのことであるからであつて、芝ではない。その後には麻布に移っているのかも知れないが、芝では絶対にはあり得ないのである。恐らく、「昔は、芝に塚本家の大きな家があつた。」という話を芥川から聴いたことから錯誤したものであろう。

「まだ女学校の生徒らしい様子のとれてゐない文子さん」というより、彼女はまだ跡見女学校在学中で、未だ満十五歳であつた。因みに、芥川龍之介（満二十五歳）と結婚したのは大正七（一九一八）年二月二日であつたが、この時も、満十七歳で、実は同校在学中であつた。縁談契約書では卒業後に結婚するという明文があつたのだが、一九九二年河出書房新社刊の鷺只雄編著「年表作家読本 芥川龍之介」のコラム「塚本文との結婚」（六十六ページ）によれば、彼女が『この年数え一九の厄年になるため、迷信深い芥川家ではせめて

節分前』(これは旧暦による安全圏内を端としたものであろう。この年の旧暦の元日はグレゴリオ暦で二月十一日に相当するからである)『に式をあげようと早めたという』とあった。

「弟の八洲君」[既出既注](#)。当時は満十三歳。

「文子さんのお父さん」山本善五郎(明治二(一八六九)年〜明治三七(一九〇四)年五月十五日)は鷺氏の前掲書のコラム「文の父・塚本善五郎」によれば、『飛騨高山の士族であったが、明治維新後、東京へ出て品川の下高輪、東禅寺の一面に一〇室程ある家を構えて住んでいた』。彼は『海軍大学第一四回の卒業生で、卒業時には成績優秀につき』、『恩師の時計と備前長船の刀をもらった』。『明治三七(一九〇四)年二月に新造された戦艦「初瀬」に乗り、第一艦隊の参謀少佐』(別資料では「大佐」とある)『として日露戦争に出征し』たが、『旅順港外で艦が機械水雷に触れて轟沈し、御真影を捧げて艦と運命を共にした』。享年三十六であった。『その時』、『妻の鈴は二三歳、文四歳、弟の八洲は一歳であった』。『塚本家には善五郎の父母が健在であったが、息子の死に力を落して相次いで世を去り、大きな家は不要となったので人に貸し、別に三間の絵を建てて一家はそこに住んだ』。しかし、『母の実家山本家では年若い未亡人一家を案じて里帰りを勧めたので、明治四〇(一九〇七)年に(龍之介満十五歳)、『一家は本所相生町へ移った』。『この相生町は小泉町の芥川家のすぐ近くで』あり、親友であった『文の叔父喜誉司』(鈴の一番下の弟)『を訪ねて龍之介が』よく『遊びに来』ており、龍之介は文の少女時代から知っていたのであった。』

十三 英文書簡一通

私の手許に残つてゐる芥川の書簡の中に、英文でしたためたものが一通ある。西洋紙二校に書いてあり、それを入れた西洋封筒の消印は「内藤新宿」局のもので、日付は明治四十五年七月二十二日となつてゐる。

それは、私たちが一高の二年生のときの学年試験を了へた後の暑中休暇のあひだのことである。私は試験が終るとただちに松江市の母の許に帰つて、その夏をすごした。手紙の文句の中に「Sister and brothers」とあるが、その一人の妹はいまでも健在だけれど、二人の弟はいづれも亡くなつてしまつた。

芥川がどうしてわざわざ英文でしたためて寄越したのかよくはわからないけれど、事によつたら私の方からブローッキングイングリッシュで書いて送つた手紙に対して、先方からも英文でもつて返信を呉れたのであつたかも知れない。なにしろ、三十五年ばかりも以前のことなので。たしかな記憶はもつてゐない。

終りに近い箇所に「without」と書いているが、正しくは「with」と書くべきでなかつたかと思ふ。それから少し後の箇所に、『乾草のかをり——牝牛たちのものうい鳴きごゑ——きいろと新月』といかも西洋の風景画をおもひ浮かべさせるやうな叙景の文句がある

が、この手紙の書かれたころには、芥川家は未だ田端の新宅に移轉して居らず、まへにも書いたやうに、新宿に住んでゐて、そのとなりには、芥川の実家で経営してゐた小規模の飼牛場があつた爲である。

ポスト・スク립ツムに追記してあるピアツレーの「サロメ」は、うつくしい版画ををさめた本であつた。

「やぶちゃん注…このためにブログ・カテゴリー「芥川龍之介書簡抄」の「芥川龍之介書簡抄 150 追加 明治四五（一九一〇）年七月二十日 井川恭宛（全文英文）・オリジナル邦訳付き」で岩波旧全集版の当該書簡を先に電子化注し、私の芥川龍之介書簡に似せて作った歴史的仮名遣・正字表現版の擬似的訳文を載せておいたが、本篇の英文引用とは改行に異なつた箇所があり、スペルや記号類を恒藤が補正したと思われる箇所も数ヶ所ある。活字がなかつたか、或いは恒藤が指示しなかつたか、斜体も使用されていない。コンマやピリオドの後の字空けが有意に倍ある。なるべく底本に近いようにしたが、そもそも底本の英文活字一つの横幅が邦文のそれに比べて相対的に大きく、ポイントも大きく、単語間の字空けも、元々やや広い感じで組んであるように思われる。そのままの一行の活字数を和文本文と同じにすると、却って読み難くなるので諦めた。★さらに、ワードで和文の中に英文の文章を混在させると、微妙に記号類に不具合が発生することが判つたため、ここは独立したPDFファイルを別に作成し、ここにリンクさせておくこととした。不自由をおかけし、誠に済まない。

——『●恒藤恭「旧友芥川龍之介」の「芥川龍之介のことなど」の一括PDF版内の「十三英文書簡一通」の章のための芥川龍之介英文書簡（PDFによる補完分）——

である。なお、注の一部をその英文の最後に移してあるので、必ず、読まれない。

「ポスト・スク립ツム」 post scriptum はラテン語で、「ポスト・スク립トウム」、「後で」＋「書かれた物・文書」を意味し、P.S.（追伸）の略号で知られるもの。」

十四 澄江堂の遺品について

この稿の書きはじめに「戦火に焼け失せた澄江堂」といふ題目の下に、一昨年の四月十三日に田端の芥川家が戦火のために灰となつてしまつたといふ未亡人からのたよりを引き合ひに出したうへ、次男の多加志君が南方の遠い地域で戦死した翌日に、『故人の生前をしのぶよすがとなるさまざまの遺書や遺品と共に澄江堂の建物が戦火のために焼けうせてしまつたといふことは、奥さんが手紙の中に書かれてゐるやうに、なにか不思議なめぐり合はせだといふ感じがする。』と述べたのであつたが、（前出七五頁）この文句の一部分を訂正せねばならぬことがわかつた。

といふのは、右の拙稿を載せた雑誌が秋田屋から郵送され、その中の拙稿をよまれた未亡人が戦後の感想をかいて寄越された手紙の中に、故人の遺書や遺品は鶴沼の現在の芥川家の住居の方に疎開してあつた爲に無事であつたといふことがしたためてあり、故人が愛藏または愛用してゐた其れらの品々は澄江堂の建物と運命を共にしたのでなかつた事実を知ることができたからである。

はじめの未亡人のたよりの中の『田端の家も昨年四月十三日に灰になつてしまひました。』といふ文句に、胸を撲たれた爲に、さまざまの遺品も一しよに灰となつてしまつたものとすつかり思ひ込んでしまつた次第であつた。若しも周到に考へたのであつたならば、当然に家具家財の疎開といふことにも思ひ及ぶべきはずであつたのだし、此のやうな訂正の言葉を書きつらねる必要も生じなかつたわけであるが、おもへば愚かな私自身の早呑みこみであつた。

「やぶちゃん注…(前出七五頁)」「[本パート冒頭の「一 戦火に焼け失せた澄江堂」](#)(リンクはブログ版) 私の太字の注の「**遺品・遺書は焼失していない**」とある前の本文部分を指す。

「秋田屋」本パートが連載された雑誌『智慧』の発行元である奈良の出版社。前リンクの私の注を参照。

「鶴沼の現在の芥川家の住居の方に疎開してあつた」無批判に考えると、芥川龍之介が晩年の一時期を過ごした鶴沼の貸家を想起するのだが、あの貸家を「芥川家」の借り物として戦中・戦後を通じて借り続けていたとは、当時の状況を考えると、かなりおかしい気がする。私はこの「芥川家」というのは、妻文の母鈴と弟八洲がいた塚本家(結核であつた八洲の療養のために龍之介の晩年に鶴沼に移っていた)のことではあるまいか？」

十五 昭和二年の七月のおもひ出

芥川が此の世を去つた年——昭和二年の七月は、来る日も来る日もきびしい炎暑がつづいた。自殺の当日の七月二十四日も朝からかんかん烈日の燃えかがやく日和であつたし、葬儀の行はれた七月二十七日もおなじやうに酷暑の一日であつた。

それ以来、何年振りかに暑さむきびしい夏がおとづれる度毎に、芥川のなくなつた年のことを想ひ出すならひととなつた。ことしは六月のあひだは例年よりも涼しい日和がつづいたけれど、七月に入つてから気候が一変して、猛暑の夏の襲來を思はせるやうになつた。

「やぶちゃん注…「ことし」初出の書誌情報と後に出る「二十四 人生と藝術」の末尾にあるクレジットから、これは昭和二二(一九五七)年と断定出来る。」

昭和二年のころには、まへにも一寸かいたやうに私は下鴨のただすの森の西側の家に住んでゐた。その年の七月二十四日の朝から夕方までの事は何一つ記憶してゐないが、夜に入つてから独り鴨川の河原に行き、星のかがやく空をながめながら、ぼんやりと涼を納れ

るどれだけかの時間をすごした後、家の方へ帰って行くと、あと四、五十歩で門のまへにたどりついたあたりで、そのころ私の家にゐた佐久間千代といふ若い婦人が急ぎ足であゆんで来るのに、はたと行き会った。

「芥田さんが自殺なさったさうです。知らせの電報が参りました」と彼女は息をはずませたと言った。

その瞬間、私は事の意外に愕くといふよりは、むしろ「ああ、さうか」といかにもきつ然敵に到来せざるを得なかつた事実がつひに到来したのだといふやうな気もちがした。だが、なかば走るやうにして家にかへりつき、電報の文句をよんだ。その朝自殺したといふことと、葬儀の日取りとを知らせる文句であつた。

翌日の夜京都駅発の急行列車の寝台券を手に入れて、たしか午後八時すぎ発の列車に乗った。すると、おなじ寝台車に一足先きに田辺元博士が乗って居られた。しばらくのあひだ並んで腰かけながら話したが、芥川の自殺の動機について尋ねられたのに対して、どのやうに答へたのか覚えてゐない。だが、ふしぎとその時、下の段の寝台にこしかけて、私のはいつて行くと、こころもち驚いたやうな表情をして、「やあ」とあいさつされた田辺さんの顔つきと様子とが、今でも鮮かに記憶に残つてゐる。

「やぶちゃん注…『佐久間千代』期待せずに検索をかけたところ、既に消失している記事(PDF)のキャッシュが検索リストに挙がってきた。そこには大正一一(一九二二)年三十二歳の時、『勉学熱心だつたお手伝いの佐久間千代を同志社の聴講生とする』というフレーズが確認出来た。

「田辺元」(たなべはじめ 明治一八(一八八五)年〜昭和三七(一九六二)年)は哲学者。西田幾多郎とともに『京都学派』を代表する思想家で、この昭和二(一九二七)年に京都帝国大学名誉教授に就任している。田辺自身と芥川龍之介には接点がない(所持する旧全集対象の宮坂覺氏の「芥川龍之介全集総索引」(単行本・岩波書店一九九三年刊)の「人名索引」にも載っていない)と思われるので、何かの用で上京するのに偶然、逢つたものである。恒藤は既に当時、法哲学者として知られていたし、同じ京都帝大であるので、旧知の人物であつたのであろう。田辺は報道で芥川龍之介の自死を知っており、恒藤が龍之介と旧知の懇意であることも知っていたのかも知れず、それならば、このシークエンスも腑に落ちるのである。」

十六 最後に出会ったときのこと

芥川の自殺した時から数へて十一ヶ月ばかり前の大正十五年九月二十六日に私はサン・フランシスコで乗り組んだ郵船大洋丸から下船して、横浜に上陸した。それから二、三日の後に、当時鶴沼に滞在した芥川をたづねたが、三年振りに会つた彼の容貌は、三年まへの其れとは大へんな変りやうであつた。まるで十年もの年月がそのあひだに経過したやう

な気がした。旅館あづまやの二階で、問はれるままに、いろいろヨーロッパ留学中のことを話し、また近況について語る彼のことばに耳を傾けた。元來が痩せてゐる芥川ではあつたが、そのときの彼の肉体の衰へは正視するのもししいやうな程度のものであつた。だが、氣力は一向おとろへてゐないもののやうに、意氣軒昂といったやうな調子で文壇のありさまなどを話して呉れた。しました、どうも健康がすぐれず、不眠にくるしんでゐるといふことも訴へた。

「やぶちゃん注：『郵船大洋丸』ドイツ帝国の貨客船として一九一一年に進水したが、「第一次世界大戦」でのドイツ敗戦後の一九一九年にアメリカ海軍軍艦輸送船となり、同年末にはイギリスに、さらに翌一九二〇年には賠償船として日本政府へ引き渡された。本船が「日本郵船」の運行になったのは恒藤が乗船したこの年の五月のことであつた。「太平洋戦争」開戦後は日本陸軍輸送船となつたが、昭和一七（一九四二）年五月八日午後八時四十分頃、シンガポールに向けて航行中、長崎県の男女（だんじょ）群島近くの東シナ海上で、アメリカの潜水艦「グレナディア」（USS Grenadier (SS-210)）等の雷撃を受け、浸水・沈没した。当時の南方作戦による占領地のインフラ整備に召集された多数の技術者や営業マンらを含む乗客・軍属・船員他八百十七名が殉難した。こうした有識者・技師が多数亡くなったことで、敗戦後の日本のアメリカによる占領地行政は実に二年も遅れたとも評される戦時中の出来事の一つであつた（[当該ウィキ](#)に拠つた）。

「それから二、三日の後に、当時鶴沼に滞在した芥川をたづねた」この来訪は恒藤のこの証言以外には日付を確定するソースがない。最新の新全集宮坂年譜でも、七月二十三日『頃』として記されてあるが、その根拠は本篇である。なお、この時は既に旅館「東屋」での宿泊滞在はやめて、同旅館が運営する近くの貸別荘「イの四号」（玄関を含め三間から成つていた）に移つていたが、やはりこの頃に、その裏にあつた二階家の借家に移つてもいる。なお、[『小穴隆一』](#)「[二つの繪](#)」(5) [『自殺の決意』](#)によれば、[龍之介が誰よりも早く、自殺の決意を小穴に対して告げたのは、この三ヶ月あまり前の大正十五年四月十五日のことであると記している。](#)

「あづま屋」私の『[風俗畫報](#)』臨時増刊「[江島・鶴沼・逗子・金澤名所圖會](#)」より鶴沼の部 [東屋](#)」を参照されたい。私のそちらの注は芥川龍之介に偏つて書いてある。」

ぜんたいとしての彼の風貌が、なにかしら鬼氣人に迫るといつたやうな趣をただよはしてゐて、晝食を共にしたりしてお互に話し合ひながら、余命のいくばくもない人と対談してゐるやうな予感めいたものを心の底に感じ、たとへやうもなくさびしい氣もちにおそはれることを禁め得なかつた。

「やぶちゃん注：『禁め』と『どめ』。」

万事を抛擲して健康の回復をはかるやうに、くり返してすすめ、京都へかへる前にもう一度たづねるからと言ひ残して別れ、東京へかへつた。いろいろの用事のために、その再訪の約束を果たすことが出来ず、私は妻や二人の子たちと共に京都に向かつて出発した。

その後、つひに再会の機を得ないままに、翌年七月二十四日による彼の自殺を知らせる電報をうけ取つたわけであるが、そのよる鴨川の河原からの帰途にはじめて悲報を耳にした瞬間に、一年まへ鶴沼のあづまやの二階で対談したとき心の底から涌き上つた予感の記

憶が、あらゆる感情の動きに先んじて力強く再現した。そして、芥川が自殺したことが私にとつては如何にも必然の成り行きだといふやうに感ぜられた次第である。

芥川が自殺を思ひ立つた動機とか、理由とかについて、私はさまざまの機会にさまざまの人々から質問をうけた。それに対して、答へようと思へば、答へになり得るやうないろいろの事情を知つてゐないわけでもないけれど、「ほんたうのことはわからないと言つた方が可いと思ひます。強ひて言ふならば、幾種類かの病氣によつてひき起された肉体の極度の衰弱、それにもとづく心と身体との甚しい不均衡——それが自殺にみちびいた基礎的要因をかたちづくつたといふことは確實だと思ひます。」といふやうなこと以上は、話したこともないし、話さうとも思はなかつた。

夜行列車で上京した翌日、田端の澄江堂にかけつけ、庭に面した階下の部屋に横たはつてゐるなきがらに当面したときに、私の眼にうつつたものは、あらゆる精神のなやみ、あらゆる肉体の苦痛から完全に解放されたところの、いとも安らかな永眠せる者の表情であつた。

時あつて芥川の死のことを想ふとき、あの残暑の一日、鶴沼で語り合つた時の、人生の苦惱におとろへ盡くした彼の肉体のすがたと、ふかい深い沈黙の安らかさに眼を閉ぢてゐた彼の此の世における最後の日の顔つきとが、かはるがはる記憶の中からよみがへつて来るならひである。

「やぶちゃん注…本篇は恐らく恒藤の芥川龍之介関連のものでは、彼と龍之介の最後の会見というシチュエーションから、最も引用されることが多い一篇であるが、今回、初めて元記事を読むことが出来た。恒藤の文章はストイックであるが故に、その龍之介への追憶感情が極めリアルに伝わってくる文章である。」

十七 言葉の感覚

一つ一つの言葉について私たちのもつてゐる感覚は著しく個性的な相違をそなへてゐるものであらうと思ふ。

ある時、芥川が「僕か『翠微』といふ言葉が嫌ひだ。どうもいやな言葉だ。」と語つたことがある。私自身は「翠微」といふ言葉について特にそのやうな感じをもつてゐなかつたので、「さうかね」とこたへただけであつた。なぜ彼がそのやうに此の言葉がきらひであつたのか、理由をきいて見たかつたのは遺憾だつたと、あとから思つたことである。

芥川は明治二十五年三月一日に東京市京橋区入船町でうまれた。辰年辰月辰日の辰の刻にうまれたので、「龍之助」と命名されたといふのだが、当人は「龍之助」といふのを嫌つて、いつの頃かはわからないけれど、みづから「龍之介」と称した。をかしなもので、私などは「芥川龍之助」と書いたのでは、どうしても芥川龍之介とは別人の名称としか思

へない。

「ちゑ」といふ言葉は「智慧」と書くのが本来の書きかたなのであらう。ところが、「智慧」といふ文字を見ると、なんだか古臭いやうな感じがするのに反して、「知慧」といふ文字は何かしら清新なやうな感じをひき起すやうである。これはどのやうな理由にもとづくものであらうか。これは私だけに妥当する理由づけであるかも知れないが、——「智慧」といふことばには何かしら佛教的な観念の連想がつきまといつて居り、そのために抹香臭いやうなところがある。それから、「慧」といふ文字は劃の多い、ややこしい形をした文字であるところへ、「智」といふ、やはり相当に劃の多い文字を附け加へると、一層こちたいやうな感じをひき起すので、「智慧」といふ言葉にくらべて、「知慧」といふ言葉の方がすつきりした印象をあたへるやうにも思はれる。「智慧」は英語の *Wisdom* に該当することばだらうと思ふが、「知慧」はなんとなく *intelligence*、という意味において通づるところがあるやうに思はれる。

関東では、木の葉や草の葉を「葉つば」といふ。「葉つば」といふと、いかにも乾からびたもののやうな感じがして、いやなことばだと思ふ。おなじやうに「原」を「原つば」といふのも、このもしくない言葉である。いつだつたか、このやうな私の私の感じを芥川に話したところ、同感するでも、同感せぬでもなく、微笑してみただけであつた。

「やぶちゃん注…「翠微」小学館「日本国語大辞典」によれば、『①山頂を少し降りたところ。山の中腹』、『②うすみどり色の山気。また、遠方に青くかすむ山。または、単に山をいう』とある。因みに、私は自身では未だ嘗つて使用したことはない語である。「衰微」を連想して私は好きになれない。

『芥川は明治二十五年三月一日に東京市京橋区入船町でうまれた。辰年反月辰日の辰の刻にうまれたので、「龍之助」と命名されたといふ』「芥川龍之介の本名は新原(芥川)龍之助である」という真(まこと)しやかな言説は、嘗つてしばしば行われた『芥川龍之助』

伝説』の一つで、結論を先に言うと、『誤り』である。既に本書でも「友人芥川の追憶」の「三」で恒藤が『去る七月二十七日、芥川の遺骸が谷中の斎場から日暮里の火葬場に運ばれ、焼竈の中に移され、一同の焼香が了つたのち、ふと見ると、鉄扉のかたへにかけてある札の上の文字が「芥川龍之助」となつてゐた。その刹那に、若しも芥川がそれを見たら「しやうがないな」と苦笑するだらうと思つた。すると世話役の谷口氏が「どなたか硯をもつて来て下さい、佛が氣にしますから字を改めます」といふやうなことを言つた。……「芥川龍之介」と改めて書かれた。何だか私も安心したやうな気がした。生前、芥川は「龍之助」と書かれたり、印刷されたりして居るのを見ると、参つたやうな、腹立たしいやうな、浅ましいやうな感じをもつたものだつた。それは、彼が「龍之介」といふ自分の名を甚だ愛し且つそれについて一種の誇りをもつて居たからでもあつた。第三者の眼から

見ても、「龍之介」は「龍之助」よりもよほど感じがいいし、よりエステツシユでもある、しかし私の強い彼は特別強くこの點を意識してゐたに違ひない。それは子供らしい誇りであつた。しかしそんな所にわが芥川の愛すべき性格のあらはれがあつた。彼の作品を愛讀してゐるとか、彼を敬慕してゐるとか云つたやうな事を書いて寄こす人が、偶々「芥川龍之助様」と宛名を書いて居るのを見て、「度し難い輩だ」と云ふ様なことを呟いた例を一二思ひ出す。』と記している。なお、この火葬場での出来事は、小穴隆一の『鯨のお詣り』(33) 「二つの繪」(22)「彼に傳はる血」にも載るので、是非、参照されたい。

なお、序でに、既注であるが、同じ小穴の驚天動地のスキヤンダラスな異常記事『二つの繪』(22) 「横尾龍之助」も、再度、紹介しておこう。なお、この名前の問題について確定的記述は、私の知る限りでは、一九九二年河出書房新社刊の鷲只雄氏の編著になる『年表作家読本 芥川龍之介』の二十二ページに載つたコラム「龍之介か龍之助か」が唯一の記載である。以下に引用する。

《引用開始》

能之介の名前については「介」か「助」かをめぐって、少久厄介な困つた事情がある。実父母の命名した戸籍上の名前は「龍之介」でこれが正しい。

ところが芥川家では恐らく意識的にであろうが、「助」を用い、龍之介は戸籍上の正しい名前を知らされなかつたために、ややこしい事態が起きる。

すなわち、龍之介の少年時代の自筆の文章は「助」であり、養父道章が実父敏三に於てた養子縁組の「証」も「助」であり、府立三中の校友会雑誌や一高の卒業生名簿、さらに東大卒業生氏名録も「助」になつてしまつた。ついでにもう一ついえば大正十一年に刊行された第一随筆集『点心』の背文字も「助」となつてゐる(これは単なる誤植であろう)。ところで明治三十七年八月、龍之介は裁判の結果正式に新原家から廃嫡となり、芥川家に養として入籍することになつた時点で、実父母の戸籍上の命名をはじめて知ることになる。

このとき龍之介は満一二歳であるが、以後は自ら「助」を用いることはなく、「介」に統一してゐる。「やぶちゃん注」以下は、本書恒藤恭の「旧友芥川龍之介」の「友人芥川の追憶」の「三」及び前掲の小穴隆一の記述を略述したものであるので、省略する。」

《引用終了》

これによつて、恒藤の「いつの頃かはわからないけれど」が、明治三七(一九〇四)年五月四日(芥川龍之介満十二歳)の東京地方裁判所民事部タ号法廷で下された新原家の推定家督相続人廃除判決文以降ということが判る。同判決文は鷲只氏の前掲書の二十五ページに原本画像があり、そこに確かに「新原龍之介」の記載を見ることが出来る。

『「ちゑ」といふ言葉は「智慧」と書くのが本来の書きかたなのであらう。……』ここで恒藤が、突然、「智慧」という文字面を問題にしたのは、本篇「芥川龍之介のことなど」が連載された雑誌名が『智慧』であつたことに由来するものであるが、出版社にとつてみると、以下の恒藤の謂いは、これ、あまり面白くない叙述ではあつたであらう。

「こちたい」「言痛し」「事痛し」という古語の転訛表現。ここは「仰々しい・おおげさな」

の意。

「Wisdom」「賢いこと・賢明・知恵・分別・賢さ・賢明であること・学問・知識・博識」の意の英語。

「Intelligence」「知能・理解力・思考力・知性・聡明・優れた知恵・機転・知恵・賢明であること・知性的存在」の意の英語。前者よりも、より哲学的なニュアンスを感じる。」

十八 おもひ出

「やぶちゃん注：本五篇は筆者恒藤恭の詩作品であり、一切の恒藤の解説がないことから、芥川龍之介の詩ではないので注意されたい。私はサイト版でオリジナルな現在入手できる芥川龍之介の諸資料を渉猟した全詩集に近い「芥川龍之介詩集」を作成してあるが、そこにはこれらに似た詩篇は一篇もない。謂わば、これは恒藤が芥川龍之介との思い出を念頭におきつつ、自身の感懐を詠じた詩篇群と推定され、恒藤の文学的資質の一端を窺わせるものとも言える貴重なものである。詩篇によっては、ある恒藤自身の或いは芥川龍之介の作品との仄かな連関を感じさせるものもあるが、それは敢えて注するのはやめる。」

ほのかなる思ひ出あり

あざやかなる思ひ出あり

いきどほろしき思ひ出あり

いともかなしきおもひ出あり

今もなほ胸ふくらむごとき

おもひ出あり

思ひ出づるもはづかしき

おもひであり

おもひでこそは

いとほしく

はかなきものか

来る日も来る日も

わづらはしき世の務めに

あわただしくも

過ぎしつ

時ありて
おもひ出の網をたぐりよせ
忘却の海に
立ち向かひつつ

寄せてはかへすしら浪の
しぶきの中に
するどなる人の
わがすがたかも

十九 此の秋

キリストが生まれたとき
「おほいなるパンは死んだ」と
叫ぶこゑが
ヘレスポンドの岬角を掠めて
ひびき渡つたといふ

太平洋戦争が終つたとき
とこしへに
いくさの神々は
此の國から消え失せたらしい

きのふもけふも
空は高く晴れて
街路のこずゑは
むらさきのかげを宿してゐる

人々は黙々として
無表情な顔をならべながら
電車の來るのを
いつまでも待つてゐる

敗戦の後に
三たび迎へる此の秋

爆音をかすかに残して

飛行機の翔り去る

行くてを見まもる

「やぶちゃん注：「キリストが生まれたとき／「おほいなるパンは死んだ」と／叫ぶこゑが／ヘレスポンドの岬角を掠めて／ひびき渡つたといふ」「岬角」は歴史的仮名遣で「かふかく」（現代仮名遣「こうかく」）は岬ミサキの意。「ヘレスポンド」はヨーロッパと東方（アジア・中東）の境に当たる現在のトルコにあるダーダネルス海峡の古称。「おほいなるパンは死んだ」一般的には「偉大なるパンは死せり」の謂いで知られるが、「パン」は牧神・牧羊神・半獣神の淫蕩な神として知られるそれであるが、ウイキの「パーン（ギリシア神話）」によれば、『ギリシアの歴史家ブルタルコス』（四六年頃～一一九年以降）が「神託の墮落」（「モラリア」第五章第十七節）『に書いたことを信じるならば、パーンはギリシアの神々の中で唯一死んだ。テイベリウス』（テイベリウス・ユリウス・カエサル（紀元前四二年～紀元後三七年）ローマ帝国第二代皇帝（在位：一四年～三七年）イエス・キリストが世に出、刑死した時のローマ皇帝）『の御代にパーンの死という』知らせが『タムス』『の元に届いた。彼はパクソイ諸島經由でイタリアに向かう船の船員だったのだが、海上で神託を聞いた』。それは「タムス、そこにおるか？ パロデスの島に着いたら、忘れずに『パーンの大神は死したり』と宣告するのじゃ。」というものであった。『その知らせは岸边に不満と悲嘆をもたらした』とあるのが元である。芥川龍之介も好んだニーチェの「ツアラトウストラ」に出る「神は死んだ」と皮肉に用いられるように、後世のキリスト教が、宗主であるイエス・キリストが古代の総ての神に代わって唯一神となつたとする意味に言い換えたものようである。但し、私はキリスト教に冥いので出典は判らない。」

二十 ひとつの感想

なんぢのことばの

なんぞ壯んなる

敗れたる此の國の人々を

罵り散らす

なんぢのことばの

なんぞさかんなる

われは正しかりき

いまもわれは正しと

自己肯定の

ところにたかぶり

いつまでかなんぢはののしる

「やぶちゃん注…「壯なる」「さかんなる」。」

二十一 顔

乗るたび毎に

顔を合はせる顔があるし

おそらく生涯に一度しか

顔を合はせない顔もある

不思議なやうな氣がするし

不思議でないやうな氣もする

いくたび顔を合はせても

好ましい顔があるし

一度顔を合はせるのも

いやなやうな顔もある

あたりまへのことに思はれるし

さうでないやうにも思はれる

いつたい同じ顔つきをした人は

決してふたりとありはしないだらう

だがよく似た顔つきをした人は

なんとざらにあることだらう

よくしたものだと言へるやうだし

さうばかりも言へないやうでもある

顔の出来上りに

必然と偶然との交錯があるらしい

何もかも神さまの

出たところ勝負のしわがらしいが

顔の持ち主こそ

いい迷惑ではないか

すがすがしい秋かぜに
ころよく吹かれながら
京都と大阪とのあひだを走つて行く
電車の中のつれづれに
そんなことを考へてゐた

「やぶちゃん注…「京都と大阪とのあひだを走つて行く／電車の中のつれづれに」先の
「三 ひがんばんな」(ブログ版リンク)私の注の冒頭のそれを参照。」

二十二 木犀の花咲くころ

いつよりもなく
まへ庭の
木犀の花は
かをりそめたり

日ごとくりかへす
生きの身の
生きのいとなみは
くるしみ多し

明けては暮るる
このごろの
日のうつろひは
流るるごとし

こころ足らはぬ
世なれども
けふのうれひは
けふにて足れり

秋深みゆく
日毎日ごと
空の碧りは
窮りぞ無き

「やぶちゃん注：「木犀」本邦では単に「モクセイ」と言った場合は、シソ目モクセイ科オリーブ連モクセイ属モクセイ変種ギンモクセイ *Osmanthus fragrans* var. *fragrans* を指すことが多い。」

二十三 退屈するといふこと

子供たちが小学校に通学してゐたところは、よく一緒に岡崎の動物園に行つたものであるけれど、近年は久しく行つたことがない。このごろは無隣庵での会合に出席するために毎月一度は動物園の門前をとほるならばしたが、以前の構内のなかばは進駐軍の自動車のグラウンドになつてゐるやうだ。

人間の世界の食糧難は動物園にも深刻な影響を及ぼしてゐるさうだから、此の頃の園内の様子はわからないけれど、子供たちと連れ立つて行つたころの事を思ひうかべると、いつ行つて見ても、そこに飼はれてゐる種々雑多の鳥や獣たちが狭い檻の中の生活に安んじてゐて、如何にも氣樂さうにふるまつてゐるな、と感じさせられたものである。ことに、いつもつくづく感じたのは、獅子だの虎だのたぐひから、かささぎとか、をしどりとかのたぐひにいたるまで、どの獣でも、どの鳥でも、いささかも退屈さうな表情をしてゐないといふことであつた。

どうも、「退屈の感じ」は人間に特有なもので、人間以外の動物はたいくつすることはないらしい。ただ、あの始終休みなく首をふり振り檻の中の一方から他方まで前進して行つては、また後退する運動をくりかへしてゐる白熊は、ひよつとしたら其の例外に属するかとも思へるが、ほんたうのところは、衝動に駆られて運動してゐるだけの話で、なにも退屈をまぎらすために運動してゐるわけでもないであらう。

さて、現在のやうに市内電車や郊外電車に乗る前に行列の中に加はつて相当の時間たたくずんでゐなくてはならぬ時代には、そして、たとへば私などのやうに日ごとにそのやうな機会をもつ者にとつては、とりわけその必要が大きいのであるが、あたり前ならばたいくつせずには居れない其のあひだを退屈しない心の工夫をする必要がある。いや、電車に乗つて腰かけてから後も目的地に到着するまでの間やはりさうした工夫をする必要がある。むろん新聞などを読んだりするのは最も簡便な方法だけれど、眼をいたはる上からはいつもそのやうな方法にたよるわけには行かない。いろいろの実際的な又は理論的なことがらを考へ、かんがへながら時を過ごすことが多いけれど、もつと徹底的な方法は、放心の状態に入つて、時の移つて行くままに任せることにあるやうだ。

いつたい、よる眠つてゐる間は別として、一日のうちの時間を少しもたいくつすることなく過ごしたいものであるが、なかなか思ふやうにならぬもので、とかく退屈の悪魔のとりこになる恐れがある。だから、一日のうちに何度かぼんやりしてゐて、しかもたいくつだといふ感じにとらはれないやうにする必要があるだけだ。

ところで、いつもなにかしら積極的に心をはたらかせてゐずには居れない性分の人があ

るやうだが、芥川はその種類の人の典型的なものであったと思ふ。つまり、退屈することが非常にきらひで、人と話すか、本をよむか、ものを考へるか、執筆するか、散歩するか、とにかく二六時中なんとかして心をはたらかせないでは居れない性分であった。

芥川龍之介全集は七巻と別冊と、あはせて八巻を包含してゐる。各巻いづれも菊版で七八百ページあり、全体では六千ページを超えてゐる。大体において大正三年あたりから三十六歳で亡くなつたまでの十五年「やぶちゃん注…ママ。十三年で数えでも十四年である。」ばかりのあひだに書かれものであるが、一行一句もおろそかにせぬ凝り性だつた芥川が、それだけの分量のものを書くために、どれほど多くの、緊張した意識の時間をつひやしたかは、想像に余りがある。しかも、いつも中々訪問の客が多かつたし、文学者仲間の会合などにも割合によく出席してゐたやうである。おまけにその間には中國旅行をはじめ、ちよいちよい遠方への旅行に出かけてゐる。

絶えず烈しく心臓を鼓動させながら人生の行路を急ぎ足であゆみ通したものである。それは緊張した、あまりにも緊張した生涯であつた。

「やぶちゃん注…『岡崎の動物園』京都府京都市左京区岡崎にある京都市立の京都市動物園（グーグル・マップ・データ。以下、無指示は同じ）のこと。大正天皇の結婚を記念して明治三六（一九〇三）年四月一日に開園した。東京の上野動物園に次ぐ日本で二番目の古い動物園である。公式サイトの「沿革・年表・動物園の歩み」によれば、昭和二一（一九四六）年四月に進駐軍により南側の約一万三千二百平方メートルが接収されていた。本書は昭和二二（一九四七）年発行である。なお、接収解除は六年後の昭和二七（一九五二）年五月であつた。

「無隣庵での会合」「無鄰菴」が正しい。元は明治二七（一八九四）年から同二十九年にかけて造営された明治・大正時期に元老として政界を牛耳つた山縣有朋の別荘。南禅寺門前にある。「会合」は不詳。

「ただ、あの始終休みなく首をふり振り檻の中の一方から他方まで前進して行つては、また後退する運動をくりかへしてゐる白熊は、ひよつとしたら其の例外に属するかとも思へるが、ほんたうのところは、衝動に駆られて運動してゐるだけの話で、なにも退屈をまぎらすために運動してゐるわけでもないであらう」この見解には恒藤に共感出来ない。私は動物園の動物は、本来の生きるための自律的な狩りをすることがなくなり、餌を与えられ、居心地のいい舎屋を当てがって貰つてゐる一方、檻からずっと出られない状況のために、退屈どころではない、一種の拘禁性精神病或いは神経症に罹つて、ああした常同行動をとつてゐるのだと思う。

「現在のやうに市内電車や郊外電車に乗る前に行列の中に加はつて相当の時間たたずんでゐなくてはならぬ時代には、そして、たとへば私などのやうに日ごとにそのやうな機会をもつ者にとつては」既注であるが、再掲すると、本書刊行時、恒藤恭は昭和二一（一九四六）年に大阪商科大学学長及び京都帝国大学法学部教授（兼任。昭和二四（一九四九）年

まで）・同志社大学客員教授（兼任）となっており（昭和二十四年、新制大学として発足した大阪市立大学初代学長となるまで）、三つの大学を掛け持ちしていたためである。

「芥川龍之介全集」以前に注した通り、昭和二（一九二七）年十一月から昭和四年二月までの間で岩波書店から発行された、所謂、第一次（元版）全集と称せられるそれを指す。

「全体では六千ページを超えてゐる」これでは漠然としていて、芥川龍之介が生涯にどれだけの作品をものしたかはちょっとイメージし難いかと思われる。実は私が「これは買って良かった！」と思っている数少ない優れた物の芥川龍之介関連本の一つに、絵本作家松本哉氏の「芥川龍之介の顔」（一九八八年三省堂刊）がある。ビジュアル的に抜きん出て凄い内容なのであるが、その「芥川龍之介の生涯」の中で、岩波版旧全集の談話・発句・詩歌・書簡を除いて、その字数を計算し、原稿用紙に換算した棒グラフというとんでもないもの凄いものが、かの龍之介が尊敬した御大泉鏡花（彼は芥川龍之介の葬儀で最初に弔辞を述べている。なお、現在知られている岩波版「鏡花全集」のそれが実際読まれたものとは異なることを、私は、昨年、知って、実際の弔辞原稿を知られたそれと並べてサイトでPDF縦書版で作成してある）のそれと比較する形で、さりげなく掲げられてるのである（一八六〇―一八七ページ）。それによれば、芥川龍之介は全七千五百枚とあり、泉鏡花は全三万枚となっている。龍之介のそれは大正三（一九一四）年五月『新思潮』の「老年」を最初として、自死までは十三年（恒藤恭の「十五年」は誤記か誤植であろう）。泉鏡花は処女作「冠彌左衛門」明治二六（一八九三）年五月で、昭和一四（一九三九）年七月の「縷紅新草」（リンク先は昨年私がものしたサイト版PDF縦書正規表現版注付き）が生前最後の小説であるから、四十六年で作家生活が二・七倍ほどであるから単純に比較は出来ないが、単純に年割にすると、龍之介が五百七十二枚程、鏡花が六百五十二枚程になる。しかし、そのグラフを見ると、鏡花の若い時のピークは二十九歳の七百枚超え（しかも総て小説）であり、最大ピークは小説以外にも含めたもので八百五十枚にも及ぶ。一方、龍之介の同じ二十九歳のところにピークがあるが、文章全部をひっくるめても三百五十枚に及ばず、最大のピークである自死の年の年初で同前で三百五十枚ほどである（但し、没後発表の小説以外の二百五十枚が目立つ）。芥川龍之介ファンとしては、この二グラフはちょっと残念なものではあるが、龍之介が心から慕った鏡花と比べられるだけでも、あの世の龍之介は喜んでることであろう。因みに、私は泉鏡花のファンでもあり、昨年より正規表現版マニアック注釈付きのものをサイトの「心朽窩旧館」で公開しているので、見られたい。」

二十四 人生と藝術

『あしたに道を聴けば、ゆふべに死すとも可なり』といふ論語の中の言葉は、道のたふとさを説いたものであらうか、道を聴くことのありがたさを説いたものであらうか、それとも、それほどまでに真剣に道をきく心のもちかたを教へたものであらうか。

とにかくきはめて短い文句の中に極度に誇張した思想内容を盛ることによつて、力強く

人のところに訴へようとする表現のしかたではある。

『人生はボードレールの詩の一行に若かず』といふのは、よく引用される有名な芥川龍之介の警句である。それは謂はゆる藝術至上主義の思想を極度に壓縮したかたちで言ひあらはしたものと視られてゐるやうである。『だが、いつたいボードレールの詩集の中から、それ程にもすぐれた価値をそなへた一行をさがし出すことが可能であらうか』と、開き直つて反問することは無用であらう。

ところで、いたづらに雑音に充ち充ちた全人生とくらべて、ボードレールの詩の調子の高さを芥川がひたむきに讃嘆してゐるのだ、と考へるよりは、むしろ、『人生のおそるべき退屈』をしみじみとも語る彼の嘆息を私は此の文句の中に聴き取るのである。

そして、芥川にとつては、藝術の使命は人生のたいくつさを克服することにあつた、とも思ふのである。

——九四七・一〇・一九——

「やぶちゃん注…本篇は特異的に文末に「——九四七・一〇・一九——」のクレジットがあるが、これは本篇（或いはそれより前の幾つかを含めて）の記事を書いた日のそれと推定される。現雑誌は確認出来ないが、松田義男氏の編になる「恒藤恭著作目録」（[同氏のHPのこちらでPDFで入手出来る](#)）初出誌『智慧』での分割発表は、昭和二二（一九五七）五月一日初回で、続いて同月二十五日、八月一日、九月一日、十二月一日の五回分（本篇まで全部と推定される）が同年中に公開されているものと推定出来る。」

「あしたに道を聴けば、ゆふべに死すとも可なり」まず、漢文の教科書に載らないことはない、「論語」の「里仁第四」の有名な一節。「子曰。朝聞道。夕死可矣。」（子曰はく、「朝あしたに道を聞かば、夕ゆふべに死すとも可かなり。」と）。

「それほどまでに眞剣に道をきく心のもちかたを教へたもの」個人的にはこれがその核心であると思ふ。

「人生はボードレールの詩の一行に若かず」正確には、「人生は一行のポオドレエルにも若かない。」である。芥川龍之介の死後、昭和二（一九二七）年十月一日発行の雑誌『改造』に掲載された「[或阿呆の一生](#)」の本文冒頭を飾る一章の中に出現する（リンク先は私のサイト版で未定稿（草稿）付きである。なお、その公開された最終決定稿では冒頭に久米正雄宛の添え書きを持つ）。以下に全文を示す。

*

一時代

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探してゐた。モオパスサン、ポオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨオ、トルストイ、…………

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに

並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴックウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……………

彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を數へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も盡き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ばかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間を動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すばらしかつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……………

*

「とうとう」はママである。この頗る映像的な沈痛に墮ちたそれは、まさに恒藤恭の言うように、「『人生のおそるべき退屈』をしみじみともの語る彼の嘆息」が直に心の響いてくる。また、「芥川にとつては、藝術の使命は人生のたいくつさを克服すること」であつたことも確かである。しかし、芥川龍之介の場合、自身の自信に満ちた自作品さえも、自身身の恐るべき地獄の死に至る病的退屈を乗り越えることは出来なかつたのである。」

二十五 森鷗外の印象

芥川龍之介に対して最も深い影響を及ぼした日本の作家は森鷗外と夏目漱石との二人だといはれてゐる。それはおそらく妥当な判断であらう。漱石と芥川との間柄は師弟の關係であつたと言ひ得べく、漱石門下の人々の中では芥川は漱石によつて最も愛せられた弟子の一人であつた。ことに第四次新思潮の創刊号にあらはれた「鼻」に対して漱石が好意にみちた賞讃のことばを送つたことが、文壇における芥川の発足を華々しいものとし、その後の彼の進出を少からず勢ひづけたことについて、芥川は深い感謝の念を心の底に持ちつづけてゐたやうである。彼の鷗外に対する關係はそのやうな親密なものではなかつたけれど、創作のうへではむしろ漱石より一層大きい影響を鷗外から受けたのだと思ふ。

私が京都から何遍か上京して滞在したあひだに、「一緒に夏目さんのところの会合に行つて見ないか」と芥川からすすめられたことがあつたけれど、つひにその機会を得なかつた。

森鷗外の家には、同郷の大先輩だといふ關係から、二度ほどおとづれたことがある。私は出雲國松江市で生まれ、そこで育つたのであるが、私の祖先たちは石見國津和野町に住み、藩主亀井武藏守に仕へてゐたものであつた。森林太郎（鷗外）の家も同藩の家中であり、私の祖父の住まつてゐた家の近所に住んでゐた。私の祖母の弟でYといふ家を嗣いだ者の娘が鷗外の末弟森潤三郎氏と結婚したが、私が京都帝大の学生であつたころには潤三郎氏は京都に住み、私の現在の住居のすぐ近所の大きい溝川にのぞんだ家を借りてゐたの

で、よく訪問したものであつた。

明治四十三年の春のはじめに私は松江を去つて上京し、しばらくのあひだ漫然として暮らしてゐたが、そのころやはり津和野出身の先輩K氏が本郷千駄木町の鷗外の家に連れて行つて呉れた。あまり廣くない中庭に臨んだ六疊敷ばかりの書齋に通された。庭はなんらの庭らしい木石の配置もなく、ただ雑草の茂るにまかせた庭であつた。それは鷗外の好みでわざとそのやうにしてあるのだといふことを、あとでK氏から聞かされた。部屋の中も庭に面した一隅の障子に沿うて小形の文机が置いてあるのと、その文机のそばに雑然と取り散らして和書、漢書、洋書が高低さまざまに積みかさねてある外には、これといふ装飾もなかつた。有名な文豪の邸宅のことなので、私は何ほどか好奇心をいだきながら訪問したのであつたが、簡素そのものと言ふべきやうな部屋の中の様子を見て、意外な氣もちを感じたと同時に、氣らくさをも感じた。

しばらくK氏と待つてゐると、やがて襖をひらいて「やあ、お待たせして失礼でした」と言ひながら森さんはいつて来て、机を斜めうしろにして端座した。K氏が私を紹介すると、血色の好い引きしまつた顔に微笑をうかべて、うなづきながら、郷里の後輩を激励して呉れるやうな言葉を、言葉少なに述べた。それから後はK氏がいろいろと森さんと話し、私はただそれを傍できいてゐた。

森さんは相手の人の顔を直視することをしないで、始終視線をいくらか別の方向にそらし、絶えず心もち微笑を頬のあたりにたたへながら、おだやかな口調でK氏に應答した。中肉中背といふよりは心もち小柄であるが、全体としてよく均衡の取れたからだつきで、打ち見たところ、いかついやうな様子は少しもないけれど。一分の隙も無い風貌だなど思つたことを今でも記憶してゐる。軍医總監らしい風格も幾らかただよつてゐたが、それは目に立つほどのものでなかつた。

とにかく森鷗外はこれまで私の会つた人々の中で最も深い印象を私のこころに残した人たちの一人であつた。

「やぶちゃん注…「森鷗外」（文久二（一八六二）年〜大正一一（一九二二）年七月九日…
菱縮腎と肺結核で満六十歳で逝去）は石見国鹿足郡津和野町田村（現在の島根県津和野町
（つわのちよう）町田。グーグル・マップ・データ）で、代々、津和野藩典医を務める森家の嫡男として生まれている。

「藩主亀井武藏守」これは後の津和野藩主の亀井家の元祖（彼自身は津和野藩主ではなく、因幡鹿野藩初代藩主である。彼の嫡子政矩の代に石見国津和野藩に増転封されている）に当たる亀井武藏守茲矩（これのり 弘治三（一五五七）年〜慶長一七（一六一二）年）にまで遡つた謂いとなっている。二代目以降の最後の藩主まで総て調べたが、武藏守であつたのはこの茲矩だけだからである。

「森潤三郎」（明治一二（一八七九）年〜昭和一九（一九四四）年）は東京生まれ。京都帝大卒。明治四二（一九〇九）年から大正六（一九一七）年まで京都府立図書館に勤務し

た後、「鷗外全集」編纂に従事した。近世学芸史の研究者でもあり、津和野の「鷗外記念館」には兄鷗外からのレファレンスに答えた手紙が残されている。著書に「紅葉山文庫と御書物奉行」「多紀氏の事跡」「鷗外森林太郎」などがある（日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠った）。

二十六 旅びとの夜の歌

「やぶちゃん注：以下の本篇は底本の中でも、最も長い文章の一つである。太字はママ。後半に出る、文中の特殊なクォーテーション・マーク（コンマが倒立したものがダブルで繋がったものが、頭で下方位置にあり、最後に上方位置に””で閉じるもの）には悩まされた。同じ形・大きさの閉じる部分と全く同じものを見出すことが出来なかったからである（[ここ](#)の五ヶ所）。ここでは””誤魔化してある。お許しあれかし。

本篇は特異的に文末に「――九四七・一二・三〇――」のクレジットがあるが、これは本篇（或いはその前の「二十五 森鷗外の印象」を含めて）の記事を書いた日のそれと推定される。現雑誌は確認出来ないが、松田義男氏の編になる「恒藤恭著作目録」（[同氏のHPのこちら](#)でPDFで入手出来る）を見ると、[初出誌「智慧」での分割発表から、昭和二三（一九五八）一月一日分ではないかと推定される。](#)」

吉川幸次郎、大山定一の両氏は、さきに雑誌「学海」に連載された往復書簡体の諸篇を一つにまとめ、「洛中書問」と題する書物に出版された。冒頭には有名なゲーテの「旅びとの夜の歌」の原文と大山氏の訳文とがかかかってあり、両氏の往復書簡はこのゲーテの詩の邦訳についての吉川氏の感想の開陳からはじまつて、外国文学の翻訳の意義とか方法とかに関する両氏の興味ふかい意見の交換をもつて一貫した内容としてゐる。

「鷗外や二葉亭の翻訳の立派さは、何を翻訳しなければならぬか、如何に翻訳しなければならぬか、を決定した彼等の文学者の眼光から来るものだといふことが出来ませう。翻訳は西洋文学の学問的研究とは何のつながりもなく、もつぱら日本文学としての自覚と実力が翻訳の可否を決定すると申さねばなりません。（中略）立派な翻訳はあくまで強烈な文学創造の精神から生まれねばならぬと僕の申す所以であります。即ち鷗外や二葉亭の翻訳の到底及びびがたい偉さは、彼等が翻訳といふ仕事によつて明治のあたらしい小説の文体を決定した点ではないでせうか。（中略）口はばつたい申し分にきこえるかも知れませぬが、『旅びとの夜の歌』の拙訳も、出来ればせめて現代日本詩のあり方に対する一つの批評としてみていただければ満足です。」大出氏はかう述べて居られる。（洛中書問、一八一―二二頁）

かやうに説明されてゐる動機と抱負からして爲されたゲーテの翻訳を原文と共に次にかかげることとする。

Wanders Nachtlied

Über allen Gipfeln

Ist Ruh,

In allen Wipfeln

Spürest du

Kaum einen Hauch;

Die Vögelein schweigen im Walde.

Warte nur, balde

Ruhest du auch.

旅びとの夜の歌

山々は

はるかに暮れて

梢吹く

ひとすぢの

そよぎも見えず

夕鳥のこゑ木立にきえぬ

あはれ はや

わが身も憩はむ

外国文学の翻訳の努力は何を目標とすべきかについて吉川氏は別の見解を左の如く述べて居られる。

翻訳によつて創作をなすといふことは、創作の業が何か必ず素材を必要とする以上、大いに可能なことであり、さうした態度の下にされる翻訳は、たとひ素材本来の形に変貌を加へてみても、許容されるべきでありませう。しかしながら、それは学人の翻訳ではありませぬ。文人の翻訳であります。鷗外、二葉亭、いづれも明治の偉人でありませう。しかし儒林傳中の人物には非ずして、文苑傳中の人物であります。学人の翻訳は、それとは道を異にすべきであります。それは眞実の隠蔽を惡む精神が、すみずみ迄もみなぎり渡つたものでなければなりません。原文の包含する限りのものを、縦にも横にも探索し盡した上、それを前の手紙でも申したやうに、『原語がもつだけの觀念を、より多からずより少からず傳へ』得べき國語に定着させたものでなければなりません。いや、觀念といつたのは狹隘でありました。廣く原語が帯びるだけのものを、つまりもとの言語がその言語の世界の

中で象徴せんとするだけのものを、同じ比率で圖語の世界で象徴し得る國語、それを探索することではなければなりません。完全にさうした役目を果し得る國語は、あり得まいといふことも出来るでありませう。しかしそれをほぼ完全に果す國語は、いかなる場合でも、必ずあると、僕は僕の経験から、ほぼ確実にいふことが出来ます。或ひはないやうに見えるのは、思はざるの故であります。憤を発して食を忘れ、食うて味を知らず、寝ねて眠らず、之を思ひ之を思へば、必ず何か思ひ当ります。(洛中書問、五九一六〇頁)

別の書簡の中で、吉川氏は、

また尊文のなかには、『嚴密な逐語訳といふのは、かさかさに乾からびてしまつて』云々といふ論旨が見えますが、かりにこの詩を

なべての山々に

あるは憩ひ

なべての梢に

まさぐるや君

一つのいぶぎだにも

鳥たちは林にもだしぬ

まちねかし しばし

憩はなむなれもまた

位の訳に止めては、なぜいけないのでせうか。翻訳といふものは、要するに方便であり、童蒙に示す爲のものであると、小生は考へます。外國文学研究の正道は、あくまでも原語についてなされるものでなければなりません。

と述べて居られる。

外國語で書かれた文章を自國語に訳すること、ことに西洋の國語で書かれた文章を日本語に訳することが、いかに困難な仕事であるかといふことを、私自身もたびたびの経験によつて痛感してゐる、もちろん、文学的作品の場合と學問的作品の場合とは、翻訳のむつかしさの程度に著しい相違があり、また文学的作品の中でも詩の翻訳はとりわけ至難の業だといふべきであらう。

ところで、翻訳の目的については、多くの場合において当人以外の他人、ことに一般の人々に讀んでもらふために爲されるであらうけれど、必ずしもいつもさうだとは限らないであらう。言ひかへると、当人が自分自身の單なる興味のために、又は原文をより充分に理解するために、又は語学的研究に役立つために、又は單に自己の外國語理解力の増進のために、翻訳をこころみることもあり得るわけである。そして、他人に示すために外國文学の翻訳がなされる場合について考へると、翻訳を通じて外國文学に接触しようとする人々の大部分は、外國文学研究のためにはなく、外國の文学的作品をよんで楽しむことを目的とするものだと言ふことができるであらう。吉川氏は、「外國文学研究の正道は、あくまでも原語についてなされるものでなければなりません。」と言つて居られるが、こ

これはあまりにも当然なことからである。いやしくも外国文学を志す人は、ただ翻訳を媒介として研究しようといふやうな不心得な態度をとつてはならぬはずであるが、しかしすぐれたる翻訳が、外国文学研究者のために役立つところも相当に大きいであらう。ただし外国文学研究は必ず原語についてなされなければならないといふのは、専門的立場から外国文学を研究する人々に対して課せられる要請であつて、他の立場から外国文学を研究しようとする人々の場合には、必ずしも原語に依ることを要せず、翻訳でも間に合ふ場合が多いであらう。たとへば、自分の文学的創作のうへに資するため、外国文学の作品に接触したいと思ふ人々は、翻訳でたくさんだといふであらうし、その言ひ分が妥当でないとは言へぬであらう。たとへば、鷗外や二葉亭の翻訳した外国文学の作品からして、どれだけ多くの日本の作家たちが彼らの創作のうへに（概して有益な）影響をうけたか、ほとんど測り難いと思ふ。（尤も鷗外なり二葉亭なりの訳文そのものからの影響と併せて、二重の影響をうけたに違ひないが。）

さて、私は両学人の熱意のこもつた意見の交換に「やぶちゃん注…ママ。」を「の誤記か誤植か。」聴くことによつて多くの啓発を被つたことを感謝するものであつて横合ひから両学人の論議に喙をさしはさむ心算ではない。ゲーテの旅びとの夜の歌は青年のころから愛誦してゐた詩であるだけに、大山氏による此の詩の翻訳をめぐつて行はれた両氏の書問のやり取りにことさら興味を感じたものであつた。それでたしか今年の初夏のころであつたかと思ふが、洛中書問をはじめて讀んだときに、自分なりにゲーテの詩を訳して見たので、甚だをこがましいけれど、次にそれをかきうつす。

山々のうへに

憩ひあり

木々の梢に

そよぐかぜの

けはひもなく

森の茂みに小鳥はもだしつ

待てしばし今はわれも

憩はむものを

ついでに言ひ添へて置きたい。原詩の第一行から第二行の *„Über allen Gipfeln Ist Ruh,“* と、第七行から第八行の *„Warte nur, balde Ruhest du auch.“* とは、前後たがひに対照的地位に立ち、且つたがひに連関するものであり、はじめの *„Ruh“* から終りの *„Ruhest“* へつながつてゐる一筋の銀線のやうなものが、此の詩の主軸をかたちづくつてゐると思ふ。だから、翻訳においても、その点が言ひあらはされてゐることが必要ではなからうか。それで、『山々ははるかに暮れて』といふ大山氏の翻訳は、それだけに即いて「やぶちゃん注…「ついで」。」を見ると、原詩の言ひあらはさうとしてゐる情景を巧み

にとらへた好い翻訳であると思ふけれど、原詩の眼目としてあるところを逸してある憾みがあると思ふ。しかのみならず、私自身の氣もちから云ふと、*„Über allen Gipfeln Ist Ruh.“* といふ最初の二行が、私自身の最も好きな文句であり、そして此の二行のもつ深い意味内容は、『山々のうへにおしなべて憩ひがある。』ところにあるのだと信ずる。それから、これは大して意味のあることではないかも知れぬけれど、拙訳においては脚韻をととのへることをこころみた。

なお、八束清氏から、「学藝」の昭和十九年二月号に外山完二氏の翻訳が掲載してあることを教へられ、それをうつし取つたので、継ぎにそれをもかかげることとする。「やぶちやん注・雑誌『学藝』の号数は「二一」の印刷で十一月号のことかも知れない。しかし直下の外山完二（とのむらかんじ）明治三一（一八九八）年〜昭和五一（一九七六）年…ドイツ文学を中心とした翻訳や著書がある）氏の名の「二」が「一一」と組まれてあるので、「二」でとつた。」

すべての峯のうへの
静けさ
樹々の相には
そよとの
木づれもなく
森の鳥も聲をひそめたり
ましてしばし
なれもまた休まん

追記

二十日ばかり前に、以上の部分の原稿を書いて秋田屋に届けたのであるが、大山定一氏の新著「文学ノート」を昨日よんで、その中の「ゲーテの自然感情について」と題する篇の中に、「旅びとの夜の歌」を阿部次郎氏が翻訳されたものが掲載されてあることを知つた。それで、ついでに其れを次にかかげる。

山なみの空
しづもりぬ
樹々のうれ
そよ風の
呼吸もなし
小鳥みな森に黙しつ
待ちねただ――今ぞ
しづもらむ汝も

「やぶちゃん注」本篇では芥川龍之介について言及はない。しかし、恒藤恭は一高時代から外国文学に強い興味を持ち、京都帝大在学中に芥川の勧めを受けて第三次『新思潮』第一巻第五号（大正三（一九一四）年六月一日発行）にアイルランドの劇作家にして詩人であったジョン・シリントン・シング（John Milington Synge 一八七一年～一九〇九年）はサイトのこちらで姉崎正見訳「アラン島」や、芥川龍之介が最後に愛した松村みね子（片山廣子）訳になる戯曲「聖者の泉（三幕）」の全電子化（前者はオリジナル注付き）を終えている）の「海への騎者」(Riders to the Sea 一九〇四年作)を翻訳寄稿したりしているので、この文章に芥川龍之介の名は出ずとも、その頃の強い文学志向が自ずと心に浮んで、亡き芥川龍之介も、このこだわりの一篇を高く評価するに相違ないと思われ、そういう意味で、本篇が本書「旧友芥川龍之介」の中にあっても、これ、何らの違和感を感じないのである。

「洛中書問」この往復書簡体のそれは、[qfwfq氏のブログ「qfwfqの水に流して Una pietra sopra」の『洛中書問』——翻訳詩の問題\(2\)」](#)に詳しいので参照されたい。そちらによれば、『書問』とは吉川によれば「何くれとない手紙を意味するところの、やや気どった漢語」である』とあった。書簡の誤りではないので注意されたい。初版は本書と同じ秋田屋で昭二一（一九四六）年刊である。

「吉川幸次郎」（明治三七（一九〇四）年～昭和五五（一九八〇）年）は知られた中国文学者。兵庫県神戸市生まれ。本篇初出の年に「東方文化学院京都研究所」（後の「東方文化研究所」、現在の「京都大学人文科学研究所」）所員から京都大学教授となった。私は漢文学で大学以来、多くの著作の御世話になっている。

「大山定一」（ていいち 明治三十七年～昭和四九（一九七四）年）はドイツ文学者。京都大学名誉教授。香川県出身。当時は京都大学文学部助教授。

「Wanders Nachtlied」は当該ウイキによれば、ドイツの文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 一七四九年～一八三二年) は、ドイツの詩人の『数ある詩の中でも最も有名なもので、世界中のゲーテ愛好家、ドイツ語話者、ドイツ語学習者に愛唱されている』とあり、そこでは、「さすらい人の夜の歌」と訳されている。『さすらい人の夜の歌』には』二『首あり、ひとつ目は恋人への熱情を直接歌い、二つ目は自然を歌いつつも最後に恋人への思いの中で憩う詩である』とあり、ここで挙げられている。一七八〇年九月六日の『夕方に、イルメナウにある狩猟小屋で書いたもの、と』、ゲーテと親しかったドイツ・ヴァイマル公国のフォン・シュタイン男爵の妻『シャルロット・フォン・シュタイン』（シャルロット・アルベルティーネ・エルネステイーネ・フォン・シュタイン（シャルト） (Charlotte Albertine Ernestine von Stein (Schardt) 一七四二年～一八二七年)』への手紙で書いていて、彼はそこで一夜を過ごしたという』とあり、原詩と訳文が載る。私はドイツ語は判らないので、特に言い添えることは出来ない。

「八束清」不詳。

「阿部次郎」（明治一六（一八八三）年～昭和三四（一九五九）年）は哲学者・美学者で作家。山形県飽海郡上郷村（後の松山町で現在の酒田市）生まれ。当時は東北大学法文学部長を敗戦の年に定年退官している。」

二十七 台湾航路が

「やぶちゃん注：本篇の方の末尾には例の特異点の執筆クレジット「一九四八・二・七」とあり、この日付挿入を考えると、この日付では、「二十七 台湾航路」は『智慧』の昭和二三（一九四八）年六月二十五日発行の八回目（全九回なので、まだ、十三章もあることから、かなり不審な気もするのだが）の初出ということになり、続く「二十八 ゼーランヂヤの丘」は最終回七月二十五日発行のそれに、分割して載せられたものかとも思われる。」

昭和十一年のことである。台北帝国大学の文政学部から法理学の講義をして呉れるやうにといふ依頼を受けたので、十二月二日に神戸から乗船し、五日に台北に到着、二十五日まで滞在した後、その日の夕かたキールンから帰航の途に就いて、二十九日に京都にかへつて来た。

当時私は大阪商科大学の専任講師だったので、台北大学へ承諾の返事をする前に学長の河田さんの了解を得て置くために学長室をおとづれた。丁度、何か用談のために本庄栄治郎氏が来て居られたが、河田さんと本庄さんが差し向ひで話して居られるテーブルの一角に置かれた椅子にこしかけて、二人の会話が一段落つくのを待ったうへ、私は河田さんに要件について話した。すると、河田さんは自分も二回台湾に行つたことがあるといふことを前置きにして、いろいろその時の経験を話されたが、二度ながら其の旅行は先生に比べてあまり愉快なものではなかつたらしく、記憶に残つてゐる不愉快な印象ばかりを話された。まへの時も後の時も海上の風波が荒かつたことや、季節が酷熱の甚しい折りからであつたことなどが、そのやうな先生の台湾旅行についての感じをかなり力強く制約したのであつたらしいことが察せられた。

「やぶちゃん注：昭和一一（一九三六）年当時の恒藤恭は、既に注した昭和八年に発生した「滝川事件」において、京都帝大法学部教授を辞任、直後には菊池寛から文藝春秋社に誘われたが、大阪商科大学（後の大阪市立大学）学長河田嗣郎かわたしろうの招聘に応じ、同年九月に大阪商大専任講師となつていた。なお、立命館大学非常勤講師も兼任し、当時、立命館大学学長（事務取扱）だった織田萬おだよろずの後任学長候補として新聞に取り沙汰されたこともあつた（当該ウィキに拠る）。

「台北帝国大学」臺北帝國大學は日本統治時代（日清戦争）の結果、「下関条約」によって台湾が清から日本に割譲された明治二八（一八九五）年から、「第二次世界大戦」が終結して日本の降伏後、中華民国政府の出先機関台湾省行政長官公署によって台湾の管轄権行使が開始された昭和二〇（一九四五）年十月二十五日まで）の昭和三（一九二八）年三月に七校目の帝国大学として設立された。内地の帝国大学が文部省の管轄であつたのに対し、台北帝国大学は台湾総督府の管轄であつた。当初は文政学部と理農学部の

二学部が設置され、昭和三年四月に開講していた。文政学部は哲学科・史学科・文学科・政学科の四学科で、国語学と国文学・東洋史学・哲学と哲学史・心理学・土俗学と人種学・憲法・行政法の各講座で構成されていた(当該ウィキに拠る)。

「河田さん」河田嗣郎(明治一六(一八八三)年〜昭和一七(一九四二)年)は経済学者。京都帝国大学経済学部教授を経て、大阪商科大学初代学長。となった山口県玖珂郡くがの生まれ。

「本庄栄治郎」(明治二一(一八八八)年〜昭和四八(一九七三)年)は経済学者。後に大阪商科大学第二代学長となった。京の西陣生まれ。」

いささか出鼻をくじかれた気味ではあつたけれど、私は未知の台湾に対して相当に強い好奇心と深い興味をもつていたので、いづれかと云へば思ひどまつた方がよからうといふ意味の河田さんの言葉によつて心を動かされることなく、持ち出した用件についての了解を得た。

私はあまり船に強い方ではないので、何よりも往復の海上の様子がかりであつたが、幸ひに、行きも帰りも、海上平穏といふほどではなかつたものの、さまで荒天といふのもなかつた。そして、十二月の台湾は一年を通じて最も快適な季節らしく、台北に着いてから、「門司で上陸して、雪交りの寒風に吹かれながら町の中を散歩したときのことを思ふと、うそのやうな気がしますよ。こちらは実に好い氣候ですね」と讚嘆したところ、当時台北大学教授であり、痒いところに手のとどくやうに世話をして呉れた堀豊彦氏が、「いやあ、台湾はいつもこんなだと思はれては困りますよ」と笑つて、事こまかに台湾の四季の氣候、ことに恐ろしく永いあひだ続く暑熱について説明してくれたものであつた。

「やぶちゃん注:「堀豊彦」(明治三二(一八九九)年〜昭和六一(一九八六)年)は政治学者。後に東京大学名誉教授。山口県赤間生まれ。」

とにかく一ばん快適の季節に滞在したことが主因を成したことと思ふが、台湾で過ごした三週間はほんたうに楽しい三週間であつた。そして、今から回顧すると、まるで二ヶ月か、三ヶ月くらいも滞在したのであつたかのやうに、台湾の人事風光に親しんだその滞在のあひだのことが思ひ出されるのである。

そのころ、私の義妹の一家が台北に住んでみて、キールンに船が着いたときには、その夫婦が台北大学の三、四人の教授諸氏と共に埠頭まで出迎へに来てくれてゐた。義妹には二人の男の兒があり、長男の純隆といふのは当時中学校の三年生か四年生かであつたと思ふが、台北に滞在してゐたあひだ私の泊つてゐた教育会館の宿舍にちよいちよい用事でたづねて呉れた。それから二、三年の後に、この甥は京都に来て同志社大学の豫科に入学し、さらに法学部に進んで、昭和十八年九月に卒業した後、十一月一日には千葉縣佐倉の近衛歩兵隊に入隊した。

ただし卒業後、甥は台北の両親の家に帰り、その土地の航空関係の製造業の会社に就職したのだが、間もなく入隊の命令をうけたので台北を出発した。ところが、かなり九州に近づいたところで乗船富士丸は米艦によつて撃沈され、彼は他の数人の乗客と共に板ぎれにつかまりながら六時間ばかり海上に漂流してゐた。そのあひだに籠のやうなかたちをし

たものが浪間に浮いてゐるのに氣がついたので、それに泳ぎついて見ると、それはバナナを入れた籠であつた。富士丸の甲板に積み込んであつたのが、船体が沈没した爲漂流しはじめたものらしい。たがひに励まし合ひながら水面に浮んでゐた其の人たちは、丁度空腹の時ではあつたし、籠の中からバナナをつかみ出し、水につかつたままですれをたべた。そのおかげで長時間辛抱して海上に浮かんでゐるうちに、救援に赴いた日本の駆逐艦のボートによつて救ひ上げられて、門司まで運ばれ、そこから汽車に乗つて東上するみちすがら、京都で下車して私の宅に立ち寄つた。船が沈没したときに、帽子や眼鏡や靴などをうしなつたので、帽子もかぶらず、スリッパをはいたままの姿であつた。そして慌しくその日の夕方の汽車で東上した。

身のたけは低い、ずんぐりと肥えてゐて、色白のまる顔にめがねをかけ、まるで少女に対するやうな感じのする甥であつたが、その時も靜かな、やさしい口調で、ぼつりぼつりと言葉少な、海上で遭遇した其のやうな危難の経験について話すのであつた。

私たち夫婦は京都訳のプラットホームで、列軍の昇降台に立つてゐる彼のすがたを見送つたのであるが、それが温順な彼のすがたの見納めであつた。といふのは、十一月の末に彼は華北派遣軍所属として出征し、石門にあつた豫備士官学校を卒業した後、陸軍少尉となり、河北省方面における部隊に属してゐたらしいが、終戦後はシベリアに送られ、チェレモホーボといふところにある收容所で生活してゐるうちに発疹チフスに罷り、昭和二十一年二月七日に永眠したからである。

「やぶちゃん注：「チェレモホーボ」不詳。」

一 昨年の春、義妹夫婦は台北を引揚げて京都にたどりつき、法然院の近くに住むこととなつた。永いあひだ彼らの長男の生死は不明であつたが、昨年の夏の終りごろ、嘗ての戦友の一人が東京に帰還し、その人によつて悲しい知らせがつかへられた。そして今年一月末に遺骨が両親の寓居に到着した。

シベリアで病死してから丁度二ケ年を経過した昨二月七日を期して、両親の寓居で簡素な告別式がいとなまれた。さまざまの供物のかざられた祭壇の中央に、季節の花にかまされながら立つてゐる額の中から引き伸しの寫眞の顔がじつと此方を見つめてゐるやうに思はれた。戦闘帽をかぶり、軍服の双肩から十文字に革紐をかけてゐる姿は、さすがに年少の士官らしい感じがしたが、よく見ると、めがねを通してこちらを見てゐるのは、やはり持ち前の柔和なまなざしをしてゐる二つの瞳であつた。

——九四八・二・七——

二十八 ゼーランヂヤの丘

台北に到着した翌日か翌々日かに放送局から台湾の印象について放送して呉れないかといふ交渉があつたけれど、その氣になれないからとことわつた。丁度、その年の夏のはじめ頃だつたかと思ふが、大阪放送局のT氏が京都の宅に来訪された。その用向きは、BK

「やぶちゃん注：「NHK 大阪放送局」のコール・サイン「JOBK」の略号。」で聴取者から希望番組を

募集した結果、「舊友を憶ふ」といふ題目で、芥川龍之介について放送して呉れるやうにといふのであつた。それまで私は一度も放送をしたことがなかつたし、現在とは違つてラヂオに對してあまり興味をもつてゐなかつた。ことに、芥川のことなどについて對世間的に話しをするといふやうなことには全く氣が進まなかつたので、T氏には甚だ氣の毒であつたけれど、辞を厚くしてことわつたのであつた。

ところで、台北についてから十日ばかり経過したころ、台北大学文学会の神田さんからその会の集まりで芥川龍之介について話して呉れないかといふ依頼をうけた。「これと云つて皆さんに聞いて頂けるやうな話が出来さうにもありません」と堅く辞退したけれど、懇請をことわり切れなくて、つひに引き受けた。約束の日に台北ホテルに行くと、二階の廣々としたサロンの一隅に、大きい長方形のテーブルをかこんで十四、五人の會員が集まつてゐた。一時間近く取り止めもないことを話したかと思ふが、そのあとで會員諸氏の質問にこたへた。

「やぶちゃん注…「台北大学文学会の神田さん」恐らくは東洋学者・書誌学者の神田喜一郎（明治三〇（一八九七）年～昭和五九（一九八四）年）であろう。当該ウィキによれば、京都市上京区生まれで、大正一〇（一九二一）年三月に京都帝国大学文学部史学科支那史学専攻を卒業、大谷大学教授・宮内省圖書寮（圖書）嘱託を経て、昭和四（一九二九）年に台北帝国大学助教授となつているからである。」

台湾まで来て、其のやうな会合の席上で、芥川のことについて話しをするなどといふことは思ひもよらないことであつた。それから四、五日の後、台北大学の文政学部の助手山下氏と飛行機に乗つて台湾の南端にある高雄まで行き、そのあたりの見物をすませて、汽車で台南に着いた。一旦旅館で休息してから、よる散歩に出ると、本島人の若い男女が白地のゆかた姿で町中をあるいでゐるのが眼についた。あくる日、パスに乗つて安平に到着、昔時のオランダ人の居城ゼーランヂヤを見物した。

うす雲の空にひろがつてゐる蒸し暑い日和であつたが、もの寂びたゼーランヂヤの城内には私たち二人の外には人影も無かつた。幅のひろい階段風に造られた、ゆつたりした道を登りながら、私はふと新宿の家の二階で、芥川から、かれの少年のころに國姓爺合戦の芝居を見た時の感想をきいた折りのことを思ひ出した。だが、あの芝居の朱色、碧色けんらんたる舞台のあでやかさとは全くちがつて、眼の前にひろがつてゐるのは、古びたオランダの風景画を連想させるやうな、南國の樹木の鈍い緑りいろをとどころに交へた、灰色がかつたゼーランヂヤの小丘のたたずまひであつた。

「やぶちゃん注…「安平」「昔時のオランダ人の居城ゼーランヂヤ」私の「[女誠扇綺譚](#) [佐藤春夫](#) [始動](#) / [一](#) [赤嵌城（シヤカムシヤ）址](#)」の注を参照されたい。

「國姓爺合戦」（こくせんやかつせん）「の芝居」は近松門左衛門作の人形浄瑠璃（私の好きな文楽作品）。後に歌舞伎化された。全五段。正徳五（一七一五）年に大坂の竹本座で初演された。芥川龍之介が見たのは歌舞伎の方である。」

大正七年の春のことであつたかと思ふが、芥川が入浴して、しばらく祇園の下河原のあたりの宿屋に滞在してゐたことがあつた。ほど好く樹木の茂つた閑静な庭に面した四疊半くらの部屋で食事を共にしたことなどを記憶してゐる。

その折り「社会思想について知りたいから、手ごろの書物を貸して欲しい」といふ芥川の依頼に應じて、幾冊か持参した。彼はかなり熱心にそれを読んだらしい。どの本とどの本とを貸したか、はつきりとおぼえてゐないけれど。有名なエルツバッハの著書『Der Anarchismus, 1900』の英訳本がその一つであつただけは記憶してゐる。「この本はなかなか便利な本だけれど、大分 tedious だね」と芥川が云つたことをおぼえてゐるからだ。當時は前の世界大戦の影響をうけて、わが國の言論界や思想界にさまざまの社会思想が澎湃とみなぎりはじめた頃であつたので、芥川もそれに興味をいだき、一と通り組織立つた知識をそれについて持ちたいと考へたものらしかつた。いろいろと彼から質問を持ち出されたものであつたが、当時私自身もその方面の研究をはじめて間も無いことであつたので、それに應答するには骨が折れたものの、とにかく熱心に論じ合つたことを記憶してゐる。「芥川龍之介全集」第六卷の見返しには、芥川ゑがくところの薄墨いろの蜻蛉二つが茶色の地のうへに飛んでゐるが、その次に

あてかいな、あて宇治のうまれどす。

茶畑に入日しづもる在所かな

恒藤恭とエンゲルスの話をする。

僕曰、エンゲルスは金があつたのだろ。

恭曰、西洋人は中々蕨ばかりは食はんさ。

僕曰、僕も蕨ばかり食ふのは御免だ。即戯れに

山住みの蕨も食はぬ春日かな

といふやうな文句が刷り出してある。これは其の時のことであつたか、もつと後年のことであつたか、記憶に残つてゐない。これは恒藤恭の誤認ではなからうか。

「やぶちゃん注…「大正七」（一九一八）「年の春」これは其の時のことであつたか、もつと後年のことであつたか、記憶に残つてゐない」これは恒藤恭の誤認ではなからうか。この年は二月二日に文と結婚しており、十三日には大阪毎日新聞社社友の件が決まり、月末には名作「地獄變」を起筆、三月には鎌倉大町辻の旧小山別邸内（グーグル・マップ・データ）に転居しており、海軍機関学校の仕事も重なつており、凡そ京都でゆっくり滞在というのは無理がある。これは「春」というにはやや後になるが、翌大正八年五月の長崎行の帰りのこ

とではあるまいか？ 宮坂年譜に五月十五日と十六日に京都滞在（祇園で遊んでいるから、前の句の前書との親和性もある）の記録がある。

「エルツバッハの著書『Der Anarchismus, 1900』」「ドイツの弁護士でユダヤ系ドイツ人の法学教授にして、ボルシェビズムの支持者であったルドルフ・ミュラー・エルツバッハ（Paul Elzbacher 一八六八年～一九二八年）の著になる一九〇〇年刊の「アナキズム」。

「芥川えがくところの薄墨いろの蜻蛉二つが茶色の地のうへに飛んである」この恒藤の解説通りの絵は所持する複数の芥川龍之介の画集や図集を見たが、見当たらない。知られた蜻蛉の絵はあるが、二匹ではなく、一匹で、地面も描かれていない。国立国会図書館デジタルコレクションの昭和一〇（一九三五）年刊の普及版第六巻の画像を視認したが、そこにはない。

「茶畑に入日しづもる在所かな」この句は前書ともに芥川龍之介が精選した「澄江堂句集」に含まれる。私の「やぶちゃん版芥川龍之介句集 一 発句」を参照されたい。この二句と前書全部を含むのは、芥川龍之介の未発表の「蕩々帖」（同名の二冊目）に出る。私の「やぶちゃん版芥川龍之介句集 二 発句拾遺」を参照されたいが、そちらでは、古い電子化注であるため、漢字の正字化が一部不全で、前書にも手を入れて恒藤の示すように改行してしまっているから、ここで、改めて正確な表記のそれを示す。

*

あてかいな あて宇治のうまれどす

茶畑に入日しづもる在所かな

恒藤恭とエンゲルスの話をする 僕曰エン

ゲルスは金があつたのだろ 恭曰西洋人は

中々蕨ばかりは食はんさ 僕曰僕も蕨ばかり

り食ふのは御免だ 即戯れに

山住みの蕨も食はぬ春日かな

*

二句目の前書と句は、言うまでもなく、「史記」の「伯夷叔齊」のパロディである。この前の句については、『ホトトギス』大正一二（一九二三）年六月発行のそれに「その後製造した句」として公開している。」

「やぶちゃん注」本篇は特異的に文末に「——一九四八・二・九——」のクレジットがあるが、これは本篇（或いはそれより前の幾つかを含めて）の記事を書いた日のそれと推定される。現雑誌は確認出来ないが、信頼出来る恒藤恭の著作目録を見ると、初出誌「**智慧**」での分割発表から見ても、昭和二三（一九四八）の六月二十五日発行分が前の「二十八 ゼーランヂヤの丘」からここまでが掲載相当であろうと推定される。

なお、本篇で一部取り上げて引用している「**京都日記**」は**本電子化に先立って、ブログで正規表現オリジナル注釈版を作成しておいた**ので、まず、そちらを全文通読されたい。そちらで注したものは、ここでは繰り返さない。言っておくと、恒藤恭は少し表記をいじっている。」

やはり全集第六巻に収められてゐる「京都日記」の中に、
『雨あがりの晩に車に乗つて、京都の町を通つたら、暫くして車夫が、どこへつけますとか、どこへつけやりますとか、何とか云つた。どこへつけるつて、宿へつけるのにきまつてゐるから、宿だよ、宿だよと桐油の後「やぶちゃん注」：「とうゆのうしろ。」から二度ばかり声をかけた。車夫はその御宿がわかりませんと云つて往來のまん中に立ち止つた儘、動かない。さう云はれて見ると、自分も急に当惑した。宿の名前は知つてゐるが、宿の町名は覚えてゐない。しかもその名前なるものが、甚平凡を極めてゐるのだから、それだけでは、いくら賢明な車夫にしても到底満足に帰られなからう。困つたなあと思つてゐると、車夫が桐油を外して、この辺ぢやおへんかと云ふ。提灯の明りで見ると、車の前には竹藪があつた。それが暗の中に万竿の青をつらねて重なり合つた葉が寒さうに濡れて光つてゐる。自分は大へんな所へ來たと思つたから、こんな田舎ぢやないよ、横町を二つばかり曲ると、四條の大橋へ出る所なんだと説明した。すると車夫が呆れた顔をして、ここも四條の近所ですがなど云つた。そこでへええ、さうかね、ぢやもう少し賑かな方へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらうと、まあ一時を糊塗して置いた。所がその儘、車が動き出して、とつっきの横丁を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場の前へ出てしまつたから奇体である。それも丁度都踊りの時分だつたから、両側には祇園團子の赤い提灯が、行儀よく火を入れて並んでゐる。自分は始めて、さつきの竹藪が、建仁寺だつたのに氣がついた。』と書いてある。

確かなことは分らないけれど、これもおそらく同じ入洛の折りのことだらうと思ふ。右に書きうつした文章の末尾は、『裸根の春雨竹の青さかな。——大阪へ行つて、龍村さんに何か書けと云はれた時、自分は京都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程竹の多い京都は京都らしく出来上つてゐるのである。』といふ文句で結んである。当時芥川は最大級の賞讃のことばをもつて龍村さんのすぐれた作品について語り「君は京都にゐるんだから、いつか是非龍村さんを訪ねて見たまへ」とすすめてくれたものである。爾來約三十年を経たが、現代染織界の最高の権威者龍村平藏氏のことについて幾たびか噂をきいた

ことはあるし、うつくしい作品に接する機会もあつたけれど、誰かに紹介してもらつてお訪ねしたいと時折り思つたことがあるだけで、今日にいたるまで未だその意を得ないである。雑誌「婦人の友」の記者が宝塚に龍村翁を訪問し、同翁の苦心談をつまびらかに聴取した記事が載せてあるのを、昨年秋のころかによんで、ひそかに同翁の健在をよろこんだものであつた。

——一九四八・二・九——

「やぶちゃん注・因みに、染織研究家の初代龍村平蔵氏は昭和三七（一九六二）年四月十一日に亡くなっている。恒藤恭は龍村氏と面会する機会を持つことは出来たのであろうか。」

三十一 室賀老人のこと

去る二月のなかば過ぎの或日のこと、到来の郵便物がいくつか机上に置かれてある中に「室賀文武」といふ人からの手紙がはさまつてゐた。アドレスは「I市門前養育院内」と書いてあつた。どうも心覚えの無い名前だなどと思ひながら封を切ると、古い大型の当用日記の一枚を引きちぎつたのと、何かのノートの一ページを引きちぎつたのと、幅二寸、長さ六寸ばかりの茶色の洋紙が二枚と、大小そろひの四枚の用紙にペンで細字をぎつしり書きみだした、風変りの手紙が出て来た。日記帳から引きちぎつたページの表は五月二十三日、裏は五月二十四日となつてゐるが、丁卯旧四月といふ字が印刷してあるから昭和二年のものらしい。

何かのノートから引きちぎつた小形の罫洋紙に赤色の横線が引いてある分から書き出してあつた。冒頭には「謹啓、私は芥川君と親しい老友でありまして、先生とは数回芥川君を訪問の際二、三回お目にかかりました事があります。当年八十個の橙の数を重ねました老耄の室賀文武と申します。俳句や短歌の嗜みある世の廢殘物であります。多分先生も御存じかとも存じられません。そして第一の句集は芥川君の序文を乞うて上梓し、第二句集は其後十年後に世に公にしました。何れも碌なものではありません事は今更申すまでもありません。そして爾來十数年を経まして、第三句集、第四句集をあつめて居ります。又短歌三編の稿が成つて居りますけれども、そして何れも上梓のつもりでありますけれども、紙不足の今日、とても死後でなくては誰一人相手にして呉れさうなものはありません。」としたためである。それに続いて短歌や俳句についての自家の見解を述べ、別紙に書いた短歌や俳句にぜひ眼を通して呉れるやうにとの丁寧な依頼の文句をしたためた上、終りに、「私は在都五十三年の都会生活を病氣と疎開との爲め十九年末に一旦生家に引揚げ、甥にかかつて居りましたが、其女房のヒステリーに苦しめられ、二十年の春第二の甥の家に移り、甥の戦死の広報に接し、其女房のヒステリーに又々苦しめられ、再び郷里に帰りますと、予想の如く女房の大ヒスに殺されかかりました所——（郷里I市居住の「第一の甥」の細君のことだらうと思ふ。恒藤）——漸く官給の当所に虎口を免かれ得た次第であります。大牟

田では生命を賭して焼夷弾の消防火につとめ、十万円位の家屋家財を全うしたのも顧みられず、ひどいめにあひました。御きげんよう 敬具」と結んである。

あとの三枚には短歌や俳句が書いてあり、所々に説明の文句がはさんであつたが、その中に『私は辛うじて生きて居ます。読返す元氣もありません。御推読を願ひます。』とも書いてあつた。

私はその四枚の紙片に書かれた手紙の文句や短歌や俳句を一應よんだ後、新宿の、そして田端の芥川家で会つたことのある人々のことを、誰れ彼れとかすかな記憶の中から思ひ浮かべて見たが、朧ろげに其の人らしいと思はれる人のすがたが浮かんで来るだけで、どうも、しかと思ひ出せなかつた。しかし、手紙の文句から、養老院の中の一室に孤独の病軀を横たへながら、あり合はせの四枚の紙片のうへにペン字を書き綴つた八十歳の老人のすがたを遙かに思ひうかべた。家内に言ひつけて、数日後、いささかの慰問の食品のるゐを小包で山陽道西部のI市の養育院に宛てて送り出させた。それから、ほかの用事で鶴沼の芥川夫人に手紙を出したついでに、室賀老人のことについて問ひ合はせた。

丁度芥川夫人は風邪のために病臥中であつたとのことで、三月になつてから返事の手紙をよこされた。問ひ合はせた室賀氏のことについては「尙、室賀さんの事お問合せに私共も一寸意外の感が致しました。『文さん』と年寄り初め皆呼んで居りました。昔は耕牧舎（新原）の牛乳配達をして居た由、其後雜貨の行商をして居たさうでございます。クリスマスチャンにて、銀座の聖書会社につとめ、（留守居のやうなもの）、震災にて自分のものは承知の上で何一つ持ち出さなかつた由。句も沢山作り、自費出版をしました。一生独身にて、其後もしばらく田園調布に小さな家を建てて、のんきな生活をして居たやうでございます。田端の家にはいつも沢山の句を作つて参り、主人と長時間話を致し、またそれが何よりの楽しみだと申しては、ちよいちよい参り、亡くなりましてもちよいちよい相変らずたくさんの句を作つて参り、年寄りや其他の人達に見せ、よく近くの下島先生（お医者様）のところに向ふのを楽しみに致して居りました。主人も変り者の室賀さんを『文さん、文さん』と家に来る方々のうちでも最も善良な人だと申しては、時の過ぎるのも忘れてお話を致して居りました。私が芥川に参りますずつと昔よりの事でございますから、お会ひになりました事もございませうと想像致されます。当方は疎開致しますまでは文通致して居りましたが、其後如何なすつたかと家内にてお噂さ致した時もございましたのに、御手紙にて『文さん』もお丈夫の事を承知致し、まあまあと思ひました。云々」としたためであつた。

「御手紙にて『文さん』もお丈夫の事と承知致し」と書いてあるのは、私が芥川夫人に出した手紙には、ただ室賀氏のことについて問ひ合せの文句を書いただけで、同氏の近状については何も書かなかつた爲である。それはともあれ、夫人からの返簡の中に「主人も変り者の室賀さんを……家に來る方々のうちで最も善良の人だと申しては、云々」とあるのをよんで、私は「なるほど、さうだつた。」と思ひ出した。芥川から室賀氏についてそれと同じ批評の言葉を聽かされたことをはつきりと思ひ出したからである。

「やぶちゃん注：本書の「芥川龍之介のことなど」は今回の電子化注で初めて読んだものだが、その中でも、この一篇は最も私を驚愕させた一篇である。まさか、あの室賀文武の晩年の見た目は無惨とも言える現実的な手紙が、ここに、このような形で公開され、そこに芥川龍之介についての秘話の一つも含まれていないという厳しいリアリズムが、激しく胸を打ったからである。

「室賀文武」（むろがふみたけ 明治元或いは二（一八六九）年～昭和二四（一九四九）年二月十三日：老衰で逝去）は、芥川龍之介の幼少期からの年上（二十三歳以上）の知人後に俳人として号を春城と称した。山口県玖珂郡室木村（現在の山口県岩国市室の木町（グーグル・マップ・データ。以下同じ）。恒藤が伏字にしてある「I市」は岩国市のことである）の農家に生まれた。同郷であった芥川の実父敏三（彼は周防国玖珂郡生見村湯屋、現在の山口県岩国市美和町生見の生まれであった）を頼って政治家になることを夢見て上京、彼の牧場耕牧舎で搾乳や配達をして働き、芥川龍之介が三歳になる頃まで子守りなどをして親しんだ。しかし、明治二八（一八九五）年頃には現実の政界の腐敗に失望、耕牧舎を辞去して行商の生活などをしつつ、世俗への夢を捨て去り、内村鑑三に出逢って師事し、無教会系のキリスト教に入信した。生涯独身で、信仰生活を続けた。一高時代の芥川と再会した後、俳句やキリスト教のよき話し相手となった。芥川龍之介は自死の直前にも彼と頻繁に逢っている。これは「西方の人」執筆のための参考にする目的が主であったものであろうとは思いますが、私はその心の底には、自死回避の僅かな可能性をキリスト者であった彼に無意識に求めたものと考えている。俳句は三十代から始めたもので、彼の句集「春城句集」（大正一〇（一九二一）年十一月十三日警醒社書店刊。国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで全篇が読める。リンク先は芥川龍之介の書いた「序」の頭）に芥川龍之介は序（クレジットは先立つ四年も前の大正六年十月二十一日であるが、これは室賀が出版社と採めたためである。なお、その「序」でも芥川龍之介は彼の職業を『行商』と記している）も書いている。晩年の鬼気迫る「歯車」の（リンク先は私の古い電子テキスト注）「五 赤光」に出る「或老人」は彼がモデルであり、晩年の芥川にはキリスト教への入信を強く勧めていた。新全集の宮坂覺氏の年譜によれば、翌年の自死の年の一月には、芥川龍之介は執筆用に帝国ホテルに部屋を借りてそちらに泊まることがあったが、その折りには、「しばしば歩いて銀座の米国聖書協会に住み込んでいた室賀文武を訪ね、キリスト教や俳句などについて、長時間熱心に議論した」とある。私は不思議なことに、この時、室賀を訪ねた龍之介のシークエンスを、実際に見たことがある錯覚を持っている。恐らく、若き日の冬の一夜、この龍之介の室賀への訪問を帝国ホテルから銀座まで歩いて踏査した経緯があるからであろう。私の「芥川龍之介書簡抄131」／大正一五・昭和元（一九二六）年三月（全）二通で「大正一五（一九二六）年三月五日・田端発信・室賀文武宛」を電子化してある。なお、彼の「春城句集」の芥川龍之介の序文は未電子化のようなので、この際、ここで電子化しておく。底本は以上に示した同句集初版の画像に拠った。なお、こ

の執筆された年は、五月二十三日に芥川龍之介の処女作品集「羅生門」が刊行された年であった。龍之介満二十五歳。

*

序

予は俳句に關しては、全く門外漢である。従つて、予が室賀君のこの句集に序を書くこと云ふ事は、自ら揣らざるものだと云はれても仕方がない。「やぶちゃん注」に「揣らざるもの」「はからざるもの」。「僭越」の意。」

しかし、予は室賀君の生活に關してなら、幾分の知識を持つてゐる。その知識は、室賀君の藝術に親まうとする人にとつて、或は多少の興味があるかも知れない。もしそれが興味に止らず、多少の利益があるとすれば、予がその知識によつて、この序を書くこと云ふ事は、幾分でも自ら揣らないと云ふ非難を免れる事が出来ようかと思ふ。

室賀君の職業は行商である。だから晝は車をひいて、雜貨類を商つて歩く。その時の君を見たものには、この血色の好い、軀幹の長大な行商人が、春城句集の作者である事は、確かに意外な発見であらう。まして、大きな麥藁帽子の下にある鋭い眼が、トルストイを讀み、ドストイエフスキーを讀む眼だと云ふ事に、氣のつくものは一人もあるまい。君はその職業によつて、月々の衣食に資するだけの金を得れば、その月の行商はそれで休んでしまふ。さうしてその時間を擧げて、書を讀むのと、句を作るとに費してしまふ。「アナ・カレニナ」や「罪と罰」は、かくして君の讀破する所となつた。室賀君にとつて、心の饑は、肉の饑とひとしく、苦しいのに相違ない。

室賀君はこの心の饑に迫られて、久しい以前に基督教の信仰を求めた。さうして今は、内村鑑三氏の門下にある信徒の一人となつてゐる。君が行商を以て職業とするのも、單に肉の饑をみたす爲ばかりでないと云ふ事は、この間の消息に徴しても知れる事であらう。

予はジアン・クリストフを讀んだ時、クリストフの伯父に當る、ゴットフリードと云ふ行商人が出て來る度に、屢々室賀君の事を思ひ出した。素朴な、力強い信仰に於ても、君は正にゴットフリードの亞流である。少年のクリストフは、この敬虔な行商人によつて、「銀色の霧が地ときらめく水の上に漂つてゐる」中に、蛙の聲と蟋蟀の聲と鶯の聲とがつくり出す、「自然」の微妙な曲節に耳を開いて貰ふ事が出來た。この句集の著者と讀者の間にも、かう云ふ關係が起り得るかどうか——それは門外漢なる予の知る所ではない。が、もし起り得るとすれば、さうしてそれが君の生活の直下なる表現の結果であるとすれば、その生活の一斑を傳へた予は、この上もなく満足である。

大正六年十月廿一日

芥川龍之介

岩波旧全集では、最終段落の末文中の「一斑」が『一斑』となっている。」

*

三十二 俳句が第一藝術である場合

『俳句は第二藝術である』といふ桑原武夫氏の議論は昨年それが雑誌に発表されたのをよんで、大層興味ふかく思つたものであつた。

その後、桑原氏の意見に共鳴する人々や、それに賛成しない人々やが、新聞や雑誌にいろいろ議論してゐるの■かなり数多く読んだやうに思ふ。やかましく論ぜられた此の問題について茲でとやかく論ずるつもりではないが、室賀老人からもらった手紙をよみ、書いてよこされた俳句と短歌をよんで、室賀老人にとつては、俳句は確実に第一藝術であると云ふことが出来ると思つた。「やぶちゃん注」■は底本画像では欠けており、如何に画像調整してみても、字を特定出来なかつた。文脈からは「を」らしく思われるが、「は」の可能も否定出来ない。」

もちろん、斯く言ふ場合には、桑原氏や同氏の意見にくみする人たちが、『俳句は第一藝術ではなくて、第二藝術である。』と主張し、反対の側の人たちが『俳句は第一藝術たることを失はない。』と主張する場合に、双方の側において共通に前提されてゐるらしく思はれるところの「第一藝術」の概念とは違つたしかたで「第一藝術」を概念してゐる次第である。

だが、ひるがへつて考へると、飽くまでも『俳句は第一藝術である。』と主張する人々の大部分は、ここで『室賀老人にとつては俳句はたしかに第一藝術である』と言ふ場合に、私が考へてゐるのと同じやうな「第一藝術」の概念と桑原氏などにおける「第一藝術」の概念とを漠然と混同してゐるのではあるまいか。

ところで、桑原氏のいはゆる第一藝術の概念を、仮りに第一藝術の客観的概念とよび、ここで私のいはゆる第一藝術の概念を、第一藝術の主観的概念と呼ぶこととして、——一般に俳句は客観的意義における第一藝術たり得ないか、例へば、芭蕉の俳句のごときものの中にも客観的意義における第一藝術の名に値ひするものが見出され得ないか、と云ふやうなところから、『俳句は第二藝術か否か』の問題について考察すべきではなからうか、といふ氣がする。

それから、第一藝術の主観的概念を念頭に置いて考へると、芭蕉は俳句を第一藝術として後半生を送つた人に相違ないし、富士山のことについて語つた直後に名も無い小丘のことについて語る嫌ひがあるかも知れないけれど、室賀老人もまた俳句を第一藝術として生きた人であるらしい。

「やぶちゃん注」『俳句は第二藝術である』といふ桑原武夫氏の議論「第二芸術論」は敗戦直後にフランス文学者桑原武夫が提起した現代俳句否定論。昭和二一（一九四六）年

の岩波書店の『世界』十一月号に「第二芸術——現代俳句について」の題で発表されたものである。小学館「日本大百科全書」から引くと、『桑原は、現代の名家と思われる』十『人の俳人の作品を一句ずつと、それに無名または半無名の句を五つ混ぜ合わせ、イギリスの批評家リチャーズの行ったような実験を試み、現代俳句は、作者の名前を消してしまえば優劣の判断が付きがたいということで、現代俳句の芸術品としての未完結性すなわち脆弱性をみた。彼によると、現代俳句は、他に職業を有する老人や病人が余技とし、消閑の具とするにふさわしいもので、「芸術」というより「芸」であり、しいて芸術の名を要求するなら「第二芸術」とよぶべきだという。桑原はこの第二芸術論を短歌や私小説にまで適用させ、日本の近代文化になお残る封建的残滓を手厳しく批判した』とある。「ブリタニカ国際大百科事典」には、『短歌に対しては小田切秀雄』や『白井吉見らの否定論が出現した。西欧市民文学を理念とする性急な伝統批判という性格が強く』、『時代思想の流行性を印象づけただけで』、『短歌や俳句の本質をゆるがすにはいたらなかった』とする。私は中学二年の時、国語教師の小島心水先生から尾崎放哉の句集を借りて以来、没頭し、二十代まで『層雲』の誌友となり、卒業論文も「尾崎放哉論」であった程度には俳句を嗜む。桑原の「第二芸術論」も何度も読み、大学時代の同人誌で、その批判もやらかしたことがある。桑原は思いつきの言いっぱなしで、肯定論への再反論なども一切しておらず、フランス語公用論などを軽率に主張したりした辺り、全く評価していない。ただ、俳壇から、それに論理的に反証する有力な主張が示されなかった点で、既存の俳句界、特に高浜虚子（私は彼の句を殆んど凡庸として評価していないし、杉田久女を抹殺した彼を絶対に許さない）を親玉とする守旧派の無力さが露呈し、馬鹿には出来ないものとは言える。少なくとも定型俳句は、発句の発生以来、長い年月を経てしまつて、組み合わせが概ね出き切ってしまったことは、物理的論理的にも確かである。確かな自身のオリジナルな五七五であっても、過去を遡れば、知られていない誰彼が既に詠んでいるものを見出すことは、極めて容易な失望の極致たる事実なのである。

「室賀老人」前章参照。」

三十三 室賀老人の俳句と短歌

室賀老人が手紙に添へて私に示された俳句の一部分を次に書いてみる。その俳句としての価値について私はいかれこれと述べようとは思はない。

渾沌にのつと出でたつ初日かな

この老爺何かはするぞ國の春

小幟にお猿くくらん春の風

靄青く暮れなんととして野路の梅

花に來てのぞけば閻魔睨み給ふ

薔薇紛々としてモデル台に上る

おくり出してうつろに居れば草ひばり

石膏の君が眠りよ百合の花

燈下親し十年の友と栗をむく

羽子をつく上目の好さよ初島田

(老いて老を知らず、十八の女房がほしい位です)

利休忌につるとあたま撫でにけり

我鬼に毛がちよつぶり生えた三四郎

ばつさりとお岩がやられた様な蚊帳

栗めしの出來の早さをほいながら

砂の上に小屋掛けの氣で新世帯

昇る初日は御國のみみはたみくによい國よい御旗

雪の達磨も尻からとける余り長居はせぬがよい

室賀老人は手紙の中に「しかし其れにしましても学問の無い、而も小学校すら卒業して居りませぬ私、句も歌も間違だらけの事をものして居るかも知れません——居るでせう」と書いてゐる。次に、老人の短歌をかかげる。

或るものの胸に宿りし其日よりかがやき渡る天地の色

箱車ひきてかへりて灯ともして物をし煮つつ感謝すわれは (シャボンうり)

内村鑑三先生

雲に聳ゆる富士は野阜となる日まで我等が先生は活くべくありけり

穴を掘るむぐら眞似を我はせし爆弾投下に微塵とならむ

高射砲とどろき渡る台の下にひとり家守りぬ眞暗きま夜を

東海道富士に雲なき日をぞゆく車窓に吹入る青麦の風

三十余年ぶりの展墓

申わけなしと寒けくうなだるる石になりたる我が父わが母

岩國川十里の上流。川沿の家

爺婆と柱のごとき大木をゐろりにくべて宵よひ語るも

大 牟 田

蒼き茶色のけぶり吐きつつ並立てる大煙突は空を濁らす

九州をめぐりめぐりて帰るさに見れば菜の花は莢になりつつ

「やぶちゃん注…室賀春城に敬意を表して、ここでは特異的に俳句・度々逸・短歌は前後を一行空けた。」

「渾沌」「渾沌」に同じ。

「利休忌」茶人千利休は天正十九年二月二十八日（一五九一年四月二十一日）に秀吉の逆鱗に触れて切腹した（一条戻橋にて梟首された）。享年七十。仲春の季語。

「我鬼」これは句意から見て、芥川龍之介のことではなく、単に「子ども」の意の「餓鬼」^{がき}を誤記したに過ぎない。

「ほいながら」「祝ぐ」の「ほぎ」の「ぎ」をイ音便化したもの。

「昇る初日は……」「雪の達磨も……」は度々逸。この前で二行空けたのは、底本が一行空けているからである。

「内村鑑三先生」室賀文武は「三十一 室賀老人のこと」で私が注した通り、キリスト者

として内村鑑三に師事した。

「野阜」本来は「のづかさ」と読み、「野司」とも書く、「野原の中で小高くなっている所・野にある丘」の意であるが、音数律からみて、「のづか」（野塚）と読んでいるものと思われる。

「むぐら」「もぐら」（土竜・モグラ）に同じ。

「展臺」墓参り。

「岩國川」山口県東部を流れる錦川の別名（グーグル・マップ・データ。以下同じ）。周防山地の筋（あざみ）ヶ岳（ピークの行政地区は山口県周南市大潮）に発し、岩国市で広島湾に注ぐ。下流に知られた錦帯橋がある。既に述べた通り、室賀は山口県玖珂郡室木村（現在の岩国市室の木町）出身である。因みに、室賀は、実は、芥川龍之介の実父新原敏三と同郷であった。それが、上京して「彼の下で働く契機となっていたのである。先般、電子化した『室賀文武 「それからそれ」』（芥川龍之介知人の回想録・オリジナル注付き）』を読みたい。

「上流」「十里」「川沿の家」旧室木村は錦帯橋の東方の近く、広島湾に近いから、ここから十里上流の錦川沿いとなると、山口県岩国市錦町広瀬（にしきまちひろせ）が相当する。「大牟田」福岡県大牟田市。旧三池炭鉱で知られる有明海東岸。」

三十四「戯作三昧」における馬琴の俳句観

芥川龍之介が大正六年に執筆した小説、「戯作三昧」の中に次のやうな箇所がある。

「貴公は相不変発句にお凝りかね。」

馬琴は巧に話題を轉じた。がこれは何も眇すがめの表情を氣にした訳ではない。彼の視力は幸福な事に（？）もうそれがつきりとは見えない程、衰弱してゐたのである。

「これはお尋ねに預つて恐縮至極でございますな。手前のはほんの下手の横好きで今日も運座、明日も運座、と、所々方々へ臆面もなくしやしやり出ますが、どう云ふものか、句の方は一向頭を出してくれません。時に先生は、如何でございますな、歌とか発句とか申すものは、格別お好みになりませんか。」

「いや私は、どうもああ云ふものにかけると、とんと無器用でね。尤も一時はやつた事もあるが。」

「そりや御冗談で。」

「いや、完く性に合はないとみえて、未だにとんと眼くらの垣覗きさ。」

馬琴は、「性に合はない」と云ふ語に、殊に力を入れてかう云つた。彼は歌や発句が作れないとは思つてゐない。だから勿論その方面の理解にも、乏しくないと云ふ自信があるが、彼はさう云ふ種類の藝術には、昔から一種の輕蔑を持つてゐた。何故かと云ふと、歌にしても、発句にしても、彼の全部をその中に注ぎこむ爲には、余りに形式が小さすぎる。だから如何に巧に詠みこなしてあつても、一句一首の中に表現されたものは、抒情なり叙

景なり、僅に彼の作品の何行かを充す丈の資格しかない。さう云ふ藝術は、彼にとつて、第二流の藝術である。——（原文には傍点なし）

「戯作三昧」は芥川の執筆した数多くの小説の中で私の好きなものの一つであるが、右に引用した「戯作三昧」の中の一とくだりにおいて、芥川が馬琴の藝術観として書いてある所に該当するやうな見解が、実際に馬琴の書いたものの中に見出されるか否かを、私は知らない。おそらく見出されないだらうと思ふが、いづれにしても大した問題ではなからう。

さて「戯作三昧」の中に馬琴の藝術観として述べられてゐる所からすれば、俳句は一般に到底「第一流の藝術」ではあり得ないと云ふことになりさうである。つまり、よし芭蕉のごとき天才を以てしても、第一流の藝術家ではあり得ないと云ふことになるわけである。芥川のいはゆる「第一流の藝術」は結局のところ桑原氏のいはゆる「第一藝術」と同意義であるように思はれるのであるが「戯作三昧」の中の馬琴の考へかたからして、俳句は第一藝術たる資格が無いとされる理由と、桑原氏が同一のことがらを主張されるについて持ち出された根拠との間には、いくらか相違があるやうに思ふ。

ところで、芥川自身はこの問題についてのやうに考へてゐたであらうか。「戯作三昧」における馬琴の俳句観に同感であつたらうか。おそらくさうではなかつたやうに思はれる。なほ、「第一藝術」とか、「第二藝術」とか云ふ言葉は、あまりわかり好い言葉ではないやうに思ふ。桑原氏の意味における「第一藝術」は、芥川の場合と同様に「第一流の藝術」と謂つた方がわかり好いだらうし、私が前に「第一藝術の主観的概念」とよんだものを指し示すためには「第一義の藝術」と謂つたら可からうかと思ふ。

「やぶちゃん注・恒藤恭の見解に私は諸手を挙げて賛同するものである。

「戯作三昧」は『大阪毎日新聞』夕刊に大正六（一九一七）年十月二十日から十一月四日まで、十月二十二日の休載を除いた計十五回で連載された。作品集「羅生門」刊行（五月二十三日）直後では、最も力の入った名作である。私はサイトで「大正八（一九一八）年一月に新潮社より刊行した第三番目の作品集「傀儡師」（くわいらいし）（かいらいし）を底本にした電子化を古くに公開しており、別ページでオリジナル詳細注もしてあるので、そちらを見られたいが、以上の引用は同作の「二」の中間部から最後までである。但し、頭の部分は「馬琴は巧に話頭を轉換した。」であるのを、恒藤はいじつてしまっている。なお、作中の主人公馬琴の作品に対する悪意を持った批評などのシークエンスは、まさに馬琴を借りて、芥川龍之介自身が現に受けている、或いは、これから受けることになるであろう作品への種々の批評をカリカチャアしている感が非常に強く感じられるが、恒藤が否定する通りで、馬琴の俳句観は、イコール芥川龍之介の俳句観「ではない」。芥川龍之介は終生、俳句は小説の余技に過ぎないなどと謙遜しておきながら、明かに非常に拘つた俳句への嗜好を持ち続けていたし、かなり強い自信も持っていた。なお、私はサイト内の発句・俳句のペ

―ジで、現在まで出版されたいかなるものよりも多く採録した「芥川龍之介俳句全集」を古くに全五巻で完成しているの、そちらも見られたい。その程度には私の芥川龍之介の俳句に対しては「我鬼」であると言ってよいのである。どっかの誰かが編集者にお任せで渉猟した知られた最新の芥川龍之介の句集など、俳句でないものまで拾っている、激しい噴飯物であった。」

三十五 俳人としての芥川龍之介

中村草田男氏は「俳人としての芥川龍之介」と題する一篇のはじめに次の如く書いてゐる。「我鬼―俳人芥川龍之介―は、当然のことであるが、小説家芥川龍之介と全然別個の存在ではない。ただ文藝の異なる分野、側面にあらはれた藝術家龍之介の共通の姿が、そこに認められるに過ぎない。」

草田男氏は、少し先きのところで次のやうに述べてゐる。

芥川は俳句を眞に愛してゐた。或る雑誌から求められた略歴風の文章の中には「余技は発句の外には何もない。」と答へてゐる。唯一の余技は、余技以上の意味を持つてゐたであらう。「軽井沢日記」といふ随筆の中には、こんな一節がある。「その晩R氏が自分の俳句の悪口を言つたので、自分は怒つて、R氏の頬をびしゃびしゃ打つた。(中略)そんな夢を見た。さめたあととも変な気がして不快だった。」余技と銘うつてゐるものの、それに第一義的價値を置いて居たればこそ、たとひ夢中の世界に於てでも。他人の非難の言辭はかくまで聞き捨て難かつたのであらう。それだけに。数少い彼の俳句作品中、彼の好みになつたものには長い年月に互つて絶えず彫琢が施されて居たやうである。一例を挙げればこんな記事がある。「僕、曩日久保田君(註・万太郎)に『うすうすと雲りそめけり星月夜の句を示す。傘雨宗匠善しと称す。数日の後、僕前句を改めて『冷えびえと曇り立ちけり星月夜』と爲す。傘雨宗匠頭を振つて曰、『いけません。』然れども僕畢に後句を捨てず。』しかも数年の後に、此句は更に推敲されて『風落ちて曇り立ちけり星月夜』と訂正されて残されて居る。……念のため、先、彼の俳歴をうかがつてみよう。ちやうど、彼自身の一文「わが俳諧修業」がある。これによると――小学校時代、四年生の時に始めて十七字を並べてみたといふ「落葉焚いて葉守りの神を見し夜かな」の一作がある。自ら「鏡花の小説など読みてゐたれば、その羅曼主義を学びたるなるべし」と註してゐるが、只管驚歎に値する早熟ぶりであり、確かに偏つた好みの作りものであるとはいへ、一面には後年の彼の藝境を既に立派に規定暗示してゐる。

俳人としての芥川龍之介について草田男氏の詳細な論評はよく肯綮に中つてゐると思ふけれど、これ以上ここに紹介することは差控へる。

無名の俳人室賀文武氏が芥川家を訪問し、芥川夫人の手紙の中にかいてあるやうに、し

ばしば長時間芥川龍之介と対談した折りに、訪客の中で最も善良の人と彼が評してゐた室賀氏に芥川は俳人芥川龍之介として対座したのであつたらうか。小説家芥川龍之介として対座したのであつたらうか。それとも、単に平和な家庭の人芥川龍之介として対座したのであつたらうか。そのいづれとも私には見当がつかないけれど、とにかく「戯作三昧」の中の馬琴が、神田同朋町の銭湯松の湯で、彼の著作の愛読者の一人である近江屋平吉に向つて話したやうな、皮肉なことばつきを弄しなかつたことは確かであらう。

——一九四八・四・一四——

「やぶちゃん注：本篇に出る中村草田男の「俳人としての芥川龍之介」は手軽には筑摩書房全集類聚「芥川龍之介全集」別巻（昭和四六（一九七二）年刊）で、新字旧仮名であるが、読むことが出来る（一九八〇二〇ページ）。また、底本と同じく「[国立国会図書館デジタルコレクション](#)」の「[国立国会図書館内図書館・個人送信限定](#)」のこちらで、その初出である「[芥川龍之介研究](#)」（大正文學研究会編・昭和一七（一九四二）年刊）を視認出来る（かなり地が焼けてはいる）。この中村氏の論考は芥川龍之介の俳句に関する論考の中でも傑出したもので、未読の方は是非読みたい。残念ながら、中村氏に著作権は存続しており、私の生きている内には電子化出来ない。

本篇を以って、「三十一 室賀老人のこと」に始まった綾なす龍之介絡みの恒藤恭の俳句に纏わるエッセイは終わっている。」

『或る雑誌から求められた略歴風の文章の中には「余技は発句の外には何も無い。」と答へてゐる』これは大正一四（一九二五）年一月発行の雑誌『文藝倶楽部』に、武者小路実篤・徳田秋声等九人の作家の回答と一緒に掲載された「[現代十作家の生活振り](#)」の中の芥川龍之介のそれである。古くにサイトで電子化してあるので見られたい。芥川龍之介の〈俳句余技伝説〉の濫觴である。そこだけ引いておく。

*

餘 技

餘技は発句の外には何にもない。勝負事はどうもやる気が起らない。人は、負けるのが厭だからなのだらうと云ふが、自分は、必ずしもさうとは思つてゐない。

*

この謂いは、虚心に読めば、寧ろ、「[余技](#)」を謙辞として読むべきは当然であつて、かのストリー・テラーの達人芥川龍之介にして、「[売文以外に芸術としての創造物として自信があるのは発句だけである。](#)」と闡明していると読む以外の余地はないものである。

「[軽井沢日記](#)」[私のサイト版](#)「[芥川龍之介軽井沢日録二種](#)」の二種目の「大正14（192

5)年8月24日(月)芥川龍之介輕井澤日録」と仮題したものが、それである。私はその注で「R氏」(このイニシャルの人物のみが不明)について、芥川龍之介の最年長(十一年上)の友人で彼が「入谷の兄貴」と呼んでいた俳人小澤碧童を候補としていた。河東碧梧桐門下の新傾向俳人で『海紅』同人であった。何より、彼は「露柴ろさい」という俳号を持っていたからである。

「僕、曩日」(なうじつ(のうじつ)…)先の日。「久保田君(註・万太郎)に『うすうすと雲りそめけり星月夜』の句を示す。……」これは「久保田万太郎氏」(『新潮』大正一三(一九二四)年六月)の末尾の一段。全体は「[青空文庫](#)」の[ここで読めるが](#)、新字新仮名で致命的なので、岩波旧全集で最終段落のみを示す。

*

因に云ふ。小説家久保田万太郎君の俳人傘雨宗匠たるは天下の周知する所なり。僕、曩日久保田君に「うすうすと曇りそめけり星月夜」の句を示す。傘雨宗匠善と稱す。數日の後、僕前句を改めて「冷えびえと曇り立ちけり星月夜」と爲す。傘雨宗匠頭を振つて曰、「いけません。」然れども僕畢に後句を捨てず。久保田君亦畢に後句を取らず。僕等の差を見るに近からん乎。

*

なお、これは「[やぶちゃん版芥川龍之介句集 一 発句](#)」及び「[やぶちゃん版芥川龍之介句集三 書簡俳句\(明治四十三年〜大正十一年迄\)](#)」にも収録してあるので参照されたい。また、最終決定稿を支持する(私も同感)私の「[其の後の虚子、龍之介、二氏の俳句飯田蛇笏](#)」も読みたい。そもそもが万太郎の句を私は全く認めない男である。

「[わが俳諧修業](#)」私の[サイト版のこちらで電子化してある](#)。

「羅曼主義」「浪漫主義」に同じ。

「肯綮に中つてゐる」「こうけいにあたつてゐる」。「莊子」の「養生主篇」の一節が原拠。戦国時代の魏の文惠王に仕えた料理の名人庖丁ほうちうが「文惠君のために牛を解く、技は肯綮を經ること未だかつてせず」とあるのに基づく。「肯」は「骨に纏わりついた厄介な肉」、「綮」は「筋と肉の繋がる複雑な部分」を指し、牛を解体する際に重要な問題のある箇所であることから、「急所・物事の要(かな)めを的確に押さえ捉えている」ことを意味する。

『[戯作三昧](#)』の中の馬琴が、神田同朋町の銭湯松の湯で、彼の著作の愛読者の一人である近江屋平吉に向つて話したやうな、皮肉なことばつきを弄したかったことは確かであらう。『[三十四「戯作三昧」における馬琴の俳句観](#)』(ブログ版)及び私の[サイト版「戯作三昧」](#)を参照されたい。」

人々に共通な心理だらうと思う。曾ての同級生であつた人に会ふと、その人をはじめその他の者たちと共に幾ばくかの年月のあひだを過ごした学校時代のことが漠然と意識の底から浮き上りさうなけはひが感せられ、過去における自分みづからの生涯の一と区切りとつながりを持つて現れた相手の人の上に、自分みづからの過去をなつかしむ感情を投射しようとするからではなからうか。

私自身の場合について云へば、小学校時代の同級生であつた少年少女たちの中の幾人かについては、今でもかなりはつきりした記憶をもつてゐるけれど、彼らが現在でもなほ生存してゐるかどうかも分らない。中学校時代のクラスメートの中で比較的親しかつた者たちは、おほむね死んでしまつたやうであるし、その他の者たちの消息もわからなくなつた。さすがに大学生時代の同級生については比較的によく消息のわかつてゐる人々が多いけれど、なにしろ私の属してゐた法科は学生の数が多かつたので、同級生の全体が一つのまとまつたクラスメートの集團をかたちづくつてゐたといふ感じが稀薄である。ところが、高等学校時代にあつては、四十人足らずの数の青年たちが同一のクラスをかたちづくりながら三年間を過ごしたものであるし、卒業後におけるその人々の消息も概して割合によくわかつてゐるので、その時代のクラスメートは、私にとつては如何にもクラスメートらしく感ぜられるのである。

私は明治四十三年の九月に一高の英文科に入学したが、それは第一部乙類とよばれてゐた。そのクラスにはたしか三十六、七人の生徒がゐたと記憶してゐるが、その中の十人ばかりは、有名なドイツ語の教授岩元先生のきびしい採点のために落第した人たちで、山本有三、土屋文明の両君などもこのグループに属してゐた。残りの新入生の中で八人は無試験で入学した人たちであつた。(当時は各地の中学校から推薦された成績優秀の者につき、高等学校で銓衡を行ひ、無試験で入学を許可する制度が行はれてゐた。)早く亡くなつた佐野文夫はその一人であつたし、芥川龍之介及び現在の人としては久米正雄、長崎太郎の両君などもこのグループに属してゐた。第三のグループ、つまり試験を受けて新しく入学した者たちの中には、菊池寛、成瀬正一、石田幹之助などの人々がゐた。私自身もその一人であつた、松岡讓君も無試験入学者の一人であつたかと思ふが、いくらか記憶があいまいである。

いろいろと特色のあるクラスだつたが、なかんづく山本有三、土屋文明、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、松岡讓と云つたやうに、後年作家として重きを成すに至つた人々、また成瀬正一、佐野文夫のごとく其れに準ずる人々を包容してゐた点において、著しい特色のあるクラスだつた。

だが、曾てのクラスメートの中で、私が確実に知つてゐるだけでも、四分の一ばかりはすでに此の世の人ではないが、この春のはじめに菊池寛がその一人に加はつた。

「やぶちゃん注…文中の人名注は、比較的知られていないかとも思われる人物のみに限つた。

「明治四十三年」一九一〇年。

「岩元先生」岩元禎（明治二（一八六九）年～昭和一六（一九四一）年）。一高のドイツ語及び哲学担当の教授。土族の長男として鹿児島県に生まれ、明治二二（一八八九）年に鹿児島高等中学造士館を卒業後、明治二十四年に第一高等中学校（第一高等学校の前身）本科を卒業し、明治二十七年の東京帝国大学文科哲学科（ラファエル・フォン・ケールに師事）卒業後は、大学院に在籍しつつ、浄土宗高等学院（現在の大正大学）でドイツ語と哲学を、高等師範学校で哲学を教えた。明治三二（一八九九）年から第一高等学校でドイツ語を教えたが、極めて採点が厳しい名物教授として知られ、安倍能成や山本有三らは、岩元の採点によって落第の憂き目を見た学生であった。学習院高等科時代の志賀直哉に家庭教師としてドイツ語を教えたこともあったという。一高では、哲学の授業も担当し、授業の冒頭で述べ、且つ、教科書の表紙に書かれていた自身の言葉に「哲學は吾人の有限を以て宇宙を包括せんとする企圖なり」がある。著書に「哲学概論」（没後の編）がある。以上は彼のウイキに拠った。そこでも一説としてあるが、岩波新全集の関口氏の「人名解説索引」にも、かの夏目『漱石の「三四郎」の広田先生のモデルとされる』とある。

「銚衡」「選考」に同じ。

「佐野文夫」後の戦前の日本共産党（第二次共産党）幹部佐野文夫（明治二五（一八九二）年～昭和六（一九三一）年）。「芥川龍之介書簡抄19 / 大正二（一九一三）年書簡より（6）十一月十九日附井川恭宛書簡」の私の注「佐野」を参照されたい。

「長崎太郎」（明治二五（一八九二）年～昭和四四（一九六九）年）。高知県安芸郡安芸町（現在の安芸市）出身。京都帝国大学法科大学を卒業後、日本郵船株式会社に入社し、米国に駐在し、趣味として古書や版画を収集、特に芥川龍之介も好きだったブレイクの関連書の収集に力を入れた。帰国後に武蔵高等学校教員となった。昭和四（一九二九）年、京都帝国大学学生主事に就任、昭和二〇（一九四五）年、山口高等学校の校長となって山口大学への昇格に当たった。昭和二十四年には京都市立美術専門学校校長となり、新制大学への昇格に当り、翌年、京都市立美術大学の学長に就任している。

「この春のはじめに菊池寛がその一人に加はった」芥川龍之介の盟友にして文藝春秋社を興し、芥川賞・直木賞・菊池寛賞の創設に携わった、男気のある作家菊池寛は、本編の初出の昭和二三（一九四八）年の春三月六日に狭心症の発作を起こし、白玉楼中の人となっていた。満五十九であった。」

三十七 入学当初のころの菊池寛のこと

一高時代のクラスメートの中で私が一ばん初めに知り合ひになったのは、菊池寛であった。と云ふわけは、入学試験の際に、たしか学課試験が終った後に身体検査があつたときに、

私は丁度菊池寛の次の順番に当つたので、その時にお互ひに言葉を交へたからである。彼はそのところから既に後年における風貌とあまり変りのない顔つき、からだつきをしてゐた。一見したところ、口の周圍から顎にかけて髭が生えて居り、眼鏡の奥からシヨボシヨボした眼つきでまともに人を見る顔つきが、怕しい。「やぶちゃん注：「おそろしい。」やうな、それでゐて妙にクシャクシャとしてゐるやうな感じがして、ほかの受験生たちよりもずつと老成した人らしく見えた。しかも、顔面とは反対に、胴や手足は女性的なまるみを帯びたからだつきをしてゐるのが印象的であつた。

三帖どちのノートにしたためた当時の日記を探し出して見たら、――九月十一日に牛込区内左内坂の下宿先を引拂つて、向が岡の寄宿寮に移つたのだが、九月十五日（第五日）のところには次のやうなことを書いてゐる。

朝は数学だ。哲学科の者だけきくのださうだけれど、傍聴しても差支へなからうと思つてゆく。（註・そのころ英文科の中でも將來大学で哲学をやりたい志望の者は幾分ちがつた取りあつかひを受けてゐた。）例の髭先生（菊池君）がきてゐる。

「やあ、君は哲学科ですか」と問ふと、「いいえ」とわらふ。

「傍聴しても差支へないでせうね。」

「ははは、君はどの寮ですか。」

「僕ですか。南寮の十番です。ついこの向うです。」

「あ、さうですか。」

「君はどこです。」

「東寮の八番です。」

「君は中学はどこですか。」

「高松です。」

「さうですか。高松はあつたかいでせうね。」

「君はどちらです。」

「島根縣松江の中学ですよ。」

「さうですか。でも、ちつとも発音がわからない事はありませんね。」

「え、僕は島根縣でも石見ですからね。」

「あ、さうですか。僕たちの所へ松江から來て居た人があつたが、ちよつとも語がわからないんですね。」

「君はいつから東京に居るんです。」

「え、僕あ二、三年まへから居るんですよ。」

やがて先生が來られる。（註・数藤教授）氣になるほど眼をばしばしさせて、「どうも大変たくさん居られるやうですが、数学は哲学の方がかりなのですが」と見まはされる。コソコソ五、六人出てゆく。そこで出欠をつけられる。哲学科のものだけだ。

つけ終つて、

「まだどうも多いやうですね。傍聴もいいですけど、しまひ迄書いて貰はなくはないです。それから傍聴する人はさういつて出てもらひたいのです。」

誰だか立つて、

「試験されるのですか。」

と問ふ。

「さうです。」

この答へにまた四、五人退却する。三、四人傍聴希望のむねをつげる。

「今おきめにならないでもいいのです。けふ一時間きいて、そのあとで考へたのちおきめになつて頂きます。」

「ええ、ここではその大学においてから哲学では微積分があるさうですから、その初歩をやるのです。それには代数や三角のさらへもやらねばならぬし、解析幾何の一部もやる事になるのですが、一年の間に一週二時間づつやるのだから中々重荷です。まづ微積分のほんの口の所までやるつもりです。」

「やぶちゃん注…文中の人名注は、比較的知られていないかとも思われる人物のみに限つた。さて。恒藤恭と菊池寛は果して「しまひ迄」「傍聴」したのだろうか？ 恒藤は後に法哲学を修めたから、終えた感じはするが。

「牛込区内左内坂」(さないざか)は現在の新宿区市谷左内町(いちがやさないざかちよう…グーグル・マップ・データ)。

「数藤教授」一高の数学教授で俳人・歌人でもあった数藤五城サトウゴジロウ(明治四(一八七二)年～大正四(一九一五)年)。島根県松江市生まれ。本名は数藤斧三郎、別名を小野三郎(晩年の歌号)。理科大学数学科卒。一高数学教授として、晩年まで務めた。早くから正岡子規に俳句を学んだ。「五城句集」がある(日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠つた)。」

三十八 行軍のときの菊池寛のこと

入学してから丁度一ヶ月目の十月十一日から十三日にかけて学校の生徒の行軍があつた。目的地は甲府で、出発の日から帰校の日まで秋雨が降り続けた。

第一日は甲府の手前の石和駅で下車し、雨の降りしきる笛吹川の沿岸で演習をやつた後、夕ぐれになつて甲府にたどりつき、方々の旅館に分宿した。よる私たちの泊つた宿屋の二階で英文科の者たちのコンパをやつた。日記の中には、「菊池君の奇声でうたふデカンシヨが最も喝采を博した。」とかいてある。

第二日は甲府滞在中で各自の自由行動がゆるされたが、日記を見ると、次のやうなことをしたためてゐる。

菊池君と五目ならべをやる。八木君ともやる。三人ぬきをやる。頭がわるいなを連発する。十時ごろから菊池、根本と雨の中を散歩に出た。宿屋の辺は柳町とかで、少しゆくと縣廳があり、中学校は石垣の中にある。山田君（註・松江中学の先輩で当時は甲府中学教諭）をたづねたら、授業中とのこと、かきつけをおいて出る。菊池君が奇声を発して寮歌を歌たふ。舞鶴城にのぼる。よく手入がとどいてゐる。天守台には信号竿が立つてゐる。四方みな山、白雲漠々。甲府の形勢を観察したのち下りて帰る。晝めしはキザミスルメにならづけのべんたう。にぎりめしが二つはいつてゐた。八木君と碁をうつ。菊池、久米君たちは牛屋へのみにゆく。小栗栖君が水晶の印材を二十五銭でかつてくる。十五銭づつで一字ほつてくれるさうだ。皆火でぬれものをあぶる。……夜、山田君がたづねてこられ、一緒に出て、洋食店へいつてビールをのみ、洋食をたべて話した。

山田君の談片。甲府の気候は大陸的で、夏は非常にあつく、夏は非常にあつく、冬は乾つ風がふくとのこと。甲府は他の大都會のやうに思ひ切つてハイカラ文明にもなり得ず、又地方の質朴なところも無く、中ぶらりんだとのこと。中学は七百人居て、中々乱暴である。校長は新渡戸博士の友人だとのこと。英語は井上のリーダーを使つてゐる。歸つて来ると、コンパのおしまひぎはだ。あすの朝は一時に出發だといふ。やれやれと全く悲觀する。菊池君と隣り合せにねて話す。

「僕はなんだね、宗教も法律も絶対にその権利をみとめない。僕は政治家も大臣も博士も偉人も何等の權威をみとめないな。」

と菊池君が言ふ。

「さうだ。自己のみ絶対だ。自己が一たび瞑目すれば万象滅すだからね。」

と言ふと、

「いや、僕はその自己をも疑ふんだ。」

とオスカア・ワイルドをかつき出した。

「やぶちゃん注…文中の人名注は、比較的知られていないかとも思われる人物のみに限つた。

「入学してから丁度一ヶ月目の十月十一日から十三日にかけて学校の生徒の行軍があつた」
明治四四（一九二一）年十月十一日から十三日である。芥川龍之介が出てこないは、気管支カタルで行軍を欠席していたことによる。新全集の宮坂覺氏の年譜では、十月「西川栄次郎」（東京帝国大農学部卒で、同大助手となり、研究員として英国へ留学、後に鳥取高等農林学校教授となつた）『とともに塩原温泉に出かける。気管支カタルで行事を欠席中だったが、病気が好転したため』と好意的に書いてあるのだが、行軍出立の前日の十月十日附山本喜誉司宛書簡には、『尤も欠席届を出すと殆ど同時に病氣もなほつてしまいました』『これから鹽原へまゐります』とあり、十四日には同じく山本宛で、塩原発信と思われる塩原の絵葉書を送っている。しかも、この旅行の同行者西川栄次郎も一高の同期生である。おかしい。一九九二年河出書房新社刊の鷲只雄氏の編著になる「年表作家読本 芥川龍之介」の同年十月十

日から十五日の条に、はつきりと』この時、学校では『行軍演習中であつたが、二人とも』
(👤)『病氣と称して巧みにサボつたもの。(森慶祐「芥川龍之介の父」)』とはつきり晒されてあるのである。或いは、この仮病欠席を、恒藤恭は後に親密になつてから、打ち明け話として知っていたのではなからうか？ 敢えてそれを晒さずに本篇を書いた恒藤の方が、遙かに人間として上であると言える、芥川龍之介の靈に投げかけておくこととする。

「八木君」八木実道(理三)。恒藤・芥川の一高時代の同級生。愛知県生まれ。東京帝大哲学科卒。宇都宮高等農林学校教授を経て、第三高等学校(京大及び岡山大の前身)生徒主事兼教授となつた(新全集の「人名解説索引」に拠つた)。

「三人ぬきをやる。頭がわるいなを連発する」五目並べで連続三人勝ちのルールで、なかなかそれが出なかつたので、皆、かく言つたということか。

「根本」根本剛(明治二五(一八九二)年〜昭和六二(一九八七)年)。茨城県生まれ。旧制新潟中学校教諭を経て、中央大学教授。ホーソンの「ワンダーブック」の翻訳がある(新全集の「人名解説索引」に拠つた)。

「柳町」甲府市の旧町名。ここの附近(グーグル・マップ・データ)。県庁と舞鶴城(甲府城)を範囲に含めた。

「中学校は石垣の中にある」甲府城の南にあつた府第一高等学校に併設されていた甲府中学であろう。

「天守台」ここ。実際に天守があつたどうかは不明。

「信号竿」飾り代わりの旗指物か。

「牛屋」不詳。牛肉を出す居酒屋か。甲州牛は明治時代に早くも肉質の高さが認められていたブランド牛の走りであるらしい。

「小栗栖君」小栗栖国道(？)昭和二(一九二七)年)は大分県生まれ。一高では恒藤恭(当時は井川姓)・芥川龍之介に次いだ成績で卒業し、恒藤と同じ京都帝大法科へ進んだ後、京都帝大教授となつている(新全集の「人名解説索引」に拠つた)。

「山田君」不詳。

「新渡戸博士」新渡戸稻造。明治三九(一九〇六)年に第一高等学校長に就任していた(東京帝国大学農科大学教授兼任で大正二(一九一三)年まで)。

「井上のリーダー」英語学者・和英辞典編纂者で官吏でもあつた井上十吉(文久二(一八六二)年〜昭和四(一九二九)年)の監修になる英語のリーダー教本であろうか。』

三十九 一高生活の終りのころ

クラスメートの中で最初に知り合ひになつたのは菊池寛だつたけれど、その後さまで親しくなつたわけでもなかつた。一年生のおひだ居た南寮十番には、法科、文科、理科、工科、医科の学生が十二人ばかりゐて、はじめの一年間はむしろそれらの人々と親しく交はつた。第一学期のおひだはあまり芥川と接触しなかつたが、第二学期になつてから次第に

お互ひに親しみをもつやうになつた。

二年生になると、英文科一年生だけが南寮四番に起臥することとなつた。これは自治寮の一般的しきたりに従つたものであつた。芥川は——どういふ理由でゆるされたのか知らないけれど——一年のあひだは新宿の自宅から通学することをゆるされてゐたが、二年生になつてからは入寮して、南寮四番の連中に加はつた。(菊池、久米などといふ人々は別の室だつた) そんなやうなわけで同じ室に起臥するやうになつてから芥川との交はりは一はんとたうに親密なものとなつて行つた。

自治寮の慣例で三年生に対しては全寮主義をあまり励行しなかつたので、三年生になると芥川は再び自宅から通学することとなり、私も退寮して、彌生町の下宿から通学することとした。翌年の四月には、ドイツ大使館つき牧師エミール・シュレーダー氏が小石川区上富坂に新しく設立した日独学館に居をうつし、第三学期——高等学校時代の最後の学期はそこから通学した。

卒業試験は六月十二日から始まり、十日ばかり続いた。それに先立つて六月二日の夕方、上野の精養軒で、新渡戸校長をはじめ、英語の村田、石川、畔柳の三教授、シーモア、クレメントの二講師、ドイツ語の速水、丸山の二教授、ユンケル講師、西洋史の齋藤教授、東洋史の箭内教授、漢文の塩谷、島田両教授、國文の今井教授、法学通論の棚橋講師、体操の米田講師と合せて千六人の先生を招待して、謝恩会をひらいた。

在学三年のあひだ始終日記を書きつづけてゐたわけではないけれど、たまたま最後の学期は別のノートブックに日記をかいてゐる。六月二日ははじめの部分には次のやうなことをかいてゐる。

午後の漢文がすんでから芥川君と寮の二階にいつてねころんだ。けふの先生と生徒との席の配り方などを相談する。三時半ごろ出かけてゆく。不忍池のほとりに入る。カラタチの垣がのぞかれた。上をロールにしたらいいと芥川君が前々からの腹案をくり返す。精養軒にいくと、店の人が二階のスピーキングルームや食堂をみせてくれる。先生と生徒との配列法が中々その人のあたまにはいりかねた。一番から四十七番までこさへて、二十四番をのぞく外は偶数は先生の席にすることにきめた。番号を芥川君がかきはじめてみると、中島、加藤、北條、ついで谷森、石田の諸君がきたので、あとの二人に接待係をやつてもらふ。出来た札を二つの盆にわけてのせ、玄関で先生にも生徒にもとらせる。先生では村田さんが真先にきて、シヨウの「ウォレン夫人の職業」の批評をはじめられた……………。

「やぶちゃん注…『彌生町』東京都板橋区彌生町(グーグル・マップ・データ。以下、無指示は同じ)か？」

「牧師エミール・シュレーダー氏」ドイツ人牧師エミール・シュレーデル (Emil Schroeder)。新全集の「人名解説索引」によれば、『普及福音新教伝道会教師』で、明治四

一（一九〇八）年に『来日』し、『小石川上富坂町（[ここ](#)）』に、三田の統一教会牧師で一高のドイツ語教師でもあった『三並良』（みなみはじめ）『の協力を得て』、『日独学館寄宿舎を開設した』人物で、『井川恭』・『長崎太郎』・『藤岡蔵六らが寄宿しており』、『芥川もたずねたことがある』とある。

「日独学館」正式な同学館の学生寮は大正二（一九一三）年に建てられた。

「卒業試験は六月十二日から始まり、十日ばかり続いた」新全集の宮坂年譜によれば、卒業試験は大正二（一九一三）年六月十二日から二十日まで。

「村田」村田祐治（元治元（一八六四）年〜昭和一九（一九四四）年）。一高の英語教授。千葉県生まれ。東大英文科卒。

「石川」不詳。

「畔柳」畔柳都太郎（くろやなぎくにたろう 明治四（一八七一）年〜大正一二（一九二二）年）。山形生まれ。東大英文科卒。在学中から積極的に雑誌『帝国文学』に論文を发表し、文芸批評家として注目された。後に「大英和辞典」などの編纂した。既に述べたが、芥川龍之介が横須賀機関学校に就職出来たのも、彼の口利きのお蔭であった。

「シーモア」ジョン・ニコルソン・セイモア（John Nicholson Seymour）。イギリス人のお雇い英語講師。「[国立公文書館 DIGITAL アーカイブ](#)」の[こちらの文書画像](#)で、「第一高等學校教師」として、明治四〇（一九〇七）年九月十一日から明治四十二年七月十日までの分の「雇入」簿冊が確認出来る。

「クレメント」これは前注の同じ簿冊にあるドイツ人お雇いドイツ語講師のウィルヘルム・グンデルト（Wilhelm Gundert）のことではあるまいか？

「速水」速水滉（明治二五（一八九二）年〜昭和二八（一九四三）年）。新全集の「人名解説索引」では、岡山生まれの一高教授とし、心理学者とある。この当時の一高ではドイツ語教授をやっていたらしい。後に京城帝大教授ともあった。

「丸山」不詳。

「ユンケル」エルンスト・エミール・ユンケル（Ernst Emil Junker 一八六四年〜一九二七年）。同じく「[国立公文書館 DIGITAL アーカイブ](#)」の[文書画像](#)で確認出来る。「芥川龍之介

書簡抄11 / [明治四五・大正元（一九一二）年書簡より（4）](#) 四通」の四通目の

『大正元（一九一二）年八月三十日・「卅日夕 芥川龍之介」・出雲國松江市田中原町 井川恭様・「親披』』の私の「ゆんける」の注を参照されたい。

「齋藤」齋藤阿具（あぐ 慶応四（一八六八）年〜昭和一七（一九四二）年）は歴史学者で夏目漱石の友人として知られる。[当該ウィキ](#)によれば、『武蔵国足立郡尾間木村（現・埼玉県さいたま市）出身』。明治二五（一八九三）年、『東京帝国大学史学科卒業』後、『大学院に進み』、明治三十年に『第二高等学校教授』となり、明治三十三年から三『年間ドイツ、オランダに留学』した。その『留学中に本郷区駒込千駄木町の家を漱石に貸し』ている。『漱石は「こころ」吾輩は猫である』を執筆した『ため、「夏目漱石旧宅跡」として区指定史跡とされ』、『旧居記念碑が建っており、旧居は明治村に移築された』とある。

『帰国後』、『第一高等学校教授となり、芥川龍之介、久米正雄、山本有三らを教えた』。昭和八（一九三三）年に『定年退官』し、『名誉教授』となっている。『日本とオランダの交渉を研究し、ヘンドリック・ドゥーフ（ゾーフ）、フィッセルの日本見聞記を訳した』ともある。

「箭内」箭内巨（やないわたり 明治八（一八七五）年〜大正一五（一九二六）年）は福島県生まれで東京帝大卒の東洋史学者。明治四一（一九〇八）年、に満鉄歴史地理調査部員となり、白鳥庫吉の指導で調査に当たった。帰国後、一高教授・東京帝大講師となり、大正十四年には教授となった。著作に「東洋読史地図」「蒙古史研究」がある（講談社「デジタル版日本人名大辞典Plus」に拠った）。

「塩谷」塩谷時敏（しおやときとし 安政二（一八五五）年〜大正一四（一九二五）年）は江戸青山の生まれの漢学者。塩谷宕陰とういんの嗣子となって後を承けた箕山（宕陰の弟）の子として生まれ、家学を継いだ。昌平黌に学び、維新後、芳野金陵・島田篁村・中村敬宇らに学んだ。明治八（一八七五）年、内閣修史局に出仕したが、翌年、辞し、明治十七年に再び、修史局に戻っている。明治二二（一八八九）年より、第一高等中学校教授となり、大正九（一九二〇）年まで勤めた（日外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠った）。

「島田」島田均一なる人物である。

「今井」棚橋「米田」不詳。

「上をロールにしたらしい」宴会場の席を教員と生徒が交わるようにロール状に配するという案か。

「中島」加藤「北條」不詳。

「谷森」谷森饒男（明治（一八九二）年〜大正九（一九二〇）年）は一高時代の同級生。一高への入学は芥川龍之介の入学の前年であるが、同期となった。非常な勉強家で卒業時の成績は官報によれば、井川・芥川に次いで三番で、東京帝大入学後は国史学を専攻し、大正五年七月に論文「検非違使を中心としたる平安時代の警察状態」を提出して東京帝国大学文科大学史学科を卒業、その後、東大史学会委員として編纂の任に当たり、優れた平安時代研究をもものしたが、惜しくも、結核のために満二十八で夭折した。芥川龍之介との交流を考証したものは、高重久美（くみ）氏の論文「歴史学者谷森饒男と芥川龍之介」第一高等学校時代の交友と文学」（大阪市立大学国語国文学研究室文学史研究会『文学史研究』二〇一七年三月発行。リンク先で視認・印刷が可能）が恐らく唯一である。

「石田」まず、後の歴史学者で芥川龍之介とも親しかった石田幹之助であろう。

『シヨウの「ウォレン夫人の職業」』アイランド出身の文学者ジョージ・バーナード・シャワー（George Bernard Shaw 一八五六年〜一九五〇年）が一八九三年に書いた戯曲・*Mrs Warren's Profession*（一九〇二年ロンドン初演）。売春と結婚制度をテーマとした問題作で、検閲によって上演禁止となった。』

四十 卒業直後の芥川の書簡

六月二十日に卒業試験は終わった。その翌日の午前、新宿に芥川をおとづれ、赤城行きに打ち合せをした。二十二日あさ芥川龍之介、長崎太郎、藤岡蔵六と私との四人が上野駅から出発した。三年間一緒にすごした高等学校生活の名残りを惜しむための旅行であった。

先づ赤城山の中腹にたどりつき、湖畔の宿に一泊した。あくる日のあさ絶頂を窮めた後、下山して、前橋を経由、伊香保の温泉で一泊、二十四日は榛名山に登った。その翌日、芥川と藤岡とは帰京し、長崎と私との二人は妙義山から軽井沢にまはつた上帰京した。

月末には私はそのころ松江に住んでみた母の許に帰省したので、卒業式には参列しなかつた。次にかかげるのは、松江にかへつた私に呉れた芥川の手紙の文句である。封筒の消印は、内藤新宿、大正二年七月十八日——松江、七月十九日となつてゐる。深い感激のころを以てそれを読んだことが思ひ出される。

私などの到底及び難い、すぐれた天才的な能力をもつてゐる友人として、私は芥川に深く敬服してゐたものであつた。それなのに、あべこべに芥川から、彼自身を過度に卑下した文句をつらねた手紙をもらつて、甚だ忸怩たるものがあつた。私が書かれるに全く値ひしないやうな過褒のことばが、その中にはくり返し書かれてあつたからである。そのやうな事情から、芥川龍之介全集編集部に宛てて、故人の書簡のうつしを送つた際には、この手紙のうつしを送ることはしなかつた。昭和二年七月二十四日に芥川が自殺してから満二十一年の歳月が経過したが、生き延びた私はこの歳月のあひだを碌々として爲すことも無く過ごして来たものである。全集第七巻「書簡集」が出版されたのは昭和四年であるが、そのころ読み返して、箱の中に納めて置いたのを、久しぶりにまた読み返して、故人に対して今さらに心恥かしい思ひを新たにせずには居れない。

卒業式をすませてから何と云ふ事もなくくらししてしまつた。人が來たり、人を訪ねたりする。ほかの人に遇はない日は一日もない。休みになつた割合に忙しいのでこまる。本も二、三冊よんだ。

この休暇にかぎつて、今から休みの日数が非常に少いやうな氣がしてゐる。もうすぐ新学期にはいる。学校がはじまる。それがいやで仕方がない。いやだと云ふ中には、大分新しい大学の生活と云ふ不氣味な感じが含まれてゐるのは云ふまでもないが、同時にまた君がなくなつたあとと三年のさびしさを予感するのも、いやな感じを起させる大きな Factor になつてゐる。顧ると自分の生活は何時でも影のうすい生活のやうな氣がする。自己の烙印を刻するものが何もないやうな氣がする。自分のオリギナリテートの弱い、始終他人の思想と感情とからつくられた生活のやうな氣がする。「やうな氣がする」に止めておいてくれるのは、自分の VANITY であらう。實際かうしたみすばらしい生活だとしか考へられない。

たとへば、自分が何かしやべつてゐる。しやべつてゐるのは自分の舌だが、舌をうごかしてゐるのは自分ではない。無意識に之をやつてゐる人は幸福だらうが、意識した以上こんな不快な自己屈辱を感じる事は外にはない。此いやさが高じると、随分思ひ切つた事までして自己を主張してみたくなる。自分はここで三年間の自分の我儘に對する君の寛大な態度を感謝するのを最適当だと信ずる。自分は一高生活の記憶はすべて消滅しても、君と一緒にゐた事を忘却することは決してないだらうと思ふ。こんな事を云ふと、安つばい感情のエキザジェーションのやうに聞えるからしれないが、自分が感情を誇張するのを輕蔑してゐる事は君もつてゐるだらう。兎に角自分は始終君の才能の波動を自分の心の上感じてゐた。此事は君が京都の大学へゆく事になり、自分が独り東京のこる事になつた今日、殊に痛切に思返へされる。遠慮なく云はせてくれ給へ。自分と君との間には感情の相違がある。感覚の相違がある。君は君の感情なり感覚なりを justify する爲によく説明をする（自分は之を好かない）。僕も同様に説明する事が出来る

（この相違から君と僕の間趣味の相違は起るのだが）。かうした相違は横の相違で、豎の相違ではないからである。対等に権利のある相違で、高低の批判を下す可らざる相違だからである。しかし理智の相違はさうはゆかない。自分が君の透徹した理智の前に立つた時に、自己の姿は如何に曖昧に、如何に貪弱に見えたらう。君の論理の地盤は如何に堅固に、如何に緻密に見えたらう。之は思想上の問題についてばかりではない。実行上の君の ability の前に自分は如何に自分の弱小を感じたらう。こんな事がある。二年の時、僕が寮へはいつて間もなくであつた。散歩をしてかへつて見ると誰もゐない。一寸本をよむ氣にならなかつたので、口笛をふきながら室の中をあるいてみると、君の机の上にある白い本が見えた。何氣なくあけて見ると、フランス語のマーテルリンクであつた。（其時まで僕は君がふらんす語が出来る事をしらなかつた）。自分はその本の表紙をとぢる時に、讚嘆と云ふより寧ろ不快な氣がした。その時に感じた不快な氣はその後數月に亘つて僕を刺戟して、何冊かの本をよませたのであつた。

（この間二十四行ばかり省略）

かうして尊敬と可及的君の言動と逆に出ようとする謀叛心が吸心力「やぶちゃん注… ママ。後も同じ。」と遠心力のやうに自分の心の中に共在してゐた。

（この間十行ばかり省略）

自分はこの遠心力も全く無益だつたとは思はない。前にも云つたやうに、これがあつた爲に君と自分とは主と隸とにならずにすんだ。けれども又之がある爲に自分は如何にも頑迷に、如何にも幼稚に、君に對して内の EGO を主張した事が度々ある。今から考へると冷汗の出るやうな事がないでもない。よく喧嘩をせずすんだと思ふ。しかも喧嘩をせずすんだのは全く自分の力ではない。終始君の寛大な爲であつた。自分が没論理に感情上から卑しい己を立て通した時に、自分の醜い姿が如何に明に君の眼に映じたかは、自分でも知つてゐる。地を換へたなら、自分は必ずかうした態度に出る男を指弾したに相違ない。いくら寛大でも、嘲侮はしたに相違ない。此点で自分は君がよく自分の

我儘をゆるしてくれたと思ふ。さうしてさう思つたときに、今まで感じなかつたなつかしさが新しく自分の心にあふれてくる。

君は自分が君を尊敬していることはしつてゐるだらうと思ふ。けれども自分が如何に君を愛してゐるかは知らないかもしれないと思ふ。我々の思想は隅の隅迄同じ呼吸をしてゐないかもしれない。我々の神経は端の端までもつれあつてはゐないかもしれない。しかし自分は君を理解し得たに近いと信じてゐるし、君も又これを信じて欲しいと思つてゐる。

一諸にゐて一緒に話してゐる間は感じなかつたが、愈々君が京都へゆくとなつて見ると、自分は大へんさびしく思ふ。時としては悪み、時としては争つたが、矢張三年間一高にゐた間に一番愛してゐたのは君だつたと思ふ。

センチメンタルな事をかいたが、笑つてはいけない。こんな事を考へるやうでは少し神経衰弱にかかつたのかもしれないと思ふ。しかし今は眞面目で之をかいてゐる。かきつつある間は少くとも偽を交へずにかいてゐると思つてゐる。自分は月並な友情を感激にみちた文句で表白する程閑人ではない。三年の生活をふりかへつて、しみじみと之を感じずるから書いてゐるのである。

君のゐなくなつたあとで、自分の生活はどう変わるか。遠心力と吸心力とは中心を失つた後にどう働く事が出来るか。それは自分にもわからない。君によつて初めて拍たれた鍵盤は、うつ手がなくなつた後も猶ひびく事が出来るか。出来るとしても、始と同じ音色でひびくだらうか。それも自分にはわからない。

今時計が十二時をうつた。もうペンを擱かなくてはならない。長々とくだらない事をかいたが、まだ書きたい事は沢山あるやうな氣がする。寝ても、こんな調子では寝つかれさうもない。

(この間十二行省略)

村田さんのところへは行つた。君が藪のある所を曲ると云つたから、山伏町で下りて、二番目の横町をはいつてから藪ばかりさがしたが、藪が出ないうちに先生の門の前へ来てしまつた。村田さんのうちは村田さんのあたまのやうな家ぢやあないか。紅茶を御馳走になつた。女中が小さいくせに大へん丁寧なので感心した。

よみにくいだらうが我慢してよんでくれ給へ。遅くなつたからもう寝る事にする。

蚊がくふ。蒸暑い。

御寺へは八月の二、三日頃ゆく事にした。さようなら。

十七日夜

龍

恭 君

追伸 また田中原だか内中原だかわすれたから曖昧に上がきをかく。今度手紙をくれる時かいてくれ給へ。

「やぶちゃん注…本篇を以って「芥川龍之介のことなど」は終わっている。

さて、以上の芥川龍之介の書簡は、原表記（改行を含む）と多少の違いがある箇所もあるが、概ね岩波旧全集に等しい。しかし、省略部（岩波版と同じ）があり、恐らく初めてこの書簡を、ここで読まれた読者は、内心、消化不良の不满を持たれるであろう。

しかし、ご安心あれ！ 私には既に、

「芥川龍之介書簡抄14 / 大正二（一九一三）年書簡より（2）三通」の三通目

で、岩波文庫の石割透編「芥川龍之介書簡集」（二〇〇九年）で復元されてあるものを参考に（岩波の新全集原拠）、漢字を概ね正字化し（その際は岩波旧全集のここまでの表記に従った）、芥川龍之介の癖を参考に現代仮名遣を歴史的仮名遣にした推定原書簡復元版を作成しており、オリジナル注も附してあるからである。どうぞ！ そちらを改めて読みたい。」

赤城の山つつじ

——大正二年六月——

「やぶちゃん注：以下の恒藤恭「旧友芥川龍之介」の「赤城の山つつじ」は全五章から成るが、松田義男氏の編になる「恒藤恭著作目録」([同氏のHPのこちらでPDFで入手出来る](#))によれば、初出は若き日の山陰文壇の常連であった恒藤恭が（現在の確認可能な最も早いものは明治三八（一九〇五）年一月一日に『銀鈴』第三号に載った長詩「年の訪れ」、その投稿の常連であった『松陽新報』に大正二（一九一三）年七月十六日・十七日・十九日・二十二日・二十三日の五回連載で書いたものである。恒藤恭満二十四歳の時のもの。この『松江新報』には、二年後の大正四年、芥川龍之介の失恋の傷手を癒すために龍之介を招いた際の随筆「翡翠記」も連載している（[私のブログ・カテゴリ「芥川龍之介」](#)で全二十六回分割で電子化注してある）。

本篇は第一高等学校卒業記念として卒業試験が終わった二日後の、この大正二年六月二十二日に、芥川龍之介・恒藤恭（当時は井川姓）・長崎太郎・藤岡蔵六の四人で赤城山方面に旅した際の恒藤恭の紀行文である。同行者については「友人芥川の追憶」の「十四」で注を附してあるので、そちらの私の注を見られたいが（そちらで注したものは、原則、再掲しない）、旅程のみを概ね再掲すると、二十二日は大沼（おの…恒藤の「おほぬ」の読みは誤り）湖畔に泊り、二十三日には午前四時に起床、赤城山に登頂、下山して伊香保に宿泊、翌二十四日には榛名山に登頂、二十五日に伊香保に滞在、二十六日に藤岡とともに帰京している（井川と長崎は、二人と別れ、妙義山から軽井沢に向かっている）。この登山の途中、「赤城にて」とする少年期よりの親友山本喜譽司に宛てた絵葉書がある（大正二（一九一三）年六月二十三日・消印二十四日）。私の「[芥川龍之介書簡抄14](#) / [大正二（一九一三）年書簡より（2）](#)」[三通](#)」の二通目を参照されたい。」

一

五里の山路はほんたうに長かった。

足尾鉄道の一小駅上神梅かみかんばいで汽車を下りてからと云ふもの、渡良瀬川の溪谷を後にして赤城の山のやま裾に分け入り、ただ最早奥へ輿へと漸次に峻しくなる坂道を谷川の水の冷めたさと舌に溶ける山苺の甘さとに慰められながら登って行つた。晝ながら梟がとぼけた声で鳴き、又しても黒い蛇が路にうねり出る。六月の山の華かな寂しさを一茎のはしに集めたやうに咲くむらさきの菖蒲の花がまつたくしをらしい。

登るに従つて頭上を蔽ふ森林は茂みを増してなつかしい白樺の木がぼつぼつ眼に入つて来る。四人づれの中の二人の友は行き悩んだ。この春胃拡張を病んで、不換金正氣散と云ふ漢方薬の二合分を一合に煎じ詰めたやつを根氣好く吞んで癒つた芥川は「こんなに心臓の鼓動が急だ」と云ふからその胸に手を当てて見ると、成る程、無暗と心臓が跳つて居た。「これでもつて好く登れるね」と僕は感心した。

持つて來たくだものなんかは疾くに麓の辺でたべてしまった。「バナナを持つて來れば

宜かった」とか、「帰つたら上野の停車場を出て山下の汁粉をたべて行くんだな」などと、各自が勝手にうまいものの話を持ち出したが、結局のところ少しも空き腹の足しには成らない。水は掬うてふくむと齒の根に透るやうな冷たいのが岩を劈いて「やぶちゃん注…」「つんざいて」流れてゐるので、喉の渴きは覚えぬが、お腹はすっかり空らになつて、歩いて行くと身体の中心が取れないで、ともすればふらふらと岩角に躓きさうであつた。

でも最早頂きはとほくあるまいと思ふと登つて行く勇氣は湧いて來た。白樺の林とつじ咲く牧場とに囲まれてゐると云ふ山上の湖水を思ふと……たとへば相知らぬいひなづけの処女を遠い國から訪ねて來た男の心のやうに、未だ見ぬ赤城の大沼おほぬ「やぶちゃん注…ママ。」をしたふあこがれの情が疲れた身体の重く鈍つた血潮をあたらしく澄み湧き立たせた。

最後に休んだ場所の水は殊に冷めたかつた。疲れ切つた長崎が急ぐやうにして抄すくつて呑んだあとでにつこり笑つた笑顔を見てゐた芥川が、「もう一度わらつて御覽。ほんたうに今は無邪気な顔をしてうれしさうに笑つたね。かはいらしい顔をしたよ。まだあんな無邪気な笑ひがほが出来るんだから頼もしいや。ははは」とわらふと、「でもほんたうに嬉しかつたんだから」と長崎はほほゑんだ。

林の間が疎らに成つた。たうとう登り盡したのだ、草原を一と息にのぼり切ると僕たちは、むかしの噴火口を囲む外輪山の一角の上に立つて居た。そしてその一角からはじめて行く手の牧原のはてに澄み湛へるみづうみの白い面を眸に入れたその瞬間……そのたふとい、うれしい愉快な瞬間に、僕たちはひとしく「報いられた！」といふ感じを抱いた。その次にはもう飾り氣の無い感情の流れ出るままに讚嘆のことばを四人が口々に叫んだ。

見よ！ 山は靈なるものの抱く限り無い愛執のこころを深く包んで。黄昏れる藍のいろの濃い衣をひきしめながら、醇の醇なる光を放つ晶のみづうみを胸にかい抱く。ゆふべは今首かうべをうなだれて靜かに山上の天をすべり足して行くのである。

「やぶちゃん注…「晶」ママ。「液晶」「水晶」の脱字かとも思ったが、或いは確信犯かも知れない。」

二

赤城山と云ふのは上州の北に座を構へて居る熄火山で、山の高さは海拔六千三百尺ばかり、頂きの噴火口の跡は湖水を湛へて大沼おほぬと呼ばれて居る。それを囲む外輪山は高く成り低くなりしてゐて、高くなつたところの峯々には大黒檜山、小黒檜山、地藏が嶽、鈴ヶ岳とそれぞれ名がついて居る。山は四方八方に溪谷を射出して、長い長い裾野を曳き、はるかに信濃の浅間山と向ひあつて、雄大な山の姿を競ひ合つて居る。「やぶちゃん注…「海拔六千三百尺ばかり」千九百九メートルほどとあるが、ちよつとドンブリ。最高峰である黒檜山くろひぎさんは千八百二十八メートルである。なお、「赤城山」という呼称は一つの大きなカルデラの火山体を総称する名であり、「赤城山」という峰は存在しない。」

僕たちの登り着いたのは大黒檜おほくろひ「やぶちゃん注：ママ。」と地藏が嶽との関の外輪山の凹みであった。此処は、もう五千尺ばかりの高さで風はつめたく薄い洋服の肌にとほつた。「やぶちゃん注：「五千尺」千五百十五メートル。彼らが辿りつたのは大沼おのの南岸の大洞おおぼら（おおぼら）附近であろう。とすれば、この附近の標高のピークは千三百六十メートルである（国土地理院図）。」

黄ばなのうめ鉢草やゆきわり草の花のうへに座して暫らく憩うた。うしろを振り向くと今まで登つて来た方の上州の平野の眺めがはるけき思ひを誘ひ、ゆくての谷を見下すと、みどりの牧場に数知れぬ牛や馬があそんで居り、牧場の盡きるところにはみづうみの水が白う光つて山のふところに柔かに抱かれてゐる。岸の林の間から夕炊ゆふげたく宿のけむりがほの青く立ち昇つて、何とも云へないなつかしい風情になびく。

疲れも忘れた。飢ゑもわすれた。

求めるものちとつも無い心の安らかさ、たのしさを胸に一杯みなぎらせながら、山芝を踏むわらじの足かろく四人は煙りの一とすぢの立つ方へと降つて行つた。

夕日の光りは笑みこぼれて湖畔の牧場にそそぎ落ちた。いま山の上は春のなかばで、若草が敷く緑の氈は香りあたらしく、黄の勝つた茜色の燃えるやうな赤城しんじょうつつじは今を盛りと牧原を蔽うて咲き匂ひ、幹は眞白く、梢はほの赤み、枝はなよやかに撓しなへて、なつかしい藍綠色の葉かげをつくる白樺があそこにも此処にも立つて居る。

幸ひなるものよ！ その間を牛は黒や赤や白や斑やのうつくしい大きい体軀を小い「やぶちゃん注：ママ。」足に載せて、あるものは靜かに歩み、あるものは安らかに憩ふ。僕たちが歩んで行くと、みんな人なつかしさうな眸をみはつて凝じつと此方こなたを向く。今まで母牛の脇にひしと寄り添うてうつつなく乳を吸つゐた仔牛が心を驚かしたのか俄に乳をはなれて駈出すと、『逃げなくても好い、にげなくとも』と友の一人は思はず叫んだ。『こんな処の牛飼なら一生成つてゐても好いな』とほかの一人が激した声で言ふ。

「やぶちゃん注：「黄ばなのうめ鉢草」ニシキギ目ニシキギ科ウメバチソウ属ウメバチソウ *Parnassia palustris*。花は脈を持った白い花であるが、花卉の底が灰かに黄綠色を帯びる。グーグル画像検索「ウメバチソウ」をリンクさせておく。

「ゆきわり草」ツツジ目サクランボ科サクランボ属セイヨウユキワリソウ亜種ユキワリソウ *Primula farinosa* subsp. *modesta*。学名の画像検索をリンクさせておく。」

三

枝振りやさしい山梨の木が一杯に梢を張つて純白な花をこぼれるやうに咲かしてゐる。僕はその枝を撓めて花の香うりをかぎながら、「ダンヌンチオの The Virgins of the Rocks の主人公が公城の姫さまたちを訪れるとき、みちばたのりんごの白い花を折つて馬車一杯に積んでゆくところがあるね、恰度「やぶちゃん注：「ちやうど」。「あんな氣がしはしないか」と芥川をかへりみると、「さう、さう」とうなづいた。

あるいてゆくうちにも、「ほんたうに佳いだらう！ 美しいだらう！ だから僕は赤城が一等好きだつて言ふんだ。ねえ、何処よりも佳いだらう」と去年の春休みの頃まだ湖畔は雪に埋もれて居る折りに来たことのある芥川は言ひつづけた。

あの外輪山の一角から湖畔の宿まで七、八丁ばかりの路程は、僕たちにとつては天上の愉樂の園にもまして楽しい逍遙であつた。「やぶちゃん注」七、八丁」約七百六十三〜八百七十三メートル。」

牛は草を食み飽きて穩かな眠りを思ひ、鳥は林の中から夕べの静けさをうたふ。白樺のすべやかな幹をなで、山躑躅のみだれ咲く花をつみ、柔かく踵になづむ芝草の上をあゆんで行くときには、斯うした高い山の奥深く、聖くうるはしい靈境を秘めてつくつた至尊しんたふんきものの心を慕ひなつかしむの念の外は無かつた。

みづうみに沿うた唐松の林の中に山家造りの宿屋がある。折り柄客は一人も無いといつて、人なつかしさうに愛想よく僕たちを迎へた。鞆や傘をそこへ投げだして置いて、直ぐと地つづきの赤城神社に詣でた。古へは武術に達した武人どもが信仰を厚うしたといふが、古寂びにさびた社である。「やぶちゃん注」赤城神社」大洞赤城神社とも呼ぶ。ここ。」

社のすぐ後ろは大沼の水がひたひたに湛へて居る。そこには幅せまい砂浜がみづうみのふちを取つて、山梨の花が雪を粒に咲いたやうに白く匂うてゐる。けふのやうに静かな夕べは少ないと言つて神官めいた白髪の老人と宮守りの男とが、一人は立ちひとり蹲まつて眺めてゐた。

見るとまたあなたの山梨のはなの蔭にも一人立つて居る。宿屋の老主人だとのことであつたが、アイヌの着るやうな継ぎ合せの筒袖の衣を着て石像のやうに汀の草の中に突立つて居る。

山の子どもは何を思ひながらどんな心持ちをして湖水の面を眺めて居るのだらうか？ まるつきり違つた異人種の人々がまるで僕たちには想像のつかないやうな不思議な世界を見つめてゐるんぢやあるまいか、と突差の間にふしぎな氣分をいだきながら、そこに一と株立つ若木の白樺の根がたに踞かけた「やぶちゃん注」こしかけた」。

なんといふ静けさだらう！ 夕映えはほのかに空に明り、山は隆い額に深い黙想を凝らして、湖の面にうつる自らの姿を伏し眼に覗いて居る。水は一枚の淨玻璃を張りつめたやうに澄み切つて、空の黄卵色と山の淡藍色とをやらはらげぼかして映して居る。

およそ静けさにもさまざまあらう。恐怖の瞬間を予想してゐる息もつけないやうな苦しい静けさや、崇高を絶して人の胸をつめたくするやうな嚴肅な沈黙や、あらゆる感情の外に逸れて恬淡の悟得にみちびく寂しい静けさもあらう。

それらの静けさが呼び起す氣分は何故かわれわれの心にはしつくりと当てはまらない。今の感じはそれらとは違ふ。傷いた理知のなやみや虐げられた情意のわづらひに萎え「やぶちゃん注」なえ。」いぢけた心も。われとわれから暢のびやかにふくらみ、外の世界から傳つて来る韻律のいささかな誘ひにも微妙にふるへようと待ち構へて居る。

皮肉な我、冷酷な我、移り氣な我、輕薄な我……いろいろの我が面目無ささうに首を垂

れてすすり泣いてゐるなかに、輝かしい顔をした、まことの我が素朴な眸にあついで涙をたたへながらいろいろの我を慰めつつ、自らもまたうつくしく泣き暮れて居る。静かなみづうみの中から目に見えぬものが湧きあがつて、何かしら耳にささやくと、眞の我は急に晴れやかな笑ひをして、みづうみのかなたをながめた。

あれ！ 見る間に湖心からあるか無きかに夕霧が湧きはじめ、つめたい山の氣に揺られゆられ、東になびき西にくづれ、向ひの岸の峰々のおもに白い紗をかけようとする。

磯の近くで飛んだ魚が描いた水の環がゆるやかに廣がつて行く。高山の夕べの寒さがししみじみと肌にとほると、飢ゑと疲れとはこころよく知覚をしびらせはじめた。

「やぶちゃん注：「ダンヌンチオの *The Virgins of the Rocks*」イタリアの詩人・作家でファシスト運動の先駆とされる政治的活動を行ったことで知られるガブリエーレ・ダンヌンツィオ (*Gabriele d'Annunzio* 一八六三年～一九三八年) が一八九五年に刊行した小説 (*Le vergini delle rocce* : 「巖344の処女」) の英訳版。私は読んだことがない。」

四

あくる朝四時まへに目を醒ますと最早山では鳥が啼いてゐる。三人を起して直ぐと登山の準備をする。梅干を紫蘇の葉で巻いて砂糖を掛けたのをたべ、熱い茶を吞んで出掛ける。宿の婆さんは峯の見えるところ迄僕たちを引張つて行つて丁寧345に道を教へて呉れた。

寒いけれど我慢してみづうみの岸づたひに歩いて行く。

朝霧のかかつたままに躑躅の花はあざやかに濡れ匂うて居る。あかつき早いで牛の姿は見えず、白樺の木立がさびしく並ぶ。みづうみの半ばあたり岸に近く小鳥が鳥といふのが浮んでゐるが、島には足を踏み入れる隙も無いほど樹木が茂り暗んで居る。

その島のほとりにはかはいらしい小島につつじの花の咲いたのがあつたり、対ひ合つた岸には水檜や唐松の老木が水の上に枝をさし伸べ、暗い杜蔭からなやかな白樺の水が悄らしく「やぶちゃん注：「しほらしく」。」髪を振り乱した狂女のやうに立つてゐるのが、此のみづうみに古くから傳はるやさしいロマンスでも物語るやうに思はれる。

そのあたりから右に折れて林に分け入るのが大黒檜山への登り路で、しばらく登つて見下ろすと、あしたの霧はみづうみの向うにそばだつ峰々をかくして、水とも霧とも分らない空間に小鳥が島が浮び漂うてゐる。登り三十丁とか聞いた。傾斜はかなり急である。「やぶちゃん注：「三十丁」約三・二七三キロメートル。」

林の中には白樺の古木の見事に枝を張つたのが多い。年長けると幹は灰白色に蝕くされつくして、うす桃色のこまかい斑が浮きあがる。林のあひだのけはしくせばまつた谷あひの草原に思ひがけなく巨きい角を振り立てた牛がじつと立つてゐたりする。

林をはなれて草低い山の背にかかると、外輪山の外側の溪谷が崩れただよふ雲霧の間から透して見える。風はさかさまに下から吹きあげて、雲のかたまりが去るわ、去るわ、草

すべやかな峰の背に沿うてまつしぐらに這ひのぼり、見る見る谷間を鎖し、林を包み、行く方の山もかくしてしまつた。

「やぶちゃん注：「小鳥が島」現在は整備され埋め立てられて赤城神社のある部分は全体に岬のようになっているが（[グーグル・マップ・データ航空写真](#)）、[「今昔マップ」](#)で戦前の地図を見ると、明かに島であつて、確かに『小鳥ヶ島』と記されてあつた。

「水櫓」ブナ目ブナ科コナラ属ミズナラ *Quercus crispula* var. *crispula*。 [グーグル画像検索](#)「[ミズナラ](#)」をリンクさせておく。

「唐松」裸子植物門マツ綱マツ目マツ科カラマツ属カラマツ *Larix kaempferi*。私は「落葉松」の方がしっくりくる。

「暗い杜蔭からなやかな白樺の水が悄らしく髪を振り乱した狂女のやうに立つてゐるのが、此のみづうみに古くから傳はるやさしいロマンスでも物語るやうに思はれる」「やさしいロマンス」ではない悲惨な「赤城山三姫物語」があるようである。 [サイト](#)「[前橋まるごとガイド](#)」のこちらを読みたい。」

五

うすい服の地は霧に濡れそぼつた。骨にとほる寒さに慄へながら登つて行くと「おや櫻草が！」と誰かが叫んだ。天風蓬々、岩角稜々、草は山の肌にしがみついて生えて居る。

この高い山のうへに楚々として淡紅色の可憐の花のむらがり咲くのを見ては誰か心を動かさぬ者があらう。それも登るに従つて山一杯をかざつて咲きこぼれて居り、走せ「やぶちゃん注：「はせ。」過ぎる雲の中に包まれて前を行く友の姿も定かには見えない。もの淋しい山の上の肌を刺す寒さをわびる身にはどんなに心の慰めになつたか知れない。

そのほかにも白・黄・うすむらさきとさまざまの名を知らぬ花の咲く中に、生々しい黄緑色の円い葉を展げて蟻などの小虫を捕へて喰つてゐる虫取すみれが殊に珍らしく思はれた。

花になぐさめられて雲の中を登りにのぼるとやがて絶頂にのぼりついた。頂きは三つに分れ、その二つには木の宮と石の宮とささやかな祠が岩の間に立つて居た。風が雲を吹きはらひ、吹き寄せて、止むこともなく、十三州を見はるかすと云ふ大観をまちうけたのもあだに成つた。

やたらに寒いので久しく留まることも出来ず、山の花をつみつみ雲をなびけて降つて行つた。

またたく間に降りつくして宿にかへり、朝飯をしたためたのち、今一日とどまつて湖畔を逍遙し、思ひ限り玲瓏の水の心にひたり度いとは切に思つたものの、梅雨時の空合を恐れ断然下山の途についた。

宿の若者の剪つて呉れた白樺の杖をつきつつ、四人は高らかに歌うて湖水の岸づたひに

あゆんで行つたが、心はあとにあとに引かされた。

其日七里のみちを前橋へ降り、電車で伊香保の温泉へ行つて泊り、あくる日は榛名の山にのぼつた。その又あくる日は二組にわかれ、僕は長崎と妙義山の方へまはつて上毛の三山を經めぐつたが、赤城のいただきの湖の静けさこそはまたなく慕はしいものであつた。

「やぶちゃん注：「櫻草」ツツジ目サクラソウ科サクラソウ属サクラソウ *Primula sieboldii*。学名のグーグル画像検索をリンクさせておく。

「虫取すみれ」キク亜綱ゴマノハグサ目タヌキモ科ムシトリスミレ属ムシトリスミレ *Pinguicula vulgaris* var. *macroceras*。言わずもがなであるが、キントラノオ目スミレ科スミレ属 *Viola* とは縁もゆかりもない。学名のグーグル画像検索をリンクさせておく。」

「やぶちゃん注」以下、「芥川龍之介遺墨」の画像を挟んで、最終パート「芥川龍之介書簡集」に入っている。本篇は松田義男氏の編になる「恒藤恭著作目録」(同氏の [E5](#) のこちらでPDFで入手出来る) には初出記載がないので、底本原本で独立したパートとして作られたことが判る。書簡の一部には恒藤恭の註がある。書簡数は全部で三十通である。ただ、章番号には以下のような問題がある。実は「六」の後が「八」となってしまっていて、その次が「七」、その後が再び「八」となって、以下が「二十九」まで続くという誤りがある。私のこれは、あくまで本書全体の文字部分の忠実な電子化再現であるから、それも再現する。

また、私は一昨年の二〇二一年一月から九月にかけて[ブログ・カテゴリ「芥川龍之介書簡抄」](#)百四十八回ほどの分割で芥川龍之介の書簡の正規表現の電子化注を終えている(本書のために追加したものであるため、現在は百五十八回ほどある)。そちらにあるものについては、注でリンクを示し、注もそちらの私に譲る。但し、恒藤恭の読者向けの読み易さからの改変、或いは、確信犯的変更、又は、単なる誤判読誤写によって、表記にかなり有意な違いがあるので、まず、本文書簡を読まれた後で、私の正規表現版と必ず比較されたい。

また、本パートの冒頭の[ここ](#)(左ページ)には、恒藤宛書簡に墨書された芥川龍之介自作の漢詩が載る。これだけは国立国会図書館に申請して掲載許可を得て掲げるつもりであったが、画像調整に好みがあるとうと判断されるので、リンクに留める。以下の通り、電子化注は行った。」

乞玉斧

茅簷帶雨燕泥新
苔砌無人花落頻
遙憶輕寒鳧水上
長隄楊柳幾條春

我鬼

恒藤恭様

侍史

芥川龍之介遺墨

「やぶちゃん注」最後の「芥川龍之介遺墨」(右手下方画像外の印刷されたキャプション)以外には自筆の墨書風の自作漢詩。これは本パート本文には採用されていない書簡の一部である。私自身、前掲の「芥川龍之介書簡抄」では取り上げていない。それは後に示す私の「芥川龍之介漢詩全集」の一つとして、事実上の紹介をしていたからである。しかし、こ

の際であるから、以下に電子化する。岩波旧全集を用いたが、以上の画像をもとに、「我鬼」

＊

大正九（一九二〇）年三月三十一日・消印四月一日 京都市下加茂町松原中の町 恒藤恭様
三月卅一日 田端より

乞玉斧

茅簷帶雨燕泥新

苔砌無人花落頻

遙憶輕寒晝水上

長隄楊柳幾條春

我鬼

恒藤恭様

侍史

二伸 その後御無沙汰した 僕病氣がちで困る 風なども去秋から殆ど引き續けだ 松岡
は魚眼眞珠株式會社社長になつた 成瀬は支那へ遊びに行つた 菊池は胃病で困つてゐる
久米はよく働き遊んでゐる 皆さん御變りないだらうね 僕も近々父になる 何だか束縛
されるやうな氣がして心細い 拙著一冊送る 始の方を少しよんでくれ給へ 頓首

＊

この漢詩については、既に訓読・注釈を行つており、ブログでは「芥川龍之介漢詩全集 二
十三」がそれであるが、出来れば、サイト版のブラッシュ・アップした「芥川龍之介漢詩全
集 附やぶちゃん訓読注+附やぶちゃんの教え子T・S・君による評釈」一括横書版をお勧
め目する。ここでは、特異的にそれらの解説部を転載（一部に追記を施し、不要と判断され
る一部を省略した）して、本書簡を完全電子化注釈として完成することにする。

＊

○やぶちゃん訓読

茅簷 ぼうせん 雨を帯びて 燕泥新たなり

苔砌 たいせい 人無く 花落つること頻り

遙かに憶ふ 寒晝 かんすゐ 水上に輕きを

長隄 ちやうてい 楊柳 いくでう 幾條の春

「やぶちゃん注…龍之介満二十七歳。大正九（一九二〇）年三月三十一日附恒藤恭宛（岩

波版旧全集書簡番号六八六)に所載する。

詩とは直接拘わらないが、邱氏(私が「芥川龍之介漢詩全集」の電子化でお世話になった邱雅芬氏の「芥川龍之介の中国」(二〇一〇年花書院刊)を指す)の解説には、この「松岡は魚眼眞珠株式會社社長になった」について、非常に興味深い事実が記されているので引用する。『松岡』とは友人の松岡譲を指すが、「魚眼眞珠株式會社」について、新全集の「注釈」は「未詳」としている。実は「魚眼眞珠」も中国古来の熟語「魚目混珠」に由来するもので、「にせもの」という意味である。したがって、これが戯れ言であり、芥川流のユーモアなのである。『あるのである。』あるのである。「魚目混珠」とは、魚の目玉と珠玉がよく似ていることから、本物と偽物が入り交じっていて紛らわしい喩えである。勿論、私もこの邱氏の解明には驚いた(ただ、龍之介のこうした悪戯好きはよく分かっているので、直ぐに腑には落ちた)が、アカデミックな国文学者として真面目に調べた新全集の注釈者をさえも困らせて——龍之介は今も悪戯っぽい目で、僕らを騙し続けているのである……

「茅簷」茅葺きの屋根。

「燕泥」詩語で燕の巢のこと。

「苔砌」「砌」は階下の石畳であるから、これは、びっしりと苔生しているそれを描写し、人の訪れの絶えていることをいう。

「寒鳧」「鳧」は野鴨。川に浮んだ寒そうにしている羽毛のほこほこととしたカモや水鳥の類いをイメージしてよいが、これは同時に固有名詞としての京の賀茂川のことを指す(日本漢詩では「賀茂川」を「鴨水」としたりする)。ここは従って、新春の未だ寒々とした賀茂川の水の流れを同時に映像化する必要がある(但し、そのスケールは実は、架空の大陸の「鳧水」という河にも変換され、あたかも隠者の棲家とする不思議な山水が、そこに現前するように龍之介は創っているに違いない)。……私などは、つい、ここから東へと目が移って、鴨東——祇園の花街が視界の隅の方に見えてしまうのであるが。……

「長隄」賀茂川の長堤。今の賀茂川堤や高野川堤は、合わせて七百本を越える桜並木の名所となっている。但し、これも西湖の知られた白堤等が、自動的にオーバー・ラップされて、非日本的(だからここは「楊柳」でなくてはならない)な広角のランドスケープが浮かび上がってくるようになっていいる。起承句の隠者の庵の描写——それは京の山間の隠れ寺のようでもある——から、転結句では、京で読む恒藤の意識に一度、フォーカスを合わせたものが、そこから再びぼやけたかと思うと——広大無辺の静謐なる大陸的景観へと変容(メタモルフォーゼ)する——かく繋げてゆく龍之介の手腕は、やはり只者ではないという気がする。」

「やぶちゃんの教え子T・S・君の評釈…「砌」は建築用の煉瓦、またはステップになっているところ。ここはステップか。「鳧」は水鳥の一種。辞書にはマガモとある。他に特に難しい語はないだろう。屈折した表現もない。結構自体にも、特段指摘したい新機軸はない。とても素直な詩だ。ブツブツとひとり口の中で朗誦、反芻すること数十回、イメージが少しずつ膨らんでくる。この懐かしさの原因は何だろう。ひとつは湿り気だ。起

句の「雨 yu3」と「泥 ni2」、承句の「苔 tai2」、転句の「鳧」と「水 shui3」。水気のある概念が三句に散りばめられている。しかも全て春の陽光を宿した柔らかい水。人は、どうしても水気のあるものに、生き物としての郷愁を感じるようにできているらしい。もうひとつは、柳の緑が眩しい春の堤。この詩の終着点の景色。私が連想したのは中国の詩人ではなかった……。そう、蕪村だ。「春風馬堤曲」。淀川水系の堤で、帰省途上の美しい娘と邂逅し、これに触発されて詠った春の歌。生命の躍動と郷愁と一抹の物寂しさが交じり合った不思議な吟行。そうして蕪村といえど忘れられないのが、「北寿老仙を悼む」。親しくしてくれた老人の死を悼む詠嘆のうた。江戸時代の詩だとは、俄かには信じられないロマンティックな調べ。この詩を読む私の胸には、濃厚に「春風馬堤曲」が、そしてどこかでかすかに「北寿老仙を悼む」が流れる。

——春雨に洗われた茅屋の軒下にも、いよいよ燕の夫婦が帰ってきたね。誰も見ていなくて、ほら、苔の緑も、盛んに散っていく花も、生命をちゃんと祝福してくれているんだよ。鴨が水の上で余寒に耐えるようにしていたのが、もうかなり昔に思われる。手前からずうっと彼方へ、春霞の中に消えていく堤の柳の並木。時折そよ風に揺れる無数の葉のひとつ筋毎に春が宿っているのが見えるだろう。いつかは失われる生命。いや、しかしそんな定めなど、今は忘れてしまおう。さあ、あらゆる生命よ。春が来たのだよ。今このときを精一杯、そして思い切り味わおうではないか——

《以下、やぶちゃん補記》蕪村の「北寿老仙を悼む」は私の大好きな俳体詩である。どうしても以下に示しておきたい。

北寿老仙をいたむ

君あしたに去ぬゆふべのころ千々に

何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ

をかのべ何ぞかなしき

蒲公の黄に薺のしろう咲きたる

見る人ぞなき

雉子のあるかひたなきに鳴くを聞ば

友ありき河をへだてゝ住みにき

へげのけぶりのはと打ちれば西吹にしふく風の

はげしくて子笹原眞すげはら

のがるべきかたぞなき

友ありき河をへだてゝ住にきけふは

ほろゝともなかぬ

君あしたに去ぬゆふべのころ千々に

何ぞはるかなる

我庵わがいはのあみだ佛ほとけともし火もものせず

花はなもまいらせずたなずごとくイめる今宵は

ことにたうとき

釋蕪村百拜書

「北壽老仙」俳人早見晋我はやみしんが（寛文一一（一六七一）年～延享二（一七四五）年）。通称は次良左衛門、名は義久、北壽は号。下総結城の結城十人衆と称された代々名主を勤めた素封家で、酒造業を営むかたわら、榎本其角や佐保介我の門下として結城俳壇の中心人物として活躍、自宅に私塾を開いたりもした。与謝蕪村とも親交をむすび、七十五歳で亡くなった晋我の追善集「いそのはな」に蕪村（彼は享保元（一七一六）年生であるから、当時は未だ二十九歳であった）はこの俳体詩を献じ、師とも仰ぎ、兄とも慕った晋我への、その万感の思いを表現したのであった。」

*

なお、以下、底本文の書簡に入るが、恒藤は全体が自身の文章でない書簡引用であることを考慮して、このパート全体を五字下げにしている。これは再現することに意味がないので、無視した。恒藤恭は読み易くするために、一部の表記等に手を加えている。上付きアラビア数字は恒藤が附した注記番号である。底本ではその番号が孰れも中途半端な箇所ところに打たれていて気持ちが悪い。本電子化では、特異的に註当該部相当の頭の部分で統一した。また、各章の間は一行空けであるが、ちよつと見た目がごちゃつくので、二行空けとした。」

一（大正元年八月三十日 新宿から松江へ）

もう二週間で学校がはじまると思ふとうんざりする。ほんとうにうんざりする。埃で白くなつた教室の机さ。落書きだらけの寮の硝子窓さ。一つだつていい心もちを起させるものはありはしない。VULGARなSLANGやVULGARなSCANDALだけでもどつとするのに、STORMのすぎた後にはいつも酒のほひがするんだらう。正直な所僕はもう二週間と思つたら、八木君のETERNALな音読の調子が耳にうかばずにはゐられなかつた。ETERNALと云ふのは全く善意で、音調「やぶちゃん注：原書簡は「音讀」。」から他に及ぼす迷惑などは毛頭考へてゐない。唯あの調子はETERNALと形容すると一番いゝやうな氣がするからつけた迄だ。ETERNALだらう。なごびやあないか。

更に正直な所このうんざりした心もちは、みんなに逢ふ事が出来ると云ふたのしみよりも遙に力強い。うんざりせずにすむのならば、皆と一つ処に集らなかつていゝ。第一僕

は君と寝ころんで話しでもする外に、そんなに逢ふのを楽しみにする程の人を知らない。
(尤も誰でもさうかもしれないけれど)。だから何も二ヶ月間の洗練を経た顔を合せて「やあ」とか何とか云ふ必要はないんだ。逢つて見たくなれば訪ねてゆく。実際木曾へゆく前に君の國へ行かうかと思つてゐた。さうして「こいつは少し汽車へのりすぎるな」と思つて煮切らないでゐるところへ KANIPAN が一高へはいつた勢で木曾へゆく PLAN を立てたのでとうとう「やぶちゃん注：原書簡もママ。但し、後半は踊り字「く」。「一緒に塵「やぶちゃん注：」ぎ」をきて金剛杖をつくやうな事になつてしまつた。未に出雲の湖と出雲の山とを見る機會を失したのが一寸残念に思はれる。KANIPAN で思ひ出したが、僕の知つてるものがうまく三人共 PASS した。工科の二十分の一は僕の友だちなんだからえらい。三人ともはいつたときはほんとにうれしかった。

KANIPAN は今アー、ペー、ツエーを教はつてるさうだ。アー、ペー、ツエーと云ふと、²ウンケルの細い褐色の頭の毛を思ひ出す。ウンケルを思ひ出すと、³シイモア先生の桃色の禿も思ひ出される。シイモア先生の娘は死んだかしら。

木曾は大へん蚤の沢山ある所だつた。福島へ泊つた晩なんぞは體中がまつ赤にふくれ上つて、まんじりとも出来なかつた。これから木曾へゆく旅客は是非蚤よけを持つてゆく必要がある。矢張福島で横浜商業の生徒と相宿になつた。休格のいい立派な青年だつたが、驚くべく寢言を云ふ。夜中にいきなり「冗談云つたら。そんなことがあるもんか」とか何とか云はれた時には、思はずふき出しちまつたものだ。

御嶽の頂上の小屋で福島中学の生徒二人と一緒になつた。二人とも寮歌をよく知つてゐる。僕なんぞよりよく知つてゐたかもしれない。きいて見ると、すべての寄宿舎の制度は一高に模倣してやつてるんださうだ。「鉄拳制裁も STORE 「やぶちゃん注：ママ。「STORM」の誤植であろう。」もあります」と云ふ。一高なんてえらいもんだと思つた。そんなに影響の範圍が広いだけでも御互に随分つつしまなくちやあならないと思つた。尤も其時は僕は決してつつしんだ方ぢやあなかつたけれど。「先輩には今どんな人があます」つてきいてみたら、隣室の金井君がさうださうだ。一寸奇遇のやうな氣がしたが、直又奇遇でも何でもないやうな氣がした。二人とも氣壓の少いので半熟な飯を何杯も食つた。一杯も食へないで、持つて來た SALT MEAT の罐詰ばかりつつついてゐた僕には、金井君は好箇の後輩を得たと思はれなかつた。

かけはしだの寢覚の床だのに低徊してからやつと名古屋へ行つた。僅少な日子を費しただけだから、精細な事はわからないが、何しろ名古屋はべらぼうな町のやうだ。均一制のない電車は市の一端から他端迄ゆくの六十枚ばかりの切符を買ふ事を要求する。それも一枚一錢の切符なんだから呆れる外はない。僕たちは伊東屋呉服店の木賊色と褪紅色と NUANCE を持つた食堂で、けばけばしいなりをした女どもを大勢見た。偕楽亭の草花の鉢をならべた VERANDAH であいすくりいむの匙をとりながら、目の下の灯の海をあるく名古屋人を大勢見た。さうしてその中のどいつをとつてみても、皆いやな奴であつた。僕たちは眞晝間に汗を流して方々の工場を訪問した。埃くさい應接室で黄色い西日に照りつけ

られながら、某々の会社からの紹介状や名刺を出して参観を頼んだ。帳簿や書類の間から黄疸やみのやうな顔を出す書記や給仕や職工に大勢遇った。さうしてそのどいつをとつてみても、みないやな奴ばかりだった。

至るところで旅鳥の身になった不快な印象を負つて、いたるところの工場で参観を拒絶されて、僕たちは三日目にとうとう「やぶちゃん注・ママ。底本は後半は踊り字「く」。」中京と誇称する、尊敬すべき名古屋を御免蒙った。僕は名古屋と甲府ほど嫌な都会を見た事がない。尤も名古屋も蚤のみないだけは木曾より難有つたけれど。

秩序もなくいろんな事を書いた。もうぢき君にもあへる。寮に又半年をくらして痩せるべく、君は肥つて東京へ來ることだらうと思ふ。

三十日夕

新宿にて 芥川 生

註1 一高時代のクラスメート。当時は東大文学部学生。

2 ドイツ人、一高のドイツ語講師。

3 イギリス人、一高の英語講師。

「やぶちゃん注」芥川龍之介書簡抄11 / 明治四五・大正元（一九一二）年書簡より（4）四通」の四通目で全文の電子化注をしてあるので、そちらを参照されたい。」

二（大正二年八月二十九日 新宿から松江へ）

廿二日に東京へかへつて來た。

どこの海水浴場でも八月の廿日になると客がぐつとへる。江尻もさうだった。それから廿日、海水浴場で一中にゐる知り人にあつた。其人が明日かへると云ふのをきいたら羨しくなつた。

それから丸善から本が來たしらせがうちからあつた。

そんなこんなで急にかへる氣になつた。東京へかへつたら大へんうれしかった。露の多い夕がた新橋の停車場を出て大な CARPET-FRANK をさげたまゝ電燈の赤みがかつた黄色い灯、瓦斯の白けた黄色い灯が錯落とつゞくのを見た時の心もちは未にわすれられない。矢張東京の小供の一人なんだらう。

それから今日迄例の通り漫然とくらしてゐる。本も少しよんだ。午睡は大分した。

其後君の方はどうきまつたかね。こつちでは君がまた東京へくると云ふ事が大分評判らしい。昨日「谷森君にあつたら、さう云つてた。へえ、さうかねと感心してきいて來た。谷森君の話では、もう來るとききまつた様な事だつたが、愈々さうなのだらうか。

この間の歌は面白かつた。湖の歌の始の方の五首「DIAN に」[「やぶちゃん注」：欧文は明らかに「霧青む」「もの狂」は少し明星すぎる』とあるのを恒藤はカットしている。意図不明。恒藤として

は、この批評に不満があったものかとも思われる。」あの六首の外に「さりどては」「國引きに」「追分の」「とほじろく」がいと。「あきらめの」の賛成だ。どつちにしても、九月の初旬には君にあへる事と思ふ。

追憶 二章

I 外

今日もまた黄なる雲ゆく桐の木の葉かげにひとりものを思へる

車前草のうす紫の花ふみてものを思へば雲の影ゆく

小使部屋の外バケツの中に植ゑられしダリアの花の赤きが悲し

II 内

教科書のかげにかくれて歌つくるこの天才をさはなどがめそ

禿頭のウンケルこそはおかしけれわが歌を見て WAS? ととひける

首まげてもの云ふ時はシーモアもあかき鸚鵡の心ちこそすれ

秋

埃及の青き陶器の百合模様秋はつめたくひかりそめける

秋たてばガラスのひじのほの青く心に来るかなしみのあり

額ぶちのすゝびし金をそことなくほの青ませて秋は來にけり

銀座通馬車の金具のひじきより何時しか秋はたちそめにけむ

仲助の撥のひじきに蠟燭の白き火かげに秋はひろがる

秋風は清國名産甘栗とかきたる紅き提灯にふく

廿九日朝

龍

註1 一高時代からのクラスメート。当時は東大文学部学生。

〔3〕四通の一通目として電子化注してあるので参照されたい。〕

三（大正二年九月十三日 新宿から京都へ）

敬啓

君の所から御礼状が来たと云つて母が持つてきたから、あけてみたら、京都大学への轉学願と其理由書がはいつてゐる。多分間違だらうと思ふから早速送る。いくら「やぶちゃん注」岩波旧全集ではここに「二度」とあるのを恒藤はカットしている。轉学するからと云つて、かう迄あはてるには当るまい。

序にかくが、僕のおやぢの名は道章で、道昭ぢやあない。道昭では道鏡の甥のやうな気がする。

十五日からいろんな講義が始まる。英語を齋藤勇さんに教はる。独乙は大津さん。一体にあんまり面白くなささうだ。大学生におぢいさんの多いには驚く。

時間の都合（五時迄一週中三日心理概論がある）で暁星へも外語へも行かれない。フランス語は來年迄延期しやうかとも思つてゐる。今日八木君や藤岡君にあつた。

そことなく さうびの香こそかよひくれ

うらわかき日のものかなしみ

十三日夕

龍

註1 一高時代のクラスメート。当時は東大文学部学生。

〔やぶちゃん注：注記番号が本文中に挿入されていない。しかし「一」で既に八木実道（理三）には註を附してあるので、ここは「藤岡君」藤岡蔵六への註である。因みに、八木も藤岡も当時は東京帝国大学文学部（正確には「東京帝國大學文科大學」）哲学科の学生である。さて、本書簡は「芥川龍之介書簡抄16 / 大正二（一九一三）年書簡より（3） 四通」の三通目で電子化注してあるので、そちらを参照されたいが、ここで「二度」を恒藤がカットした理由を考えてみる。実は、岩波元版全集の本書簡では「二度」は入っていないかつたようである。それは、筑摩書房の元版を親本としつつ、新規に増補して作られた全集類聚版（昭和二四（一九四九）年刊）でも「二度」がないからである。しかもそこには当該書簡は『（写）』となっており、これは書簡自体から起こしたのではなく、何かからの転載であることを示すもののだが、その文章を見るに、ぼつちり句読点が打たれてあって、実は本篇と全く同じものであって、まさに本書の本篇から転載したものであることが判明した。而し

て考えて見るに、恒藤は狭義の意味での「轉學」など一度もしていないのである。芥川龍之介の謂いは、当初、恒藤（当時は井川姓）が東京帝国大学文学部に進むつもりであったものが、芥川龍之介の才能に遠く及ばないことを自覚して、文科を改めて法科に進学を変え、しかも、東京帝大の法科大学ではなく、京都帝国大学法科大学政治学科へ入学したのを、東京帝大文科から法科で一回、東京帝大から京都帝大で二回として、自己の中で進学進路の変更したことを「二度轉學」と言ってしまうものと私は推理する（そこには芥川龍之介が持った、彼と別れ別れになることへの仄かな私怨が籠っていると考えようのである）。狭義の「轉學」には全く当たらないことは明白であるから、自身、誤読されると困ると考えて、龍之介の「二度」をここでは外したものであろう。」

四（大正二年十月十七日 新宿から京都へ）

エレクトラをみに行つた。

第一、マクペスの舞臺稽古。第二、茶をつくる家。第三、エレクトラ。第四、女がたの順で 第一はモオリス・ベアリングの翻譯、第二は松居松葉氏の新作、第四は鷗外先生の喜劇だ。

「マクペスの舞臺稽古」を序幕に据へたのは甚不都合な話で、劇場内の氣分を統一するために日本の芝居ではお目見えのだんまりをやるが（モンナブナに室内が先立つたのも）、マクペスの舞臺稽古は此点から見て、どうしても故意に看客の氣分を搔乱する爲に選ばれたものと思ふことは出来ない。この PLAY は DEMUNTIVE DRAMAS（ぶつか寮へもつて行つてゐた事があるから君はみたらう）からとつたのだが、あの中にある PLAY 中でこれが一番騒々しい。何しろ舞臺稽古に役者が皆我儘をならべたり、喧嘩をしたり、沙翁が怒つたり、大夫元「やぶちゃん注…「たいふもと」。現代仮名遣で「たゆうもと」。」が怒鳴つたりするのをかいたんだから、これ以上に騒々しい芝居があまりあるものではない。大詰にでも、はねを惜む心をまぎらすにはこんな喜劇もよいかもしれないが、エレクトラを演ずるにさきだつて、こんな乱雑なものをやるのは言語道断である。

「茶をつくる家」をみたら猶いやになつた。舞臺のデザインは中々うまく行つてゐたが、作そのものは全く駄目だ。第一これで見ると松居さんの頭も余程怪しいものぢやあないかと思ふ。筋は宇治の春日井と云ふ茶屋が零落して、とうとう「やぶちゃん注…原書簡もママ。」老主人が保険金をとる爲に自分で放火をする迄になる。そこで一旦東京の新橋で文学藝者と云はれた、その家の娘のお花が足を洗つてうちへかへつて来てゐたが、また身をうつて二千円の金をこしらへ、音信不通になつてゐた兄から送つてくれたと云ふ事にして、自分は東京へかへる。父や兄は娘の心をしらずに、義理しらずと云つてお花を罵ると云ふのだ。第一どこに我々のすんでゐる時代が見えるのだらう。保険金をとらうとして放火する位の事は氣のきいた活動寫眞にでも仕くまれてゐる。且家運の微祿を救ふのに娘が身をうると

云ふのは、壯士芝居所か、古くはお軽勘平の昔からある。お軽が文学藝者に変つたからと云つて、それが何で SOCIAL DRAMA と云へよう。何で婦人問題に解決を與へたと云へやう。作者は解決を與へたと自称してゐるのだからおどろく。

さてエレクトラになつた。

灰色の石の壁。石の柱。赤瓦の屋根。同じ灰色の石の井戸。その傍に僅な一叢の緑。

SCENE は大へんよかつた。水甕をもつた女が四、五人出て来て水をくむのから事件が発展しはじめ。始めは退屈だつた。訳文が恐しくぎごちないのである。一例を示すと、

おまへはどんなにあれがわれわれを見てゐたか、見たか、山猫のやうに

凄かつた。そして……

と云つたやうな調子である。いくらギリシアだつてあんまりスパルタンすぎる。クリテムネストラが出て話すときも、そんなに面白くなかつた。之も訳文が崇りをなしてゐるのである。唯クリテムネストラは緋の袍に寶石の首かざりをして、金の腕環を二つと金の冠とをかがやかせ、 BARE ARMS に長い SCEPTRE をとつた姿が如何にも淫婦らしかつた。第一この役者は顔が大へん淫蕩らしい顔に出来上つてゐるのだから、八割方得である。残念な事に、声は驢馬に似てゐた。

オレステスの死んだと云ふ報知がくる。クリテムネストラが勝誇つて手にセプタアをあげながら戸の中に走り入る。かはいいいクリソテミスがエレクトラに、オレステスが馬から落ちて死んだとつげる。エレクトラが独りになつてから、右の手をあげて「ああとうとう「やぶちゃん注：原書簡もママ。」ひとりになつてしまつた」と叫ぶ。其時、沈痛な声の中に海のやうな悲哀をつたへるエレクトラがはじめて生きた。河合でないエレクトラが自分たちの前に立つてゐる。その上に幕が急に下りた。

前よりも以上の期待をもつて二幕目をみる。幕があくと、下手の石の柱に紫の袍をきた若いオレステスが腕ぐみをしてよりかかりながら立つてゐる。上手の戸口——青銅の戸をとぎした戸口の前には黒いやぶれた衣に繩の帯をしたエレクトラが後むきにうづくまつてゐる。エジステスが父のアガメンソンを弑した斧の地に埋まつてゐるのを掘つてゐるのである。二人の上にはほの青い月の光がさす。舞臺は絵の様に美しい。

オレステスとエレクトラと妹弟「やぶちゃん注：ママ。原書簡は「姉弟」。エレクトラはオレステスの姉である。誤植かも知れない。」の名のりをする。オレステスの養父が来る。事件は息もつけない緊密な PLOT に従つて進んでゆく。静な部屋のうちから叫声を起る「やぶちゃん注：原書簡もママ。」。クリテムネストラが殺されたのである。エレクトラは「オレステス、オレステス、うて、うて」と叫ぶかと思ふと地に匍伏して獸のやうにうなる。

エジステスが来る。エレクトラに欺かれて部屋のうちへはいる。再び「人殺し、人殺し」と云ふ叫声が起る。窓から刺されて仆れるエジステスの姿が見える。

静な舞台には急に松明の火が幾十となくはせちがふ。劍と劍と相うつ音がする。人々の叫び罵る声がある。オレステスの敵とオレステスの味方と争ふのである。其叫喚の中にエレクトラは又獸の如く唸つて地に匍伏する。松明の火「やぶちゃん注：原書簡では「光」であ

る。」は多きを加へる。人々は叫びながら部屋のうちに乱れ入る。劍の音、怒号の声は益々高くなる。エレクトラは酔つたやうによるめきながら立上る。さうして手をあげて、足をあげて、ひた狂ひに狂ふのである。

遠い紀元前から今日まで幾十代の人間の心の底を音もなく流れる大潮流のひびきは此時エレクトラの踊る手足の運動に形をかへた。やぶれた黒衣をいやが上にやぶれよと青白い顔も火のやうに熱して、うめきにうめき、踊りに踊る。エレクトラは日本の俳優が扮した西洋の男女の中で其最も生動したものの一つであつた。クリソテミスがひとり来て、復仇の始末をつげる。エレクトラは耳にもかけず踊る。つかれては仆れ、仆れては又踊る。クリソテミスはなくなく青銅の扉をたたいて「オレステス、オレステス」と叫ぶ。誰も答へない。幕はこの時泣きくづれるクリソテミスと狂ひ舞ふエレクトラとの上に下りる。

自分は何時か涙をながしてゐた。

「女がた」は地方興行へ出てゐる俳優がある温泉宿で富豪に部屋を占領される業腹さに、女がたが女にばけて、その富豪の好色なのにつけこんで一ぱいくはせると云ふ下らないものである。唯出る人間が皆普通の人間である。一人も馬鹿々々しい奴はゐない。悉く我々と同じ飯をくつて、同じ空気を呼吸してゐる人間である。ここに鷗外先生の面目が見えない事もない。

兎に角エレクトラはよかつた。エレクトラ、エレクトラと思ひながら其晩電車にゆられて新宿へかへつた。今でも時々エレクトラの踊る思ひ出す。

芝居の話はもうきり上げる事にする。

牛込の家はあの翌日外から大体みに行つた「やぶちゃん注…原書簡も「体」はママ。移転しようとする目星をつけた家を「外」則（そとがわ）「から、大体、見に行つた」。後の同書簡のリンクの私の注を参照されたい。」。場所は非常にいゝんだが、うちが古いのと、あの途中の急な坂とで、おやぢは二の足をふんだ。所へ大塚の方から地所とうちがあるのをしらせてくれた人がある。そのうちの方は去年建てたと云ふ新しいので、恐しい凝り方をした普請（天井なんぞは神代杉でね）なんだが、狭いので落第（割合に價は安いんだが）。地所は貸地だが、高燥なのと、静なのと、地代が安いのとで、八割方及第した。多分二百坪ばかり借りて、うちを建てる事になるだらうと思ふ。大塚の豊島岡御陵墓のうしろにあたる所で狩野「やぶちゃん注…ママ。原書簡もママ。」治五郎の塾に近い。緩慢な坂が一つあるだけで、電車へ五町「やぶちゃん注…五百四十五メートル強。」と云ふのがとしよりには誘惑なのだらう。本郷迄電車で二十分だから、そんなに便利も悪くない。

学校は不変つまらない。

シンヂはよみ完つた。DEIDE OF SORROWS と云ふのが大へんよかつた。文はむづかしい。関係代名詞を主格でも目的格でも無暗にぬく。独乙語流に from the house out とやる。大分面倒だ。

Forrunner をよみだした。大へん面白い。長崎君が本をもつてみたと思ふ。あれでよんでみたまへ。割合にやさしくつていゝ。

大学の椽はすっかり落葉した。プランターも黄色くなつた。朝夕は手足のさきがつめたい。夕方散歩に出ると、靄の下りた明地に草の枯れてゆくにほひがする。

文展があしたから始まる。

毎日同じやうな講義をきいて、毎日同じやうな生活をしてゆくのはさびしい。

ゆゑしらずたゞにかなしくひとり小笛を

かはたれのうすらあかりにほうぼうと

銀の小笛を

しみじみとかすかにふけば

ほの青きはたおり虫か

しくしくとすゝりなきするわが心

ゆえしらずたゞにかなしく

「やぶちゃん注：以上の詩篇は、原書簡とは表記方法が異なるので必ず比較されたい。また、「すゝりなき」は「すゝなき」であるのを恒藤が訂したものである。」

京都も秋がふかくなつたらう。寄宿舎の画はがきにうつゝてゐる木も黄葉したかもしれない。

われは織る

鳶色の絹

うすれゆくヴィオラのひびき

うす黄なる Orange 「やぶちゃん注：原書簡では以上に「模様……」が続いている。」

われは織る われは織る

十月の、秋の、Lieder 「やぶちゃん注：原書簡では最後にピリオドが打たれてある。」

十月幾日だかわすれた。

水曜日なのはたしかだ。

龍

「やぶちゃん注：本書簡は「芥川龍之介書簡抄17 / 大正二（一九一三）年書簡より

（4）十月十七日附井川恭宛書簡」で電子化注してあるので参照されたい。」

五（大正二年十月 帝國ホテルから京都へ）

「やぶちゃん注…この標題のクレジットは誤りで、現行では（旧全集データ）十一月十九日発信となっている。かなり一般に知られていない人物なども登場するので、時に私の「芥川龍之介書簡抄19 / 大正二

（一九一三）年書簡より（6） 十一月十九日附井川恭宛書簡」の原文と私の注を参照されたい。」

¹菅さんの家へついたのは午後五時頃だった。

鎌倉から江の島へ行つて、江の島から又由井ヶ浜までかへつて来たのである。先生の家は電車（鎌倉・藤沢間の）の停留所から一町ほど離れてゐるが、それもおみやげに江の島から持つて来た栄螺を代る代るさげてあるく藤岡君と僕とは可成長い路のやうに思はれた。鼠がかつた紺にぬられた木造の西洋建の窓にはもう灯があかくさしてゐる。ごめん下さいと云ふと、勢のいゝ足おとがして、重い硝子戸があいた。うすぐらい中に眼の涼しいかはいゝ男の子の顔が見える。「先生は御出でですか」とたづねると、「はい」と会釈をして、すぐまたうすぐらい中にみえなくなる。

靴をことごとくならしながら待つてゐると、菅さんの顔が玄關から出た。「おはいり、さあ、おはいり」

案内されたのは二階の先生の書齋だった。戸口には斑竹へ白く字をうかせた聯がかゝつてゐる。はいると、四方の壁にも殆隙間なく幅がかけてあつた。悉支那人の書で、それが又悉何と考へてもよめさうもない字ばかりである。紫檀の机の上には法帖と藍の帙にはいつた唐本とがうづたかくつんである。隅のちがひ棚の上には古びた銅の置物と古めかしい陶器とがならんでゐる。すべてが寂然^{じやくぜん}として蒼古の色を帯びてゐるのである。

今めかしいのは高い天井から下つてゐる電燈と廣い縁にすゑた籐椅子ばかり。白麻の縁をとつた畳も、唐木の机も、机の周囲に敷いた白い毛皮も、青い陶器の火入れも、藍のつむぎの綿入をきた菅さんも、何となく漢詩めいた気分の中にをさまつて見える。

窓には帷がおりてゐたが、晝は近く松林の上に海を見る事が出来るのであらう。窓のわきに黒い蝕んだ板がたてかけてゐる。上には模糊として文字のやうなものが蝸牛のはつた跡のやうにうすく光つてゐた。あれは何ですときくと、先生は道風ぢやと答へた。自分らしみじみ先生がああ青磁の瓶に幽菊の一枝をさし、ああ古銅の香爐に一炷の篆煙を上らせないのを残念に思つた。奥さんのなくなられたあとの三年間を先生は五人の御子さんと一緒に二人の下女を使つて、此湘南の田園居に悠々とした日月を送つてみられるのである。先生の書に於ける鑑識が天下に肩随するもののない事は前からきいてゐた。しかし書を作る上から云つても先生の造詣に及ぶものが何人あるであらう。「此夏休みには日に一万字づつ書かうとしたが、どうしても六、七千字どまりぢやつた」と云ふ先生にとつて、独乙語の如きは閑余の末枝「やぶちゃん注…原書簡では「末枝」。誤植かも知れない。」に過ぎないのであらう。

僕「やぶちゃん注…原書簡は「自分。」」たちはチョコレートをすひながらこんな逸話をきいた。

先生が此間なくなつた栢竹「やぶちゃん注…これは書家なかばやしちちく中林栢竹の芥川龍之介の誤り。原書簡の注を参照されたい。」をたづねた事がある。三、四度留守と称して断られたあげくにやつとあへた。あふと、七十余歳の栢竹は白鬚髯「やぶちゃん注…「はくしゆぜん」と読んでおく。しらひげ。」を撫しながら「お前さんは何用あつて来たのぢや」と云ふ。

「書法についての御話がうけたまはりたくてまゐりました。」

「わしは書法なんと云ふものはしりません。さう云ふ事は世間に沢山話す人がゐるか、その人たちにききなさい。」

「その人たちの話がききなかないから、あなたの所へあがつたんです。」

この會話は先生の語をコトバきいた通りにかいたのである。

栢竹は何と云つても書法はしらないで押通す。先生もとうとう「やぶちゃん注…ママ。」我を折つて、かへつて来た。さうすると、一日「やぶちゃん注…原書簡は「一月」。誤植かも知れない。」あまりのうちに栢竹が死んだ。所が先生の親友に大井（？）哲太郎と云ふ詩人がゐる。詩の外に書もよくする人ださうだが、栢竹と師弟のやうな關係で、「やぶちゃん注…原書簡にはここに「其上」とある。」意氣相投ずる所から死ぬ迄親しく交つてゐたので、先生がその人にあつた序に栢竹の話しをすると、その人が云ふには

「そりやあ惜しい事をした。あなたの來たあとで、栢竹がわたしをよんで、昔と云ふ男がこんな事を云つて來たが、お前は同郷だし、どんな男か知つてゐるだらうと云ふから、知つてる所ぢやあない。支那に三年も行つてゐた。これこれかう云ふ男だと話してきかせると、栢竹は大へん残念がつて、俺は早速鎌倉へ逢ひに行きたい。お前案内をしてくれと云ひ出した。云ひ出してすぐ病氣になつて、死んだのぢやから、栢竹もあなた同様残念だらう」

と云ふ事だつた。

自分はこんな話をきいてゐる中に非常に面白くなつた。そこで書家の噂になると、先生は「之はわしの先生がかいたのぢや、ごらん」と云つて、厚い紙にかいた五言の律詩を見せてくれた。字は六朝の正格である。不折の比ではない。自分は感心して見てゐた。「たゞみてゐたつて仕方がない。かうしてみるがいい。」先生はその紙を手にして「やぶちゃん注…原書簡には「して」は、ない。」灯にすかさやうに「やぶちゃん注…原書簡はここに「して」がある。前と合わせて恐らくは元版のために恒藤が書き写した際の誤りと推定出来る。」見せてくれた。字の劃が中央は黒く、左右は銀のやうに墨がたまつて、厚紙の上に字を凹彫にしたやうに見える。「どうぞや、かうなれば一家を成したと云へる。日本の書家には一人も之が出来ない。」自分は愈々感心した。

先生は今度は李瑞清の法帖をあげて、「香」の字を指しながら

「この※見なさい 内圓にして外方と云ふのが六朝の正体「やぶちゃん注…「せいたい」。ママ。」ぢや 日本の書家は之を能くしない」「やぶちゃん注…※」は「」の下の縦線を横線よりごく纒か

に長くしたものが入る。しかし、これでは違う。原書簡の方で底本に挿入されてある芥川龍之介の直筆画像をトリミングして示してあるので、そちらを見られたい。「刀」の第二画をカットしたような字である。」

大きな銅硯に唐墨をすつて鋒「やぶちゃん注…「ほこさき」。筆先。」の長い筆をひたすと、そばの半紙の上へ同じ字をかいてみせる。内円にして外方なる鉤が出来る。

それから沢山の碑文や法帖や手簡や扇面をみせてくれた。その中で「これが漢の古碑文ぢや。不折が複製を手に入れたと云うて、うれしがつてゐたが、わしのは原文だ」と云つて見せてくれたのが、最も古色を帯びたもので、形容したら鳳篆龍章とも云ふやうな字が明滅して並んでゐた。

かうしてゐるうちにいつか時がたつて汽車がなくなつてしまつた。

先生は「とまつてゆきなさい」をくりかへす。さう云へば一寸とまつて見たいやうな氣もする。何となく部屋のなかにみちてゐる瀟洒とした風韻が人を動す「やぶちゃん注…「うごかす」のだ。そこでとうとう「やぶちゃん注…ママ。」とめてもらう事にした。最後に先生は有合せの紙に

沿河不見柳絲搖

歩向青谿長板橋

丁字簾前猶彷彿

更誰問話到南朝

とかいてくれた。

翌日先生と一緒に東京へかへつて、すぐ学校へ出て、五時迄授業をうけたら、へたへたになつた。文展の最終日にも行きそくなつてしまつた「やぶちゃん注…ママ。」。

文展は昨年ほど振はなかつたが、日本画の第二部で牛田鶏村の町三趣と土田麦僊の海女とがよかつた。唯癩にさはるのは久米の外に海女に同情を示す人がない事だ。石田君などは全然不賛成だと云ふ（之は寧「やぶちゃん注…むしろ」。光榮に感じるが）谷森君のおぢさん（審査員）は「怪物」だと云つたさうだ。文展は大阪であるんだらう。さうしたら殊にこの二つをみてくれ給へ。海女の海のウルトラマリンには僕も全然は賛成はしないが、左の半雙の色調と海女の運動のよく現はれた点では成功が著しいと思ふ。町三趣は朝もいいが夜が殊にいい（少し遠近法を無視しすぎて「夜」の石垣なんぞに變な所があるが）。谷森君は「驛路の春」がすてきにすぎださうだ。

エレクトラはすこしほめすぎて、大阪迄君をひき出したやうな氣がして、恐縮だ。其後「夜の宿」をみて、役者のどれよりも舞台監督としての小山内氏の伎倆に敬服したが、之はかく迄もない。

帝國ホテルのヴェルデイの記念会があつた。ドプロボルスキイと云ふ女のひとのうつくしいソロをきいた。ただおしまひの四部合唱に泣き佛の中島かね子さんとザルコリとタムとドプロボルスキイと出た時には、どうしても西洋人が四人で泣き佛をいぢめてるやうで氣の毒だつた。ザルコリの音量は實際豊なものだと思ふ。

大塚は「やぶちゃん注…「に」の誤読か誤植。」地所をかりた。冬をこして二月頃から普請にかゝる。今より廣くなるから、今度君がくるときにはもつと便利になる。

石田君が一高へ歴史会を起した。講義をずべつて迄一高へ行つて世話をやいてゐる。

山本のやつてる野外劇場は泉鏡花の紅玉を田端の白梅園でやつて失敗した。当事者の久米でさへ「見てられない位まづいんだからな」つて云つてた。

谷森君は不変眞面目にやつてゐる。佐野と根本とがずべつてゐる。成瀬は月謝を皆にかしてしまつた所へ月謝の催促が來たと云つて悲観してゐる。根本などは國から洋服をこしらへる金をとつて、それを使つてしまひ、洋服は出來るとすぐ二度程きて、勘定は拂はずに質へ入れてしまつたさうだ。その金で今は三崎へ行つてゐる。

まだあつた。黒田も石原もずべつてゐる。久米と成瀬は可成眞面目に学校へ出てゐる。佐伯君は大学の橡の木の下で午休みによく座禪をくんで腹式呼吸をやつてゐる。

DOVROVOLSKY 夫人も秋の夜はさびしと思ふことありや灯を

SIGINORIA NAKAJIMA のきる紫の羽織もさむき夜となりにけり

秋の夜のホテルの廊を画家南薫造のゆくにあひにけるかな

バアナアドリイチと語る黒服の女はみみづくによく似たるかな

(帝國ホテルにて——四首)

註1 故菅虎雄氏(当時、一高教授、担当はドイツ語)

2 佐野、根本、成瀬、黒田、久米、佐伯——いづれも一高のクラスメート、
当時は東大文学部学生。

「やぶちゃん注…くどいが、「芥川龍之介書簡抄19」 / 大正二(一九一三)年書簡より(6) 十一月十九日附井川恭宛書簡」の原文と私の注を参照されたい。そちらで読者に必要と思われる注は総て設けてあるからである。」

六(大正二年十二月五日 新宿から京都へ)

「やぶちゃん注…この標題のクレジットの日付は誤りで、現行では(旧全集データ)大正二(一九一三)年十二月三日発信となっている。本文内註にある通り、書き込まれている図が省略されているので、私の「芥川龍之介書簡抄20」 / 大正二(一九一三)年書簡より(七) 十二月三日附井川恭宛書簡」の原文と私の注を参照されたい。なお、標題「一」と「二」で二度出る「長安尺素」というのについてのみ、私の注を引用しておく、「長安」は帝都東京の比喩であろう。「尺素」は「せきそ」と読む。「素」は「帛」の意。「一尺余りの絹布」の意で、文字を書くのに用いたところから、「僅かの書き物」「短い手紙」の意。「尺牘」に同じである。則ち、「帝都東京短信」という意味の標題である。」

フィルハーモニー会があつた。クローンのバツハが一番よかつた。会場は帝劇で、舞台の前に棕櫚竹やゴムの大きな鉢を舞台と同じ高さにならべ、舞台はうすい緑にやゝ濃い緑で簡単なエジプト模様を出した壁で囲ひ、左右の WING に濃いクリームソンを使ったのが、大へん快く出来てゐた。ウンケルが来てゐた。

一番出来の悪かつたのは中島かね子のブラームスとトーマ。樋口信平のヴェルゼイも振はなかつた。

舞台協会が悪魔の弟子と負けたる人とをやつた。シヨウの翻譯には大へん誤訳があると云ふ噂がある。皆あまりうまくない。森のリチャードも貧弱だ。

林千歳のダッヂヨン夫人は更に貧弱だ。金井のスウィンドン少佐になると新派のくさみが甚しい。最よかつたのは佐々木のバーゴイン將軍だつた。負けたる人に至つては言語道断だ。あの脚本をしつてゐるものは誰でもよくかう拙劣に演じる事が出来るもんだと感心するにちがひない。

フューザン会が順天中学のうしろの焼跡の自由研究所と云ふとたん葺の仮小屋の様な所でやつてゐる。三並さんの画が一番最初に出てゐる。皆よくなかつた。唯赤い煙突が晴れた空に立つてゐるのが稍よかつた。最も人目をひいたのは小林徳三郎氏の江川一座(二枚あるがその一で見物席をかいたもの)と云ふ水彩と北山清太郎氏の二、三の小品であつた。莊八氏も大分腕を上げた。與里氏「やぶちゃん注…洋画家齋藤與里」はフューザンの黒田清輝の如くおさまつてゐる。同氏の作は劉生氏と共にあまり出来がよくない。

独乙人で世界的にヴァイオリンの名手と云はれる DORA VON MOLLENDORFF の CONCERT が帝國ホテルにあつた。ペッツオルドが補助として出演する。

ヴァイオリンは自分の今迄きいたどのメロヂイよりもうつくしいメロヂイをひいてくれた。自分は今でも水色のきものをきて濃い栗色の髪をかき上げながら弾くひとの姿を目前に髣髴する事が出来る。實際あの絃の音は奇蹟のやうであつた。

ペッツオルドも出来がよかつた。あの婆さんも当夜は黒天鷲絨に銀糸の繡「やぶちゃん注…「ぬひとり」」のあるきものをきてすましてゐた。久保正夫にあつた。

長安尺素 二

1 石田君が愈々一高歴史会の FOUNDER 「やぶちゃん注…ファウンダー。創立者・始祖・開祖。」として第一会をひらいた。斎藤さんと慶應の何とか云ふ先生とが出席した。其何とか云ふ人はウインデルバンドをよんでゐる人で、石田君が師事してゐる人である。独法と英法と文科とで会員が大分出來たと云ふ事だ。先生さへ來なければ出席して牛耳つてやるんだがなと久米が口惜しがつてゐる。

一高の物理の教室と攝生室「やぶちゃん注…衛生室。保健室のこと。」との間に廊下が出来た。食堂の方の廊下も立派になったさうである。²瀬戸さんは國民新聞に現代の学生は意氣が消沈してゐるから、もつと自省自奮自重しなければならんとか何とか三日つゞきで論じてゐる。校長としての評判は校内でも校外でも悪くはないらしい。

ガルスウアシイの詩集 MOODS, SONGS AND DOGGERELS はベルグソンの流轉の哲学の思想を随所に見得る点で注目に價すると云はれてゐる。始にある MY DREAM の終の三つのスタンザなどはいいと思ふ。

大学に希臘印度美術展覽会が開かれてゐる。高楠さんや黒板さんの採集した希臘の古陶器や人形に欲しいものが澤山ある。貝多羅葉に經文をかくペンを陳列して置いた五本のうち二本盗まれたと云つて印哲の助手がごぼしてゐた。「やぶちゃん注…「貝多羅葉」「ばいたらば」と読む。古代サンスクリット語の「木の葉」の意の漢音写。上古のインドに於いて針で彫りつけて經文を書き、紙の代わりに用いたタラジュ（単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科コウリバヤシ（行李葉椰子） 亜科コウリバヤシ連コウリバヤシ属タラジュ（多羅樹） *Corypha um*）の葉を指す。」

とりでがウォーレン夫人の職業とイエーツの幻の海をやる。うまく行かないだらうと思つてゐるが、三等は十五錢だから、皆でみてやらうと久米が云つてゐる。

根本は九月以來一ぺんも出てこない。谷森君はどこかで感化院にはいつてるときいたさうだ。実は耽溺の揚句に日本館にかくれてゐるのである。

佐野や石原や黒田も大分盛らしい。「やぶちゃん注…「日本館」「につぼんかん」（につぼんかん）と読む。かの「浅草オペラ」（大正六（一九一七）年〜大正一二（一九二三）年）の時代に浅草公園六区で初めてのオペラ常設館となつた劇場・映画館（一八八三年十月開業。一九九〇年前後（既にピンク映画上映館となつていた）に閉鎖）。同所にあつた根岸興行部の「金龍館」と競い合つた。」

八木君が頭をのばした。わけの氣と見える。句あり。「山羊の毛も刈らでくれけり秋の牧」

佐伯君と坂下君とは一日もやすまずに出てゐる。坂下君の鼻の赤いのは毎日賄で生姜を食つたからださうだ。成瀬の云ふ事だからあんまりあてにもならない。

成瀬は本郷菊坂の何とか日米露と云ふ人の二階にゐたが、今月から自宅から通ふさうだ。時計を九月に佐野にかしたのがかへつてこないと云つて悲觀してゐる。「やぶちゃん注…底本

では「佐伯君と坂下君とは……」の段落と「成瀬は本郷菊坂の……」の段落の間で見開き状態で改ページとなつてゐる。本文版組を厳密に計測してみても、これと次の段落の間には行空けはおかれていない。しかし、原書簡では一行空けがなされている。成瀬絡みで恒藤と一緒にしたとも考えられるので、以上のよ

うに繋げておいた。」

そのあとへ久米が移る筈になつてゐる。久米は月謝を佐野にかしたのがかへつて來ないと云つて悲觀してゐる。同人は目下玉乗の女を主人公にした小説起稿中。

山宮さんにまじめにたのまれて、とうとう「やぶちゃん注…ママ。」又³畔柳さんの会へ出た。よむ本は SHAW 久保謙や久保勘や⁴山宮さんや皆 SHAW は嫌ひだと云つてた。むづかしくつてわからないからきらひなんだらうと思ふ。畔柳さんがこんな図をかいた。(図をはぶく)「やぶちゃん注…山宮」の註番号が、冒頭の「山宮」に打たれず、後にあるのは底本のママ。「(図をはぶく)」は恒藤恭の補注。[「芥川龍之介書簡抄20 / 大正二\(一九一三\)年書簡より\(七\) 十二月三日附井川恭宛書簡」](#)に載る芥川龍之介の自筆図(旧全集からトリミングしたもの)をリンクさせておくが、そこで私が注したように、正直言うと、私は図とは理解し易くするためのものでなくてはならない。畔柳教授の、こういう判つたような自己満足のチャートは百害あって一利なしとしか思わない人間である。多分、恒藤も私と同意見と思う。」

A は人間が TRANSCENDENTAL GOD 「やぶちゃん注…超自然的・形而上的な神。」を求め
る時代。B は IDEAL を人間の本来に求める時代(遠くはプラトー 近くはメテリック)。C
は無理想の自然主義の時代。D は現在の生活に理想を求める時代。この時代は大分して二
となる(D)。「やぶちゃん注…横転はママ。」「」はないが、意味が通じなくなるので、原書簡で補つ
た。α は社会に對して個人を重くみる個人主義。β は社会を BETONEN 「やぶちゃん
注…「ベトウネン」。ドイツ語。「重視する」の意。」する社会主義。これが動くとき E T G の三方向
をとる。E はプラグマチズムの方向で、どこ迄も平行線でゆく。F は科学者の人類観で、
滅亡を予想する悲觀説。E はベルグソン、オイッケンのネオロマンチックの哲学による樂
觀説とするのださうだ。

メテリックの時よりは面白かつた。僕が SHAW AS A DRAMATIST をやつた。

まだあるが、長くなるから切上げる。

文展の批評でもききたい。町三趣はよからう。「やぶちゃん注…原書簡ではここに「海女の半双
(海のない方)もよからう」とある。」あとの半双も僕は人が云ふほど悪くは思はない。

松本博士は廣業の四幅を日本画に新紀元を與へるものだと云つた。僕にはわからない。

註1 石田幹之助氏。一高時代のクラスメート、当時は東大文学部学生。

2 瀬戸虎記氏。当時は一高の校長。

3 故畔柳芥舟氏。当時は一高教授、担当は英語。

4 一高時代では芥川よりも一年だけ上級生。当時は東大文学部学生。

「やぶちゃん注…くどいが、この書簡、注無しで全部判るといふ人は、大変な文化人と思

う。「芥川龍之介書簡抄20」／大正二（一九一三）年書簡より（七） 十二月三日附
井川恭宛書簡」で、私はかなり苦しみながら、神経症的に注を附してあるので参照された
こ。」

八（大正三年三月二十一日 新宿から京都へ）

「やぶちゃん注：御覽通り、問題がある。実はこの通り、「六」の後が「八」となってしまう
って、その次が「七」、その後が再び「八」となって、以下が「二十九」まで続くという誤
りがある。私のこれは、あくまで本書全体の文字部分の忠実な電子化再現であるから、それ
も再現する。書簡数は全部で三十通である。」

どうしてかう君の手紙と僕の手紙とは行きがちがひになるのだらう。今日かへつたら、君
のが来てゐた。僕のは昨日出したんだから、今頃やつと君がよんでゐる時分だらう。

君の手紙をみて大へんうれしかつた。前の手紙にかいたやうに、皆京都へゆく、僕はそ
の人たちとはなれて行かうかと思つてゐた。君の手紙をよんだ時には、すぐにも行くと云
ふ手紙を出さうかと思つた位だ。けれども、手紙のおしまひへ來たら、君が東京へ來ると
かいてある。けれども、東京で君とあふのはあまり平凡で、あまり PROSAIK なやうな
氣がする。君さへ都合がよければ、藤沢あたりで落ちあつて、一緒に鎌倉へ行つて菅先生
をお訪ねしやうかと思つてゐるが、どうだらうか。「やぶちゃん注：「PROSAIK」ドイツ語で「散
文的・無趣味」の意。但し、原書簡は「PROSAIC」となっており、これは「散文の・散文的な」
「(文章・話などが)詩趣に乏しい」、「平凡な・退屈な・面白くない」の意の英語である。思うに、この書
簡は恒藤恭が元版全集のために芥川龍之介書簡を臨書して供出した際、ドイツ語と錯覚して誤記したもので
あらうと思われる。原書簡の私の注も参照されたい。」

僕の方は二十五、六日頃迄授業がありさうだが、少しはすつぽかしてもいい。なる可く
早く君にあひたいと思ふ。人間はあはないでゐると外部の膜が固くなるものだ。誰にでも
とは云はない。少くとも君に対して膜が固くなるのは嫌だ。

発音矯正会は山宮さんがやつたのだ。僕があとから訂正を申込んだが、間に合はなかつ
た。シンヂはまだいいにして、山宮さん自身のかいた論文の中の片かなにも誤謬がありさ
うだ。

僕の生活は不変單調に不景氣にすゝんでゆくばかりだ。すすんでゆくのか、止つて
ゐるのか、わからない程、緩慢だが、蝸牛の殻は中々はなれない。はなれたらスケッチ
ブックの始の QUOTATION にあるやうな醜いものになるだらう。「やぶちゃん注：この出典
などについては、「芥川龍之介書簡抄151」で詳細な注をしておいたので、見られたら。」

新思潮へかく事は僕は全く遊戯のやうに思つてゐる。(作をする事ではない、出すと云ふ事だ)。従つて同人の一人となつたと云ふ事についても SERIOUS な事として考へてやつたのも何でもない。が今になつてみると、たとひ一号の巻頭に、同人を結びつけるものが唯「使宜」にある事を声明したにもせよ、全く傾向の異つた人間と同じ名の下に立つ事は誤解を招きやすいのみならず、僕自身にとつても不便があるかもしれないと思つてゐる。僕自身の不便が單に不便に止らず、種々の事情から不便のままに押通す事になるかもしれないと思つてゐる。しかしこれは僕は自由にやぶれる障害だと信じる。

その外に勿論多少 VANITY も働いてゐたにちがひないけれども、最も力づよかつたのは靜平な生活が靜平すぎるままに化石しやしないかと云ふ惧だつた。

云ひ訳けのやうなものにならないやうに氣をつけてかいたが、結局云ひ訳けに完つたかもしれない。唯体裁のいいうそはついてないつもりだ。それから序に二つかきそへる事がある。一は幸にして僕がまだ何にもかぶれない事、一は接触する機会が前より多くなつた爲に、同人の多くに対する僕の見方が(僕から云つて)正確になつた事、正確になつた結果は不幸にして前よりも以上の尊敬と同情とを失ふに止つた事とである。

此頃は 大へん DISILLUSION がつゞいてこまる。記念祭の事で Y 君と二三度あつたら、すつかり Y 君が嫌になつてしまつた 其他なまじい口をきかなければよかつたと思ふ人が沢山ある。前にはそんなに思はなかつた人でも大分大ぜいイヤになつた。

三四郎とはまだ一人も口をきいた事がない。

劍道部の水野と云ふあばれものの兄さんが僕の級にゐる。英語は英文三年を通じて一番出来るかもしれない。クリスチャンで西洋人のうちにある。青山学院の英文科の卒業生だ。語学者のやうな人で今の英文科の模範的秀才のやうな氣がする。人はいゝ人だ。その人だけに、あふとおぢぎをする。

氣がつかずにゐるうちに自分自身に對して寛大になつてこまる。君はそんな事がなささうで、うらやましい。

東京へくる迄にもう一ぺん返事をくれ給へ。一には鎌倉へゆく都合がいいかわるいかしらせる爲に。

廿一日朝

龍

「やぶちゃん注…以上の書簡は未電子化であつたので、「芥川龍之介書簡抄」に「芥川龍之介書簡抄151 追加 大正三(一九一四)年三月二十一日 井川恭宛」として岩波旧全集の正規表現で電子化注しておいた。なお、ここでは欧文は総て横書であるが、原書簡は総て縦書である。

「Y君」恒藤の伏字。原書簡は「矢内原君」とある。」

七（大正三年三月十日 新宿から京都へ）

「やぶちゃん注：既に述べたが、章番号には以下のような問題がある。実はこの前後、「六」の後が「八」となってしまうと、その次が、この「七」、その後が再び「八」となると以下が「二十九」まで続くという誤りがある。私のこれは、あくまで本書全体の文字部分の忠実な電子化再現であるから、それも再現する。思うに、ここは書簡の並びがおかしいことに気づく。前の書簡は大正三年三月二十一日附であるのに、その後の本書簡は大正三（一九一四）年三月十日附である。則ち、ここは恒藤が原稿で錯雑したか、或いは校正係が原稿を入れ違えたままに組んでしまった可能性が出てきた。孰れにせよ、恒藤の最終校正のミスではある。」

先達は早速イエーツを送つて下すつて難有う。又其節の八つ橋も皆で難有頂戴してゐる。手紙を出さうと思つてかいたのも、うちの番頭が急病で死んだものだから、いろんな事に紛れて遅れてしまつた。君は知つてゐるだらうと思ふが、なくなつたのはうち（新宿の）店にみたおぢいさんだ。成瀬が電話をかけると牛のなくやうな返事をすると言つたおぢいさんだ。

病氣は心臓の大動脈弁の閉鎖で、発作後十五分ばかりでもう冷くなつてしまつた。それ迄は下女と大正博覧会の話をしてゐたと云ふのだからかはいさうだ。見てゐるうちに耳から額へ、額から眼へひろがつてゆく皮膚の變色を（丁度雲のかけが日向の野や山へ落ちるやうに）見てゐるのは如何にも不氣味だつた。水をあびたやうな汗がたれる。かすれた声で何か云ふ。血も少しはいた。

今朝六時の汽車で屍体は故郷へ送つたが、二日も三日も徹夜をしたので、うちのものは皆眼ははらしてゐる。帳面をぶら下げた壁や、痕だらけの机のある狭い店ががらんと急に廣くなつたやうな氣がする。

こんな急な死に方をみると、すべての道徳、すべての律法が死を中心に編まれてゐるやうな氣がしないでもない。くから死骸を引取りに來た親類の話によると、なくなつた晩にかけてない目ざまし時計が突然なり出したさうだ。それから夜があげると、うちの前へ鳥が一羽死んで落ちてゐたと云ふ。母や叔母や女中は皆氣味のわるさうな顔をしてこんな話をきいてゐた。

一週間程前に巢鴨の癡狂院へ行つたら、三十程位の女の氣狂ひが「私の子供だ、私の子供だ」と云つて僕のあとへついて來た。子でもなくして氣がちがつたのだらう。随分氣味が悪かつた。中に神道に凝つてゐる氣狂ひがゐた。案内してくれた医学士が「あなたの名は何と云ふんです」ときくと「天の神、地の神、奈落の神、天てらす天照皇神、むすび國

常立何とか千早ぶる大神」と一息に答へた。「それが皆あなたの名ですか」と云ふと、「左様で」とすましてゐる。をかしくもあり、かはいさうでもあつた。

そのあとで医科の解剖を見に行つた。二十の屍体から発散する悪臭には辟易せずにはゐられなかつた。其代り始めて人間の皮膚が背中では殆五分近く厚いものだと云ふ事を知つた。

屍体室へ行つたら、今朝死んだと云ふ屍体が三つあつた。其中の一人は女で、まだアルミのかんざしをさしてゐた。

死ぬと直ぐ胸の上部を切つて、そこから朱を注射するので、土気色の皮膚にしたたつてゐる朱が血のやうで氣味が悪い。一緒に行つた成瀬はうちへ歸つても屍体のにほひが鼻についてみて、とうとう「やぶちゃん注…ママ。原書簡も同じ。」吐いてしまつたさうだ。

一九一四・三・十 新宿にて

龍

「やぶちゃん注…最後のクレジットと署名は。原書簡では、本文の前にこれがある。本書簡は『芥川龍之介書簡抄23 / 大正三(一九一四)年書簡より(二) 四通』の二通目で岩波旧全集版から電子化注(この書簡の注ではかなりリキを入れた)してあるので、参照されたい。」

八(大正三年三月 新宿から京都へ)

「やぶちゃん注…既に述べた通り、章番号は「九」の誤りである。また、この書簡は岩波旧全集では『前缺』とあつたので、私は不完全書簡として電子化をしなかつた。しかし、今回の恒藤恭のこの「旧友芥川龍之介」の「芥川龍之介書簡集」にも、やはり前部分欠損のままに(但し、その注記はない)収録されており、現在、最も新しいデータである岩波文庫石割透編「芥川竜之介書簡集」にも同じく前欠損で収録されている(同文庫は岩波の忌まわしい新字の新全集が典拠)ことから、この書簡は恒藤自身が、前部分を紛失して完全形は最早、期待出来ないことが判つたので、以下の電子化に先だつて、先ほど、岩波旧全集底本で電子化注をして、『芥川龍之介書簡抄152 追加 大正三(一九一四)年三月十九日 井川恭宛』として公開した。まず、そちらを読まれる方がよからうと思う。注無しに読むのは、かなりきついと思われるからである。」

新思潮の二号を送つた。

井出と云ふのは土屋、松井と云ふのは成瀬だ。六号にある記事は皆久米のちやらつぽこだから信用してはいけない。僕一人の考へでは大分下等のやうな氣がして不平がないでもない。三号へは山本勇造氏が大へん長い DRAMA「やぶちゃん注…原書簡では小文字。」をかいたので久米が俑「やぶちゃん注…よう」ひとがた人形。原書簡の私の後注を参照。」を造つたのを悔いて

ゐる。

比頃も不相変不愉快だ。新思潮社の同人とも水と油程でなく共「やぶちゃん注…とも」。石油と種油にはちがつてゐる 併しどう考へても、あるがまゝの己が最も尊いやうな氣がする（人の EINFUSS をうけやすい人間だけに余計こんな氣がするのかもしれないが）。ひとりで本をよんだり、散歩したりするのは少しさびしい。

胃病が「やぶちゃん注…原書簡ではここに「又」と入る。」少し起つた。休みはどうしやうかと思つてゐる。

成瀬や佐藤君は一高の應援隊を利用して、汽車賃割引で京都へゆくと云つてゐる。

石田君が大へん勉強してゐる。來年はきつと特待になると云ふ評判である。前より少し青白くなつたやうな氣もする。「やぶちゃん注…以下に石田への悪口があるが、恒藤恭によつてカットされており、以下に続くはずの二段落分もカットされてしかも詰めてある。」

佐藤君はフロオペールとドストエフスキーをよんでゐる。谷森君とは毎日大抵一緒にかへる。相不變堅実に勉強してゐる。谷森君のおとうさんは貴族院の海軍予算修正案賛成派の一人ださうだ。尤も内閣の形勢が悪くなる前は權兵衛をほめてゐたが、風向がかはると急に薩閥攻撃にかはつたんだから、少しあてにならない賛成家らしい。

時々山宮さんと話しをする アイアランド「やぶちゃん注…ママ。」文学を研究してゐるひとりで僕をシング（小山内さんにきいたらシングがほんとだと云つた）の研究者にきめていろいろな事をきくのでこまる。アイアランド文学号を出すについても、グレゴリーの事をかく人がなくつてこまつてゐる。著書が多いから仕末が悪いのだらう。

畔柳さんの会は相変らずやつてゐる。今度はダンヌンチヨださうだ。

前には遠慮をしてしやべらなかつたが、僕も此頃は半分しやべる。鈴木君と石田君とが一番退屈な事を長くしやべる。其度に畔柳さんにコーヒーと菓子の御馳走になる。何でもその外に畔柳さんは三並さんや速水さんや三浦さんと一緒に觀潮何とかと云ふ会をつくつて、一高の生徒を聴衆に月に一回づつ講演をしてゐるさうだ。

芝の僕のうちの井戸の水が赤つちやけてゐて、妙にべとべとする。昔から何かある井戸だと云つてゐたが、此頃衛生試験所へ試験を願つたら、わざわざ出張してしらべてくれた。試験の結果によると、ラヂウムエマナチオン「やぶちゃん注…原書簡では「ラヂウム」と「エマナチオン」の間に一字空けがある。」があつて、麻布にあるラヂウム泉と同じ位の強さだと云ふ。芝のうちのものは皆毎日湯をわかしてははいつてゐる。今にこの井戸が十萬円位にうれたら僕を洋行させてくれるさうだ。

うちの二階からみると、枯草の土手の下にもう青い草が一行につづいてゐる。櫛の枝のさきにもうす赤い芽が小さくふいて來た。春の呼吸がすべての上をおほひ出したのだと思ふ。雨にぬれた土壤からめぐむ艸のやうに心の底の暖みから生まれるともなく生まれる

「煙」のやうなものに、出来るなら形を與へたい。僕は此頃になつてよんでゐるツアラトストラのアレゴリーに限りない興味を感じずにはゐられない。

時々自分のすべての思想、すべての感情は「やぶちゃん注…原書簡ではここに「悉」(ことごとく)と入っている。」とうの昔に他人が云ひつくしてしまつたやうな氣がする。云ひつくしてしまつたと云ふより、その他人の思想、感情をしらずしらず自分のもののやうに思つてゐるのだらう。ほんとうに自分のものと称しうる思想、感情はどの位あるだらうと思ふと心細い。オリギナリテートのある人なら、こんな心細さはしらずにすむかもしれない。

時々又自分は一つも思つた事が出来た事のないやうな氣もする。いくら何をしようと思つても、「偶然」の方が遙に大きな力でぐいぐい外の方へつれ行つてしまふ。全体自分の意志にどれだけ力があるものか疑はしい。成程手や足をうごかすのは意志だが、その意志の上の意志が自分の意志に働きかけてゐる以上、自分の意志は殆「やぶちゃん注…「ほとんど」。」意志の名のつけられない程貧弱なものになる。其上己の意志以上の意志が國家の意志とか社會の意志とか云ふものより更に大きな意志らしい氣がする。何故ならば國家の意志なり社會の意志なりを究極「やぶちゃん注…原書簡では「屈竟」。」の意志とすれば、その上に與へらるる制限の理由を見出す事が出来ない(それがベシユテムンせらるゝ理由を見出す事が出来ない)からだ。事によると自由と云ふものは絶対の「他力」によらないと得られないものかもしれない。

此頃別様の興味を以てメートルリンクの戯曲がよめるやうになつた。空氣のやうに透明な戯曲だ。全体の統一を破らない爲には注意と云ふ注意を悉く拂つてある戯曲だ。美と云ふものに対して最注意ぶかい、最敏感な作者のかいた戯曲だ。それでゐて、おそろしい程EFFECTがある。僕は其上にあの「ランプのそばの老人」の比喻を晒つた「やぶちゃん注…「わらつた」。」アーチャーを晒ひたいとさへ思ふ事がある

独乙語の試験の準備をするからやめる。あさつて試験。

龍

「やぶちゃん注…最終段落の「EFFECT」は、原書簡では、この部分だけ縦書欧文となっているが、底本はここも横書となっている。」

九(大正三年四月二十一日 新宿から京都へ)

「やぶちゃん注…既に述べた通り、章番号は「十」の誤りである。また、私は以下の書簡は電子化していませんので、このために、[「芥川龍之介書簡抄153 追加 大正三\(一九一四\)年四月二十一日 井川恭宛」](#)として岩波旧全集底本で正規表現で電子化注しておいた。まず、そちらを読まれる方がよからうと思う。注無しに読むのは、かなりきついと思われるからである。」

昨夜ノラとハンネレとをみた。

孔雀のノラ一人で、あとは皆下手だった。ハンネレに至っては舞台監督の此脚本の解釈が疎漏であるばかりでなく、道具も、演出法も甚貧弱なものであった。第一ハンネレのゴットワルドに對するTosを省いたのなどはハウプトマンに對する冒瀆の甚しいものであらう。最後に勸工場の二階のやうな天國で寒冷紗の翼をはやした天使が安息香くさい振香爐をもつて七、八人出て來たときにはふき出したかつた位である。

長田幹彦氏の祇園をよんだ。つまらなかつた。
シングをよろしく願ふ。山宮さんもかへつて來た。

すゞかけの芽が大きくなつた。今日から天氣が悪くなると新聞に出てゐる。雨がまたつづくのだらう。

Sはほんたうに退学になつた。何でも哲学科の研究室の本か何かもち出したのを見つけて、誰かになぐられて、それから退校されたと云ふ事だ。卒業の時のいろんな事に裏書きをするやうな事をしたから、上田さんも出したのだろ。其後おとうさんがつれに來たのを、途中でまいてしまつて姿かかくしたさうだが、又浅草でつかまつて、東北のおぢさんの所へおくられたさうだ。かはいさうだけど、仕方がなかる。あんまり思ひきつた事をしすぎるやうだ。

二食にしてから弁当がいらないので甚便利だ。之から少しべんきやうする。

いつか君がワイルドのサロメの中の「癩病のやうに白い」と云ふ句をいいと云つたら。あれはエンシエント・マリナーの中の句だ。アアサア・ランサムが「ワイルドの豎琴は借物だつた」と云つたのも少しはほんらしい。

からだの具合もいゝ。御健康を祈る。

「やぶちゃん注」：「S」恒藤による伏字。原書簡は「佐野」。前記リンク先の私の注を参照されたい。」

「やぶちゃん注・標題に「一〇」とあるのは「一一」の誤り。なお、本書簡は既に二〇二一年四月一日に『芥川龍之介書簡抄26 / 大正三（一九一四）年書簡より（四） 六月二日井川恭宛 長編詩篇「ふるさとの歌」』として原書簡を電子化して注してある。また、実は本書のこの前の書簡と、この書簡の間には、井川（恒藤）恭宛の芥川龍之介の非常に重大な一通が存在しているのだが、恒藤恭はその書簡を本書では恣意的に掲げていない。それは――芥川龍之介のプライバシー（失恋）に踏み込む危険性を憚ったこと――であろう（私はどうってことはないと思うが）。当該書簡は『芥川龍之介書簡抄25 / 大正三（一九一四）年書簡より（三） 五月十九日井川恭宛』である。さらに付け加えると、このリンク先の前後で、私はかなりレアな（あまり知られてはいないという意味で）『芥川龍之介書簡抄24 / 特異点挿入★大正二（一九一三）年或いは翌大正三年の書簡「下書き」』（推定）★――初恋の相手吉村千代（新原家女中）宛の〈幻しのラヴ・レター〉――や、芥川龍之介の恋（失恋・破局に終わる）の初めと一般に理解されている『芥川龍之介書簡抄27 / 大正三（一九一四）年書簡より（五） 吉田彌生宛ラヴ・レター二通（草稿断片三葉・三種目には七月二十八日のクレジット入り）』（これは芥川龍之介好きならまず知っている全集所収の書簡）も電子化注してあるので、ご覧あれ。

なお、以下の詩篇の第一連は底本では改ページ〔283〕が左ページで〔284〕は右ページで〔283〕の裏に相当する）であるが、底本の版組では以下で第二連として示す連との間を孰れのページにおいても空けた形跡が物理的に存在しない。実は同じ現象が〔289〕と〔290〕でも起こっているのである。しかし、原書簡では孰れも二箇所ともに一行空けであるので、ここでは特異的に一行空けた。底本原本を読む人間は改ページで行空け効果を与え得るので、取り立てて問題はなかったのかも知れぬが、私はそれでは我慢が出来ないからである。悪しからず。まあ、萩原朔太郎でさえ、単行本で改ページ行空けとぶつかった部分で気にした形跡が殆んどないほどであるから、恒藤恭に対して文句を言うつもりは毛頭ない。さらに読み進めていかれると私の注が突然入るのであるが、残念なことに、原書簡から一連分が丸々抜け落ちているのである。

最後にちよつと言っておくと、四連目の「狭丹塗の矢」は「さいにぬりのや」で、「赤い土や顔料で塗った特別な神聖を持つ矢」を指す。五連目の「鉏」は「うでわ」。その後私の挿入注の後の二つ目の連の「櫛弓」は「はじゆみ」或いは「はじ」と読めるが、私は音数律から「はじ」と読みたい。」

ふるさとの歌

人がゐないと女はしくしくないてゐる

葉の黄いろくなつた橡の木の
下で
白い馬のつないである橡の木の
下で

何故なくのだから誰もしらない――
葉の黄色くなつた橡の木の
下で
日の沈んだあとのうす赤い空を
みて
女はいつ迄もしくしく泣いて
ゐる

お前が大事にしてゐる青瑠璃の
曲玉を
耳無山の白兔にとられたのか
お前の夫の狭丹塗の矢を
小田の鳥が啣へ行つたのか

何故なくのだから誰もしらない――
両手を顔にあてゝしくしくと
すゝなきながら女は
とほい夕日の空をながめて
ゐる

そんなにお泣きでない
腕にはめた金の釧が
ゆるくなるほどやせたぢや
あないか
そんなにお泣きでない

女はなきやめるけしきはない
それもそのはずだ
とほい夕日の空のあなたには
六人の姉妹きょうだいがすんでゐる

六人の姉妹は女の來るのを
待つてゐる
一番末の妹の女の來るのを
待つてゐる
空のはてにある大きな湖で

湖の上にいるゐる六羽の白鳥が
女の來るのを待つてゐる
青琅玕の水にうかびながら
妹の來るのを待つてゐる

七年前に七人で

この國の海へ遊びに來たときに――

海の水をあびて

白鳥のうたをうたひに來たときに――

海の水はあたゝかく

砂の上には薔薇がさいて

五月の日の光が

眞珠の雨のやうにふつてゐた――

「やぶちゃん注：実は、原書簡では、この後に以下の一連があるのであるが、非常に残念なことに、本書では一連が、丸々、全部、抜けてしまっている。恐らくは恒藤が所持する書簡から原稿に写し書きした際のミスと思われる。恐らく筑摩書房全集類聚版は本底本から引いたらしく、同じように抜けている。

*

七人とも白鳥の羽衣をぬいで

白鳥のうたをうたひながら

海の水をあびてゐた時に――

七人の少女をとめが水をあびてゐた時に

*

これは芥川龍之介の原詩の詩想を枉げることになるので、敢えて途中で同ポイントで注を挿入しておく。」

卑しいこの國の男が砂山のかげへ

そつとしのびよつて羽衣の一つを

知らぬ間にぬすんだので

――何と云ふきたないふるまひだらう――

卑しい男のけはひに七人ともあわてゝ

羽衣をきるのもいそがはしく

白鳥に姿をかへたとび立つと

――丁度櫛弓の音をきいたやうに――

空にとび立つたのは六羽

羽衣を着たのは六人――

一番末の妹は羽衣をとられて

裸身はだかみのまゝ砂の上に泣きながら立つてゐた

その時その卑しい男にかどわかされた

一番末の妹を思ひながら

六羽の白鳥は湖の空に

七つの星をかぞへながら待つてゐる

一番末の妹は夫になつた卑しい男が

ゐなくなると何時でもしくしくと

泣きながら夕日の赤い空をながめてゐる

葉の黄いろくなつた橡の木の下で

卑しい男の妻になつた女は

何時空のはてにあるあの大きな湖へ

六人の姉がまつてゐる湖へ

帰ることが出来るだらう

女の夢には湖の水の音が

白鳥の歌と共にきこえてくる

なつかしい湖の水の音が

月の中に睡蓮の咲く湖の水の音が

卑しい男の妻になつた少女は

湖の水を恋ひて

毎日ひとりでないでゐるが

何時あの湖へかへれるだらう

耳をすましてきけ

おまへのたましひのたそがれにも

しくしく泣く声がするのをきかないか

耳をすましてきけ

お前の心のすみにも

白鳥の歌がひびくのをきかないか

人がゐないと女はしくしくないてゐる

葉の黄いろくなつた橡の木の下で

白い馬のつないである橡の木の下で

(一九一四・六・二)

R. AKUTAGAWA

「やぶちゃん注…途中で注した通り、一連脱落という致命的ミスがあるので、原書簡で再度、読まれんことを強くお薦めする。」

一一 (大正三年六月十五日 新宿から京都へ)

「やぶちゃん注…標題に「一一」とあるのは「一二」の誤り。」

こつちも試験で忙しい。心理なんか大抵よまない所が出て悲観しちやつた。六十点とれたかどうか、それさへわからない。苦しむと云ふのと覚えると云ふのとは別々な現象で、其間に必然的な関係はない。それを必然的な関係があると誤断して、その上にそれをひつくりかへして苦めさへすれば覚えるとしたのが試験の制度だ。此意味で試験問題をつくる人は中世の INQUISITION の判官にひとしい。事によると更に下等かもしれない。何となれば試験は陋烈な復讐心が其行爲を規定する主なファクターになつてゐるからだ。自分も試験で苦しんだから若い奴もと云ふやつだ。何とか云ふが、兎に角理屈はぬきにして、いやなものはいやだ。

青木堂で¹岩元さんにあつたら「人間の頭ちふものは大がい際限のあるもんで、午前中よりきかんものだ。それを午すぎに講義をするなんちふ奴は、する奴もする奴だが、きく奴もきく奴さなあ」と云つた。それから、「おらあ自分でやる授業でも午すぎのやつはでたらめをしゃべつてるんだが、そのわりに間違はないものだけ」と云つた。何だか酒屋の番頭に羊羹の拵へ方をきいてるやうな氣がした。

石田君は勉強して特待になる。谷森君は今日の心理で僕位しくぢつたが、なるかもしれない。久米はなまけてみて八單位とるさうだ。

みんなよく一朝事あるときに平生の生活状態の均衡をやぶつて顧ないでゐられる。この頃僕は肉体的にも精神的にもそんな勢がなくなつてしまつた。

²プリフェアのところへ行つたら、伊太利亞語をやらなくつちやあだめだと云はれた。

西班牙語の詩をよんできかせられた。西班牙語が南の語では一番やさしいさうだ。一つ伊

太利亞語、西班牙語でもはじめるかなと思つたが、今はもうそんな氣はしなくなつた。しかし伊太利亞語がよめるとちよいといゝな。

新思潮は一冊君の國のうちへおくつた。試験がこつちより早くすんで、二十日前にはもう君が宍道湖のある町へかへつてゐるだらうと思つたからだ。例によつて同人一人につき雑誌一冊しかもらへないのだから。

あと一冊は今手許にないのですぐに送れない。あさつて試験で学校へゆくから、その時にする。この手紙より二、三日遅れるだらう。

あさつてコツトの希臘羅馬文学史の試験がある。こいつも大変だ。セオクリタス、アポロニウス、サイロピデア、シンサス、アプレリウス——人の名だか本の名だか地名だかわすれてしまふ。とりあへず。

六月十五日夜

龍

註1 故岩元禎氏(当時、一高教授、担当はドイツ語)

2 イギリス人

「やぶちゃん注…この書簡は、電子化していなかったもので、新たに「芥川龍之介書簡抄1 54 追加 大正三(一九一四)年六月十五日 井川恭宛」として岩波旧全集の正規表現版で電子化注しておいたので、そちらを参照されたい。」

一一二(大正三年九月 新宿から京都へ)

「やぶちゃん注…標題に「一一二」とあるのは「一一三」の誤り。」

ミラノの畫工

ミラノの画工アントニオは

今日もぼんやり頬杖をついて

夕方の鐘の音をきいてゐる

鐘の音は遠い僧院からも

近くの尼寺からも

雨のやうにふつて来る

するとその鐘の音のやうに

ぼんやりしてゐるアントニオの心に

おちてくるものがある

かなしみかもしれない
よろこびかもしれない

唯アントニオはそれを味はつてゐる

「先生のレオナルドがゐなくなつてから
ミラノの畫工はみな迷つてゐる」

かうアントニオは思ふ

「葡萄酒をのむ外に
用のない人間が大ぜいゐる
それが皆 画工だと云つてゐる

「レオナルドのまねをして
解剖図のやうな画を
得意になつてかく奴もゐる

「モザイクの壁のやうな
色を行儀よくならべた画を
根氣よくかいてゐる奴もゐる

「僧人のやうな生活をして
聖母と基督とを
同じやうにかいてゐる奴もゐる

「けれども皆画工だ
少くも世間で画工だと云ふ
少くも自分で画工だと思つてゐる

「自分にはそんな事は出来ない
自分は自分の画と信ずる物を
かくより外の事は何も出来ない

「しかしそれをかく事が又中々出来ない
何度も木炭をとつてみる

何度も絵の具をといてみる

「いつも出来上るのは醜い画にすぎない
けれども画は画だ
いつか美しい画がかかる時がくる

「かう思ふそばから
何時迄たつてもそんな時来ないと
誰かが云ふやうな氣がする

「更になさけないのは
醜い画が画でない物に
外の人のかくやうな物になつてゐる事だ

「己はもう画筆をすてやうか
どうせ己には何も出来ないのだ
かう思ふよりさびしい事はない

「同じレオナルドの弟子だつた
ガブリエレはあの僧院の壁に
ダビデの像をかいたが

「同じレオナルドの弟子の
サラリノはあの尼寺の壁に
マリアの顔をかいたが

「己はいつ迄も木炭を削つてゐる
いつ迄も油絵具をとかしてゐる
しかし己はあせらない

「己はダビデよりマリアより
すぐれた絵をかき得る人間だ
少くもあんな絵はかけぬ人間だ

「たゞ絵の出来ぬうちに
己が死んでしまふかもしれぬ

己の心が凋んでしまふかもしれぬ

「たゞ画をかく

之より外に己のする事はない

之ばかりを己はちつと見つめてゐる

「この企てが空しければ

己のすべての生活が空しいのだ

己の生きてゐる資格がなくなるのだ」

アントニオはかう思ふ

かう思ふと涙がいつとなく

頬をつたはつて流れてくる

アントニオは今日もぼんやりと

夕月の出た空をながめながら

鐘の音をきいてゐる

君にあつて話したいやうな氣がする。此頃は格別不愉快な事が多い。

龍

追 伸

出来るに従つてかく。唯今ひま。

あざれたる本郷通り白らませて秋の日そゞぐ午後三時はも

紅茶の色に露西亞の男の頬を思ふ露西亞の麻の畑を思ふ

秋風は南瞻部洲ぜんのかなたなる寂光土よりかふき出でにけむ

黄埃にけむる入り日はまどらかにいま南蛮寺の塔に入るなり

秋風は走り走りて鶏の風見まはすとえせ笑ひすも

ゼムの廣告秋の入日に顔しかむその顔みよとふける秋風

をちこちの屋根うす白く光るなり秋や滅金をかけそめにけむ

ごみごみと湯島の町の屋根黒くつづける上に返り咲く櫻

遠き木の梢の銀に曇りたる空は刺されてうち黙すかも

あはただしく町をあゆむを常とする人の一人に我もあり秋

かにかくにこちたきツエアラの書をよむよみこちごちしさよ圖書館の秋

日の光「秋」のふるひにふるはれて白くこまかくおち來十月

木乃伊つくと香料あまたおひてゆく男にふきぬ秋の夕風

秋風の快さよな佇みて即身成佛するはよろしも

龍

「やぶちゃん注・本書簡原本は既に『芥川龍之介書簡抄31 / 大正三(一九一四)年書簡より(九) 井川恭宛(詩「ミラノの画工」及び短歌十四首収録)』で電子化注済みである。また、そこにもリンクさせてあるが、同時期に芥川龍之介が訳した「レオナルド・ダ・ヴィンチの手記 芥川龍之介譯 ——Leonardo da Vinci——」(リンク先は私の古いサイト版電子化)も参考になろう。また、短歌の七首目の「光るなり」は原書簡では「光るありである。恒藤の転写の誤りか、誤植であろう。」

一三(大正四年二月二十八日 田端から京都へ)

「やぶちゃん注・標題に「一三」とあるのは「一四」の誤り。」

ある女を昔から知つてゐた。その女がある男と約婚をした。僕はその時になつてはじめて僕がその女を愛してゐる事を知つた。しかし僕はその約婚した相手がどんな人だかまるで知らなかつた。それからその女の僕に対する感情もある程度の推測以上に何事も知らなかつた。その内にそれらの事が少しづつ知れて來た。最後にその約婚も極大體の話が運んだのにすぎない事を知つた。

僕は求婚しやうと思つた。そしてその意志を女に問ふ爲にある所で会ふ約束をした。所が女から僕へよこした手紙が郵便局の手ぬかりで外へ配達された爲に、時が遅れて、それは出來なかつた。しかし手紙だけからでも僕の決心を促すだけの力は與へられた。

家のものにその話をもち出した。そして烈しい反對をうけた。伯母が夜通し泣いた。僕も夜通し泣いた。あくる朝むづかしい顔をしながら僕が思切ると云つた。それから不愉快な氣まづい日が何日もつゞいた。其中「やぶちゃん注」に「そのうち」に僕は一度女の所へ手紙を書いた。返事は來なかつた。

一週間程たつてある家のある会合の席でその女にあつた。僕と二、三度世間並な談話を交換した。何かの拍子で女の眼と僕の眼とがあつた時、僕は女の口角の筋肉が急に不随意筋になつたやうな表情を見た。女は誰よりもさきにかへつた。

あとで其処の主人や細君やその阿母さんと話してゐる中に女の話が出た。細君が女の母の事を「あなたの伯母さま」と云つた。女は僕と従兄妹同志だと云つてゐたのである。

空虚な心の一角を抱いてそこから歸つて來た。それから学校も少しやすんだ。よみかけたイブナイリイッチもよまなかつた。それは丁度ロランに導かれてトルストイの大いなる水平線が僕の前にひらけつゝある時であつた。大へんにさびしかつた。五、六日たつて前の家へ招かれた礼に行つた。その時女がヒポコンデリックになつてゐると云ふ事をきいた。不眠症で二時間位しかねむられないと云ふのである。その時その細君に贈つた古版の錦繪の一枚にその女に似た顔があつた。細君はその顔をいゝ顔だ云つた。そして誰かに眼が

似てゐるが思出せないと言つた。僕は笑つた。けれどもさびしかつた。

二週間程たつて女から手紙が来た。唯幸福を祈つてゐると云ふのである。其後その女にもその女の母にもあはない。約婚がどうなつたかそれも知らない。芝の叔父の所へよばれて叱られた時に、その女に關する悪評を少しきいた。

不性な「やぶちゃん注」ママ。「無精な」の慣用。」日を重ねて今日になつた。返事を出さないのでしまつた手紙が沢山たまつた。之はその事があつてから始めてかく手紙である。平俗な小説をよむやうな反感を持たずによんで貰へれば幸福だと思ふ。

東京ではすべての上に春がいきづいてゐる。平静なる、しかも常に休止しない力が悠久なる空に雲雀の声を生まれさせるのも程ない事であらう。すべてが流れてゆく。そしてすべてが必「やぶちゃん注」：「かならず」。止るべき所に止る。学校へも通ひはじめた。イブナイリイッチもよみはじめた。

唯、かぎりなくさびしい。

二月廿八日

龍

「やぶちゃん注」失恋——見方を変えれば——芥川家の強烈な反対による——民俗社会的破局——の側面も強い吉田彌生との破談の一件を、芥川龍之介が初めて、親友であつた著者に詳らかに明かしたもので、芥川龍之介書簡の内、超弩級に重要な一本である。この心傷は恐らく芥川龍之介の全生活史の中で、実母の精神的欠損に次いで、対人関係（特に女性）に対する思惟についてコペルニクスの転回を与えてしまつた事件であつた。思うに、芥川龍之介の、この後の彼の短い生涯の中で、夥しい女性関係を引き起こすことになるその根っこは、ここにある。彼の慢性的な PTSD (Post Traumatic Stress Disorder) 心的外傷後ストレス障害) の反側的症状として、龍之介は出逢う女性に反射的に暗示的示唆的モーションをかけて惹き込ませ、恋愛関係を〈模造〉し、而して、同時にそれに神経症的に苦しむことになるという事態を、複数の女性との間に繰り返すことになつたのである。或いは、この時のトラウマが、龍之介の中に、『自分は必ず女を虜にすることが出来る、出来ねばならない』という倒立した関係妄想を、終生、形成させたのだとも私は考えている。原書簡は「芥川龍之介書簡抄35」／大正四(一九一五)年書簡より(一) 井川恭宛 龍之介の吉田彌生との失恋告白書簡」で詳細に正規表現で電子化注してあるので参照されたい。

なお、発信地が「田端」に変わっている。この四箇月ほど前の前年十月末、芥川家は新宿の実父新原敏三所有の家から、新築した東京府北豊島郡滝野川町字田端四三五番地（現在の北区田端一丁目）のここ。グーグル・マップ・データ）に転居していた。芥川龍之介の終の棲家となつた。」

「やぶちゃん注：「一四」とあるのは「一五」の誤りであり、また、クレジットの大正四年は恒藤恭の勘違いで、明治四十五年の大きな誤りであり、従って「田端」も「新宿」が正しい。従って、本「芥川龍之介書簡集」では、「一」の前に配されるべき、井川（恒藤）恭宛書簡の最古層に配されるべきものである。」

新聞を送つて下すつて難有う。幾日か君の帰郷の道すぢをよむことが出来るのを楽しみにしてゐる。

讀書三昧所か毎日半日は何かしら用が出来てつぶされてしまふ。せめて七月にでもはいつたら少しは落つける事だらうと思ふ。

二十六日の晩 OPERA をみに行つた 僕の行つた晩は Tanner と云ふ人の THE QUAKER GIRL と云ふ出し物だつた。毎日曲がかはるので、二十九日にはあの Musume をやるんださうだ。見物には西洋人が可成沢山きてゐた。三等にさへ夫婦づれが二組来て居たと云へば、BOX や ORCHESTRA STALL に沢山きてゐたのはしれるだらう。

藤岡君と一緒にゐる。予想してゐたより割合に下品で、その上予想してゐたより遙に話す言葉がわからない。笑はせる事は随分笑はせる。僕のうしろにゐた米國人らしい女なんぞは、黄色い薔薇の造花をつけた、パナマの大きな帽子が落ちはしないかと心配するほど笑ふ。PINK の襟飾をつけた品のいゝその亭主も時々笑ひ声を何段にも鼻からきつて出す。

唯不快だつたのは upper circle や gallery にゐる三等四等の日本人が偶々拍手さへ長くつゞけてゐれば必ず俳優はその技を何度でもくりかへすべき義務があるものと盲信して ENCORE の拍手を長々と何時までもやつてゐる事であつた。

はねて、明い灯のついた玄関を外へ出るときに、浅黄縞子「やぶちゃん注：「しゆす。」の地へ雲と龍と麒麟との刺繍をした支那めいた上衣の女を見た。その下から長くひいた淡黄色の JUPON も美しい、つれのもつとぢみななりをした年よりの女と自動車まで話しながら歩いてゆくのである。話は英語のやうだつたし、OPERA よりもこの女に一人あつたので、余程西洋らしい心もちがした。

二十四日か三日に寮へ行つた。教室では札幌農大の試験をやつてゐた。あの廊下の練瓦の壁に貼つてある数学の問題をみると、大概やさしい。寮には鈴木と八木と黒田と根本がのこつてゐた。藤岡はときくと、西寮の三階に独りで住んでゐるのだと云ふ。anchorite みたいだなと思ふ。

今はもう皆國へかへつてしまつた。藤岡君だけは三十日頃かへると云つてまだのこつてゐる。あの白い壁へ殆半年ばかりぶらさがつてゐた新島先生も、もう鈴木 of 行李の底へはいつて仕舞つたらう。Adieu

六月二十八日午後

東京にて

龍

「やぶちゃん注：既に「芥川龍之介書簡抄8 / 明治四五・大正元（一九一二）年書簡より（1） 八通」の七通目で電子化注してあるので参照されたい。なお、そちらでは、最後のクレジットと署名は書簡冒頭にある。」

一五（大正四年七月二十九日 田端から松江へ）

「やぶちゃん注：「一五」とあるのは「一六」の誤り。」

差支へさへなければ、三日に東京をたつ。

五日には松江へゆけるだらう。よろしく御ねがひ申します。

龍

「やぶちゃん注：井川（恒藤）恭が芥川龍之介の失恋の痛手を癒すために、井川の故郷松江に招いた、そのプレの礼状である。これは恒藤恭は何も註していないが、実は自筆絵葉書でルノアール風の裸婦の絵が裏面に描かれている。これは本書中の「芥川龍之介のことなど」の「四 藝術的作品と制作者の性格」の途中に、「女 芥川龍之介ゑがく」というキャプションを伴って画像として使用されてある（ここ）。当該原書簡は「芥川龍之介書簡抄4 2 / 大正四（一九一五）年書簡より（八） 井川恭宛三通」の二通目で電子化注しており、そこに異なったソースの二種の画像を掲げてあるので見られたい。なお、この年の春、ルノアールの原画を見て、龍之介はいたく感動している。「芥川龍之介書簡抄36 / 大正四（一九一五）年書簡より（二） 失恋後の沈鬱書簡四通」の四通目の「大正四（一九一五）年四月十四日・田端発信・井川恭宛（転載）」を参照。」

一六（大正五年三月十一日 田端から京都へ）

「やぶちゃん注：標題に「一六」とあるのは「一七」の誤り。」

論文と原稿とが忙しかつたので、大へん御ぶさたした。これと一しよに寮歌集も送る。

「やぶちゃん注：原書簡ではここに「(第二)」と行頭にあるのをカットしてある。」

それから御願が一つある。「荒川重之助（？）の事蹟を知る事は出来なからうか。酒のみで天才だと云ふ事だけは君からきいた。あれとヘルン氏とを材料にして出雲小説を一つかきたい。松江の印象のうすれない内に。」

是非たのむ。

閃かす鳥一羽砂丘海は秋なれど

今は俳句気分になつてゐない

十一日

龍

註1 出雲の人。彫刻家。稲田姫の彫像―稲田姫が右手で胸のあたりに劍を水平に持ち、

伏し目にそれを見すえてゐる木彫彩色の彫像が彼の作品の中でも有名である。

「やぶちゃん注」読者の諸君は「第一」が気になると思うが、旧全集でも以上と同じで、「第二」は存在しない。ところが、岩波の新全集で原書簡が見つかり、復元されている。それを表記を推定復元したものを、「芥川龍之介書簡抄55 / 大正五(一九一六)年書簡より(二) 井川恭宛二通(芥川龍之介に小泉八雲を素材とした幻しの小説構想が彼の頭の中にあつた事実・「鼻」反響(注にて夏目漱石の芥川龍之介宛書簡を翻刻)」の冒頭で電子化注してあるので、是非、参照されたいが、その推定復元の「第二」の本文を以下に示しておく。

*
(第二)「鼻」は二つのベグリップスインハルトを持つてゐる 一つは肉體的缺陷に對するヴァニテの苦痛(ハウプト)一つは傍觀者の利己主義(ネエベン)―それ以上に何もずるい企「やぶちゃん注」：「くはだて」をした覺はない 君がずるい企の意味を明にしなかつたのを遺憾に思ふ 傍觀者の利己主義は二つのベディングングを加へて全體の自然さを破らないようにした 一つは内供の神經質(性格上)一つは鼻の短くなつてから又長くなる迄の期間の短い事(事件上)だ それが徹底していなかつたと云へばそれ迄だが 次の號は四月一日發行にした 僕は小品をかいた 出來たら送る

*
「稲田姫の彫像―稲田姫が右手で胸のあたりに劍を水平に持ち、伏し目にそれを見すえてゐる木彫彩色の彫像」彼のウイキも参照されたいが、これは一八九三(明治二十六)年にアメリカで開かれた「シカゴ万国博覧会」で優等賞を受賞した彫像「くしいなだひめのみこと櫛稲田姫命」のことで、[takuya氏のブログ「タクヤの写真館」の「出雲の天才彫刻家荒川亀齋\(鳥根県松江市\)」](#)で、モノクローム写真で、その画像を見ることが出来る。調べたが、この像は現存しないようである。」

一七(大正五年三月二十四日 田端から京都へ)

「やぶちゃん注」：「一七」は「一八」の誤り。」

荒川の事はちよいとした小品にかかうと思つてゐた。わざわざしらべて貰ふほど大したものではない。何かあの人の事をかいた本はないかな。

ヘルンが石地藏を見た話は知つてゐる。かかうと云ふ氣にはその話からなつたのだ。

「鼻」の曲折が *natural* でないと云ふ非難は當つてゐる。それは綿拔瓢一郎も指摘してゐた。重々尤に思つてゐる。

それから夏目先生が大へん鼻をほめて、わざわざ長い手紙をくれた。大へん恐縮した。成瀬は「夏目さんがあれをそんなにほめるかなあ」と云つて不思議がつてゐる。あれをほめて以來成瀬の眼には夏目先生が前よりもえらくなく見えるらしい。成瀬は自分の骨ざらしが第一の作で、松岡の「鴛唄摩」「やぶちゃん注：「あうくつま」」がそれに次ぐ名作だと確信してゐる。

僕はモオパッサンをよんで感心した。この人の恐るべき天才は自然派の作家の中で匹儔「やぶちゃん注：「ひつちゅう」(ひつちゅう)。匹敵すること。同類・仲間と見做すこと。また、その相手」のない鋭さを持つてゐると思ふ。すべての天才は自分に都合のいゝやうに物を見ない。いつでも不可抗的に欺く可らざる眞を見る。モオパッサンに於ては殊にその感じが深い。

しかしモオパッサンは事象をありのままに見るのみではない。ありのままに観じ得た人間を憎む可きは憎み、愛す可きは愛してゐる。その点で万人に不関心な冷然たる先生のフロオベールとは大分ちがふ。*me vie* の中の女などにはあふるゝばかりの愛が注いでゐる。僕は存外モオパッサンがモラリスティックなのに驚いた位だ。

この頃コンスタンタン・ギュイの画をみて感心した。あれの素描は日本人にも非常によくわかる性質を持つてゐるらしい。墨の濃淡などでも莫迦に日本画的な所がある。大きなデイルネの素描は殊に感心した。それからドラクロア——ダンテの「やぶちゃん注：原書簡ではここに「舟」と入っている。」一枚でも立派なものだ。テイントオレットオとドラクロアはいゝ複製のないので有名だが、その悪い複製でも随分感心させられる。あの男の画は恐しくダイナミックだ。オフエリアの画なんぞを見ると殊にさう思ふ。

論文で大多忙。「やぶちゃん注：以下、捲つて改ページで、一行空けはないが、原書簡に従い、特異点で一行空けた。」

¹ロオレンスが死んだ。可愛さうだつた。おともらひに行つた。さうしてこの老教師の魂の爲に祈つた。ロオレンス自身には何の恩怨もない。下等なのはその周囲の日本人だ。

ロオレンスの死顔は蠟のやうに白かつた。そしてその底にクリムソンの澱そりをり「やぶちゃん注：ママ。歴史的仮名遣では「おり」でよく、原書簡でもそうルビで振られてゐる。」がたまつてゐる。

た。百合の花環、黒天鷲絨の柩、すべてがクエエカアらしく質素で且清淨だつた。僕はロオレンスが死んだ爲に、「反て「やぶちゃん注」かへつて」。いろんな制度が厄介になりはしないかと思つてゐる。ロオレンスの死が喜ばしたのは成瀬位だらう。成瀬はあの朝方々へ、ル・デアブル・エ・モオルと云ふ句にボン・クラアジュと云ふ！を加へたはがきを出した。「やぶちゃん注」以下、**短歌四首を含む四段落**（旧全集で本文活字のみで全十五行。総てに行空け有り）がごっそりカットされてゐる。」

ふみ子を貰ふ事については猶多少の曲折があるかもしれない。さうして事によると君に相談しなければならぬやうな事が起るかもしれない。僕はつよくなつてゐる。それだけ余計に曲折をつくる周囲の人間を憫んでゐる。僕が折れる事はないのだから。

まだはつきりした事はわからない。

本をよむ事とかく事とが（論文も）一日の大部分をしめてゐる。ねてもそんな夢ばかり見る。何だかあぶないやうな、さうして愉快なやうな氣がする。いやな事は一つもしない。散歩にふらふらと出て遠くまで行く事がよくある。今日まで三日ばかり逗子の養神亭へ行つて来た。湘南は麥が五寸ものびてゐる。菜はまだあまりさかない。梅は遅いが桃が少しさいてゐる。ある日の夕かた秋谷の方へ行つたかへりに長者ヶ崎の少し先の海の岸に白いものが靄の中でうすく光つてゐるから、何かと思つたら桃だつた。山はまだ枯木ばかり、唯まんさくの黄いろい花が雪解の水にのぞんでさいてゐる事がよくある。鳥はひよ、山しぎ、時によると雉。論文をかきあげたらどこかへ行きたい。それまでは駄目。

逗子葉山の海には海雀が多い。銀のやうに日に光る胸を持つたかはいゝ鳥だ。かいつぶりに似た声で啼く。鴨、鷗、あいさも多い。

東京へかへつたら又切迫した心もちになつた。

來るものをして來らしめよと云ふ氣がする。

龍

註1 イギリス人、東京帝大講師、担当は英文学。

「やぶちゃん注」この前の回と同じく「芥川龍之介書簡抄55 / 大正五（一九一六）

年書簡より（二） 井川恭宛二通（芥川龍之介に小泉八雲を素材とした幻しの小説構想が

彼の頭の中にあつた事実・「鼻」反響（注にて夏目漱石の芥川龍之介宛書簡を翻刻）」の二通目で電子化注してある。以上はカット部分があるので、参照されたい。」

「やぶちゃん注：「一八」は「一九」の誤り。」

I

白ふぢの花のほひときくまでにかそけかれどもかなしみはあり
夕やみにさきつゝにほふ白藤の消なば消ぬべき恋もするかな
わが恋はいよよかすかにしかはあれいよよきよけくありさびにけり

II

朝ぼらけひとこひがてにほのぼのとあからひく頬をみむと思へや

III

たまゆらにきえし光とみるまでにそのたをやめはとほく行きけり

IV

天ぎらふ雲南省ゆ來りたる埴輪童女をよめに FUMIKO は似るも

（白木屋の展覧会あり）

朝づけば観音堂の尾白鳩ふくだめるこそ FUMIKO には似ね
ふと見たる金の蒔繪の琴爪箱つめをかひてやらむと思ひけりあはれ

君と同じ理由で Extra-Re-Echo を要求する資格があるかと思ふ。

自賛すればIIが一番得意。IIIはどうしても一番まづい。実感がうすいのかしらとも思つてみる。IVをかく時は氣樂に出来る。Iはともすればありあはせの SENTIMENT で間に合はせてしまひさうで良心がとがめる。それでつくつた歌はもつと沢山あつたが、三首だけしか書かなかつた。君のはがきの絵のやうに、はじめに書いた奴だけ書いたわけだ。

短篇を二つ書いた。發表したらよんでもらふ。

朝は早くおきるやうになつたから感心だ。尤も必要にせまられてだが。

今朝君が結婚したら何を祝はうかと思つていろいろ考へた。BEETHOVEN の MASK ではいけないかな。僕はこの頃この天才と BERLIOZ との傳記をよんで感心してしまつた。

龍

「やぶちゃん注：最後の署名は最終行下方十四字空け位置にある。原書簡は「芥川龍之介書簡抄69 / 大正五（一九一六）年書簡より（十六）二通」の一通目で電子化注しであるので参照されたい。」

一九（大正六年四月一日 田端から京都へ）

「やぶちゃん注」：「一九」は「二〇」の誤り。

拜復

ボクの病氣はもう大へんいゝから安心してくれ給へ。（中略）

ボクはどんな意味でも人の運命に交渉を持つ事にはこの頃益々神経質になりつゝある。

まだ病後の疲労が回復しないせぬか、何としても疲れ易い。これでよす。

それから今月の中央公論へ出した僕の小説は大に自信のない事を廣告しておく。

四月一日夜

龍

「やぶちゃん注」：この書簡は未電子化であったので、「芥川龍之介書簡抄155 追加
大正六（一九一七）年四月一日 井川恭宛」として、岩波旧全集の正規表現の中略復元版
を電子化注しておいたので参照されたい。」

二〇（大正六年 田端から京都へ）

「やぶちゃん」注：「二〇」は「二二」の誤り。なお、この書簡は、本書の先行する「芥川龍之介のことな
ど」の「九 帰京後の挨拶の手紙」（リンクはブログ版）で、一度、丸々、出ている書簡である。律儀と
いうよりも、恒藤恭の自身宛の芥川龍之介書簡を編年体（一部に大きな間違いはあるが）で資料として読
者に供するという学者的らしい配慮と言うべきである。再掲すると、原書簡は「芥川龍之介書簡抄71」
大正六（一九一七）年書簡より（三） 塚本文宛・井川（恒藤）恭宛で電子化注してある。」

先達はいろいろ御厄介になつて難有う。

その上、お土産まで頂いて、甚だ恐縮した。早速御礼を申上げる筈の所、かへつたら、
母が丹毒でねてみた爲、何かと用にかまけて、大へん遅くなつた。

かへつた時は、まだ四十度近い熱で、右の腕が腿ほどの太さに、赤く腫れ上つて、見る
のも氣味の悪い位だつた。何しろ、命に關する病氣だから、家中ほんとう「やぶちゃん注」
ママ。原書簡も同じ。」にびつくりしたが、幸とその後経過がよく、医者が心配した急性腎
臓炎も起らずにしまつた。今朝、患部を切つて、炎傷から出る膿水をとつたが、それが大
きな井に一ぱいあつた。今熱を計つたら卅七度に下つてゐる。このあんばいでは、近々快
癒するだらうと思ふ。医者も、もう心配はないと云つてゐる。

何しろ、かへつたら、芝の伯母や何かが、泊りがけで、看護に来てみたには、實際びつ

くりした。尤も腕でよかつたが。

医者曰く、「傳染の媒介は、一番が理髪店で、耳や鼻を剃る時に、かみそりがする事が多い。さう云ふのは、顔へ来る。顔がまつ赤に腫れ上つて、髪の毛が皆ぬけるのだから、女の患者などは、恢復期に向つてゐても、鏡を見て氣絶したのさへあつた」と。用心しないと、あぶないよ、實際。

とりあへず御礼かたがた、御わびまで。

まだごたごたしてゐる。

廿一日夜

龍

「やぶちゃん注」関する「恒藤恭が読み替えているのだが、ここは原書簡では「關る」であり、素直に読むならば、私は「かかはる」と訓じていると思う。」

二一（大正六年八月二十九日 鎌倉から京都へ）

「やぶちゃん注」：「二一」は「二二」の誤り。

御無沙汰した。

雅子さんも相不変御壯健な事と思ふ。僕は暑中休暇を全部東京で費した。赤木の桁平さんと京都へ行くつもりだったが、向うにある事件が始まつたので、行けなくなつた。松島見物にゆく計画もあつたが、矢張おじやんになつた。

東京では毎日日本をよんだり、ものを書いたりして甚だ太平に消閑した。消極的に屋内にばかりゐたから、芝居とか何とか云ふものには一向足を入れなかつた。人にもうちへ來たお客のお相手をした丈で、諸方へ甚御無沙汰をした。毎日暑い思をして横須賀の町をてくてく歩いてゐたあとだから、東京の暑さも大して苦にならなかつた。胃の具合も大へんに好い。概して鎌倉住みになつてから、体が丈夫になつたやうだ。

來年の三月頃鎌倉へうちを持つ筈だが、まだ漫然とした予想だけで、少しも確実にはなつてゐない。しかし下宿生活は心そこから嫌になつた。

実は学校もやめてしまつて閉靜に暮したいのだが、いろんな事情がさう云ふ事を許さない。花に洗いだり「やぶちゃん注」：「そそいだり」。本を讀んだりしてばかりゐられたら、さぞ好いだらうと思ふが、思ふだけだから悲惨だ。僕は元來東洋的エビキュリアンだからな。この間も支那人の隠居趣味を吹聴した本を讀んで、大に同情した。

東京でぶらぶらしてゐた間に義理でつくつた俳句を御らんに入れる。これを臆面もなく画帖や扇子へ書きちらかしたんだよ。

論して曰牡丹を以て貢せよ「やぶちゃん注」：「論」はママ。原書簡では「諭」である。これでは句意がおかしくなる。恒藤恭の判読の誤りか、誤植である。」

あの牡丹の紋つけたのが柏庭ぢや
牡丹切つて阿嬌の罪をゆるされし

×

魚の目を簪でつつくや冴返る

後でや高尾太夫も冴返る

二階より簪落して冴返る

×

春寒やお関所破り女なる

新道は石ころばかり春寒き

×

人相書に日蝙蝠の入墨あり

×

銀漢の瀬音聞ゆる夜もあらむ

あとは忘れちまつた。

八月廿九日

芥川龍之介

「やぶちゃん注」本原書簡は未電子化であったので、「芥川龍之介書簡抄156 追加
大正六（一九一七）年八月二十九日 井川恭宛」として電子化注しておいたので参照され
たい。

なお、句については、既に、私が強力な句「餓鬼」となって蒐集したオリジナルの「芥
川龍之介俳句全集」（こちらで全五巻）の各所で注しているが、ここで少し纏めておく。

まず、この十句は俳人芥川我鬼誕生前のプレ作品群で、一句も最後に自らが嚴撰した句群
（「やぶちゃん版芥川龍之介句集 一 発句」）には含まれていない。これらの句の半分は、
過去に見た歌舞伎見物のシークエンスを素材としているものと私は推察する。

「諭して」「さとして」。「教え導いて」。後の「貢」は「みつぎ」。ここは風流者・隠者の
嘯うそよきのポーズであり、ここに出る「牡丹」は歌舞伎役者市川団十郎家において二代目以降
の花とされているものであり、これは二代目の鼻唄方であった江戸城大奥方の女性が彼に
送った着物の柄が牡丹であったからとされることを受けて一句を構築したものと私には思
われる。

「柏筵」（はくえん）は二代目市川団十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦九（一七五九）
年）の俳号。彼ほかの蕉門の榎本其角との交流もあった。

「阿嬌」は一般には「美人」の普通名詞であるが、ここは漢籍に詳しかった芥川龍之介な
れば、その語源である陳阿嬌を指しているように思われる。阿嬌は、漢の武帝の皇后で、
大変な美人であったが、武帝より十六歳年上な上に、房事に無関心であった。そのため、武
帝も彼女のもとには通わなくなってしまう、代わりに阿嬌の姉の平陽公主、次いで衛子夫えいしふ
を愛するようになってしまい、後、子のなかった阿嬌は皇后を廃されてしまい、衛子夫が

皇后となつたいわくつきの悲劇の美女なのである。この句の「罪」は、その房事無関心の罪であり、それへのオマージュとしてのイマジナルな映像であろう。

「冴返る」時季外れの春の季題「冴返る」(春先、暖かくなりかけたかと思うと、再び、寒さがぶり返すことを言う)であるが、この語、芥川我鬼が非常に偏愛した語で、多くの句で頻繁に使用されている。なお、芥川は必ずしも同期的に句を作ることにはあまり拘らず、時に無季と思われる句も読み、新傾向の非定型句や、さらに自由律俳句と見紛う句も一時期には見られる。

「高尾太夫」は、江戸時代の新吉原の代表的名妓で、この名を名乗った遊女は十一人いたと言われているが、いずれも京町一丁目三浦屋四郎左衛門方のお抱え遊女であった。ここはそれをシンボライズした一句と思われるが、[芥川龍之介の晩年の名随想「本所兩國」](#) (昭和二(一九二七)年五月『東京日日新聞』夕刊に全十五回で連載。リンク先は私の古いサイト版電子化注)の『乗り継ぎ「一錢蒸汽」』の中で、

*

駒形は僕の小學時代には大抵「コマカタ」と呼んでゐたものである。が、それもどうの昔に「コマガタ」と發音するやうになつてしまつた。「君は今駒形こまかたあたりほととぎす」を作つた遊女も或ひは「コマカタ」と澄んだ音を「ほととぎす」の聲に響かせたかつたかも知れない。支那人は「文章は千古の事」と言つた。が、文章もおのづから句を失つてしまふことは大川の水に變らないのである。

*

と述懐しており、この句を詠んだ、知られた悲劇の二代目高尾太夫の伝説をイメージしていたのかも知れない。以上に句は万治二(一六五九)年に彼女が伊達綱宗に贈つた句とされるものだが、俗説では、高尾は熱心に通う綱宗を徹底して振り続け、結局、彼に惨殺されてしまい、これが「伊達騒動」の火種となつたとされる。

「二階より簪落して冴返る」かんざし簪を落とすというシーンはないが、私は若き日にこの句を読むに、直ちに「曾根崎心中」のお初が吊行灯を消すと同時に階下に落ちるシークエンスを思い出していた。

「新道」単なる思いつきだが、当時の東京で最も知られた「新道」の名のつくそれは、「食傷新道」(しょくしょうじんみち)である。現在の中央区日本橋一丁目附近で、今は完全な高層ビル街に変貌して往時の印象は全くない。悲惨な大火で知られる「白木屋」は後に「東急百貨店」となり、更はその跡地に現在は「[コレド日本橋ビル](#)」があるが、ここにあった細い通りが、「白木屋の横町」「木原店」と呼ばれ、左右共に美味の評判高い小飲食店が目白押しに建ち並んでいた。ここは江戸時代、文字通り、「通一丁目」として、江戸で最も繁華な場所、明治になつてもその面影が残っており、東京一の飲食店街として浅草上野よりも知られた通りであった。俗に「食傷通り」「食傷新道」などとも呼ばれた。

[「宇野浩二 芥川龍之介 十」](#) (1) (私の古い分割ブログ版)で、宇野と芥川がここある「中華亭」で食事をしつつ、『聞きとれないような低い声で、「どうも、この家(う

ち)は、僕には、『鬼門』^{きもん}だ、と、云った。』という、すこぶる印象的なシーンが出る。

「蝙蝠の入墨」言わずもがな、「お富与三郎」で知られる「与話情浮名横櫛」^{よはなさけうきなよこぐし}の「源氏店」

蝙蝠安の場面を素材とする。蝙蝠安は、ならず者で、頬に蝙蝠の刺青をしている。

「銀漢」天の川。やはり彼が句で好んだ語である。」

二二(大正六九月四日 鎌倉から京都へ)

「やぶちゃん注：「二二」は「二三」の誤り。「芥川龍之介書簡抄157 追加 大正六(一九一七)年九月四日 井川恭宛」として電子化注をしておいた。」

君に隠遁を賛成されて大にうれしくなつたから、この手紙を書く。

隠遁にかけては、どうも東洋の方が西洋の方より進歩してゐるやうだ、僕は同じ隠遁でも、西洋の坊主のやるやつは余り同情がない。エピクロスが地面を買つて、庭を造つて、お弟子と一しよにぶらついたのなどは、西洋にしては白眉だが、東洋にはざらにある。殊に支那人はその方面では大したものだ。王摩詰君などの高等遊民ぶりは実にうらやましい(陶君は田野にくつつきすぎて、僕には稍縁が遠い。)

林泉の間に徘徊して、暇があれば本でもよんでゐるんだと、僕だつてもう向上するんだが、この頃のやうに鬼窟裡に生計ばかり営んでゐたんぢや、とても駄目だ。君は僕があまり書かないと云つたが、浮世の義理で、やつぱり殆月月々書かされてゐるよ。今月も黒潮と中央公論と二つ書いた。それから新潮に日記を書いたから、これは君の方へ東京から送らせて、よんで貰ふ。

どうも日本では、隠遁がブルジョオアの手に落ちて以来、墮落したね。ポピュライズはヴァルガライズだつた形があるよ。徳川時代も元和頃には詩仙堂の大將なんぞがあたが、追々市井の隠居なるものが勢力を得て来て、大に隠遁道が低級になつて来た。まづ元祿の芭蕉が、最後の偉大なる隠遁家だらうと思ふ。さてよ、そのあとにも九霞山樵がある。高芙蓉がある。どうも僕の隠遁史は少し怪しいやうだ。

雅子さん御懐胎の由、結構な事だ。僕の友人の細君で、今つはりで弱つてゐるのが二人ある。一人はフラウ・アカギだ。

僕も家を持つと、どうせ貧乏人だから消極的に細々とやつて行かなけりやならない。それでも下宿生活よりましだらう。下宿生活位天下に索漠蕭瑟たるものはないね。パリで下宿ずまひをしてゐる中に、シングが碌に「やぶちゃん注：原書簡では「碌な」。」ものを書かなかつたのは、当然すぎる事だよ。

かくと云へば、かく事は沢山あるんだが、中々かけるやうに形態を備へて来ない。それに時々、腰がふらついていけない。ふらつかない氣でも、あとで氣がついて見ると、ふらついてゐるんだから駄目だ。こないだシャヴァンヌが悪評はよまずに焼いてしまつて、ど

んどん仕事をしたと云ふのをよんで以來、僕もその方法を採用してゐる。印象派全盛の中で、あんな画をかきつづけるには、さうでもしなかつたら、駄目だらう、僕も批評と云ふ方面でだけ現代と没交渉になつて、益々自由を尊重して行かうと思つてゐる。

僕はこの頃大雅の画に推服し盡してゐる。あいつ一人、どうしてあんな時代に出たらう。雪舟とくらべたつて、或はだと思ふ。一步すすめて、夏珪や牧溪にくらべても、或はだと思ふ。それから字もあの男は馬鹿にうまいね。

(二十六年非ぢや平仄が合はない)

即今空自覺

四十九年非

皓首吟秋宵

蒼天一鶴飛

隱情盛な時に作つた詩だから、特に書き添へる。序にもう一つ。

心情無炎暑

端居思澹然

水雲涼自得

窓下抱花眠

九月四日

龍

二三(大正六年十月七日 東京から京都へ)

「やぶぢちゃん注」：「二三」は「二四」の誤り。

今日又東京へかへつて來た 態々難有う

あらしはずゐぶん東京がひどかつた。本郷藪下のよく君と散歩した通り(まつすぐゆくと森さんの家の前へ出る細い通り)では、あの大きな櫛が三本根元からひつくり返つて、向う側の家を二つつぶしちまつた。大学の木も大分やられた。上野もひどい。銀座の柳がならんで何本も仆れたのも奇観だつたし、朝方々の看板が往來へたくさん落ちてゐたのも盛だつた。僕のうちは垣根が仆れただけだが、前の柏倉(屋根に鳩のあるうち)では、庇が何間か風にさらはれて、うちの中へ雨が土砂降にふりこんださうだ。うしろの小山君の庇も風にやられて、画を大分痛めたらしい。

学校の方は大分忙しくなつた。和文英譯を教へるんだから、やりきれない。近々大阪毎日へ半月位の豫定で短篇をかか。

雅子さんによろしく。

十月七日

芥川龍之介

「やぶちゃん注：以上の書簡は未電子化であったため、「芥川龍之介書簡抄158 追加大正六（一九一七）年十月七日 井川恭宛」として正規表現で電子化注をしておいた。標題に特異点で「東京」とあるが、田端の自宅である。」

二四（大正七年一月十九日 鎌倉から京都へ）

「やぶちゃん注：「二四」は「二五」の誤り。」

女の名は

加茂江カモエ（下加茂を記念するなら、これにし給へ）

紫乃シノ（子）

さざれサザレ（昔の物語にあり復活していゝ名と思ふ）

茉莉マリ（子）

糸井イトキ（僕の友人の細君の名 珍しい名だが感じがいゝから）

これで女の名は種ぎれ。男の名は

治安

樓蘭ロウラン（二つとも徳川時代のジャン、ロオランの翻訳。一寸興味があるから書いた）

哲士朗テツシロウ（この俳人の名はすぎだ）

俊山彦シュンシヤン（原始的詩歌情調があるぜ）

眞澄マコ（男女兼用出来さうだ）

そんなものだね。

書けと云ふから書いたが、なる可くはその中にない名をつけて欲しい。この中の名をつけられると、何だかその子供の運命に僕が交渉を持つやうな気がして空恐しいから。

僕は來月に結婚する。結婚前とは思へない平靜な氣である。何だか結婚と云ふ事が一のビジネスのやうな気がして仕方がない。

僕は子供が生れたら記念すべき人の名をつける。僕は伯母に負つてゐる所が多いから、女だつたら富貴子、男だつたら富貴彦とか何とかつけるつもりだ。或は伯母彦もいと思つてゐる。そのあとはいい加減にやつつて行く。夏目さんが申年に生まれた第六子に伸六とつけたのは大に我意を得てゐる。実は伯母彦と云ふ名が今からつけたくつて仕方がないんだ。

この頃は原稿を皆断つてのんきに本をよんでゐる。英國の二流所の作者の名を大分覚え

爪とらむその袂かせ宵の春
ひきとむる素袍の袖や春の夜
燈台の油ぬるむや夜半の春
葛を練る箸のあがきや宵の春
春の夜の人參湯や吹いて飲む

この間運座で作った句を五つ録してやめる。

龍

二伸、奥さんによろしく。産月は何時だい。今月かね。

「やぶちゃん注…原書簡は「芥川龍之介書簡抄86」／大正七（一九一八）年（一）
十通」の二通目。次の書簡を参照。」

二五（大正七年二月十五日 鎌倉から京都へ）

「やぶちゃん注…「二五」は「二六」の誤り。」

御長男の生まれたのを祝す。御母子の健康を祈りながら

春寒く鶴を夢みて産みにけむ

二月十五日

芥川龍之介

「やぶちゃん注…因みに、恒藤恭の子は大正七年二月十五日、長男が生まれ、名は「信一」と命名されている。しかし、二年後の大正九年七月二日に亡くなった通知が齎されて（逝去は六月二十二日で、死因は疫病であった）、芥川の家族中がショックを受けている（「芥川龍之介書簡抄98」／大正九（一九二〇）年（三） 恒藤恭・雅子宛（彼らの長男信一の逝去を悼む書簡）」を参照）。芥川龍之介の案を採用しなかったことは、芥川龍之介にとって幸いであったと断ずることが出来る。何故なら、芥川は、こうした後の偶発的な不幸な状況に対して強い因果を想起する、関係妄想を持ち易い性格であるからである（事実、芥川龍之介が縁談の仲介を世話したり（小穴隆一の場合がそれ）、媒酌人を務めた、縁談や結婚が後に上手く行かなかつたり、離婚となるケース（岡栄一郎の場合がそれ）等に於いて、それが強く認められる。）」

二六（大正大正七年三月十一日 田端から京都へ）

「やぶちゃん注」：「二六」とあるのは「二七」の誤り。」

拜啓

御祝の品難有う。今日東京へ歸つて拜見した。

うちはやつと見つかつたが、引越すのは多分今月廿日頃になるだらうと思ふ。鎌倉でも、橋「やぶちゃん注」原書簡は橋名の「亂橋」（みだればし）となつてゐる。」と停車場との中間にある寂しい通りだ。間敷は八疊二間、六疊一間、四疊二間、湯殿、台所と云ふのだから少し廣すぎる。が、蓮池があつて、芭蕉があつて、一寸周囲は風流だ。もし東京へ来る序でもあつたら寄つてくれ給へ。番地その他はまだ僕も知らない。いづれ引越しの時通知する。

例の通り薄給の身だから、これからも財政は少し辛いかも知れないと思つてゐる。兎に角人間は二十五を越すと、生活を問題にするやうになると云ふよりは、物質の力を意識し出すやうになるのだ。だから、金も欲しいが、欲しがつてもとれさうもないから、別に儲ける算段もしないでゐる。

学校の方はいゝ加減にしてゐるから、本をよむ暇は大分ある。この頃ハムレットを讀んで大に感心した。その前にはメジュア、アメジュア「やぶちゃん注」原書簡では「メジュア フオアメジュア」。恒藤の転写ミスであろう。」を讀んでやつぱり感心した。僕の学校は一体クラシック스에 事を缺かない丈が便利だ。バイロンのケインなどは初版がある。古ぼけた本をよくでゐるのは甚しい。その代り沙翁のあとで独訳のハムスンを讀んだから妙な氣がした。新しいものもちよいちよい瞥見してゐる。あんまり面白いものも出なさうだね。

その中に（四月頃）出張で又京都へゆくかも知れない。谷崎潤一郎君が近々京都へ移住するさうだ。さうして平安朝小説を書くさうだ。僕は今度はゆつくり寺めぐりがしたいと思つてゐる。

あとは後便にゆづる。

末ながら雅子様によろしく

別封は前に書いたが出さずにしまつたものだ。以上

三月十一日

龍

「やぶちゃん注」原書簡は「芥川龍之介書簡抄86 / 大正七（一九一八）年（二）十通」の八通目で電子化注してある。諸注してあるが、ここでは以下を補足しておく。

「橋」文中注で示した「亂橋」は固有名詞であり、私はこれを外してしまつた恒藤恭には、鎌倉の郷土史を手掛けてゐる私としては、甚だ不満である。鎌倉市材木座二丁目のここ

（グーグル・マップ・データ）にある。鎌倉名数の一つである「鎌倉十橋」の一つで、材

木座の日蓮宗妙長寺の門前から少し海岸寄りにある橋（グーグル・マップ・データ）であ

ったが、道路上は、現在、ほぼ暗渠化している。但し、上流部には小流が確認出来、現在は欄干様の後代のそれが、上下流の部分が配されており、よすがを残し、碑もある（後の二つのリンクは孰れもストリートビュー画像）。芥川が、それほど知られていないこの橋名を出しているのは、彼の尊敬する泉鏡花の初期作品「星あかり」が、この妙長寺や乱橋をロケーションとしているからと推察する。「星あかり」は明治三一（一八九八）年八月発行の『太陽』に「みだれ橋」の標題で発表され、後の明治三十六年一月に春陽堂から刊行された作品集「田毎かどみ」に収録した際、「星あかり」と改題されている。私は昨年、この偏愛する一篇を正規表現PDF縦書版でマニアックな注を附して公開してあるので、是非、読みたい。芥川好みのドツベルゲンガーらしき怪異も描かれており、恒藤恭が読んでいたかどうかは判らないが、芥川の確信犯の仕儀と心得る。なお、上記の地図の北の横須賀線の踏切の向こう側に「辻薬師堂」（正しくは「辻の薬師」）があるが、その鉄道を挟んだ西側に芥川龍之介の新婚の新居があった（当時の鎌倉町大町字辻の小山別邸の離れの建物を借り受けたもの）。本書簡から八日後の三月二十九日、芥川龍之介はここに転居している。宮坂年譜によれば、『当初は伯母フキも同居したが、翌月中旬には田端に帰る。フキは、以後も時々鎌倉を訪れた』とある。場所は現在の鎌倉市材木座一丁目の元八幡（鶴岡八幡宮の元宮である由比若宮）の南東直近のこの中央附近（グーグル・マップ・データ）である。既に述べたが、私の父方の実家は北西二百メートル余りの直近にある。この「辻」というのは、鎌倉時代にここに「車大路」と「小町大路」との辻があったことに由来する。私の『風俗畫報』臨時増刊『鎌倉江の島名所圖會』（明治三〇（一八九七）年八月二十五日発行）教恩寺／長善寺／亂橋／材木座」の「長善寺」（この雑誌発刊時には横須賀線敷設のために、この廃寺となつていたので、この項立て自体はおかしい）の項を見られたい。「その中に（四月頃）出張で又京都へゆくかも知れない」新全集の宮坂年譜によれば、この四月は三月から書き始めていた「地獄變」（五月一日（後者は二日）から二十二日まで『大阪毎日新聞』及び前記の系列新聞である『東京日日新聞』に連載）が、海軍機関学校の公務の多忙と重なり、脱稿が下旬まで延び、『精神的疲労は重く、月末には診察を受けている』という有様であった。但し、「出張」と言っており、これは五月三十日に出発した広島島の江田島海軍兵学校参観を指すので、この時には具体的な出張日程が示されていないかっただものと思われる。先行する『恒藤恭「旧友芥川龍之介」」「芥川龍之介のことなど』（その30）／『三十 京都の竹』（ブログ版）が、その出張後の京都訪問を指す。そのため電子化注した『芥川龍之介 京都日記（正規表現・オリジナル注釈版）』（ブログ版）も参照されたい。但し、この時、恒藤と逢ったかどうかは、確認出来なかった。「谷崎潤一郎君が近々京都へ移住するさうだ。さうして平安朝小説を書くさうだ」谷崎がこの時期に京都に転居した事実はなく、「平安朝小説」というのも、この時期、それらしいものはないように思う。」

二七（大正九年四月二十七日 田端から京都へ）

「やぶちゃん注」は「二七」は「二八」の誤り。また、標題のクレジットは四月二十八日の誤りである。原書簡は「芥川龍之介書簡抄96 / 大正九（一九二〇）年（一）三通」の三通目で電子化注してある。さらに、前の書簡（大正七（一九一八）年三月十一日）から実に二年も飛んでいる点も特異点である。」

啓

手紙及雑誌難有う。君の論文は門外漢にも面白くよめた。法律哲学と云ふものはあんなものとは思はなかつた。正体がわかつたら大に敬服した。外の論文はちよいちよい引繰り返して見た。「やぶちゃん注」原書簡では句点なしで「がとても讀む氣は出なかつた」と続く。」

本がまだ届かない由、日本の郵便制度は甚しく僕を悩ませる。君のも入れると二十冊送つた本の中、先方へ届かないのが既に四冊出来た訳だ。郵便局は盗人の巢窟のやうな氣がして頗不安だ。二、三日中に今度は書留め小包で御送りする。

素戔鳴の尊なんか感心しちやいかん。第一君の估券「やぶちゃん注」ママ。「沽券」が正しい。」に関する。それより四月号の中央公論に書いた「秋」と云ふ小説を讀んでくれ給へ。この方は五、六行を除いて、あとは大抵書いてゐると云ふ自信がある。但しサノオも廿三回位から持直すつもりである。さうしたら褒めてくれ給へ。去る二十一日僕の弟の母「やぶちゃん注」実母フクの妹で新原敏三の後妻に入ったフユ。芥川龍之介からは叔母に当たる。」が腹膜炎でなくなつた。それやこれやでサノオの尊は書き出す時からやつつけ仕事だつたのだ。去年は親父「やぶちゃん注」実父新原敏三。」に死なれ、今年は叔母に死なれ、僕も大分うき世の苦勞を積んだわけだ。どうも同志社などには倉田百三氏に感服する人が多かりさうな氣がする。違つたら御免。この間藏六「やぶちゃん注」藤岡藏六。一高時代の二人の級友。」が感服してゐるのを見たら、ふとそんな氣がしたのだ。赤ん坊は比呂志とつけた「やぶちゃん注」長男。

四月十日出生。就学年を上げるために三月三十日生まれて出生届を出している。」。菊池を Godfather にしたのだ。「やぶちゃん注」原書簡ではここに「赤ん坊が出来ると人間は妙に腰が据るね」とあるのをカットしている。」赤ん坊の出来ない内は一人前の人間ぢやないね。経験の上では片羽の人間だね。大きな男の子で、目方は今月十日生れだが、もう一貫三百目ある。今ふと思ひ出したから書くが、この前君が東京へ来た時一しよに「鉢の木」で飯を食つたらう。（中略）

「やぶちゃん注」略部分は原書簡参照。」久保正夫の講師は好いね。世の中はさう云ふものだ。さう云ふものだから腹を立てる必要はない。同時にさう云ふものだと云つて諦め切る必要もなささうだ。僕はこの頃になつてやつと active serenity の境に達しかけてゐる。もう少し成佛すると、好い小説も書けるし、人間も向上するのだが、遺憾ながらまだ其処まで行かない。相不変女には好く惚れる。惚れてゐないと寂しいのだね。惚れながらつくづく考へる事は、惚れる本能が煩惱即菩提だと云ふ事——生活の上で云ふと、向上即墮落の因縁だと云ふ事だよ。理屈で云へば平凡だが、しみじみさう思ひ当る所まで行くと。妙に自分を

大切に作る氣が出て来る。實際惚れるばかりでなく、人間の欲望は皆殺人劍活人劍だ。菊池は追々藝術家を廃業してソシアリストの店を出しさうだ。元來さう云ふ人間なんだから仕方がないと思つてゐる。但しこの仕方がないと云ふ意味は実に困つてゐると云ふ次第ぢやない。当に然る可しと云ふ事だよ。むやみに長くなつたから、この辺で切り上げる。

近作 二三

白桃は^{うる}沾み緋桃は煙りけり

晝見ゆる星うらうらと霞かな

春の夜や小暗き風呂に沈み居る

奥さんに——と云ふより雅子さんと云ふ方が親しい氣がするが——によるしく。

さやうなら

四月廿七日

一人の子の父

二人の子の父様

座右

二伸

僕の信用し難き人間を報告する(但し作物その他には相当に敬意を表する事もないではないが)

(以下略)「やぶちゃん注…恒藤恭が略した部分は原書簡参照。「福田徳三、賀川豊彦 堺枯川、生田長江

倉田百三 和田三造 鈴木文治」と七人をフル・ネームで挙げており、武者小路は「實際ソシアリスト

も人亂しだ 武者小路」「実篤などは其處へ行くと嬉しい氣がするが」、その「御弟子は皆嫌ひ」とブチか

ましている。」

「やぶちゃん注…「さようなら」は「よろしく。」の後に二十三字明けて、同行にあるが、改行した。原書簡では「——によるしく さやうなら」である。」

二八（大正十年三月八日 田端から京都へ）

「やぶちゃん注：「二八」は「二九」の誤り。本書簡は特異的にサイトの「芥川龍之介中国旅行関連書簡群（全53通） 附やぶちゃん注釈」で電子化注してある（書簡本文だけでよければ、ブログのプレ予告電子化のこちらで見られる）が、両方とも Unicode 導入以前の Word で作ったため、漢字の正字化不全があるので、ここで、注を概ね含めて（恒藤恭の注などの不要と判断したものを除去し、一部を訂正・追加もした）総てを正規表現に直した原書簡を特異的に注で掲げておく（恒藤は文中の一部や最後を略してもあるからである）。中国へ「大阪毎日新聞社」特派員として向かう直前の書簡である。」

啓

今この紙しかない。粗紙だが勘弁してくれ給へ。僕は本月中旬出発、三月程支那へ遊びに行つて来る。社命だから貧乏旅行だ。谷森君は死んだよ。余つ程前に死んだ。石田は頑健。藤岡には僕が出無精の爲会はない。成瀬は洋行した。洋行さへすれば偉くなると思つてゐるのだ。厨川白村の論文など仕方がないぢやないか。こちらでは皆軽蔑してゐる。改造の山本実彦に会ふ度に、君に書かせると煽動してゐる。君などがレクチュアばかりしてゐると云ふ法はない。何でも五月には頂く事になつてゐますとか云つてゐた。僕は通俗小説など書けさうもない。しかし新聞社にもつと定見が出来たら、即、評判の可否に関らず、作家と作品とを尊重するやうになつたら、長篇は書きたいと思つてゐる。この頃益々東洋趣味にかぶれ、印譜を見たり、拓本を見たりする癖が出来て困る。小説は藝術の中でも一番俗なものだね。（中略）

奥さんよろしく。以上

三月七日午後

龍之介

「やぶちゃん注：以下、特異的に原書簡を示し、注も附す。岩波旧全集の「八六二」書簡を底本とした（新全集書簡番号は「929」）。

*

大正十（一九二一）三月七日・消印八日・京都市下鴨森本町六 恒藤恭様・三月七日 東京
市外田端四三五 芥川龍之介

啓

今この紙しかない。粗紙だが勘弁してくれ給へ。僕は本月中旬出発三月程支那へ遊びに行つて来る。社命だから、貧乏旅行だ。谷森君は死んだよ。余つ程前に死んだ。石田は頑健。あいつは罵殺笑殺しても死にさうもない。藤岡には僕が出無精の爲会はない。成瀬は洋行した。洋行さへすれば偉くなると思つてゐるのだ。厨川白村の論文など仕方がないぢやないか。こちらでは皆軽蔑してゐる。改造の山本実彦に会ふ度に君に書かせると煽動してゐる君

なぞがレクチュアばかりしてゐると云ふ法はない 何でも五月には頂く事になつてゐますとか云つてゐた 僕は通俗小説など書けさうもないしかし新聞社にもつと定見が出来たら即 評判の可否に關らず作家と作品とを尊重するやうになつたら長篇は書きたいと思つてゐる この頃益東洋趣味にかぶれ印譜を見たり拓本を見たりする癖が出来て困る小説は藝術の中でも一番俗なものだね

同志社論叢拜受渡支の汽車の中でよむ心算だ 京都も好きが久保正夫などが蟠つてゐると思ふといやになる あいつの獨乙語などを教つてゐると云つたつて ヘルマン und ドロテアは誤譯ばかりぢやないか

奥さんによろしく 頓首

三月七日午後

龍之介

恭 様

○やぶちゃん注

たにもりにお

・「谷森」たにもりにお谷森饒男（明治二四（一八九一）年〜大正九（一九二〇）年八月二十五日）のこと。日本史学者。芥川・恒藤の一高時代の同級生。東京帝国大学史料編纂掛嘱託となり、「檢非違使を中心としたる平安時代の警察状態」（私家版）等をもつすが、夭折した。官報によれば、一高卒業時の席次は、首席の恒藤と次点の芥川に次いで三番であった。父は貴族院議員の谷森真男である。

・「石田」は石田幹之助（明治二四（一八九一）年〜昭和四九（一九七四）年）のこと。歴史学者・東洋学者で、芥川・恒藤の一高時代の同級生。

・「藤岡」は藤岡蔵六（明治二四（一八九一）年〜昭和二四（一九四九）年）のこと。哲学者。ドイツ留学中にヘルマン・コーエン（Hermann Cohen 一八四二年〜一九一八年）ドイツのユダヤ人哲学者で、新カント派マルブルク学派の創設者の一人。時に「十九世紀で最も重要なユダヤ人哲学者」ともされる）の「純粹認識の論理」を翻訳して注目されたが、先輩であった和辻哲郎の批判を受け、後々まで不遇をかこつた。甲南高等学校教授。芥川・恒藤の一高時代の友人。

・「成瀬」成瀬正一（明治二五（一八九二）年〜昭和一一（一九三六）年）は仏文学者。横浜市生まれ。成瀬正恭（「十五銀行」頭取）の長男で裕福であった。芥川・井川（恒藤）の一高時代の同級生で、東京帝大も芥川と同じ英文学科に進み、第三次・第四次『新思潮』に参加した。大正五（一九一六）年八月にアメリカに留学（芥川は「出帆」（リンク先は「青空文庫」（新字新仮名））と題した作品にその船出の様を描いている）するが、失望、ヨーロッパに渡り、帰国後は十八〜十九世紀のフランス文学研究に勤しんだ。

・「厨川白村」（くりやがわはくそん 明治一三（一八八〇）年〜大正二二（一九二三）年）は英文学者・評論家。当時は京都帝大英文科教授であった。この頃、成瀬は彼に傾倒して

いたらしい。因みに、大正七（一九一八）年六月二日頃、芥川龍之介は出張した際に途中下車した京都で、彼と面会している。しかし、この部分、私はちょっと意味を取りかねている。「厨川白村の論文など仕方ないぢやないかこちらでは皆輕蔑してゐる」という部分がそれで、これは或いは、先行する恒藤恭（京都帝大卒で、当時は同志社大学法学部教授であったが、この翌大正十一年には京都帝大経済学部助教授となっている）からの書簡の中に、成瀬の厨川白村論が評判だ、といった伝文があったのに対して、批判したもので――「厨川白村」について成瀬が書いた「論文など」は「仕方がない」ほど評価しようがないもの「ぢやないか」、「こちらでは」、「皆」、彼のその論文を「輕蔑してゐる」ぜ、というニュアンスを私は感じる。「こちら」は京都に対する東京の謂いであり、ごく自然に以上のような意味でとれるからである。無論、そうではなく、芥川龍之介が実は厨川白村自身を評価していなかったというコンセプトとして読むことも可能であるが、厨川は京都帝大の前任者上田敏と同じく、日本における最初にして中心的なイエイツの紹介者であり、アイルランド文学の研究者を輩出するといった功績を考えるに、芥川がまるで評価していなかったというのは、ちょっと考え難い気がするのである。因みに、成瀬は芥川にとって、所詮、プチブルのお坊ちゃんであり、他の書簡でも、彼をチャラかしたり、厳しい評を加えたりする記載がかなり多く、『新思潮』の同人で友人でもあったが、私は、芥川は彼を文学者としては、一貫して評価してはいなかったように捉えている。但し、碌な才能もない癖に、洋行する彼に、芥川の輕蔑と嫉妬が緋い交ぜになった心理が、この裏にはある気もすることも言い添えておく。

・「山本實彦」(明治一八(一八八五)年〜昭和二七(一九五二)年)は当時の大阪毎日新聞社社長であり、芥川も御用達の改造社の創設者である。後の大正一五(一九二六)年に『現代日本文學全集』(全六十三卷)の刊行を開始、円本ブームの火付け役ともなった人物で、芥川龍之介とは自死する直前まで(同全集の強行日程の宣伝部隊に芥川は里見淳と一緒に駆り出されている)いろいろと縁が深かった。

・「何でも五月には頂く事になつてゐますとか云つてゐた」今回、松田義男氏の編になる「恒藤恭著作目録」([同氏のHPのこちらでPDFで入手出来る](#))を見たところ、これは恒藤恭の論考「世界民の愉快と悲哀」であることが判った。この二ヶ月後の大正二〇(一九二一)年六月一日発行の『改造』に発表されている。

・「同志社論叢」[柴田隆行編「L・フォイエエルバッハ日本語文献目録」\(PDF\)](#)によれば、丁度この頃、恒藤は、ドイツの哲学者で「青年ヘーゲル」派の代表的な存在であるルートヴィヒ・フォイエエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach 一八〇四年〜一八七二年)の著作の翻訳を行っている。例えば、「哲學の改革に關する問題」(大正一〇(一九二一)年岩波書店刊のプレハノーフ「マルクス主義の根本命題」所収)、「哲學の改革に關するテーゼ」(大正一二(一九二三)年『同志社論叢』の「マルクス主義の根本問題」巻末)や、「哲學の始點」(昭和二(一九二七)年『大調和』六月号)がそれである。芥川が彼から贈呈された論文も、フォイエエルバッハ、若しくは、マルクス主義関連の翻訳か論文であったと

考えてよい。

・「久保正夫」(明治二七(一八九四)年〜昭和四(一九二九)年)は翻訳家・評論家。芥川・恒藤の一高時代の後輩。京都の第三高等学校講師。デンマークの詩人イェンス・ヨハンネス・ヨルゲンセン (Jens Johannes Jorgensen 一八六六年〜一九五六年)の「聖フランシス」の訳(大正五(一九一六)年新潮社刊)や、トルストイ「人はどれだけの土地を要するか外三篇」(大正六(一九一七)年新潮社刊)の訳等がある。

・「ヘルマン und ドロテア」大正七(一九一八)年に新潮社から刊行されたギョオテ(ゲーテ)著・久保正夫訳「ヘルマンとドロテア」を指している。大正九(一九二〇)年にはゲーテの「親和力」(新潮社)も訳しており、久保正夫の訳した本は芥川好みのラインナップではあるが、芥川には、余程、我慢がならない拙い訳であったようだ。

＊

二九 (大正七年八月六日田端から京都へ)

「やぶちゃん注」：「二九」は「三九」の誤り。なお、これが本書「旧友芥川龍之介」の本文の掉尾なので、原書簡「芥川龍之介書簡抄88 / 大正七(一九一八)年(三) 五通」の三通目)に附した私の注も一部を追加して示しておく。

また、標題に発信地を「田端」とあるのは誤りで、「毎日海へはいつたり」で判る通り、「鎌倉」(発信地を「鎌倉町大町辻」と記す)である。

さらに、これを恒藤恭が時系列を無視して、本章Ⅱ本書の掉尾に置いた意図は判らない。単に、挿入し忘れたのを、現行の最後に追加で置いただけのようにも思える。特に意図を以って配したとは思えない。いや、或いは、恒藤は、この日常的なシックエンスをモンタージュしたそれに、逆に「時々僕が癩癩を起して、伯母や妻をどなりつける」けれど、「毎日海へはいつたり、人と話しをしたりして、泰平に暮してゐる」として、「一家無事」と記した、なんだかんだ言っても、芥川龍之介の確かな幸福な瞬間をここに見出だし、それを最後にさりげなく画像として配したと考えるべきなのかも知れない。ただ、結婚した後、龍之介が文に対して、急にぞんざいな口をきくという暴露的特異点の一通ではあり、私も、鎌倉発であることから、幾つか思いこむ彼の書簡の中の一つではあるのである。そうして、これは、実は、この内容が、遺稿「或阿呆の一生」の以下を直ちに無条件反射で想起させるものだからでもある(但し、そのロケーションは田端の自宅なのであるが)。

＊

三家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い爲に妙に傾いた二階だつ

た。

彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかつた。しかし彼は彼の伯母に誰たれよりも愛を感じてゐた。一生獨身だつた彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだつた。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か氣味の悪い二階の傾きを感じながら。

*

因みに、芥川龍之介の妻文の「二十三年ののちに」（昭和二四（一九四九）年三月発行の『函書』所収。岩波文庫石割透編「芥川追想」で読める）には、『亡くなる年の前あたりに、何を思い出したか、急に「鎌倉を引きあげたのが一生の誤りであつた。」といったことがあります。』とあるのである（太字は私が施した）。

本篇を以つて「芥川龍之介書簡集」は終わっており、これで底本「旧友芥川龍之介」の本文パートは終わっている。

最後に奥附を電子化しておいた。」

拜啓

こないだ東京へかへつたら、おやぢの所へ君の手紙が来てゐた。寫眞は今一枚もないから、焼き増して送る由。京都からかへるとすぐ手紙を出したつもりでゐたから、その催促だと思つた。所がうちへ歸つて見ると、妻が君の所へ出す筈の手紙を未に出さずにあると云ふ。封筒の上書きがしてないから、まだ出しちやいけないだと思つたんださうだよ。「やぶちゃん注…この「よ」は原初書簡には、ない。」。莫迦。してなきや、してないと云ふが好いや。こつちも「やぶちゃん注…原書簡は「は。」。忙しいから忘れたんだと云ふと、私莫迦よと、意氣地なく悲観してしまふ。そこで、この手紙を書く必要が出来た。そんな事情だから君にはまだお茶の御礼も何も云はなかつた訳だらう。甚恐縮する。奥さんよろしくお詫びを願ふ。僕等夫婦はずぼらで仕方がないのだ。寫眞もおやぢに至急焼き増しを頼んだから、その中に送るだらう。

この頃は毎日海へはいつたり、人と話しをしたりして、泰平に暮してゐる。一家無事。時々僕が癩癩を起して、伯母や妻をどなりつける丈。

晝の月霍乱人の目ざしやな

八月六日

龍

井川様

「やぶちゃん注…「寫眞」二月二日の芥川龍之介と塚本文の結婚式の写真と思われる。

「京都からかへるとすぐ手紙を出したつもりであた」これは二ヶ月前の六月五日、横須賀海軍機関学校の出張で広島県江田島の海軍兵学校参観に行った帰りに京都に滞在したことを言っている。但し、この時、龍之介は恒藤（井川）恭とは逢っていないと思われる。龍之介が鎌倉へ戻ったのは六月十日頃であるから、一月半近くも文は表書きのない手紙をそのままにしていたということになる。確かにちよつと唾然とするが、しかし、それ以上に結婚した途端、「文ちゃん」への言葉遣いがド荒くなるのは、かなり、興醒めである。「時々僕が肝癪を起して伯母や妻をどなりつける丈」とあるのは、龍之介の書簡の中でもかなり知られた一文である。また、この時期、伯母フキが鎌倉に滞在していたことも判る。なお、この六日後の八月十二日に名作「奉教人の死」（九月一日『三田文学』発表）を脱稿（私の偏愛する作品で、私はサイトとブログで、

奉教人の死〔岩波旧全集版〕

作品集『傀儡師』版「奉教人の死」

芥川龍之介「奉教人の死」（自筆原稿復元版）ブログ版

同前やぶちゃん注 ブログ版

原典 斯定筈（Michael Steichen 1857-1929）著「聖人伝」より「聖マリナ」

を完備させてある）、翌十三日からは、かの「枯野抄」を起筆している（九月二十一日脱稿で、十月一日『新小説』発表。同じく偏愛する一篇で、

枯野抄〔岩波旧全集版〕

作品集『傀儡師』版「枯野抄」

本文+「枯野抄」やぶちゃんのオリジナル授業ノート（新版）PDF縦書版

同HTML横書版

を完備している）。

「霍乱」（かくらん…原書簡でも「乱」はママ）は現在の「日射病・熱中症」の類い。昼の月を「白目を剥き出した病人の目」に喩えたもの。この句は、この年の「我鬼窟句抄」に載っているから、旧作の使いまわしではない。「やぶちゃん版芥川龍之介句集 二 発句拾遺」参照。老婆心乍ら、

「目ざし」は字余りでも「まなざし」と読んでいよう。

*

以下次の最後のページに奥附を電子化した。上部に本文は最小ポイントで「著者略歴」が載り（五行目の字空けはママ）、下方にやや縦長の罫線に囲まれて、書誌が載るが、分離して並べた。なんとなく見た目似せただけで、字のポイントの違いは完全に再現したものではない。」

著者略歴

大正五年兄弟法學部卒、
昭和十三年法學博士、京
大教授、大阪商大學長を
經て現在大阪市立大學總
長、著書「法の基本問
題」「法律の生命」「ハル
ムス法哲學概論」その他

昭和二十四年八月一日印刷

定價二百五十圓

昭和二十四年八月十日發行

著者

恒藤 恭 つね とう きたかづ

發行者

藤原 惠

介 之 龍 川 芥 友 旧

印刷者

井村 雅 宥

發行所

大阪市中之島

朝日新聞社

東京都丸の内

(電話北濱一三二、丸の内一三二)

恒藤恭「旧友芥川龍之介」(全) 藪野直史オリジナル電子化注 完